
ドラゴンズヘブン

田崎 将司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンズヘブン

【Nコード】

N6023X

【作者名】

田崎 将司

【あらすじ】

新大陸コルドア。そこは人類が航海の果てにたどり着いた新天地。しかし、コルドアで人類を待ち受けていたのは、竜という未知の存在。

圧倒的な力をもって人間を蹂躪する竜。それに立ち向かうのは、大砲と鉄砲と、『竜人』と呼ばれる戦士たちだった。

コルドアフロンティアの最前線に暮らす平凡な青年・フランシス。偶然竜に襲われたことから物語は始まる。

『竜人』を擁する辺境騎士団・対竜部隊が、知恵と勇気を武器に強

大な竜と戦うさまを描くファンタジー。

2011年11月22日、エピソード3が完結しました。

プロローグ

時はルゲール暦1279年のことである。列強各国が世界の覇を握らんと、大海に帆船を繰り出した大航海時代が収束しつつあるころ。所は『新大陸』コルドア東部、開拓村を結ぶ田舎道。

日差しもうらかな、春の昼下がり。広大な平原を貫く街道沿いにはスマイレやシロツメクサの花が咲き誇り、新緑の緑とともに辺りを彩る。実に平和で牧歌的な風景の中、およそその景観に似合わない絶叫と、どしん、どしんという『何者か』による巨大な足音が響き渡る。

「いったい、どうしてっ、僕がっ、こんな目につ！」

声の主は、開拓村の青年、フランシス・ファウラー。身の丈5フィート半ほど、優しそうな茶色の瞳を持ち、簡素な衣服に身を包んだ、いかにも純朴な田舎の青年といった風采だ。彼は、大きな町で職を探そうと、住み慣れた故郷から馬に乗り旅立たんとしていたところであつた。

恐怖に顔を引きつらせながらも、必死で馬を駆るフランシス。

（少しでも速度を落としたら、僕はたぶん死ぬ。きっと死ぬ。絶対死ぬ）

彼をそこまで怯えさせるもの。それは、『何者か』の大きな足音だ。全速で馬を駆けさせる彼の背後に迫るもの——それは、『竜』であつた。

身の丈六〇フィート以上。全身をくまなく赤褐色の鱗で覆い、トカゲのような頭部に長い首。頭頂部から首筋にかけて鋭角なうろこ

が逆立って生えており、さながらトサカのように。口元からは一フィート以上もあるかという巨大な牙が見え隠れし、指の先には鋭い爪。まさに、御伽噺に出てくる『竜』そのもの。人類が『新大陸』コルドアで出会った、人が文明を得て以来最大の天敵。それが竜だ。そんな竜が後足で立ち、時速四〇マイルにも届こうかという速度で、先刻からフランシスを追い回しているのである。

「どうしてこんな場所に竜が？　ここは安全地帯のはずだろう！」

フランシスの疑問はもつともである。竜とはきわめて縄張り意識の強い生物であり、自分の縄張りから出ることはまずない。ゆえに、一度安全が確認された場所で竜と遭遇することはあり得ない。これは、開拓地に生きる者の常識だった。

——もし、フランシスに竜を観察する余裕があったならば、この竜が身体のあるところに手傷を負わされていることに気が付いたかもしれない。そして、それが元で我を忘れ、自らの縄張りから出てきたという結論に達することもできたかもしれないかった。

竜と遭遇したのは十数分前のことだ。フランシスは、街道沿いの木陰で昼食がてら休憩をしていた。ぽかぽかと降り注ぐ陽気と満腹感から、ついうとうとしてしまったのが間違いのもと。木々の異常なざわめきと、鳴り響く足音に目を覚ました時には既に遅く、フランシスは竜に捕捉されてしまっていた。慌てて馬に飛び乗り、今に至るというわけだ。

しかし、このまま逃げ続けても事態が好転する気配はない。この竜の走行速度は、実際のところフランシスの愛馬の全速力に及ばない。整地された都市部の街道や、競馬場のコースだったならば、あるいは逃げ切ることが可能だっただろう。しかし、ここは馬車の轍がわずかに残るのみの田舎道。所々に岩が露出し、雨水が作った水

溜りやぬかるみもある。全速力で馬を走らせることは困難だ。結果、振り切ることも適わず、付かず離れずの距離で追われ続けることになっている。

護身用に使っていた猟銃を一発撃ってみたが、鱗に阻まれなんら手傷を負わせることができなかった。豆鉄砲ほどの効果もあったかどうか。

竜が諦めるのが先か、フランススの馬が潰れるのが先か。前者であってくれと願うフランススだが、背後の竜の速度が衰える気配は無い。それどころか、愛馬は明らかに疲れを見せ始めている。

「ちょ、まずいって！ もう少し頑張ってくれ！」

必死に拍車をかけるものの、速度は段々と落ちていく。足元も覚束なくなってきた。無理もない。この馬は軍馬でもない農耕馬で、全速で駆け続けることにはまるで慣れていないのだから。

竜との距離は徐々に縮まり、既に生ぬるい竜の息吹が感じられるほどである。そして――

「グアアアアアアア――ゴ！！！」

平原一杯に轟き渡る、竜の咆哮。驚いたフランススの馬はバランスを崩し、転倒。フランススは背中から地面に叩き付けられた。

「ぐうっ……！」

身体のあちこちに、鈍い痛みが走る。逃げなきゃ、と思っても身体がいうことを聞いてくれない。這いずるようにもがくも、一ヤードも進んでくれない。よく見ると、腹部がざっくり切れて、真っ赤な血がどくどくと流れている。落馬したときに岩角か木の枝かで切

り裂かれたのだろうか。いずれにせよ、かなりの深手だ。命に関わるかもしれない。

――背後からは、ゆっくりと竜が迫るのを感じる。振り向くと、竜はもう目の前だった。

爛々とぎらつく両眼、剥き出しになった鋭い牙。牙の隙間から、ふしゅる、ふしゅると荒い息が漏れる。

（トカゲみたいな顔だけど――コイツ、怒ってる）

果たして感情と呼べるものが竜に備わっているのか、フランシスには知る由もない。しかし、その表情からは明確な『怒り』が伝わってきた。

（ああ、これは死んだ。絶対死んだ）

爪で引き裂かれるのか、牙で噛み殺されるのか、あるいは踏み殺されるのか。いずれにせよ、もはや死は免れないことを悟る。恐怖を通り越し、諦観の情が浮かぶ。

（顔も覚えていない父さんと母さん、息子は今からそっちに行きます。神父様と教会の弟たち、仕送りできなくてごめんよ）

竜は前足を大きく振り上げて、今にもフランシスに叩き付けようとしている。覚悟を決めて、目を閉じる。

――ダーンという音が、遠くから響いた。僅かに遅れて、至近から炸裂音。

何事かと薄目を開くと、前足を振り上げたままの体勢で、首筋から鮮血を噴き出す竜の姿が。ぬるい竜の血が、フランシスの身体に

も降り注ぐ。遠くから放たれた特殊弾頭が竜の鱗を貫いたというところを、フランススが理解できるはずもなかった。

次にフランススの視界に入ってきたのは、二人の人影。一人は小柄で華奢な女性、もう一人は大柄で筋骨隆々の男性だ。二人とも、深緑色の軍服に身を包んでいる。

「もう大丈夫だよ」

そうフランススに声をかけると、小柄な女性は両手に小剣を持って果敢にも竜に向かっていく。

大柄な男性はフランススを抱え、二〇ヤードほど離れた場所に横たえた。

「悪いな、アイツを片付けないことにはおちおち手当てもしてらねえ。痛えだろうがもう少し我慢してくれ」

そう言うと、彼もまた巨大な戦斧を掲げて竜に向かっていった。

「……無茶、だ、にげ、て……」

腹部の激痛に朦朧としながらも、フランススは二人を止めようとする。いくら手負いとはいえ、生身の人間があんな化け物に立ち向かうなんて、正気の沙汰じゃない。助かるには、逃げるしかない。そう思っていたフランススの目に、信じられない光景が飛び込んできた。

——そこには、身の丈六〇フィートの巨大生物と、その身に帯びた刃のみで互角に戦う二人の姿があったのだ。

竜は、両の腕と尻尾で矢継ぎ早に攻撃を繰り返す。その両腕は唸りを上げ、熊や獅子をも一撃で粉碎してしまうであろう勢い。尻尾

は鞭のようにしなり、辺りの立ち木や岩を破碎する。しかし、二人にはまるで当たらない。二人は尋常ならざる速度でその攻撃を避け、間隙を付いて竜に斬撃を加えている。そして、信じられないことに、彼らの攻撃は分厚い鱗を切り裂き、竜に対して着実にダメージを与えているのだ。猟銃の弾丸をもものとしなかった相手に、である。

（これは何なんだ?! 僕は夢でも見ているのか? それともひよっとしてもう死んじゃってる?!）

わが目を疑うフランスス。その間にも、二人は凄まじい速度・勢力をもって竜と戦い続ける。

と、竜の尻尾が横薙ぎに振り払われた。二人は跳躍してそれかわす――が、その跳躍も尋常ではない。明らかに3ヤードほどは跳んでいるのだ。

（ああ、わかった。あの人たちは人間じゃないんだ。きっと、神様から遣わされた天使か何かだ）

混濁する意識の中、そんなことを考える。

やがて、竜の動きが段々と鈍くなっていく。全身から血を流し、余命が僅かなことはフランススにもわかった。遂には後足で立つこともままならなくなり、四つんばいの格好になる。

「エドガー、止め!」

「応よ!」

これを勝機と見てか、掛け声とともに大柄な男性が高く跳躍。大きく振り上げた戦斧を、自身の全体重とともに竜の脳天に叩きつける。ごりっ、という鈍い音。頭から鮮血を噴き出し、竜の身体が大きく傾ぐ。

「クリス、もう一撃だ！」

「おっしや！」

続いて小柄な女性が跳躍、先ほど戦斧が作った傷口に、二本の刃を柄をも通れとばかりに突き刺した。二、三度竜の身体が痙攣したかと思うと――大地を震わせ、竜は倒れた。

「よっしや、討伐四匹目！」

「おいおい、浮かれてんな。あっちの兄ちゃんの手当てが先だろう」

「っと、そうだった。おい、大丈夫？」

いや、大丈夫じゃないから、と言いたくても、喉からは僅かなうめき声が漏れるのみでもはや声を出すことすらできない。目の前が段々と暗くなっていき――フランシスの意識は途切れた。

幕間

コルドア大陸——ルゲール暦一二〇九年、旧大陸エウレシウスの強国・ブリーディアの探検家アマディアスによって発見された、人類の新天地だ。エウレシウスから大海を挟んで東に八〇〇〇マイル。海流や季節風の関係で未だ大陸を周航できた船は未だなく、正確な広さを推し量ることすらできていない。

ブリーディアの調査団により、豊かな土壌と豊富な鉱物資源の存在の可能性が示唆されると、旧大陸で覇権を争っていた各国はこぞってこの新大陸の開拓に乗り出した。

しかし、コルドアで待ち受けていたのは、人類が有史以来初めて出会う天敵——竜だった。

沿岸部を除く、大陸のほぼ全土に分布すると見られている竜は、圧倒的な戦闘力を持っていた。数十フィートの巨軀に矢も鉄砲も通じない堅牢な鱗、爪や尻尾の一撃は岩をも容易く粉碎し、『竜の息<sup>ドラゴ
ンブレス</sup>』はあらゆるものをなぎ払う。時には馬をも超える速度で疾駆するこの生き物には、大砲の弾を当てることも困難だった。

意気揚々とコルドア開拓に乗り出した旧大陸各国が、多大な被害により新大陸からの一時撤退を余儀なくされるまでさほど時間はかからなかった。

そんな中——唯一竜との徹底抗戦を選んだのが、大陸を発見した国でもあるブリーディア王国だ。

ブリーディアは、古代ルゲール帝国を祖に持つ伝統と格式のある国家だ。一一〇〇年台中ごろ、周辺国の発展に危機感を覚えた時のブリーディア王は軍制の改革に着手。他国に先駆けた常備軍の編成、兵学校・士官学校の設置と効率的な兵士育成、国営工廠の設立など

の施策により、世界一と言われる強力な軍隊を創り上げた。この近代的な軍があったからこそ、ブリーディアは竜に対抗することができたのだ。

しかし、この改革は歳費の増大と財政悪化も伴った。ブリーディアがコルドアから撤退しなかったのは、コルドアの資源を手に入れて財政赤字を補填したい、という考えがあったためである。ブリーディアには、竜に対抗し得る軍事力があったのと同時に、その軍事力ゆえに竜と戦わねばならない理由があったのだ。

ブリーディアにとって幸運だったのは、竜が非常に縄張り意識の強い、自分の縄張り以外に興味を持たない生物であったこと、生殖能力が極めて低かったことだ。一度特定の地域の竜を討伐してしまえば、そこにはもうほぼ竜が出現しないしないと考えていいのである。

二度にわたる大規模な竜討伐作戦が実施され、壮絶な戦いの末――ブリーディアは、海岸線から四〇〇マイルほどの範囲まで領地を拡大することに成功する。

軍の再編を余儀なくされるほどの多大な被害を出したものの、新たに開拓した領地からもたらされた富はそれを補って余りあるものだった。とりわけ、新たに開発されたサーディーン金鉱は、ブリーディアの景気を一気に好転させたほどだ。

竜との戦いは一段落したものの、ブリーディアにはコルドアの利権を奪わんとするエウレシウス列強国との争いが待ち受けていた。私鯨船を繰り出しコルドアからの積荷を狙ったり、コルドア領そのものへ侵攻を試みたり。要するに、ブリーディアが苦心して切り開いたコルドアからの富を横から掻っ攫おう、というわけだ。こうした国際情勢があり、海路の確保とコルドア沿岸部の防衛がブリーディアにとっての最優先課題となり、現在コルドアの領地拡大政策はその分緩やかになっている。

フランシスが育ったのは、そんなコルドア開拓地の最前線——フロンティアにある小さな村、ジーンだ。彼の両親はブリーディア本国で細々と暮らす葡萄農家だった。大規模な植物の伝染病により生活の糧を失い、藁にもすがる思いで新大陸に渡ったのが二〇年前。その開拓地で生まれたのがフランシスだった。しかし、程なくして両親は他界。フランシスは教会の孤児院で育つことになる。

18歳になるまで、教会の仕事と村の農作業の手伝いをして暮らしていたフランシスだったが、そろそろ独り立ちが望まれる年齢となった。しかし、畑をやるうにも独力で新たに農地を切り開くのは至難、借地でやるうにも収穫が出るまでは収入を得ることができない。孤児院の財政が思わしくないという話を漏れ聞いていたフランシスには、手っ取り早い収入が必要だった。そこで、大きな町に出て働き口を見つけようと考えたのだ。

そんなわけで、住み慣れた村に別れを告げたフランシスだったが、その矢先に出くわしたのが例の竜だったのである。

すんでの所で救出されたフランシス。彼の前途に待ち受けるものはいったい何であろうか。物語は次の章を紡いでいく。

辺境騎士団・対竜部隊

夢うつつの中でまどろむフランシスの意識を覚醒させたのは、遠くから響くラッパの音色だった。

目を開けると、そこには見慣れない天井。石作りの建物の一室に据えられた、簡素なベッドに寝かされているようだ。

（ここは、どこだ？　僕は、なにを――）

二度寝をした後のような倦怠感に包まれ、考えが纏まらない。と、自分の胸に包帯が巻かれていることに気が付く。同時に、フランシスに「あの時」の記憶が怒濤のように蘇ってきた。

「うわああああ！　ってあれ、僕、生きてる？」

混乱するフランシス。無理もない。巨大な竜に追い回され、決して浅くない傷を負ったと思っていたのに。恐る恐る、包帯を捲ってみる。そこには想像していた酷い傷はなく、乾きかけた大きなかさぶたがあるのみだった。

思ったより大した傷じゃなかったのだろうか。そんなことを考えていると、不意に部屋の扉が開いた。

「あ、なんか騒がしいと思ったら目、醒ましたんだ」

入ってきたのは、一人の小柄な女性。年のころはフランシスと同じくらい、明るいブロンドの髪を肩口で無造作に切り落とし、パツチリとした明るい碧眼からは、いかにも快活で活発な印象を受ける。そして、彼女は深い緑色の制服に身を包んでいた。その制服には、フランシスも見覚えがあった。彼女自身もどこかで見たことがある

ような――。

「えっと……軍人さん？　ここはどこですか？　あなたは――」

「ここはシラーズの町、辺境騎士団対竜部隊本部。あたしはクリスティ・キーツ少尉」

崩した敬礼をしながら女性が答える。

「あ、どうも。僕はフランシス・ファウラーです……ってシラーズ？　どうしてそんな所に」

シラーズは、フロンティアの中心地的存在である都市だ。フランシスが馬を走らせていた街道からは40マイルほど離れている。

「それに……対竜部隊って『あの』対竜部隊？」

「コルドアの対竜部隊ったら一つしかないでしょ」

コルドア辺境騎士団、対竜部隊。それは、竜という強大な生物が闊歩するコルドアにおいて、その討伐を専らとする精鋭部隊だ。フロンティアという竜の脅威が身近に存在する土地で育ったフランシスも、当然その存在を知っている。もっとも、その詳しい実態までは知らなかったのだが。

「まあ、聞きたいことはたくさんあるだろうけど。まずは食事しない？　お腹空いてるでしょ」

と、丁度いいタイミングでフランシスの腹が鳴った。混乱状態で気付かなかったが、相当な空腹である。思わず赤面するフランシス。

「しょうがないよ、一週間も眠ってたんだから。ちょっと待って、

今ご飯運んでくるから」

「一週間!？　僕はそんなに――って、行っちゃったよ」

程なくして、両手に食事を満載したトレイを持ったクリステイが戻ってきた。

干し葡萄とナッツ入りのパンにベーコンと野菜のスープ、山盛りのソーセージに白かびチーズと、貧しい開拓民であるフランスにとって結構なご馳走だ。フランスは食欲に任せ、貪るように腹に流し込む。結構な量の食事を平らげ、水差しの水を一気飲みしてようやく人心地付く。

「うん、それだけ食べられるならもう身体は大丈夫そうだね」

「それで……僕の身に何が起こったのか、話を聞かせてもらえますか」

「んー、簡単に言うとは街道で竜に襲われてたキミをあたしたちが助けて、ここへ運んできた。そんだけ」

「あ、やっぱりそうでしたか……。助けてもらって、有難うございました」

朦朧とする意識の中で見た人影は、辺境騎士団の軍人だったのだろう。口ぶりからすると、このクリステイもその場に居合わせていたらしい。

「いやあ、お礼を言われることじゃないっていうか……」

何となく気まずそうな表情を浮かべるクリステイ。

「でも、死ぬかと思ったけど大した傷じゃなかったんですね。もう直りかけてるみたいだし」

「いやいや。キミ、死にかけてたよ。腹が裂けて腸が飛び出してた

し」

「ええっ!？ でも、それならどうして……」

「んー、これってあたしの口から言ってもいいのかなあ」

何やら曰くありげな話しぶりである。

その時、部屋のドアをノックする音が響いた。返事をする間もなく、二人の人間が部屋に入ってきた。一人は壮年の男性。広い肩幅と厚い胸板、ブラウンの髪を短く切りそろえ、顎に濃い髭を蓄えている。柔和な表情を浮かべながらも眼光は鋭く、糊の利いた制服がよく似合う。歴戦の勇士を思わせる雰囲気である。もう一人は、20代中盤であろう女性。ブルネットの美しい髪を肩の下で綺麗に切りそろえた美女である。切れ長の黒目でこちらも眼光鋭く、抜き身の刃のような空気を見にまといっている。

「ファウラーくん、と言ったかな」

口を開いたのは壮年の男性。

「私はレナード・パーシヴァル。ここの司令官を務めている」

「パーシヴァル將軍!？ まさか、あの『ドラゴンスレイヤー』の?」

フランススが驚くもの無理はない。レナード・パーシヴァルと言えば、竜討伐で多大な功績を挙げ、コルドア全土にその名を轟かす大英雄なのだ。子供のころ遊びで『パーシヴァル將軍役』が取り合いになるほどの有名人である。ドラゴンスレイヤーとは、その功績を認められブリーディア国王から直々に賜った称号だ。コルドアにおいて彼より高い発言力を持つ者は数えるほどしかないとも言われる傑物である。

「まずは、我々の不手際で一般市民である君を負傷させてしまったこと、心より謝罪する。本当に申し訳ない」

「いやいや、止してください！ 將軍ほどのお人が僕なんか……」

そんな英雄に平伏され、フランシスは恐縮しきりだ。

「いや、完全に我々の手落ちだったからな。君は運よく助かったが、危うく死なせてしまうところだったのだ。そうなのは、いくら謝罪しても意味が無いからな」

「ええと、不手際とか手落ちとか仰ってますが……あの時一体何があったのか、聞いてもいいですか？」

「そのことに関しては私から」

ブルネットの女性が進み出る。見た目に違わず、話し方からも理知的な印象を感じさせる。

「私はダイアナ・ヘイワード少佐。あなたを負傷させた竜の討伐作戦の指揮を執っていたのは私です。私からも、この度のこと謝罪させてください」

「それはもういいですって……。それより、あの時のこと教えてもらえますか」

「はい。私たちはあの日、ジーンの村からおよそ50マイルの地点で、竜の討伐作戦を実行中でした。竜に手傷を負わせ、あと一歩のところまで追い詰めたのですが……一瞬の隙を突かれ、竜に包囲を突破してしまったのです」

「それが……僕を襲った竜ですか」

「はい。完全に指揮官たる私の失態です。申し訳ありませんでした」

「上司として少佐を弁護させてもらうが……知っているかもしれないが、本来竜はとても縄張り意識が強い生き物だね。自分の縄張りからは滅多に出ようとしないものなんだ。ところが、あの時の竜は

手傷を負って半狂乱になり、自分の縄張りから大きく外れたところまで出て行ってしまった。これは今までに無い事態で、少佐が対応できなかったのも仕方ないことなんだ」

「いえ、常に不測の事態に備えるのが指揮官の務めです。私の手落ちであることに違いはありません」

「まったく、君は頑固だな。キーツ少尉、頭の固い上司で君も大変だろう」

「いやあ、えーっと、ソナナコトアリマセンヨ？」

誤魔化すクリスティだが、真意は表情から見て取れる。隠し事が苦手なんだろうなあ、とフランシスは思う。

「コホン。……そして追跡の末、あなたを引き裂こうとしていたところを補足し、竜を倒すことに成功しました」

「しかし、我々がこう言うのもなんだが、君もお手柄だったんだよ。あそこで君が竜と出くわしていなかったら、あの竜はそのまま暴走しどこかの村落を襲っていたかもしれない。君が竜を引きつけてくれたおかげで、被害が出ずにすんだ」

フランシスが襲われたのは、故郷のジーンの村から20マイルほどの地点だ。あの竜のスピードを考えれば、目と鼻の先と言ってもいい距離である。村が襲われていたらと思うとゾッとするフランシスであった。

「以上が、一週間前に起こったことの顛末です」

凡そのあらましを聞いて、フランシスは納得する。自分の記憶と照らし合わせても、特におかしいことは無い。ただ、一つだけ疑問が残った。

「一つ聞きたいんですが。僕の傷のことなんですけど。酷い傷だったと思うんですが、もう直りかけてますよね」

先ほどのクリステイの話しぶりが気になっていたフランシスが質問する。

「それなんだがね……質問に質問を返すことになるんだが、君はあの時『竜の血』を何らかの形で身体の中に取り込むようなことはなかったかな？ 例えば口に入ったとか」

「そうですね、確か……腹をやられて、もう駄目だと思ったとき……大きな銃声のようなものが聞こえて、竜の首からたくさん血が噴き出して……それが僕の身体にかかったような気はします。それが傷口に入っことはあり得るかも……ただ、あの時は意識が朦朧としていてはつきり覚えていないんですけど」

レナードがダイアナと顔を見合わせ、頷く。

「間違いないな。君はその時、竜の血によって『竜人』ドラゴノイドとなった。致命傷と思われた傷が治癒したのも、竜の血の力によるものだ」

「竜の血？ 竜人？」

レナードの言葉が理解できず、フランシスがたくさんの疑問符を浮かべる。ただ、フランシスは竜人という単語には聞き覚えがあった。『対竜部隊には竜人兵ドラゴノイド・トルーパーと呼ばれる凄く強い精鋭がいるらしい』程度のことを聞きかじっただけだったが。

「閣下、少し端折りすぎです」

「すまんな、少佐。また説明を任せていいかな」

「はい。一から説明すると少々長くなりますが構いませんか」

領くフランス。辛抱強く、人の話をしっかり聞くことができるのは彼の美点の一つである。

「では……コルドアでは過去、二度の東方遠征が行われたのを知っていますか」

「教会の日曜学校で習いました。竜を倒して開拓地を広げるための戦い、ですよね」

東方遠征とは、フランスの答えたとおり、竜を討伐してブリーディア領コルドアの支配地を広げるために行われた大規模遠征のことである。二度行われたこの戦いは多大な損害を出したものの、領地を大きく拡大させた。そこには良質な金山が存在したため、損害以上にの利益をブリーディアにもたらした。フランスが育ったジーンの村も、第二次東方遠征で切り開いた地域に位置している。

「その通りです。そして、その戦いの最中、一人の兵士がある試みを実行に移しました。『竜の血を飲むと不死身になる』という御伽噺を真に受け、実際に竜の血を飲んだのです」

ダイアナの話に、レナードが何故だか苦笑する。

「すると、その兵士の肉体に変化が起きました。不死身にこそなりませんでした。が、身体能力、回復力などが常人を遥かに越える水準まで向上したのです。俄には信じられないような話でしょうが」

ここまでの説明で、フランスもおぼろげながら話の核心がつかめてきた。

「このことが軍全体に広まり、兵はこぞって竜の血を飲みました。しかし、先の兵士のような効果が得られた人間は僅かに三人。他の

大多数には何の変化もありませんでした。数千人、いや、万人に一人の割合です。何によって選別されるのかはわかっていませんが、竜の血が合う人間と合わない人間がいるということです。そして、この竜の血によって強化された人間のことを『竜人』と呼ぶようになったのです」

「――あの時僕の身体に竜の血が入り、その力で僕は死ぬほどの傷から回復することができた。そういうことですか」

「理解が早くて結構。詳しく調べなければ確実なことは言えませんが、そう考えるのが妥当でしょう」

「うんうん。苦しまないように止めを刺してあげようか、って相談してたら、その間に傷がみるみる塞がっていったからねー。普通の人間じゃありえないよ」

「なるほど……ちよつと信じられないような話だけど、納得はしました」

実際直りかけている自分の傷口を見せられては、フランスも信じるほかはない。理解の早さ、適応力の高さというのもフランスの長所と言えるだろう。

「ちなみに、先の話に出た兵士とは私のことだよ」

悪戯っぽい笑顔で言うレナード。かの大英雄が『御伽噺を真に受けて』竜の血を飲んだ兵士だったとは。人体に毒のあるものだったらどうするつもりだったんだろう、とレナードは思う。

「この私、そしてそのキーツ少尉も同じく竜人兵です」

「そうだったんですか」

「さて、大体のところは分かってもらえただろう。次に、君の事を聞かせてもらいたいのだが、いいかね？」

「わかりました」

フランスは自分がジーンの村の開拓民であること、両親と幼い頃に死別したこと、職を見つけて独り立ちしようと大きな町を目指していたことなどを話す。

「ほうほう。君は職を探していたのか。それは好都合」
「あの、好都合って……」

レナードがその言葉を遮るように、ベッドのフランスにずっと顔を近づける。

「ファウラー君。対竜部隊に入って竜と戦わないか」
「へ？」

突然の言葉に呆氣に取られるフランス。畳み掛けるようにレナードが続ける。

「衣食住付き、給料も高い。求職中の若者にこれほどいい勤め先は無いぞ。どうだね、私と一緒に竜を倒そうじゃないか」

「ちょ、待ってください！ 話がいきなりすぎて何が何だか……」

暑苦しく迫るレナードを押し留めるフランス。呆れ顔のダイヤナがフォローに入った。

「閣下、話を急くのは悪い癖かと。彼も混乱しています」
「おお、悪い悪い」

「ファウラー君、閣下はあなたの竜人としての力をこそ望めます。先ほと言った通り、竜人になれるのは万人にひとり。貴重な戦力となりうるその力を、騎士団で発揮してみませんか」

「僕なんかが貴重な戦力？」

「そうです。竜人の力は常人を凌駕します。然るべき装備をした竜人は数個小隊——おおよそ百人分の働きができると言われているのですから」

「うーん、そう言われても……」

軍人になることなど考えてもいなかったフランススである。困惑するのも無理は無い。しかも、対竜部隊といえばその名の通り竜と戦う専門部隊だ。あの恐ろしい竜と戦うことを考えると、おいそれと返事ができるものでもない。

「我々の仕事は確かに極めて危険だ。しかし、国家に大きく貢献できる誇り高い職業だぞ。そう思わんか、少尉」

「あたしは国とかそんな大層なことは考えてませんけど……でも、フロンティアの平和を守る、っていうのは立派な仕事だと思っってます」

考えてみれば、フランススと両親が暮らしたジーンの村も、騎士団がその血をもって切り開いた土地なのだ。それに、騎士団に入ってフロンティアの平和を守ることは、孤児だった自分を育ててくれた村の人たちへの恩返しになるのでは、とフランススは思い始める。

「閣下が仰ったとおり、対竜部隊員はかなり高給です。また、負傷等で除隊した場合でも、20年間年金が支給されます。危険度を考慮に入れても、かなりの好待遇かと」

高給という言葉に心動かされる。これは、フランススが欲深いというわけではない。彼が育った孤児院の経営が思わしくないのは前述した。そして、そこには共に育った家族同然の子供たちが何人もいる。給料が高ければ、孤児院に仕送りをして、弟・妹たちにより良い暮らしをさせることができる、と考えたのだ。

それでも踏ん切りが付かないフランス。生来争いごとが嫌いな性質である自分に、軍人が務まるのかという不安もある。

そこに、レナードが最後の一押し。

「よし、それではひとまず仮入隊ということにしないか？ 我々の任務がどんなものか、体験してみるといい。もちろん、危険な前線に立たせることはしないし、給料も満額ではないが出そう。ここが気に入らなければ、その時点で辞めて別の仕事を探せばいい。どうだね？」

「……わかりました。こんな僕で良ければ、入隊させてください」

レナードほどの人物にここまで言われて、とうとう断れなくなつたフランス。

「よく言ってくれた、ファウラー君。とりあえずは、ゆっくり休んでその腹の傷を治してくれ。完治したら訓練に入ってもらおう。いいね？」

「はい」

かくして、開拓村の青年フランス・ファウラーは、辺境騎士団・対竜部隊に体験入隊することとなったのだ。

幕間その二

コルドア辺境騎士団。ブリーディア領コルドアの、辺境地域の防衛と治安維持を目的として組織された騎士団である。

ただ、この『騎士団』という言葉、一般的な『騎士が寄り集まった集団』という意味では使われていない。

ブリーディアにおいては、近年大きな軍制改革が行われた。旧来の封建的契約による騎士と傭兵を主力とする軍制を見直し、常備軍を編成。また兵学校を設立し、共通した基礎訓練を課すことにより、兵士の質の向上・均一化を図ったのである。結果、ブリーディアはいち早く軍の近代化を成し遂げ、世界最強の軍事国家となったのである。

そんなわけで、現在のブリーディアには『戦闘職としての騎士』は存在しない。ブリーディアにおいて騎士団という言葉は軍の編成単位でしかなく、かつての名残として使われているに過ぎないのだ。

現在ブリーディアには、第一から第七までの七騎士団と、辺境騎士団を合わせた八つの騎士団が存在する。第一から第三はブリーディア本国内を、第四から第六は海軍として海を、第七はコルドア沿岸部の都市群を。そしてコルドア辺境地方を受け持つのが辺境騎士団である。

辺境騎士団は、辺境地方の中心都市、ニエマイアに本部が置かれ、兵力は総勢6千。本来定員は1万人以上なのだが、二度にわたる東方遠征の損耗や、海軍を強化せざるを得ない国際情勢などの影響で兵力を削られている。

その中で、竜の討伐を主任務とするのが対竜部隊である。騎士団の中から約六百の精鋭が選拔され、任に就いている。フロンティア

の先の未開拓地に生息する竜を相手にするという性質上、その本部はニエマイアからさらに東の都市、シラーズに設置されている。

シラーズ郊外の広大な土地に造られた対竜部隊本部基地——その敷地内には複数の兵舎や作戦本部棟、医務棟などいくつもの大きな建造物が建ち、広大な練兵場、さらには武器工廠まで併設され、小規模な街をも凌ぐ規模を誇っている。

これが、フランススが暮らすことになった場所である。

幕間その二（後書き）

ここでのいう騎士団とは、本文中で述べられている通り部隊編成の単位です。概ね師団／旅団クラスのまとまりというイメージです。

訓練開始、その前に

数日の療養で、フランシスの傷はすっかり癒えた。僅か十日ばかりで、内臓が飛び出るほどの傷が癒えてしまったのだから脅威と言うほか無い。フランシスの腹には、うっすらと傷跡が残るのみ。フランシスとしては妖精に化かされたか、夢でも見ていたような感覚である。

さて、この日フランシスとクリスティは対竜部隊本部にある部隊長執務室に呼び出されていた。しかし、肝心のレナードの姿は見えない。部屋には簡素な執務机と本棚が据えられており、本棚には軍学や鍛冶技術などに関する本がぎっしりと並んでいる。壁には、赤地に竜の頭と交差する剣を配した立派な隊旗が飾られていた。

「何の話だろうね」

暇そうにあくびをしながら、クリスティが話しかけてくる。

「傷が治ったら訓練開始って言ってたから、僕のほうは多分その話だと思えますけど」

「うーん、あたしは呼び出されるようなことあったかなあ？ ……」

って、その堅苦しい話し方止めようよ。同年なんだし」

「そう言われても……キーツ少尉は先輩になるわけだし、階級も上になりますよね？ 軍隊ってそういう上下関係厳しいんですよね？」

「他所はそうだろうけど、ここは結構いい加減だよ。仲間同士の連帯が一番大事だ、って隊長がね。だからあんまり煩いことは言わないんだ。少佐は苦い顔してるけど」

「そうなんですか」

「だから、普通でいいってば。呼び方もクリスでいいよ。うちには

あたしのことキーツ少尉、なんて呼ぶ奴はいないからむず痒くって」
「……わかった、クリス。僕のことはフランでいいよ」
「うん、それでオーケー」

そこで、ダイアナを引き連れてレナードが入ってきた。

「待たせてスマン、会議が長引いてな」

「いえ、とんでもありません」

「さて、察しはついていると思うが、今日はフランスの今後についての話だ」

レナードも、いつの間にやらフランスをファーストネームで呼んでいる。ざつくばらんというか、アットホームというか、クリスティの言った通りそのあたりはいい加減らしい。

「まず、フランスは士官見習い扱いとなる。本来なら竜人ドラゴノイドは『竜人である』というだけで士官扱いになるんだが、フランスの場合兵学校で正規教育を受けていないからな。当面は、この基地で訓練を受けながら対竜部隊について体験してもらうことになる。訓練が終わって、正式入隊を決意してもらえば、その時点で少尉に任官される。それまでは、便宜上准尉という仮の階級が与えられる」

「はい」

「それから少佐、書類を」

「はい、少々お待ちを……これです。准尉、読み書きは？」

「あ、准尉って僕のことか。はい、できます」

「結構。一番上にあるのが契約書。給料や年金などに関する条件が書かれています。一読して内容が理解できたらサインをしてください」

言われて、フランスは書類に目を通す。給料の額を見て驚愕す

る。フロンティアの一般的な農家の年収の10倍を超える額である。

「あの……こんなにもらっちゃっていいんですか？」

「もちろんだ。ただ、世の中に楽な仕事は無い。君が正式入隊した暁には、相応の仕事はしてもらうさ」

「対竜部隊の任務は、ブリーディア、コルドア全土を見渡しても他に類がないほど危険なものです。もし恐怖を感じるなら止めておいたほうがいいでしょう」

受け取り方によっては、ここで『ハイ、止めます』なんて言ってしまうと臆病者だと思われてしまうような言い方にも聞こえる。同い年の女の子であるクリスティも居る手前、引く訳には行かない。

「……大丈夫です。サインはここに？」

「はい、確かに。残りの書類には、隊規——隊の中での決まりごとが書かれています。これは後で熟読するように」

「まあ、隊規など大した重要じゃない。流し読みしておけばいいさ」
「閣下、あなたがそういう態度では困ると何度も申し上げているはずですが」

「そう睨むなよ。……まあ、私はあれこれ細かいことは言わん、気楽にやってくれ。私からは以上だ、あとは少佐に任せる」

そう言っ、レナードは部屋を出て行った。大雑把なレナードの物言いに、やれやれといった風に首を振って、ダイアナが先を続ける。

「さて、当面の教育係としてしばらくはキーツ少尉に付いてもらうことになります」

「あたしがですか？」

「少尉も任官して一年です。士官としての自覚をより強く持つても

らおうという大佐のご判断です」

「わかりました……（面倒くさいなあ）」

「何か言いましたか？」

「いえ、何でもありません！ 拝命します！」

ダイアナに一睨みされ、クリスティが背筋を正す。

「准尉の住むところですが、傷が治ったということなので、今の医务棟から士官用兵舎に移動してもらうことになります。場所は後ほど案内します」

「はい」

「それから、早速訓練開始、といたいところですが、その前に今日はちよつとした試験を受けてもらいます」

「試験ですか？」

「試験と言っても、それによってあなたの待遇が左右されることはありません。竜人としての能力を測りサンプルを取る、実験を兼ねたものです。構えずとも大丈夫ですよ」

「わかりました」

「それでは少尉、准尉の案内を。部屋には一通りの支給品が揃えてありますので、まずは訓練服に着替えて速やかに第二練兵場へ来るように」

「了解《イエス、マム》！」

クリスティが敬礼する。見よう見真似でフランスもぎこちなく敬礼する。よろしい、と軽く返礼し、ダイアナ出て行った。

「じゃ、行こっか」

クリスティに先導され、兵舎に向かうフランス。執務室がある作戦本部棟から少し歩いたところに、士官用宿舎があった。フラン

シスの部屋は三階建ての二階で、部屋の造りはここ10日間過ごした医務棟のそれと大差はない。簡素なベッドと机、大きなクローゼットが据えられているのみである。クリステイはクローゼットを開くと、そこからオリーブ色のウールのズボンと麻のシャツ、ゲートルを取り出した。

「訓練服っていったらこれね。じゃ、ちゃっちゃと着替えちゃって」

先ほどは面倒くさそうにしていたクリステイだが、なんだかんだいって面倒見がいい性格だった。

——と言ったものの、クリステイは一向に部屋から出て行こうとしない。孤児院では性別年齢様々な兄弟たちと暮らしていたフランシスだが、同年代の、しかも知り合ったばかりの女の子に着替えを見られるのは気恥ずかしい。

「あの、クリス……、着替えるんで少し出て行ってもらえる？」

「ん？ あたしのことは気にせずどうぞ。……お、小銭入れのデザイン変わってるんだ」

机の引き出しの中のをいじりながら、クリステイが事もなさげに答える。

（軍人って女の人でもこんなものなのかなあ……）

しょうがないので、クリステイに背を向けてもそもと着替え始める。なんとなく、背中に視線が向けられているようでやはり恥ずかしい。

「ん、終わったね。ゲートルの巻き方も……大丈夫そうだね」

「それじゃ、行こうか」

今度は、兵舎の裏手に広がる練兵場へ向かう。ダイアナが指定した第二練兵場は、おおよそ500ヤード四方ほどの広さの整地された広場で、トラックや丸木で組んだ障害物などが設置されている。基礎体力作りのための施設だった。

「キーツ少尉、ファウラー准尉兩名、参上しました！」

待ち構えていたダイアナに、二人して敬礼。ダイアナが返礼する。

「10分35秒、少し遅いですね。戦場で敵は待ってくれません。身支度などは、可能な限り迅速に済ませるように」

「了解しました」

早速軍人の心得を教えられるフランスス。

と、ダイアナの後ろに人影があることに気付く。かなり小柄な女性だ。クリステイも小柄だが、さらに小さい。女の子、と言っている体格だ。ぼさぼさの赤髪を耳の後ろで二つに結び、釣り上がり気味のとび色の瞳に、開拓地では珍しいメガネをかけている。全体的に幼い風貌で、騎士団という無骨な場所には似つかわぬ雰囲気だ。

「紹介しましょう。こちらは、パトリシア・スタンフォード博士。アカデミーから派遣された生物学者です」

「博士？　こんなちっちゃい子が！？」

しまった、と思ったときには既に遅く、フランススの言葉にパトリシアはみるみる不機嫌顔になる。どうやら、その外見にコンプレックスがあるようだ。

「あ、ごつ、ごめんなさい！　なんだか失礼なことを言っちゃったみたいで……」

「はあ、まあいいわ。大体の人はあなたと同じ反応をするから。そのクリスも含めてね」

と、パトリシアは嘆息する。クリスはばつが悪そうに顔を逸らしている。

「本当にごめんなさい、悪気があったわけじゃないんです」

「それは十分分かったわ。あなたもこれからは私の研究対象になるわけだし、良好な関係を築いていきましょう」

やれやれ、と肩をすくめるパトリシア。

「研究対象って？」

「パティは竜と竜人について研究してるんだ。あたしたちより二つも歳下なのに、アカデミーを飛び級で、しかも主席で卒業した天才少女なんだよ」

天才と言われ、パトリシアは満更でもないという表情を浮かべる。

（二つ歳下、ってことは16歳か……。16歳にしても小さいよなあ）

なんてことを考えるフランススだが、無論それは心の中に留めておいた。

「これからはあなたにも色んな実験に付き合ってもらうことになるから。よろしくね」

「よろしく願います、博士」

「ああ、博士はやめてちょうだい。パーティでいいわ。畏まった話
方もナシね」

彼女もクリスティ同様、堅苦しいのが苦手な性質のようだった。

「自己紹介はもういいでしょう。早速始めますよ」

ダイアナに促され、一同はトラックへと向かう。

訓練開始、その前に（後書き）

途中です。キリがいいところで一旦投下させてもらいます。

訓練開始、その前に体力測定

「さて、竜人となったことを身をもって体験してもらいましょう。ついでに記録も取らせてもらいます」

そう言って、ダイアナがフランススをトラックに連れ出す。

「向こうに旗が見えるでしょう。ここからあそこまで丁度二〇〇ヤードあります。三、二、一の合図とともに、あそこまで全力で走ってみてください」

「わかりました」

「少尉、あなたは計測を」

「了解」

クリスティがゴール地点に向かって走っていく。彼女がゴール地点に着いたのを見計らって、ダイアナが

「いいですか……三、二、一、GO！」

フランススは、強く大地を蹴って走り始めた。全力疾走など、子供の頃に駆けっこや鬼ごっこをしたとき以来である。始めは手足が上手く動かなかったが、十歩もしないうちに身体感覚が戻ってきた。とにかくゴールに向かって全力で腕を振り、足を前に運ぶ。――そうしているうちに、フランススは違和感に気付いた。消える景色が凄い速さで流れて行くのだ。ゴールのクリスティの姿がぐんぐんと近づいてくる。自分の足がとんでもなく速いのだ、と気付いたときには、フランススは既にゴールしていた。

程なくして、ダイアナとパトリシアももゴール地点まで歩いて来

た。

「少尉、記録は」

「九秒弱、ってところですかねー」

「それって凄いんでしょうか」

なにせ、走行タイムなど計ったこともないフランスである。九秒といわれても、それがどれほどのものなのかまるでピンと来ない。

「概ね、競馬に出る競走馬と同程度のスピードね。あなたがその身体に慣れれば、もう少し速くなるはずだけど」

「馬並み？ 速いとは思ったけど、道理で……」

「ちなみにあたしのベストは7秒。騎士団ナンバーワンなんだから」

クリステイが自慢げに薄い胸をそびやかす。はしこそような見た目の印象どおりだな、とフランスは思う。

「それから、あの距離を走って息も切れてないでしょ」

「そう言われてみれば」

フランスも言われるまで気が付かなかったが、確かにほとんど息切れしておらず、動悸も上がっていない。よくよく考えれば異常なことである。これも竜人としての力の一端なのだろうか。

次に一同が向かったのは、障害物コースに組まれている丸太のやぐらである。上から吊り下げられたロープを昇降する訓練に使用されるものだ。高さは五ヤード以上ある。

ダイアナは地面からほぼ垂直に立てられた一本の柱を指差し、

「今度は、あの柱の脇から全力で上に跳躍してください。最高点に

達したら、これで柱に印をつけること」

そう言って、フランスに一本の白墨を渡す。

「わかりました。……せーの、よっ！」

跳躍した瞬間、フランスは物凄い勢いで自分の身体が上昇するのを感じた。上昇速度が弱まるとともに、今まで感じたことのない浮遊感。気が付くともう少しでやぐらの頂上に手が届くほどの高さまで達しており――あっと思う間も無く今度は身体が落下し始めた。

「あ痛っ！」

あまりの跳躍力に自分でも面食らったせい、フランスは着地に失敗して尻餅をついてしまった。

「もー、なにやってんのよまったく」

クリスティから差し伸べられた手を取って、フランスが立ち上がる。

「ありがとう」

「いいって。ほら、印付けるの忘れたでしょ？ もう一回」

「わかった」

今度は失敗しないように、と自分に言い聞かせながら二度目の跳躍。一度目の跳躍のときの感覚を思い出す。今度は混乱すること無く、最高点に達したところで柱に印をつけ、見事に着地する。

「後で詳しく計測するけど……あなたの身長を差し引きして、3ヤ

ード前後といったところね。若い体力自慢の騎士団員でも一ヤードに届くかどうか、ってところだから、あなたはその三倍ということになるわね」

フランスも、猫や狐が自らの身の丈の何倍もの高さまで跳躍する姿を見たことがあったが――まさか、自分がそんな跳躍をすることになるとは思ってもみなかった。

「どうですか。竜人の力というものを理解できましたか」

「はい。……自分でもまだ信じられないところがありますけど――今の自分が普通の人間じゃない、ということはわかります」

「へえ、冷静なんだね。あたしだって、最初は我ながらちよつと気持ち悪いって思ったもんだけど」

「正直薄気味悪いっていうのはあるよ。でも、そうなっちゃったからには仕方ないだろ」

フランスの適応力は高い。幼い頃から孤児院育ちで、それなりの逆境を乗り越えてきた苦勞人ならではの精神力だ。

「では、次の試験にいきましょう。次は、あなたの膂力を試させてもらいます」

今度の試験は、一つ100ポンドの土嚢をどれだけ持ち上げることができるか、というもの。驚くべきことに、土嚢を10個積み上げたものを持ち上げても、まだ多少の余裕があるくらいだった。結局、12個を上げたところで限界に達する。

その次に行われたのは、視力聴力の試験。これらの試験においても、フランスの能力は大きく向上していることが示された。なにせ、100ヤード先の人物が持つ本の文字や、500ヤード先で鳴らされた鈴の音が判別できるのだから。

それから鉄球をどれだけ遠くまで投擲できるか計る試験、水平方向への跳躍力を計る試験、滑車で吊った錘をどれだけの重さまで引っ張ることができるか計る試験——様々な試験が行われた。どれも、常人のそれをはるかに超える記録をはじき出したのは言うまでもない。

最後に行われたのは、持久力の試験。これは、騎馬のダイアナのペースに合わせ、ひたすらトラックを回り続けるというもの。この試験で、フランスは唯一とっていい竜人の弱点を思い知ることになる。

初めの数周は快調そのもの。普通の人間ならばすぐに引き離されてしまうだろうスピードで先導するダイアナの乗馬にも、楽々ついていくことができた。異変を感じ始めたのは、10周も走ったあたりだろうか。足が重くなったり、どこか痛めたりしたわけではない。呼吸も動悸も上がっておらず正常だ。なのに、身体からどんどん力が抜けていく感覚。みるみる速度が落ちていき、とうとう一步も動けなくなってしまった。フランスから活力を奪った原因——それは以外にも、『空腹』だった。

へたり込むフランスに、顔をにやつかせたクリステイが近づく。

「大丈夫？ やっぱりアンタも引っかかったか」

「……クリス、これ、なんなの？ 引っかかったって？」

「これ、新しい竜人兵が入ったときの恒例行事らしいんだよね。あたしもやられたし。……立てる？」

クリステイの手を借り、何とか立ち上がる。しかし足腰は萎え、クリステイの肩に掴まらなければ立つことすら覚束ない有様だ。

貧しい孤児院の出であるフランス。幼い兄弟たちに自分の分の食事を分け与えて自分はひもじさに耐える、なんてことは日常茶飯

事だった。そんなフランススが、足腰も立たなくなるくらいの空腹。そもそも、数時間前に食事を取ったのだ。いくら走ったり跳んだりしたとて、たかだか数時間でこれほどの空腹を感じることは異常である。

「騙すような真似をしてしまいましたね。実は、今やつてもらったのは試験ではないのです」

「どういうことでしょう」

「長時間全力で動き続けようとすると、空腹で動けなくなってしまふ。このことを身をもって感じてもらうためにやったことなのです」

「……これって、やっぱり竜人にだけ起きることなんですか」

「そうです。常人をはるかに凌ぐ能力を持つ竜人が、ただ一つ持つ欠点と言えるでしょう」

「代謝が激しいとか、筋繊維の破断を常に修復し続けてるとか、学術的に説明しようとするのと長ったらしくなるんだけど――まあ、簡単に言ってしまうえば、普通の人の何倍もの能力を発揮すると、普通の人の何倍もお腹が減るってことね。当たり前と言えば当たり前無理屈なんだけど」

「そう言われると、なんだか納得できるような……。でも、これって実は凄く不便なんじゃ」

「普通の人並みの力しか出さないならこんなことにはならないわ。安心して」

「しかし、戦場では全力で力行使し続けざるを得ない場合もあります。そのような事態に備え、常に自分の限界が何処なのかを念頭において行動すること。これを肝に銘じて欲しいのです」

もし、戦場で今のような状態に陥ってしまったら、とフランススは考える。想像するだけで背筋が寒くなる思いだ。

「それから博士、彼の測定結果はどうでしたか」

「うーん、どの記録もこれまでのサンプルの平均値周辺をうろついてる、って感じね。良くも悪くも平凡、といったところかしら」

「ぷっ」

「笑うことないじゃないか」

「いや、平凡って……。フランにすごいしっくり来るもんだからさ。くくっ」

「笑うことないじゃないか」

確かに、身長、風采、フランスからはいかにも平凡そうな雰囲気
気が漂う。鉄面皮のダイアナも思わず相好を崩しそうになったのだが、それに気付いた者はいなかった。

「平凡、大いに結構。近代の用兵理論では、兵士の質は均質である
ことが望ましいとされます。平凡であることも立派な長所ですよ」

「そんなもんですか……」

「それでは、本日の試験は終了します。准尉はしっかり食事を取っ
て休養すること。少尉、食堂まで連れて行ってあげなさい」

「了解。ほら、しっかり！ 今日食堂のメニューは豚バラの煮込
みだぞ、もう一頑張り！」

へばったフランスを引きずるように、クリステイが食堂に向か
っていく。

——このあと、フランスは自分でもびっくりするような食欲を
見せた。食事をとった後は急激な睡魔に襲われ、泥のように眠るの
だった。

訓練の日々

翌日から、フランススの訓練が始まった。

本来ならば、軍志願者は兵学校で規定の教育課程を経て、正式に任官されることになるのが、レナードの強引な勧誘によりそれを飛び越えて入隊（もっとも現段階では試験入隊なのだが）することになったフランススの場合、いささか事情が異なる。

なので、兵学校で教わるはずの課程の中から、特に必要と思われるものを抜き出し、現場での実体験を交えながら一気に教え込む、という形をとられることになった。ダイアナが作成したカリキュラムを、クリステイ付き添いの下に形で行われる予定である。

「フラン、これがあんたの予定表。基本的に、この表のとおりに行動してね」

早朝の食堂で食事をしながら、クリステイから予定表を手渡される。フランススはざっくり目を通して感想を漏らした。

「うーん、軍人さんの訓練って朝から晩まで走りっぱなし、みたいな印象あったんだけど……。意外とそんなこともないんだね」

たとえば、ある一日の予定はこうだ。

7時～9時 座学（軍学）

午前9時30分～11時 座学（救命術）

11時30分～12時30分 格闘訓練

14時～15時30分 射撃訓練

16時～17時 剣術訓練

「ああ、これはあんた専用のカリキュラムだからね。ほら、あたし

たちには『基礎体力作り』ってやつがあんまり必要ないじゃない」

フランススの想像は確かに正しい。兵学校では一日をひたすら身体を苛め抜くことに費やされる。しかし、竜人にはそんなことをせずとも十分過ぎるほどの体力が備わっている。そんなわけで、基礎体力を作るための訓練は一切が省かれているのだ。

「それに、昨日体験したでしょ。あたしたちって『全力で動く』とすぐに燃料が切れちゃうからね」

「ああ、なるほど。格闘術とか剣術の訓練が必ず昼休みの前か一日の最後になってるのもそういうわけなんだ」

全力で動くことが前提となる訓練のあと、すぐに食事が取れるようにという配慮だろう。

「でも、一日3時間も4時間も座学でしょ？ あたしなら走らされたほうがマシだなあ」

「クリスって勉強嫌い？」

「ってか勉強好きなやつなんてこの世にいるの？」

「僕は結構好きだけど。新しいことを知るって楽しくない？」

勉強と言っても、教会の日曜学校で教わる程度のことしかしてこなかったフランススだが、勉強は好きだった。新たな知識を手に入れると、自分の中の世界が広がる気がするからだ。頭の回転や物覚えもいい部類であり、教会の神父は、常々フランススをちゃんとした学校に行かせられないのを残念がっていた。

「あんたって……マゾの変態？」

珍獣を見るような目でフランススを見るクリステイ。

（印象どおりといえば印象どおりだけど……。そんなに勉強が嫌いなのか……）

「あら、随分な言い草ね、クリス」

二人が振り向くと、そこには食事を乗せたトレイ片手のパトリシアがいた。

「あはは……別に、パティのこと言ってるんじゃないくてね、その、えーと……」

必死に取り繕おうと、しどろもどろになるクリスティを横目に、パトリシアは着席して嘆息する。

「はあ、いいわよ。ここの軍人の9割9分は多かれ少なかれクリスと同じような考えだし。——でもフラン、あなたはなかなか見所がありそうね」

「ありがとう、と言ったほうがいいのか」

「うん、あなたみたいな人なら教えがいがあるわね」

「教えがい？」

「ああ、座学のうち竜に関する部分については私が受け持つことになってるから」

「えっ、本当に？でも、パティって忙しいんじゃない？」

パトリシアがこの対竜部隊で竜の研究をしていること、また研究班の長であることもフランシスは話に聞いていた。さぞ忙しいに違いない、と思っていたのだ。

「まあ、それなりに忙しいのは確かだけど……。でも、人に教える、

っていう行為は案外刺激になるのよ。素人考えから新しい発見が生まれることもあるし」

「へえ、そんなものなんだ」

「とにかく、やる気がありそうな生徒で楽しみだわ」

「期待に沿えるよう頑張るよ」

「まあ、頑張ってちょうだい。あたしには関係ないことだし」

そう言うクリスティだが、これが他人事でないということに気付くまでそう時間はかからないのであった。

食事を終え、クリスティと連れ立って食堂を後にするフランシス。この日の予定では、まず本部棟の作戦室で座学ということになっている。二人して本部棟への道を歩いていると

「よう、クリス。そいつが例の新入りか？」

背後から野太い声。振り返ると、そこには二人の男がいた。

一人は、筋骨隆々の大男。身長は6フィート半ほどもあるだろう。年齢は三十前後。広い肩幅に分厚い胸板。茶色の髪を短く刈り込み、顎までもみあげを生やしている。見た目の印象を端的に表すなら――『豪傑』という言葉がふさわしいだろう。

もう一人は、細身の男。身長はフランシスと同じくらい、年齢は二十台中ごろだろう。艶やかな長い金髪を油でなでつけ、首の後ろで結んでいる。目鼻立ちの調った二枚目だ。香水の匂いを漂わせ、襟元や袖口から装飾具をのぞかせる。かなりの洒落男といえる。

「エドガーにサイラス。二人にもその内紹介しようと思ってたんだ。フラン、こっちのでっかいのがエドガー。で、こっちの気障ったらしいのがサイラス。二人とも、あたしたちと同じ竜人兵だよ」

エドガーが進み出て、フランシスにその大きな手を差し伸べる。

「エドガー・ノリス中尉だ。よろしくな」

「よろしく願います、ノリス中尉。フランシス・ファウラーです」

「ああ、俺のことはエドガーでいいぜ。堅っ苦しいのはナシだ」

（この人たちはみんなこうなのだろうか……）

などと思いながらも、握手を交わすフランシス。

「ところでエドガーさん、ひょっとして僕が竜に襲われたとき……」
「おう、あん時は手当てが遅くなって済まなかったな。まあ、結果的に助かって何よりだ」

どこか見覚えがあると思っていた。朦朧とする意識の中で、フランシスが見た二人の兵士。一人はクリスで、もう一人はこのエドガーだったようだ。

次いで、優男が進み出る。

「俺はサイラス・ガーランド少尉だ。家名で呼ばれるのは好きじゃないんで、俺のこともサイラスでいいぜ」

「お世話になります」

「お嬢さんじゃなかったのは残念だが……新しい仲間が増えるのは大歓迎だ。よろしくな」

サイラスとも握手を交わす。外見に似合わず、その掌は硬くごつごつしていた。

と、基地内にラッパの音が響き渡る。訓練開始10分前の合図だ。

「おっと、ゆっくりもしてられないな。またあとで、な」

サイラスはクリスティに意味有りげま目配せをすると、エドガーと共に去っていった。

「それじゃ、あたしたちも行こうか」

二人は、再び本部棟を目指して歩き始めた。

訓練の日々（後書き）

長くなりそうなので一旦切りました。

訓練の日々／＼竜学を学ぶ／＼

フランスが一番初めに受けることになっている科目は、竜学である。竜学とは、生物学の中でも特に竜の研究を専らとすることを便宜的に表す言葉だ。

作戦室に到着すると、そこにはダイアナとパトリシアが待ち受けていた。

「おはようございます——ってあれ？ 少佐？」

竜に関する講義だけに、パトリシアがいるのは予想していたが、ダイアナがいるのはフランスの予想の外だった。

「私たちは学者と違い、単に生物としての竜についてだけでなく、『敵』としての竜についても学ばなければいけませんから。戦場における竜については、私たち現場の兵士が教えるのが一番でしょう」「ふうん……。それじゃ、あたしはこれで」

フランスを案内したことで自分の役目は終わりと思ったのか、クリステイがその場を辞しようとする。

「待ちなさい、少尉。あなたも講義を受けて行きなさい」

「へ？ あたしも？ なんで？」

「思い当たることはないですか」

「いや、全然」

ダイアナが盛大なため息を漏らす。

「前回の報告書と課題です。あなた、何を書いたか覚えていますか」

「えーと、何だっけな……」

ダイアナの顔がますます険しくなる。眉間に皺がより、こめかみには血管が浮き出ている。

ちなみに、対竜部隊では二ヶ月に一度、士官全員に活動報告書と課題の提出が義務付けられている。責任感と目的意識を高く維持できるように、との意図からダイアナの発案により始められたものだ。

「『遠征の長期化・長距離化が予想される場合、指揮官として留意すべき点は何か』というテーマに対し、あなたが返した答えがこれです。『引越す』。……これが！ れっきとした士官の書く答えですか！」

ダン、と机を叩いてダイアナが怒声を上げる。理知的で冷静な印象がある（事実その通りなのだが）ダイアナが珍しく発した怒号に、クリスティは冷や汗を流し、すっかり竦み上がってしまっている。

「今まではパシヴァル閣下がお許しになっていたから私も目をつぶっていましたが、今回ばかりは我慢しかねます。少尉、当面の間、准尉と共に座学を受けることを命じます。定期的に試験をして、結果が悪かった場合は懲罰があるものと思いなさい」

「そんなあ、酷い……」

「何か異論でも？」

「とんでもありません、ママ！」

ぎろりとひと睨みされ、背筋を伸ばすクリスティ。さながら蛇に睨まれた蛙だ。

「……さて、それでは気を取り直して」

コホンと一つ咳払いをして、ダイアナが話し始める。

「戦に勝つためには、まず敵を知ること。准尉、あなたは竜という生物についてどれだけ知っていますか」

「えっと、大きくて、強くて……凄いやと爪があつて……火を吹いたり……」

思いつく限りのことを、しどろもどろになりながら口に出す。我ながら拙い答えだと思う。

「プッ、アンタおつきくて強い、って。子供じゃないんだからさー」
「准尉はこの間まで一般人だったのですから、仕方ないでしょう。」
少尉、あなたが代わりに答えなさい」

すかさず茶々を入れるクリスティに矛先が向いた。

「えーっと、あれですよ、竜類？に分類される生物のことで……そのー、おつきくて強い？」

全然情報が増えてないじゃないか、と突っ込みたくなるフランシスだった。

「コルドア大陸に生息する巨大陸上生物。竜類というカテゴリーに属する生物の総称であることは、少尉の言った通りです」

それ見たか、と言わんばかりにクリスティが自慢げに薄い胸をそびやかす。別に自慢できるほどのことはしていないのだが。

「では少尉、今までに発見されている竜の種類を全て挙げてくださ
い」

ファイアードラゴン、ストドラゴン、シルバードラゴン、ファイアードラゴン
「えーっと炎竜、森緑流、銀晶竜、黒鉄竜と……何だっけ？ ア、

アーパー竜？」

アンバードラゴン

「琥珀竜だってば」

パトリシアが突っ込む。

「……やはり、少尉を参加させて正解だったようです。あなたに合格点を出した兵学校の教官は何をしていたのやら」

フランススが視線を向けると、クリスティはぼつが悪そうに顔を背けた。

「さて、この五種類に、たった一例目撃報告があるだけで実在が疑問視されている飛翼竜フライングドラゴンを含めた六種を総称し、竜類と呼んでいます」
「でも、この六種類を同じ生物種として纏めて取り扱うのは学者としては納得行かないけどね」

パトリシアが口を挟んだ。

「それはどうして？」

フランススが思わず疑問を口にしてしまったが、ダイアナの話の腰を折っていることに気付く。怒らせてしまったのでは、とダイアナの反応をうかがうが、

「これは本日の授業に大きく関わる話です。博士、先を続けて」

と意外な反応。

「生物を系統立てて分類する、分類学という学問があるの。生態、骨や内臓の構造など様々な観点から共通点を探して分類していくん

だけど……。たとえば猫と虎と狼、この分類学という学問において仲間外れがいるとしたらどれだと思う？」

「猫でしょ」

クリスティが即答。一方、フランシスは少し考えてから答える。

「狼、かな？」

「理由は？」

「えー、だって狼や虎は強くて他の動物をバリバリ食べちゃう、って感じだけど猫は日向でゴロゴロしてるだけ、って感じだし」

「虎は本でしか見たことがないけど……。体つきとか、猫と似てる気がして」

「正解は狼。フランシスが正解ね」

「えー、なんでー？」

「猫や虎、獅子は、骨格や内臓を見比べると実は凄く似てるのよ。この分け方だと、狼は犬に近い仲間になるわ。こういうのが分類学って学問」

そんな学問もあるのか、とフランシスは感心する。あのまま村で暮らしていたら、動物に関しても乳を出すのが牛、毛が取れるのが羊、くらいの関心しか持たなかっただろう。世界は広い。様々な知識が溢れている。

「で、竜なんだけど、種類によって骨格から内臓から全然違うのね。行動パターンもバラバラ。似通ってるのは『御伽噺に出てくる竜』っぽい外見をしている、ってところくらいかしら。……。確かに、外見も生物を分類する上で一つの指標になるんだけど。でも、これを一くくりにするのは分類学に対する挑戦だわ」

「さて、話が横道に逸れましたが。まさに今博士が言った通り、『御伽噺の竜』の如き姿をした存在、それらを我々は竜と呼び習わし

ているに過ぎません。討伐した竜の死骸から多少のことは分かっていますますが、その生態はまだまだ謎に包まれています」

「それじゃ、竜は謎に包まれた巨大生物、ってことで今日のお勉強は終わり！ …… ってわけにはいきませんよね、あはは……」

ダイアナの一睨みに小さくなるクリスティ。またもや蛇に睨まれた蛙状態。

「危険すぎて、長期的な観察もできないからね。生殖、捕食などに ついてもあまりわかっていないのよ」

「……では、そろそろ詳しい話に入りましょう。今日は、特に炎竜について。恐らく我々が一番戦う機会が多いであろう相手であり、 フランススを襲ったのもこの種類です。博士」

ダイアナがパトリシアを促す。詳しい説明はパトリシア担当、ということらしい。

「1214年、ブリーディアのコルドア調査団が初めて遭遇した竜がこの炎竜ね。大陸の平原部に、広く生息していると思われるわ。赤褐色の鱗が特徴。ちなみに、今までの竜との遭遇例のうち、9割以上がこの炎竜。未踏の大陸深部のことはわからないけど、この大陸で会うのはほとんどがこの炎竜と言ってもいいくらい」

「ちなみに、成熟した炎竜の鱗は銃弾を簡単に弾き返し、砲弾の直撃でもそう簡単には致命打を与えられないほどの耐久力があります」

大砲が撃たれるのを見たことがないフランススにとっては、ややピンと来ない話である。とにかく凄く頑丈、ということだけは伝わったのだが。

「竜の鱗は、脱皮するトカゲや蛇なんかの鱗と違って、身体の成長

とともに下からどんどん新たな層が生まれていく仕組みらしいの。成熟した竜の鱗は数十もの層で構成され、衝撃をうまく吸収する構造になっているのね。あと、鱗の下にある脂肪の層も、衝撃に強い要因」

「刃物による斬撃に対しては、完璧な防備というわけではありません。もっとも、常人の腕力で竜の鱗を損傷せしめることは不可能ですが」

裏を返せば、竜人ならば竜の鱗に傷を付けることが可能、ということだ。実際、フランシスが救出された際は、エドガーやクリステイが竜に痛手を与えていた。

「大きさは80フィート超のものまで確認されてるわね。生まれたての竜、というものの観測報告がないから小さいほうはどれだけ小さいかわからないけど」

「80フィート！？ 村の教会より大きいんじゃない……」

「さすがにそこまでデカイのは滅多にいないよ。フランを襲ったのがだいたい60フィートで、あのくらいなのが一番多いんじゃない？」

「それでも十分デカイって……」

あの日のことを思い出すフランシス。大の大人を一飲みにしそうな顎。牛をも握りつぶせてしまいそうな手。そして、地響きを起こして疾駆する巨躯。竜人の力を手に入れたとて、本当に自分はその存在と戦えるのだろうか、と自問するも答えは出ない。

「走る速度は最大毎時40マイル以上ね」

「あ、ごめん。毎時ってどういう意味？」

「一時間に40マイル進める速さ、ということです。具体的に言えば、訓練された馬より若干遅い程度、といったところでしょうか」

「それから、硬質の爪と牙、頭頂部から首筋にかけて生えている、トサカのように逆立った鋭角の鱗が特徴ね。あと、最大の特徴、それが炎吐息^{フアイアーブレス}。炎竜を炎竜たらしめるもの、と言っても過言じゃないわね」

まさに御伽噺の竜がごとく。この大陸の竜はブレスを吐く。ただし、必ずしも炎を吐き出すというわけではなく、竜の種類によってブレスの種類は様々だ。

「我々がどれほど入念に作戦を立て、死力を尽くして戦ったとて、ただの一撃で戦局をひっくり返されてしまう。竜が持つ恐るべき能力です」

そう言うダイアナの顔には、怖いぐらいの真剣さと――過去の戦いを思ってたか――ほんのわずかな悔しさ、苦渋のようなものが浮かんでいる。

「僕を襲った奴は吐いて来なかったけど……クリスは見たことあるの？」

「もちろん。あたしたち竜人なら、牙や爪の攻撃は避けられないこともない。でも、アレだけはヤバイ。射程範囲内にいる者は、竜人だろうが普通の人だろうがお構いなしで消し炭だよ」

いつもお気楽なノリのクリスティも、表情が強張っている。竜のブレスとはそれほど恐ろしいものなのか。

「クリスの言うとおり。成熟した炎竜の吐く炎吐息は効果範囲が最大五〇ヤード。温度ははっきり分からないけど、鉄製の装備が溶けかけたという報告もあるわ。人間が喰らったならひとたまりもないわね」

フランシスは、あの時の竜がブレスを吐いて来なくて本当に良かった、と思うと同時に改めて背筋の凍る思いがする。

（あの時の自分はまさに九死に一生を得た、というやつだったんだな……）

しかし、冷静に考えると、竜とて生身の生物である。そのような強力な炎がなぜ吐けるのか。フランシスも立派な大人だ。御伽噺の魔法なんて実在しないと理解できるだけの分別はある。まるで魔法じゃないか。しかしフランシスはそう言わずにはいられない。

「魔法でもなんでもないわよ。一応、ブレスについてはその仕組みがある程度説明されてるの。これも教えたほうがいい？」

よろしい、とダイアナが先を促す。

「フラン、あなた曲芸師が火吹きをするのを見たことがある？」

「うん。小さいころ、お祭りで一度見たよ」

「あれはどうやってるかと言えば、口の中に含んだ度数の高い酒を種火に向かって一気に吹きつけてるのね。竜のブレスも、基本は同じ」

アルコールに可燃性があることは、フランシスも知っている。改めて考えたこともなかったが、教えられればしごく単純な原理である。

「ということ、竜は体の中に『度数の高い酒みたいなもの』を持ってるってこと？」

「そう。炎竜には私たち研究者が『炎囊』と呼んでいる特殊な臓器

があるの。どうやって作り出しているのかはまだ謎なんだけど——とにかく、炎竜は体内でアルコールよりもはるかに高い温度で燃える可燃性物質を生成して、炎囊に溜め込んでいる。そして、牙に挟み込んだ石をこすり合わせることで火花を散らし、可燃性物質を一気に吹きつける、というのが炎吐息の原理ね。それともう一つ、ブレスの威力を飛躍的に高めている秘密があるわ」

「それは？」

思わず前のめりになって話を聞くフランシス。学はないが、知的好奇心は豊富な性質である。竜という強大で謎めいた存在についての解説がおもしろいのだ。一方のパトリシアも所謂『教えたがり』であり、打てば響くような反応を示すフランシスのような相手だと教えがいがあるのだろう、非常に生き活きと話を続ける。

「うん、それは竜の腹部にある、通称『ふくはら韃腹』と呼ばれる器官ね」

韃腹とは、炎竜の腹部に存在する、その名の通り韃の役割を果たす器官である。任意に動かせる鱗と、その下にある袋状の体組織がセットになったものだ。パトリシアが、石版に白墨でこの韃腹の略図を示す。

「まさに、鍛冶道具の韃そっくりな構造ね。これを何個も同時に動かすことで、普通に呼吸するよりもはるかに多い空気を体に取り込むことができる。そして、腹が膨れ上がるほど大量の空気を取り込んだ時点で一気に吐き出す。これが、五〇ヤードもの射程を可能にしているのね」

「へえ、よくできてるもんだなあ」

その驚異的メカニズムに、思わず感嘆するフランシス。村の鍛冶屋の老人から、韃という道具が今の形になるまでどれだけかかった

か、なんて蒨蓄を聞かされたことがあったが、竜という生物はそれを生まれながらにして備えているのだ。

「そうね。実に合理的な機能。まったく、竜ってのは凄い生き物だわ。実に研究のしがいのある対象ね」

フランススという真面目な生徒に自分の研究分野についてレクチャーしたことが楽しかったのだろう、満足げな表情のパトリシア。クリスティはと言うと、すっかり退屈したよう得手元の羽ペンをこねくり回したり、鼻の下に挟んだりしている。元来じっとしているのが嫌いな性分なのだった。

「……さて、炎竜の生態についてはこんなところでしよう。どうですか、准尉。竜という生物についての理解は深まりましたか」

「はい。とても面白い話でした。そして……」

その先を話すのを躊躇する。

「どうしました、遠慮せずに言って御覧なさい」

「あの……恥ずかしいんですが、竜って怖い生き物なんだな、って改めて思ったっていうか」

「……」 「……」

しばしの沈黙。てっきりクリスティには馬鹿にされ、ダイアナには叱咤されるものと思っていたフランススにとっては意外な反応だ。

「……それが正しいのですよ、准尉」

「どういうことでしょう」

「竜を討伐するには、まず竜がいかに恐ろしい相手であるか、ということをはっきりと認識しなければなりません。……どうしました

「？」

いかにも意外だ、と言わんばかりのフランスの表情に気付いたのだろう。

「いえ、てつきり『そんな臆病なことではどうする！』とでも言われるのかと……」

「最初に言ったでしょう、敵を知れと。竜とは、人知を超えた力を持つ恐るべき存在である、ということをおぼのがこの授業の目的です。竜が相手では、竜人の力など風の前の塵に等しいということをおぼえておきなさい」

「この隊に入ろうとする奴はね、入団審査でこう質問されるんだよ。『お前は竜という存在をどう思うか？』って。で、竜なんか怖くない、って強がる奴はそこで落とされる。そういう連中は大概早死にするかトンスラするから」

ちなみに、クリステイ自身はこの質問に対し「よくわかりません！」と元気良く答えたのだが……。なぜ入隊が許されたのかは謎である。

「そうです。敵の恐ろしさを認識した上で、なおも勝利のために全力を尽くせること。これが蛮勇ではない、本当の勇気というものです。軍曹、あなたにも本当の勇気を身に付けてもらいたい。戦場で兵士を最後に支えるのは技術でも体力でも兵器でも、ましてや竜人の力でもない。勇気なのですから」

と、遠くから鐘の音が響く。時報の鐘だった。

「さて、今日のところはここまでしておきましょう。准尉は次の科目の実施場所へ移動しなさい。少尉は准尉を案内したのち、先日

の課題の書き直すこと」

「りょうかい……」

力のない敬礼をするクリスティを横目に、ダイアナとパトリシアは退室していった。

「あー、もう！ あんたの教育係なんかになったからこんな目に！
どうしてくれるの！」

「それは八つ当たりじゃ……（というか、少佐ははじめから一緒に座学を受けさせるつもりでクリスを僕の教育係にしたんじゃないかなあ）」

まあまあ、とクリスティをなだめながら、フランシスは次の訓練に向かうのだった。

幕間その三

いまだブツブツと恨み言を垂れ流すクリスティと並んで歩くフランシスは、何とか空気を変えようと話題を振ってみた。

「ところで、ちょっと聞いていい？」

「うん？」

「僕の場合は偶然竜人になったわけだけど、クリスや他の人たちはどうやって竜人になったの？」

かねてから持っていた疑問をぶつけてみることにする。フランシスの場合、偶然傷口に竜の血が入ったことによって竜人となったのだが、なにせ万人に一人の資質といわれる竜人である。偶然竜の血が誰か体内に入り、そしてその誰かがたまたま資質を持っていた、なんてことはそうそう起こるものではないだろう、と考えていたのだ。

「ああ、隊長が東方遠征の最中に竜の血を飲んで最初の竜人になった、って話は聞いたでしょ」

「うん」

「『竜人をたくさん集めたら凄い戦力になるぞ』、って思うのは当然だよ。で、上層部は兵士全員に竜の血を飲ませて一人でも多くの竜人を生み出そうとした」

「それでクリスも竜の血を？」

「そういうこと。去年までは、辺境騎士団と第七騎士団の入団志願者全員が竜の血を飲まされてたんだよ。……あれは不味かったな」

「へえ」

「あと、謝礼を出して一般の人たちから実験に付き合ってくれる人、被験者っていうの？ 募ったりね。お金に困ってる人たちが随分集

まっただみだい」

「去年まで、って今はもうやってないの？」

「うん。資質がない人は、普通竜の血を飲んでも何も起こらないんだけどね。たまに、何ていうの、パティは『拒否反応』って言うってたかな。竜の血を飲むと凄じい熱を出して寝込んでる人が出るみたい。で、酷いときには死んじやったりね」

自分もそうなら、と思うとゾツとする。もともと、フラシスの場合は竜の血の力がなければ腹の傷が元で死んでいた可能性が高いのだが。

「で、去年、とうとう隊長が実験を全部止めることに決めたんだ。戦力は確かに欲しいけど、いたずらに死人を出すようなことはしたくないって」

クリスは語らなかったが、人道的な問題以外にも実験が中止された背景はいくつかある。

一つは、効率。竜人の資質は万人に一人、と言われている。一般人の一般人に謝礼を払って被験者になってもらっても、せいぜい一人か二人の竜人を生み出すことしかできない。実際のところ、一般から千名以上の被験者を集めながら、一人の竜人も生み出すことはできていなかった。

また、竜人の数が増えると、その中に良からぬ事を企む者も出る可能性が高くなる。竜人の力を犯罪に用いたり、あるいは他国への亡命を試みたり。特に、大きな戦力となりうる竜人の他国流出は、国として避けたいことだ。

「今は鼠とかで実験してるらしいけど。とにかく、竜の血についてもう少し詳しく分かるまで、人間で実験することはないってさ」

「じゃ、これから先当分竜人が増えることはないってわけか」

「そういうことになるね。隊長があそこまで熱心にフランを誘ったのもわかるでしょ」

レナードが強引にフランシスを勧誘したのは、今や貴重な竜人の力が欲しかったのと同時に、竜人の力を持つ者を自分たちが管理しうる立場におきたい、とう意図もあったのだが。

そうこうしているうちに、次の訓練が行われる練兵場に到着した。

「じゃ、頑張つて。あたしはこれから課題のやり直しだよ、ハア……」

がっくりと肩を落とし、クリスティが去っていく。

（自業自得じゃないかなあ……）

と思いつつ、クリスティの背中を見送るフランシスであった。

訓練の日々／剣術訓練／

その後フランスはいくつかの座学を受け、この日予定表の最後に記されていた科目は剣術訓練だった。これをこなせば、初日の訓練は終了だ。慣れない座学に少々疲れを感じていたが、あともう少し、と気合を入れ直す。

クリスティはダイアナに命じられた課題の書き直しに手こずっているため、フランスは独り練兵場に向かう。目的地は練兵場の片隅にある、白兵戦専用の訓練施設だ。藁と木材を人間に模して造った人型が何体も設置されている。また石畳で覆われた区画があり、そこは模擬戦を行うための試合場として使われている。

フランスがその訓練場に近づく、一人の男が細身の剣を振るっているのが見えた。既に夕刻に差し掛かっており、西日が目に入って人物の特定はできない。

――しかし、遠目にもわかる男の剣技の凄まじさ。

一太刀振るうごとに大気が唸りを上げ、その剣閃はさながら迅雷のごとし。一切の無駄の無いその動きは美しささえ感じられるほどであり、剣舞を舞う踊り子を思わせる。

やがて、男は剣を鞘に納めた状態で藁人形に正対する。ゆっくりとした動作で柄を握り一呼吸。

豪という凄まじい風切り音が響き、ほぼ同時にチンという軽い金属音。

竜人となり、動体視力が格段に向上したフランスでさえ、その男が刹那のうちに剣を抜き放ち、また鞘に収めた音だと気付くまで少しの間を要した。さらに少し遅れ、藁人形の上半身が横に滑り落

ちた。凄まじい速度の抜き打ちで、藁人形の胴体が切断されたのだ。

「フランススか？」

呆氣にとられるフランススに、男が声をかけた。今朝方自己紹介をしたサイラスだった。

「サイラスさんでしたか。すいません、盗み見するような真似を」

「別に構わないさ。それよりお前、剣術の訓練に来たんだろ？」

「はい。でもどうしてそれを？」

「お前の相手をしてやってくれと、少佐から頼まれてな」

彼の剣の腕を見込んでのことなのだろう。素人目にも、サイラスの剣が尋常でないことはわかったのだから。

「そうだったんですか。よろしくお願いします」

「ああ。で、お前、剣の経験は？」

「いや、サッパリです。刃物なんて料理と刈り入れのときくらいしか扱ったことがないですよ」

「まあ、そうだろうな。剣なんて、近頃は兵学校でも兵科によっちゃあ教練から外されるくらいだからな。実戦じゃ役に立たないって」

生産力の向上により、鉄砲や大砲が戦場の主役となりつつある時代。特に、先進的な軍制をしくブリーディア（およびコルドア）では、剣や槍などの白兵戦用の武器は廃れる一方だった。もはや剣術など『嗜み』以外に意味を持たなくなっていたと言っても過言ではない。

「でも、僕の訓練予定表だと剣術の時間が結構たくさんありますよ」

「竜人が竜を相手にする場合、話は別だ。竜の鱗つてのは弾丸には滅法強いが、『刃物で斬る』攻撃に対してはそこまででもない。まあ、普通の人間の腕力じゃ傷を付けることもできないが。それで、お前には剣術訓練をやってもらうってことだろうな」

弾丸には強いが、斬撃には弱い。先刻の座学でも、同じような話は聞いていた。

「じゃあ、始めるか。まずはこれを。おれたち竜人の訓練用にあつらえた物だ」

サイラスから、一振りの剣を渡される。幅広で、刃渡り3フィートほどの両手剣である。それは形としては確かに剣なのだが――常識的な剣とは明らかに異質なものだ。まず、どう見ても分厚い。刃の厚さは1インチを超え、そこらの斧やまさかりよりも肉厚だ。当然、重量も生半可なものではない。

これを振り回すのは無理だろう、とフランスは思うものの、実際に持ってみると呆気ないほどに軽く感じる。常人を超えた現在の身体能力と、頭の中にあるかつての身体感覚との間には未だ大きなギャップがあり、それは簡単に適応できるものではないようだ。

「よし、とりあえず上段に振りかぶって振ってみろ」

「はい」

とにかく剣を上に掲げ、振り下ろしてみる。が、剣の勢いに振り回され、大きくバランスを崩してしまう。

「ああ、それじゃ駄目だ。ちょっと見てろ」

そう言ってサイラスはフランスのものと同じ型の剣を手取る。

振りかぶると、一気に振り下ろす。太刀筋は美しい軌跡を描き、振り下ろした剣先は中段でぴたりと静止している。具体的に何が違うのかは分からなかったが、自分とは明らかに違うということだけはフランスにも分かった。

「いいか、剣を振るとき大事なのは腕じゃなくて足腰だ。まずは足の親指でしっかり地面を踏み締めろ」

言われたとおり、足腰に意識を集中させ、二振り三振り。へなへなした太刀筋ではあるものの、剣の重さに体を持っていかれることはなくなった。

「よし、次は膝にも意識を集中させてみる。軸足の膝に溜めた体重を、一気に前に移動させる感覚だ」

さらに5、6度繰り返す。サイラスの見せた手本を思い出しながら剣を振る。

「あとは、腕を振るという動作には必ず背中中の筋肉と腹の筋肉が連動していることを意識しろ。そして、下腹を引き締めて一気に振り下ろせ」

一呼吸間を置き、今まで教わったことを頭の中で反復する。よし、と気合を入れ、一気に剣を振り下ろす。今度は体の軸がぶれることなく、真っ直ぐ剣を振り下ろすことができた。無論、サイラスの洗練された素振りには遠く及ばないものだったが。

「よし、悪くないぞ。あとはその感覚を忘れないうちにひたすら繰り返せ」

「はい！」

数度、素振りを繰り返す。

「漫然と数をこなしても駄目だ。一太刀ごとに考えながらやれ」

「はい！」

さらに繰り返す。足の指、膝、腹筋、背筋――。一太刀一太刀集中して素振りを繰り返す。

「とにかく、最初は『剣を振るう』感覚を身体に染み込ませるんだ。これさえ身に付きゃ、あとは武器がなんであろうと応用が利く」

「はい！」

それにしても、サイラスの指導は実に理知的で的確だ。軽薄そうなイメージを抱いていたフランススは、第一印象で決め付けてしまった自分を恥じるとともに、尊敬の念を抱く。

何度繰り返しただろうか。フランススの額からは大粒の汗がとめどなく流れ、シャツも汗で身体にへばりついている。

「よし、そろそろ休憩するか」

「わかりました」

練兵場には、訓練後に渴きを潤したり身体を清めるための井戸が数箇所掘られている。二人は、その一つに向かった。

「フランスス、お前はなかなか見所がありそうだな。剣術に向いてるんじゃないか」

「そうでしょうか？　――でも、サイラスさん、さっきの凄かったですね」

訓練前にサイラスが見せていた剣技を指して、フランスが賞賛する。

「さっきの？ ああ。あれか。まあ、これでも王都じゃこいつの腕でちょっとした有名人だったんだぜ」

腰に挿した剣の柄をポンと叩き、サイラスが言った。

「王都？ 王都ってブリーディア本国の？」

「ああ。昔は王都の第一騎士団にいたからな」

第一騎士団とは、ブリーディア王都および王城を守護する近衛軍だ。自然、エリートが集まる。そのくらいのことはフランスも知っていた。

「へえ、凄いですね」

「大したことじゃない。一応貴族の三男坊でな。兄貴たちは官僚になったが、俺は顔と剣の腕以外取り得がなかったから、騎士団に放り込まれたってわけだ。言ってみればコネ入団だな」

（さりと顔の自慢をしたよ、この人。でも、何でこんな辺境に……）

「何でこんなところに、って顔をしてるな」

「いやいや、そんなことは……」

凶星を突かれ、慌てて否定する。他人の素性をみだりに探るのは不躰だと思ったのだ。

「まあ、聞きたいんなら遠慮するな。隠してるわけでもないしな」
「いいんですか？」

「ああ。——ちょっとしたヘマをやっちまてな、ここへ来たのは左遷ってわけだ」

「ヘマって？」

「不倫がバレた」

絶句するフランス。

「相手は、とある仮面舞踏会で出会った女だ。『そういう関係』になってその後も度々会ってたんだが、運悪く密会の現場を旦那に見つかってな。さらに不運なことに、その旦那は騎士団の偉いさんだった。事は親父が揉み消したが、俺は責任を取らされて新大陸送りになったってわけだ」

恥ずべき過去を、なんでもないことのように語るサイラス。さっきの尊敬を返せ、と言いたくなるフランスだった。軽薄そうなイメージは間違いでなかったらしい。

「まあ、こっちの暮らしも悪くないな。食い物は美味いし煩い上司もない。綺麗な姉ちゃんが少ないのとフェディキア(※)のワインが飲めないのだけは不満だが。……よし、そろそろ再開するか」

と、サイラスがフランスを促す。なんだかなあ、という思いを抱えつつも、フランスは日が暮れるまでひたすら素振りを繰り返すのだった。

(※) ワインの産地として有名な地域

歓迎会

日もどっぷりと暮れた頃。初日の訓練を終え、軽く水浴びをしたフランシスは、自室で新しいシャツに袖を通しているところだった。

部屋のクローゼットには、騎士団の制服や肌着など一通りの衣類と、背囊や弾薬入れなどの小物が収められていた。無論、官給品である。当面生活に困ることはなさそうだが、細々としたものはやはり足りない。ちなみに、村を出たときに持ってきた荷物は竜に追われた際にどこかへ失くしてしまっている。事情を鑑みたダイアナの配慮により、初月分の給料の三割が先渡しされているので、近いうちに生活必需品を買いに行かなければ——そんなことを考える。

「お腹空いたな……」

思わず一人ごちた。体力測定の際の一步も動けない状態——クリスティは『燃料切れ』称していた——ほどではないが、かなりの空腹だ。先刻の剣術訓練の影響だろう。そろそろ食堂に行くか、とフランシスがドアノブに手をかけたちようどそのとき、ノックが鳴った。

「はい、どなたですか」

「サイラスだ。今いいか？」

「サイラスさん？ どうぞ」

フランシスがドアを開けると、そこにはサイラス、クリスティ、エドガーという竜人兵の三人がいた。

「どうしたんですか？ こんな時間に」

「突然だが、お前晩飯はもう済ませたか？」

「いいえ、これから食堂に行こうかと思っていたところです」

「それは好都合」

三人は顔を見合わせ、頷きあう。

「あのー、一体どういうことでしょう」

「これからちよっと飲みに行こうと思ってな。お前さんを誘いに来たんだよ」

にんまり笑ってエドガーが答える。

「飲みに、ってお酒ですか？」

「ああ、お前さんの歓迎会も兼ねてな。心配するな、今夜は俺たちの奢りだ」

「歓迎会ですか？ でも、僕はまだ仮入隊の身だし、そんなことをしてもらうわけには……」

「細かいことは気にするなって。たとえ一時でも、同じ隊の仲間であることには変わりないんだからな」

「そうだよ、サイラスはこう言ってるけど、口実を作って飲みに行きたいだけなんだから。遠慮しないで」

「こら、クリス！ 自分だけいい子ぶるんじゃない。お前も同じだろうが」

フランスはそんなやり取りを見て苦笑しつつ、ありがたく申し出を受けることにする。

「そうですか……。じゃあ、有り難く受けさせてもらいます。それで、場所は？ 食堂ですか？」

「馬鹿言うな。あそこには酔になりかけの料理酒しか置いちゃいな

い。街へ出るんだよ」

「でも、もう六時過ぎてますよ。門限は七時だって確か隊規に……」
「大丈夫だ。点呼を取るわけじゃないし、ばれないように忍び込めばいいんだ」

「それに、俺たちや竜人だからな。門が閉められたって、その気になりゃ基地の塀なんざひとつ跳びだ」

「本当に大丈夫？」

「うん、うちはそういうところ緩いから。少佐にさえ見つからなければ」

「クリス、余計なことは言わんでいい！」

エドガーとサイラスが慌てたようにクリスを制止する。

「ヘイワード少佐？ ……やっぱり怖い人なの？」

座学でクリスティに見せたダイアナの剣幕を思い出す。いわゆる典型的な『怒らせると怖い』タイプなんだろう、という想像はついた。

「と、とにかく大丈夫だ。怒った少佐は確かに竜よりヤバいが、要は見つからなければいいだけの話さ」

「ほら行くぞ、美味え料理と酒が待ってるぜ」

エドガーがフランシスの肩を抱え、強引に部屋から連れ出そうとする。

（本当に大丈夫かなあ……）

困惑するフランシスだが、空腹ゆえに美味しい料理を奢るというのは逆らい難い誘惑だった。

「そういうことなら……」

「よし、決まりだな。じゃあ、早速行こうか」

対竜部隊の本部基地があるシラーズの町は、フロンティアの中心都市だ。人口は8万人、フロンティアで生産される様々な物産の集散地であり、交易の中心地である。旧大陸の大都市のように大きく華美な建物こそ無いものの、新しい土地を切り開いて生きる人々の活力が満ち溢れる賑やかな町だ。集散地ゆえ、食べ物が安価で美味しいところでもある。

小さな開拓村で生まれ育ったフランスにとっては、何もかもが珍しい。キョロキョロと余所見をしながら歩いていたせいで、時折人とぶつかりそうになる。

「そんなにシラーズが珍しいの？」

「ああ、うん。僕はジーンの村からほとんど出たことがなかったしね」

「シラーズでこの調子だと、本国の王都なんか行った日には大変なことになるな」

サイラスが苦笑する。ちなみにブリーディア王都の人口は50万以上。シラーズとは桁違いの大都市である。

「あたしも王都には一度だけ行ったことがあるけど……。人が多すぎてちよっと嫌になっちゃったな」

「それに関しては同感だ」

やがて、四人は繁華街の片隅にある一軒の酒場に辿り着いた。大通りからやや奥まった場所で、酒場としてはあまり良い立地とは言

えないのだが、それでも店のは多くの酔客で賑わっており、人気のほどが覗える。カウンターと10卓ほどのテーブル席で構成されている店内はほぼ満席状態だ。

サイラスたちは顔馴染みらしく、店に入るなり何も言わずに隅のテーブル席に通された。テーブルには『予約席』の札が。手回しのいい事に、事前に席を確保してあったらしい。注文を取りに来た女給に、サイラスが慣れた様子で料理を注文する。女給の去り際に尻をなでようとするサイラスだったが、盆で振り払われてしまった。

「痛う、盆で思いっきり叩くことないだろうに……。ところでフラシス、お前酒はいける口か？」

「そもそもあまり飲んだことが無いんですよ。収穫祭のときにワインやビールを一杯だけ、って感じですよ」

「そうか。なら、いきなり強い酒は止めておいたほうが良いだろうな。とりあえずはビールでいいか。おおい、ビール4丁！」

程なくして、陶器のタンブラーに並々と注がれたビールが運ばれてきた。ペールエールと呼ばれる濃い金色をしたタイプで、強い香りとコクが楽しめる。

「それでは、ここに新たな仲間を迎えたことを祝して――乾杯！」

サイラスの音頭に合わせ、一同がタンブラーを傾ける。フラシスも、他のメンバーに倣って一気にビールを流し込んだ。空きっ腹にアルコールが染み渡り、胃の辺りから熱い感覚が全身に広がっていく。

「くう〜っ！ 美味しい！ お姉さん、ビールあと四つね」

早くも杯を干し、お替りを注文するクリスティ。

「ちょ、クリス、早くない？」

「何言ってるんだ坊主、ビールなんざ水と変わらねえだろ。姉ちゃん、今のはナシだ。タンブラーじゃなくて甕かめで持って来い」

高さ一フィートほどもある甕に並々と注がれたビールと、同時に最初に頼んだ料理のうちいくつかが運ばれてくる。牛スネ肉の煮込み料理、ピクルスやチーズの盛り合わせ、刻んだキャベツに塩コシヨウ、オリーブオイル、ワインビネガーで味付けしたサラダなど、予め仕込みが住んでいるものの、調理の手間がかからないものがある。だ。

勧められるまま飲み食いするうちに、フランスはすっかりいい気分になってきた。会話も弾み、流れから自らの生い立ちや騎士団に入るようになった経緯などを話す。

「あたしはこの前聞いたけど……。フランって苦労人だよな」

「そうかなあ。フロンティアには同じような境遇の人はたくさんいるだろうし」

「いやいや、立派なもんだ。うちの餓鬼と変わらないくらいの時分に二親亡くしたってんだからな」

「あれ、エドガーさんにはお子さんがいるんですか」

「おう、娘が一人な。こんな商売だからなかなか会えねえんだが。

ニエマイアの町の近くにカミさんの実家があってな。そっちで暮らしてるよ」

「エドガーって顔に似合わずすごい親バカなんだよ。この前も『エミリーから手紙が来た』って大はしゃぎしちゃって」

「うるせえな、お前も親になったらこの気持ち分かるだろうよ」

ばつが悪そうに顔を赤らめるエドガー。豪快な男の意外な一面で

ある。

酒もいい感じに回り始め、一同はすっかり打ち解けた雰囲気になった。

「ところで、二人はどうして騎士団に？」

ほろ酔い加減になったフランシスは、遠慮することなく質問をぶつける。

「おお、俺たちだけ坊主の身の上聞いちゃ不公平だわな」

最初に答えたのはエドガーだ。

「俺の親父は指物師だった。本当は長男の俺が跡を継ぐはずだったんだが、素質がないつつーか、どうにもああいふ細けえ仕事は性に合わなくてな。俺に向いてる仕事を探した結果が騎士団ってわけだ。なにせ、このガタイだからな」

そう言って、分厚い胸を叩く。豪傑、戦士という雰囲気を全身から発しているエドガーである。適材適所だったと言えるだろう。

「クリスは？」

「あたし？ あたしは『竜と戦える』ってところに惹かれてね。凄いやね、だってまるでお話の中の英雄みたいじゃん」

「そんな理由で……」

好き好んで竜と戦いたがる人間がいるとは。驚愕するやら呆れるやらのフランシスである。

「まあ、ほかに行くあてがなかった、ってのもあるんだけど」

「どういうこと？」

「あたし、^{フリーデリア}本国の商人の娘だったんだけどね。親に無理矢理結婚させられそうになったから、二年くらい前こっちに逃げてきたんだよ」

「それってもしかして家出!？」

「まあ、そうなるね。素性の怪しい小娘なんて雇ってくれるところなんてなかなかなくてさ。いやあ、^{うち}辺境騎士団の入団資格が緩くて助かったよ。あのままだと大人しく家に帰るか、娼婦になるかの二つしかなかったからね」

クリスティの言うとおり、辺境騎士団の入団資格はかなり緩い。慢性的な人員不足に悩まされているため、やる気のある人間は男女年齢問わず大歓迎という状態なのだ。

「でも、ご両親は心配してるんじゃない？ 連れ戻されたりしないの？」

「実際連れ戻しに来ただけどね。でも、そのときには、あたしはもう竜人になってたからね。隊長が両親を説得してくれて、それで諦めたみたい」

フランシスの勧誘のとき片鱗を見せたように、レナードはかなり押しの強い人物だ。そして、相手に有無を言わせぬオーラがある。何より、『ドラゴンズレイヤー』の大英雄、音に聞こえたレナード・パーシヴァル直々に説得されてはクリスティの両親も引き下がるほかなかっただろう。

「僕なんかよりよっぽど凄い人生送ってるような……」

フランシスと同年なのだから、二年前といえば16歳かそこらである。そんな歳で单身海を渡り、女だてらに軍隊に入るなど並大

抵の行動力ではない。フランシスは呆れるばかりだ。

「それより、サイラスの野郎がコルドアに流れてきた話のほうが傑作だぜ」

「残念だったな、その話はもう済ませたよ。……そういや、お前の両親はブリーディアじゃワイン用の葡萄を作ってたって言ったな」

サイラスが話題を変える。

「どこに住んでたんだ？ マーシスか？ それともライトウィツジ？」

「マーシスです。どうして分かったんですか？」

「ブリーディアでワインの産地、しかも疫病で葡萄が全滅したって言っただろ。ワイン好きならこれだけでピンと来るさ」

「僕が生まれる前にこっちに来たから、正直マーシスのことは全然知らなかったんですけど……。マーシスのワインってそんなに有名なんですか」

「ああ。旧大陸じゃ五本の指に入る産地だな。特に、長期間寝かせるのに適した赤ワインに関しては他の追随を許さない。疫病以前に作られたマーシスのワインなんて、今じゃ従来の何十倍の値段に釣り上がっているほどだ。それだけの値段を払ってでも飲みたい、って奴がたくさんいるってことだな。お前の前では不謹慎かも知れんが、新しい葡萄が育つまで最低数十年はあのワインが造れない、ってのは文化的損失と言っている」

「あーあ、またサイラスの蘊蓄が始まっちゃったよ。語りだすと長いんだよねー」

「サイラスよ、そろそろビールも空いちまう。講釈はそのくらいにして、お前の大好きなワインでも頼もうじゃねえか」

「……分かったよ。マーシスには敵わないが、ここコルドアのワインも中々だ。特に赤はいい。しかも安いときている」

いつの間にか、甕一杯のビールが空になっていた。フランシスもそこそこは飲んだのだが、特にエドガーとクリステイはよく飲む。

「おーい、姉ちゃん、赤を四本な。ああ、いつものだ。あと、ソーセージ盛り合わせと鴨のスモーク、羊の肩肉の香草焼きも頼む。あとお勧めの肉料理は？ ……鹿？ そりゃあ最高だ、いいところ見繕って持ってきてくれ」

程なくして、ワインが運ばれてきた。同時に、薄作りの高給そうなグラスが四つ。なんでも、それはサイラスの私物で、わざわざこの酒場に預けてあるのだそうだ。

サイラスは慣れた手つきで抜栓すると、グラスの3割程度までワインを注ぐ。

「ここいらのワインは長期熟成には向かないが、その分芳醇で若々しい香りが楽しめる。こうしてグラスを回すと香りがだな——」

「だから、蘊蓄はいってば。ほら、フランも」

そう言いつつ、クリステイはエドガー、フランのグラスに並々とワインを注ぐ。

「全く、お前らときたら……。ワインの嗜み方ってものをわかつちやいないんだよ」

ぶつぶつ言いながら、サイラスは手酌でワインを飲み始める。

やがて、先ほど頼んだ肉料理が運ばれてきた。運んできたのは、今までフランシスたちのテーブルの給仕をしていた女給とは違う女性だった。年の頃は二十代前半、明るい巻き毛のブロンドで、パツチリした眼が印象的な愛嬌のある女性である。

んん、と目を細めるフランシス。この女性、どこかで見たことがあるような――。

「あら、騎士団の皆さんじゃない。久しぶりね」

「お、ナタリーちゃんか。今日は姿が見えなかったが」

「店長の言いつけで、ちょっとお使いにね。……あれ？ そちら新人さん？ ってどこかで見覚えが……」

ナタリー。フランシスには、その名前に一人だけ心当たりがあった。忘れるはずもない、その女性。よくよく見れば、当時の面影が残る。間違いない。

「もしかして、ナタリー姉ちゃん？ ジーン村のカーチスさんちの」

「あなた……もしかしてフラン？ フランね！ いやまあ、随分大きくなっちゃって！ こんなところで会えるなんて、ビックリしちゃったわよ」

「僕も驚いたよ。……久しぶり、姉ちゃん」

「なになに、二人は知り合いだったの？」

「ええ、村で近所に住んでいたの。六年前に一家でこっちに引っ越してきて以来だから――六年ぶりになるのね」

ナタリー・ヘイワード。かつてジーン村で、フランシスが暮らす教会の近所に住んでいた女性だった。心根が優しく世話焼きで、孤児院の仕事を手伝ったり、子供たちの遊び相手になったりしていた。フランシスにとっては幼馴染のお姉さん、という存在だった。もともと可愛らしい少女だったが、今はすっかり大人びた美女に成長していた。出るところはしっかり出ていて、スタイルも抜群だ。

「フランシス、騎士団に入ったのね。あなた、喧嘩もしたことなかったのに」

「いやあ、色々あってね、アハハ……」

竜人であることは部外者には極力伏せておくように、とダイアナから注意されていたため、入団の経緯については誤魔化しておく。

「いつからこっちに？」

「来たばかりだよ。騎士団に入ったのだって昨日だし」

「そう。――会えて良かったわ。ふた月遅かったら、すれ違いになつてたところだから」

「すれ違い？」

「うん。私、お嫁に行くから。あとふた月でこの町を出るの」

「なんだ、ナタリーちゃんに会えなくなるのかよ。こんな美女を手に入れた果報者はどのどいつだ」

「お相手はね、ここから南に40マイルくらい行つたところにネスつて町があるでしょ、そこで農場やつてる人」

幸せそうな笑顔を浮かべるナタリー。

「そっか……。おめでどう、今度お祝いさせてよ」

「ありがと。そんなわけだから、残り短い間だけ顔見せに来てね。じゃあ、お客さん呼んでるから私行くわね」

そう言うと、ナタリーは立ち去っていった。

「結婚か……。姉ちゃん、結婚しちゃうんだ……」

「坊主、どうした？ 浮かない顔してるぜ」

「あ、わかった！ フラン、ナタリーのこと好きだったんでしょ。もしかして初恋の人？」

「ち、違うよ！ そんな、好きとかじゃなくて……」

慌てて否定するが、それは凶星であった。恋心と呼ぶにはあまりに幼く漠然としたものであったにせよ――確かにナタリーはフランスの初恋の人だった。ナタリーの一家が村から引っ越して6年。彼女のことは、良き思い出として昇華できていたはずだった。しかし、いざ結婚するという話を聞くと、寂しいような哀しいような複雑な思いがちくり、ちくりと胸を刺す。

「離れ離れになった初恋の人と再会したら、いきなり結婚の話かゝそりゃへこむよねゝ」

「そうかそうか。まあ、元気を出せ。初恋は実らないもんさ」
「だから、違いますってば！」

この手の話でからかわれるのに慣れていないフランススは、顔を真っ赤にして反論する。

「ほれ、もっと飲め。飲んで忘れちまえ」

「ああもう、エドガーさんまで！　こうなりやとことん飲んでやりますよ！」

やけくそ気味にグラスをあおるフランスス。
フランススの失恋話を肴にしつつ、宴は続くのだった。

幕間その四

日付が変わりかけるころ。酒場でしこたま痛飲した四人は、基地へと戻っていた。

門限どころか消灯時間もとくに過ぎており、当直の者以外は寝静まっているはずの時間だ。当然門は硬く閉ざされている。

この部隊は規則違反に寛容だ、とはいっても、堂々無断外出しているところを見咎められれば処罰は避けられない。あくまでも「ばれないようにやるなら目をつぶる」という話なのだ。ただし、対竜部隊には、門限破りが咎められるのは現行犯のみ、という慣例がある。

「とりあえず、西側に回ろう。あっちは見回りの順路からは外れているはずだ」

サイラスの先導に従い、一同は基地をぐるりと囲う塀に沿って進む。

「よし、このあたりだな。フランシス、酔いは醒めてるか？」

「はい、多分大丈夫です」

ほとんど初めての酒であり、しかもどう考えても大量に飲んだはずなのだが、不思議なことに既に酔いは醒めかけていた。若干の頭痛とふらつきがこそ残っているものの、行動に支障が出るほどのものではない。サイラス曰く、この酔いの醒めやすさも竜人の特徴の一つらしい。便利な身体である。

「クリス、まずお前が先行して様子を探ってくれ。安全なようなら、

塀を叩いて合図するんだ」

「了解」

そう言うのと、クリスティはひらりと塀を飛び越えた。3ヤード近くもある塀を、いとも簡単にである。

数秒ののち、クリスティから合図が送られる。

「よし、フランス、次はお前だ。着地には気をつけろよ」

頷き、思い切り跳躍。やや高さが足りなかったが、塀の上端に手を付き、その勢いで塀を乗り越える。膝のばねで衝撃を和らげ、できる限り音を立てぬよう着地する。サイラス、エドガーも続いて飛び降りてきた。

「よし、兵舎までは500ヤードだ。慎重に行くぞ」

抜き足差し足、まるで盗人のように歩く四人。と、先頭のクリスティが突如立ち止まる。

「どうした？」

「シッ！ 足音が聞こえる……。あっち、本部棟のほう」

フランスたちの右方、およそ300ヤード離れたところにある本部棟。フランスはそちらに向けて目を凝らす。竜人の視力が、僅かな灯火に照らされた足音の主の姿を映し出す――ブルネットの女性だった。

「やべえ、少佐だ！」

エドガーが思わず声を上げた。

「バカ、声がでかい！」

一同は、慌てて物陰に隠れる。クリステイが首だけ出して様子を伺う――どうやら、気付かれなかったようだ。

（危なかったな、あの眼のいい少佐によく気付かれなかったもんだ）

同じ竜人でも、その能力には当然個人差というものがあり、ダイアナの視力は特に秀でているのだ。

（きつと、少佐も疲れてたんだよ）

（ああ、この時間に本部棟から出てくるってこたあ、残業でもしてたんだろうよ）

小声で会話する。

（で、これからどうするんですか？）

（大丈夫だ、少佐の向かう先は俺たちと同じ、士官用兵舎だろう。ここでやり過ごして、頃合を見て兵舎に忍び込めばいいさ）

（……………）

（どうした、クリス。顔が固まってるぞ）

（……おしっこ、したくなっちゃった）

（その辺でしろ、と言いたところだが……。音で気付かれちゃう、今は我慢しろ）

もちろん、大量の飲酒が原因だろう。

（漏れるっ、漏れちゃうっ！）

なんとか尿意を紛らわせようと、腰をくねらせ足踏みをするクリ

スティ。と、運悪くその足元には枯れ枝が。乾いた音を立てて、枝が折れた。

「！ 誰か、そこにいますか！？」

鋭い声が響く。

（バカ、なにやってんだ！）

（しょ、しょうがないでしょ！ 切羽詰ってるんだから！）

（言い合いしてる暇はねえ！ 少佐が来ちまう！）

そうしている間にも、靴音がどんどん近づいてくる。

（気付かれた以上、誰一人少佐に捕捉されずに逃げ切ることは不可能だ。……エドガー、クリス。今日の宴の主役は誰だった？）

（フランでしょ）

（ああ。俺たちの誘いに乗って付き合ってくれたフランススを、処罰させるわけにはいかない。そうだよな？）

（そいつはその通りだ）

（なら、俺たちがやることは一つだ。フランススを無事、兵舎まで送り届ける。お前らも協力してくれ）

（……わかったよ）

（……もちろんだ）

（よし、フランスス、よく聞け。俺たち三人はこれからでバラバラの方向に走る。少佐にわざと顔がばれるようにしてな。俺たちは門限破りの常習犯だから、少佐は怒り狂って三人のうち誰かを追いかけるはずだ。お前はここで身を潜め、俺たちが少佐を十分引きつけるのを待ってから兵舎に入るんだ。いいな）

（でも、それじゃ誰か一人が犠牲に）

（気にすんなくて。さっきサイラスが言ったとおりさ。お前を逃が

すのが俺たちの責任ってやつだ)

(エドガーさん……)

(もう時間がないよ! 敵との距離あと50!)

(行くぞ。いいか、俺たちの死を無駄にするなよ)

(じゃあね、フラン。短い間だったけど……。楽しかったよ)

(じゃあな、戦友。あの世で先に待ってるぜ)

無駄に悲壮な覚悟で、三人は物陰を飛び出していく。

「いや、大げさすぎるでしょ」

と、フランシスは三人の背中を見送った。

「サイラス・ガーランド! またあなたたちですか!」

数秒後、皆が寝静まった基地内に、ダイアナの怒声が響き渡った。生贄となったのは、サイラスだったようだ。続いて、韃走りの音と、刃先が風を切る音が聞こえてくる。

「今度という今度は絶対に許しません! そこに直りなさい! この手で修正してあげます!」

「ちょ、少佐! 真剣はまずいって! ってうわっ、切れてる! やめて! 切れてるって!!」

ダイアナの怒声とサイラスの悲鳴が交互に響く。

(こりゃ、死を覚悟するのかもしれないのかも……)

「すみません、サイラスさん。あなたの犠牲は無駄にしません」

眩き、フランスはサイラスに背を向け兵舎へと走っていった。

翌朝、食堂には端正な顔をボコボコに腫らし、体中に包帯を巻きつけたサイラスの姿が。ダイアナを怒らせるようなことは絶対にしないようにしよう、と心に決めるフランスだった。

訓練の日々（弾道学）

フランススの訓練が始まって、一週間が経過した。その日最後の科目として、本部棟の作戦室で参謀科の中尉から戦術論の講義を受けたフランスス（とクリステイ）。フランススはなかなかの飲み込みの早さを見せ、その中尉から参謀科^{うち}に來ないか、と誘われたほどであった。クリステイのほうは半分眠っていたが。

作戦室を辞して、自室へ戻ろうとするフランススとクリステイだったが、隣の部屋の開け放たれたから聞き覚えのある声が漏れるのを聞いた。覗いてみると、そこでは客員研究員・パトリシアが一人の中年将校に向かって何やら解説をしている。

「あれ、フラン？」

パトリシアと目が合ってしまった。

「ごめん、邪魔しちゃった？」

「別にいいわよ。ちょうど終わろうとしてたところだったから」

「お、お前さんが噂の新入りだな」

中年将校から声をかけられる。40過ぎの精悍な男だ。長身で体格が良く、黒髪を短く刈り込み、濃い顎鬚をたくわえている。叩き上げの軍人であろうことは風貌から察せられた。

「はい、フランスス・ファウラー准尉です」

慣れない敬礼をしながら、自己紹介をする。

「俺はスコット・ベイカー少尉だ。対竜^{こり}部隊で砲兵隊長をやっている

る」

「よろしく願います」

差し出された手を握る。皮が分厚く、ごつごつした掌だった。

「ベイカー少尉は、大砲での竜の討伐記録を持つ有名人なんだよ」

「へえ、凄いなあ」

大砲で竜を殺傷するのは難しいと聞いている。その大砲で竜の討伐記録を持つ、というのだから大変なことだ。

「あんまり持ち上げるなよ、クリス。たいがいマグレなんだからよ」
スコットが謙遜する。

「ところでパティ、君も講義をしたの？」

「うん、弾道学ってやつ解説を少尉に頼まれてね」

「弾道学？」

「要するに、大砲の弾が発射されてから着弾するまでの間、どんな軌道を描いて飛ぶのか、ってことを数学的に解き明かそうって学問。最近ようやく形になってきた、まだまだ発展途上の学問ね」

「へ？ 大砲の弾って真っ直ぐ飛ぶんじゃないの？」

わざわざそんなことを研究する必要なんてないんじゃない、と思って
しまうフランス。

「まあ、ごく近い距離に、水平に打ち込むのならお前さんの考えも
あながち間違っちゃいないんだがな。現実はどうも少し複雑なのさ」
「どういことですか？」

「話は、そもそも大砲や銃の弾ってのは真っ直ぐ飛ぶもんじゃない

ってそこからだな」

フランススにとっては意外な言葉だった。大砲や銃の弾は、撃ち出したら凄く速度で目標目がけて一直線、という漠然としたイメージがあったのだ。

「まずは風の影響をかなり受ける。強い横風の場合、500ヤード先の目標から数ヤード以上ずれることもある。あとは引力だな。これは俺もまだまだ勉強中だから、先生に説明してもらったほうが良いだろう」

「もう、先生呼ばわりは止めてってば。少尉は私のお父さんより年上なのよ？ ……えと、引力っていうのはね、全ての物体は引かれあう性質を持つ、って最近提唱された学説」

「引かれあう……？ なんだか良く分からないけど」

「確かに難しい話だけどね。そうね、例えば体力測定するとき、あなたも鉄球投げをやったでしょ。別に、鉄球じゃなくて小石でも何でもいいんだけど」

「それが大砲の弾とどう関係あるの？」

「手から離れた鉄球は山なりに飛びながら、地面に引かれるように段々と高さが落ちて行き、やがて地面に着く。じゃあ、どうしてこの鉄球は地面に落ちるの？」

「？？ ごめん、ちよつと言ってることがわからないや」

「うーん、そうね。じゃあ、話を変えるけど。例えばこの机、横から押せば反対方向に動くわよね。『物体に力を加えれば、その物体は移動する』。動物ですら経験的に知っている、宇宙の法則」

当たり前といえば、当たり前の話だ。うんうん、と頷きながら話を聞くフランスス。教えたがりのパトリシアは、その様子を見て饒舌になっていく。話が長くなりそうなのを察知したクリスティは、あたしはパス、と言って先に帰ってしまった。

「じゃあ、この白墨。これを持ち上げて手を離す。すると、白墨は床に向かって落ちる。これっておかしいと思わない？」

「……手を離しただけで力を加えていないのに、『床に向かって移動した』のがおかしい、そういうことだね」

「ご名答。『なぜ物体は地面に落ちるのか』という当たり前のことをことを学者たちが散々考えた末、出した学説が『引力』。面倒な説明を省いてざっくりと言うなら、『地上の全ての物体には、常に地球に向かって引っ張られる力が働いてる』ってことね」

「へえ……。そんなのがあるんだ」

フランスは多少こんがらがりながらも、パトリシアの言っていることをおおむね理解することができた。それにしても、学問というのは面白い、といくつかの座学を経験して思う。当たり前前に起きている現象に対し、『なぜ』それが起こるのか考えるのが自然科学の出发点だ。日常にある些細なことにも、学問の種は転がっているのだ。

「で、この理屈に従えば、投げられた鉄球と同じく、砲弾も弧を描いて地面に落ちていくことになるわ」

「実際、そういう現象が起きてるんだな、これが。近距離じゃ無視していい程度の動きだが、長距離になればなるほど影響はでかい」

スコットは、長年大砲を撃ち続けてきた叩き上げのベテランである。そのスコットが言うのだから間違いないのだろう。

「風、引力、その他もろもろの要素を考慮に入れて、もっとも適切な発射角を弾き出すのが弾道学なの」

ようやく話が最初に戻った。

「今までは砲手の勘と経験でやっていたんだがな、もっと精度を上げる方法はないもんかと先生に相談したら、数字で計算できるって聞いてな」

「それで週に一度、こうして弾道学と数学を教えてる、ってわけ。私も専門外だから、ほんの基礎的なことしか教えられないけどね」

いかつい砲兵隊長が背中を丸めて数字と睨めっこしている姿も意外だが、砲術に数学が必要だ、ということもフランスにとっては意外だった。それにしてもこの少尉、この齡にして感心すべき向学心である。

「ところでそろそろ三ヶ月になるけど効果は出てるの？」

「若いもんにも勉強させてるし、先生が考えてくれた計算尺も役に立ってる。精度は確実に上がってるな。だが、理屈は正しくても、いかんせん砲と弾と火薬の精度が問題で頭打ちの状態だ。せっかく教えてもらってるのに申し訳ないんだが」

大砲や弾の加工精度にばらつきがあるため、引力や風を考慮に入れてもどうしても弾着はずれてしまう。火薬の質・気温・湿度によって火薬の燃焼に変化が起るため、その影響もある。いくら弾道を計算しても、こうした不確定要素が着弾を乱してしまうのだ。スコットが竜を倒したのを『まぐれ』とい称するのも、大砲を狙って当てる難しさを散々体験しているからなのだろう。

「まあ、俺たちにできるのはとにかく弾をばら撒いて、竜の動きを抑えることくらいなもんさ。最終的に頼りになるのは、お前たち竜人の白兵突撃だ。なにせ、一年ぶりの新人竜人兵だからな、みんなお前さんに期待してるんだぜ」

「仮入隊のフランスにあんまりプレッシャーかけないでよ、少尉」

「おお、スマンかったな。まあ、死なない程度に頑張ってくれや、ハッハッハ」

ポンとフランスの肩を叩き、スコットは出て行った。ほかの兵士たちから期待をかけられていることを知り、不安を禁じえないフランスだった。

陰謀

フロンティアのとある街道。

5人の騎馬の男たちが、談笑しながら進んでいた。

「最近ようやく暖かくなってきましたね」

「そうだな。このあたりは吹き曝しだから、冬の巡回は辛くてたまらなかったぜ」

「そうそう。いっそのこと、炎竜にブレスでも吐かれたほうが楽だっ
って思えるくらいでしたよ、班長」

男たちは、辺境騎士団の団員。街道沿いの巡回と警備を受け持っている。この日も、いつもの順路を回っていた。

「それにしてもいい陽気ですね。こうして馬に揺られてるだけじゃ眠っちまいそうだ」

「バカ野郎、気を抜くんじゃない。ここいらじゃ犯罪は少ないが、旅人が狼やジャッカルの群れに襲われたって報告もあるんだぞ」

「すいません、班長。……ん？ あれはなんですかね」

一行の前方、街道から外れた平原の只中に一台の馬車の姿が。遠目からは分からないが、何ごとか問題が起きて難儀しているようだった。

「なんだ？ とりあえず行ってみるか」

近づいてみると、どうやら荷車の車輪が窪みにはまり、動けなくなってしまうようだ。三人の車夫が押したり引いたりしているが、なかなか脱出することが出来ない。

「いかな。おい、我々も手伝うんだ」
「了解」

団員たちの協力で、ようやく荷車を引き上げることに成功する。
車夫たちは、へこへここと恐縮しながら感謝の言葉を述べた。

「なに、これも職務のうちだ。それにしてもお前ら、なぜこんなところ？」

「へえ、ここいらの道は大きく曲がってるでしょう。真ん中を突っ切れば近道になるってわけです」

「なるほど。気持ちは分かるがな、この辺は人通りも少ない。運よく我々が通りかかっていなければ、立ち往生していたかも知れんぞ。次からは横着せずに街道を通ることだ」

「へえ、へえ。申し訳ないこつて。それじゃ、失礼しやす、騎士様」

そう言って、馬車馬に鞭を入れようとする車夫。しかし、巡回班の班長は、その物言いに引かかえるものを感じた。『騎士様』。確かに自分たちは辺境騎士団員だ。しかし、騎士という職業は、ブリーダーおよびコルドアではとっくの昔に廃れてしまっている。このあたりの一般人は、自分たちのことを『兵隊さん』『軍人さん』などと呼ぶが、『騎士』呼ばわりは聞いたことがない。

「ちょっと待て。その荷はなんだ？」

そう言って、班長は男たちを引き止めた。

「へ？ この荷物はうちの村の名物の、林檎の蒸留酒でござえます。一冬寝かせたものを、隣の市に卸しに行くところですよ」

「そうか。念のため、中身を改めさせてもらおうぞ。おい、お前たち」

「はい」

団員たちが、荷車に近づく。——と、おどおどしていた車夫たちの雰囲気、にわかに剣呑なものへと変化した。その眼には、鋭い眼光が灯る。

「……?! おい、お前たち、これは一体——」

荷を改めていた団員が絶句する。一呼吸おいて、膝から崩れ落ちた。

「……余計なことに気付かなければ、殺さずに済んだものを」

喉を切り裂かれ、あるいは心の臓を突かれ、銃を構える暇もなく団員たちが次々と倒れる。

「くっ！ 貴様ら一体何者だ！ ーっ！」

一人残った班長の問いに、車夫は刃の一突きをもって答えた。

「……死体はどうする？」

「……隠蔽する暇はない。捨て置くしかあるまい」

「……余計な時間を食った。急ごう」

男たちは風のようにその場を立ち去って行った。

「死者5名、か」

あくる日の昼下がり。ところは変わり、ここは対竜部隊本部基地、隊長レナード・パーシヴァル將軍の執務室だ。

「金品が持ち去られていることから、野盗による犯行として捜査をしています。しかし……」

報告書を読み上げる副官ダイアナが、一旦言葉を切った。

「しかし、なんだね？」

「野盗の犯行ならば、わざわざ騎士団員を襲ったのが解せません。それに、殺しの手口が鮮やか過ぎます」

「鮮やか、とは」

「頸動脈、心臓。5人を絶命させたのは、いずれも急所への一撃によるものです。これは、明らかに訓練を受けた者の手口です」

「ふむ……。そうすると、犯人は軍人崩れか、あるいは――間者か」

「お言葉ですが、あの近辺に諜報活動の対象となるようなものは存在しないかと」

「それはそうなんですが……」

レナードは顎髭をなでながら、しばし黙考する。

「……閣下、これからいかがいたしますか」

「当面は捜査の続行を。街道の巡回はひと班5人から10人体制にしよう。第七騎士団に沿岸警備の強化を要請、あとは本国の諜報部に繋ぎを取って情報収集する、ってところだろう。まあ、本国から返答が来るのは数ヶ月後だ、諜報部のほうはアテにならないだろうが」

「了解しました。手配します」

一つ敬礼をして、ダイアナが部屋を出て行く。

「……大事にならなければよいのだが」

執務室で、レナードは一人呟く。

同じころ、フランシスはシラーズの街にいた。細々とした生活必需品を揃えるためである。クリスティに案内してもらい、市場を回る。雑貨の露店で石鹸や裁縫道具を求め、支払いをしようと小銭入れの布袋を取り出す。と、横合いから小さな手が伸びて――フランシスの小銭入れを掻っ攫う。

「へっ？　なに？」

「なにボーっとしてるの！　引ったくりだよ！」

田舎育ちのフランシスである。引ったくりなどという犯罪が起こること自体、全く頭になかったため、クリスティが叫ぶまで思考が停止してしまっていた。

「え？　ああ、うん、追いかけてよう！」

慌てて走り出す。見ると、犯人はまだ小さな男の子だ。ボロを纏った身なりから、路上生活者であることが推測できた。

市場の買い物客に阻まれ、フランシスたちは思うように追跡をすることが出来ない。一方、その少年は小さな身体を生かし、人ごみを縫ってスイスイと逃げていく。かなりの距離を離れてしまったが、少年を見失わなかったのは、ひとえに竜人の視力のおかげであった。

と、子供は横道に入った。恐らくは、人ごみの中でフランシスたちを撒いたと思ったのだろう。しかし、子供の考えは甘かった。

「フラン、いた！　あそこ！」

「うん！」

少年が振り返ると、背後には二人の姿が。しかし、彼にはまだ余裕があった。追っ手とはまだ50ヤードほどの距離がある。追いつかれる前に入り組んだ路地に入り込んでしまえば、そこは自分の庭のようなものだ。――相手が常人ならば、彼の逃走は成功していたに違いない。しかし、今回ばかりは相手が悪かった。

「一気に捕まえる！」

クリスティが加速した。人気のない裏道ゆえに、竜人としての脚力を十二分に発揮できる。50ヤードの距離を詰めるのに、3秒とかならなかっただろう。少年は声を上げる暇もなく、クリスティに捕縛された。

「こら、人の物を盗っちゃ駄目でしょ！」

少年の頬を抓り上げ、クリスティが怒鳴る。

「いててっ、悪かったって、頼むから許してくれよ！」

男の子は、涙目で許しを請う。

「子供だからって、やっていいことと悪いことくらいわかるでしょ！」

「勘弁してくれって！ おいら、頼まれてやっただけなんだ！」

「はぁ？ 頼まれて？」

なんともおかしい言い分である。大した金額も入っていない小銭入れを、わざわざ人に依頼して盗ませるとは。

「ねえ、君。それってどういうこと？」

「おいらにもよくわかんないけど……。さっき通りでオッサンに声をかけられて……。小遣いやるからあの軍人の財布を取って来い、って」

「なにそれ、変なの」

「本当に？」

「本当だって。嘘はついちゃいないよ」

確かに、少年が嘘をついているようにも思えない。

「クリス、もういいよ。離してあげて」

「でも……」

「いいって。お金も返ってきたし」

貧しい身の上のフランシスは、路上生活者らしき男の子に同情的な気分になった。小銭を数枚取り出し、少年に握らせた。

「これは君にあげる。その代わり、もう二度と盗みはしないって約束できるかな」

「いいのか？ 約束するって言ったって、おいら守らないかもしれないよ」

「それでも構わないさ」

「わかった、約束するよ」

フランシスと思う。せめて少年に持って欲しいのは、罪の意識。彼は貧しい路上生活者だ。望むと望まないに関わらず、悪に手を染めざるを得なくなることがあるかもしれない。そんなとき、今日の記憶が小さいながら歯止めとなるかもしれない。

「ありがとう、兄ちゃん」

手を振って、少年は去っていった。隣のクリステイは呆れ顔だ。

「ハア、あんたがそれでいいんならあたしは文句言わないけどさ。フランって本当にお人よしだね」

「うん、それは自分でも思うよ」

「にしても……。妙な話だったよね」

「うん。何者だったんだろ、その男って」

少年曰く、どこにでもあるような服を着た、どこにでもいそうな30男。それ以上の特徴は覚えていないという。

「ひょっとしてその小銭入れ、裏返すと宝の地図になってたり、とか？」

「そんなことあるわけないだろ」

「だよーね。まあ、世の中変な人はたくさんいるからね。気にしなくてもいいんじゃない？」

「……うーん、そうかなあ」

若干の疑問を残しつつも、フランシスは買い物に戻る。この謎の男が、のちに起こる事件の鍵となることなど、このときのフランシスは知る由もなかった。

幕間その五

フランススの訓練が開始されて、半月が経過した。レナードの執務室にて、ダイアナがフランススの訓練の進捗について報告する。

「座学は優秀です。勉強熱心で、飲み込みも早いと各担当教官も太鼓判を押しています。スタンフォード博士など、もっと早い時期に然るべき教育を受けていれば、と残念がっているほどです。遠くないうちに、士官としてふさわしい教養が身に付くかと」

「ほう、それは結構。実技のほうはどうだね」

「剣術はサイラス・ガールランド少尉が、格闘術はエドガー・ノリス中尉が主に担当していますが、一朝一夕で身に付くものではありませんので。実戦水準に達するまでは、今しばらくかかるでしょう」

竜人の体力は常人のそれとかけ離れているため、竜人に剣術や格闘術を教えるのは同じく竜人でなくては都合が悪い。なので、フランススにはサイラスやエドガーが一对一で稽古をつけている。

「馬術や野営術、銃の基本操作、応急手当などは、好都合なことに教える必要がありませんでした」

「まあ、彼も開拓地の男だからな。そのあたりの技術は当然身につけているだろう。……で、どうだ、ものになりそうか？」

「申し上げたとおり、頭の回転は申し分ありません。白兵戦の技術に関しても、カンが悪くないといえます。優秀な兵士となる素質は十分にあると考えます」

「そうか、少佐がそう言うのなら心配ないだろう。引き続き訓練の総監督を頼む」

「了解しました。次の案件ですが」

そう言つて、ダイアナは報告書の束を提出する。一枚目には、『ヒークス平原東部地方における炎竜の生態調査』とある。

「ほう、どれどれ。……体長50〜55フィートの成竜、ヒークス平原東部半径およそ12マイルを行動範囲とす、か。この調査隊の斥候はスオウとアルフだったな」

「はい。ですので、報告書の精度はかなり高いと思われます。いかがなさいますか」

「……よし、ニエマイアの辺境騎士団本部に出撃を具申する。許可が下り次第、討伐に向かう」

「了解しました」

「作戦の指揮は、前回に引き続き少佐、君が執り行ってくれ」

「ご命令とあらば。しかし閣下、私は……」

『前回』とは、フランススが竜に教われる原因となった作戦のことである。——この戦いは、それまで副官として指揮官レナードの補佐をしてきたダイアナが、初めて一人で指揮を執った戦いであった。

結果はご存知のとおり、竜を取り逃がして一般人を負傷させるというダイアナにとって苦い初陣となってしまうた。

唇をゆがめ、ダイアナが口ごもる。物事をはっきり言うタイプのダイアナとしては、極めて珍しいことだ。

「まだこの間のことを気にしているのか、少佐」

「……私はまだまだ未熟です。指揮官など不相応ではないかと」

ダイアナは、強すぎる責任感が仇となり、失敗を過剰に悔やむという短所があった。レナードは、しばらくダイアナを指揮官から外して様子を見ることも考えたが——ダイアナにはこの失敗を乗り越

えられる精神力がある、そう信じて再び指揮を執らせることに決めたのだ。

「おいおい、いつまでこの中年男に前線に出ろというのだ。辺境騎士団本部からも、私の後継者を早急に育てるようにと再三指令が来ている。一度の失敗でへこたれてもらっては困るぞ」

「閣下の後継者など！ 恐れ多いことです」

「君のほか誰に指揮官が務まるというのだ。判断力、分析力、決断力。どれをとっても私よりよほど優れているというのに」

「ご冗談が過ぎます。私など閣下の足元にも及びません」

「とにかく、だ。失敗を恐れてはいつまで経っても前には進めない。失敗したと思うなら、次に生かせ。聡明な君のことだ、本当は言われなくともわかっているのだろう？」

レナードの言うとおりであった。次は絶対に失敗しないと心に誓い、戦術を練り直し、人知れず自らに厳しい訓練を課していたダイアナだった。

「……了解しました。拝命します」

そう言ったダイアナの表情からは、先ほどまでの不安の色は消えていた。

いい顔になった、そう思うレナード。

「そうだ、今回はフランスも連れて行ったらどうだね」

「准尉をですか？ しかし彼の訓練はまだ――」

「なにもフランスを戦わせよう、ということではない。彼はまだ正式入隊するかどうか保留している立場だ。実際に我々の仕事を見せてやらないことには、決断もできないだろう。言ってみれば見学のようなものだ」

「……わかりました。仰せのままに」

「よし、では以上だ。よろしく頼んだぞ」

ポン、とダイアナの肩に手を置く。筋肉の緊張がレナードの手にも伝わった。表情にはおくびも出していないが、きたる戦いに向けて早くも闘志を燃やしているのだ。プレッシャーをかけ過ぎたか、と思うレナードだったが、冷静すぎるダイアナのことだ、燃え上がるくらいがちょうどいいだろうと思い直す。

（今度こそ……!）

固い決意を胸に抱きつつ、ダイアナは執務室を後にする。

実戦へ

「僕が、実戦にですか？」

作戦室に集められた竜人兵の面々の前で、フランシスは実戦への参加指令を告げられた。

「はい。もちろん、まだ前線で戦わせるようなことはしません。嫌なら今回は見送っても構いませんが」

フランシスは言葉に詰まる。実戦ということとは、あの恐ろしい竜と相對することになる。最前線に立たなくとも、何らかのアクションで竜がフランシスに襲い掛からないとは限らない。ちょうど「この前」のように。しかし――

「分かりました。僕も連れて行ってください」

フランシスは、拒否しなかった。

「へえ……フランって結構肝っ玉据わってるんだね。見かけによらず、なんて言っちゃ悪いけどさ」

「怖くないかと言われれば、そりゃ怖いよ。でも……僕はまだ正式入団するかどうか決めかねてるわけだから。実際自分の目で見てから判断したい」

やはりフランシスは聡い、とダイアナは思う。

「しっかりしてんなあ。俺なんてフランシスくらいの時分には女を口説くことしか考えてなかったぜ」

「そりゃサイラスが特殊なだけじゃないのー？」

「まあ、心配すんな。お前さんには指一本触れさせねえよ。ピクニックに出も行くつもりで気楽にしてろ」

フランススの背中をバシバシ叩きながら、エドガーが豪快に笑う。

「ノリス中尉の言うとおりです。あなたを危険に晒すようなことは絶対にありません。しっかり私たちの戦いを目に焼き付けてください」

「はい」

「出発は三日後。出撃前の準備に関してはキーツ少尉に指示を仰ぐこと。以上です。解散」

訓練の合間に荷物を纏めたり、行軍について教わったりしつつ――三日は瞬く間に過ぎ、フランススたちは馬上の人となっていた。目標はヒークス平原。シラーズの街から北東におおよそ七〇マイル、未だ人の手が入らぬ未開の地である。

今回の作戦の目標は、このヒークス平原を縄張りとする炎竜の討伐だ。先行調査隊の報告によれば竜のサイズは55フィート。平均的な大きさといえる。動員された兵力は総勢250あまり、大砲が30門。実際のところ通常よりもやや多い人員だが、これは前回の失敗を踏まえての増員だった。また、この作戦には本人の強い希望で研究者のパトリシアも随行している。

竜人兵と士官、騎兵は一人につき一頭の馬が割り当てられているが、その他の兵は二頭立ての馬車に3〜4人が乗り組んで移動している。他の軍隊ならば、この程度の距離だと歩兵や工兵は徒歩で移動する場合が多い。しかし、対竜部隊の場合はなるべく全員が馬によって移動することが推奨される。それは、万一作戦が失敗した場

合の退却を効率よく行い、生存率を上げるためである。

戦闘に参加することはないと言われたフランスだったが、道中や現地で食料調達せねばなくなることもあるため、ナイフと猟銃として使うためのマスケットを持たされた。背囊には食料と幾許かの着替えが詰め込まれ、シャベル、毛布などとともに馬の背に括り付けられている。

クリステイはフランス同様の装備に加え、二本の小剣と、3フイートほどの柄の先に円錐型の穂先を取り付けた、短槍のような武器を携えている。聞くと、それはスケイルピアサーといい、竜の鱗を刺し貫くための武器だという。サイラスはロングソードを三本、エドガーは長柄の巨大な戦斧を一本と、小型の片手斧を二本携えている。

三人の武器に共通して言えるのは――どれも異常に肉厚で野太く、無骨な造りだということ。竜人の腕力と竜の耐久力を考慮した結果なのだろう。

三人とも複数の得物を持っているのは、武器が損壊したときに備えてのことだ。常人をはるかに超える臂力をもって竜に挑む竜人兵は、特に武器が壊れるリスクを考えなければならぬ。

「ねえ、クリス」

クリステイのほうに馬を寄せ、フランスが話しかける。

「なに？」

「少佐はこれといって武器を持っていないよね？ やっぱり指揮官だから直接は戦わないの？」

「違う違う。ほら、少佐の得物はアレだよ」

そう言って、クリステイは一台の荷馬車を指差す。

「アレは——銃？ 凄い大きさだけど——」

そこには、非常に巨大な銃が二挺積み込まれていた。全長は7フイート以上、太さは五インチほどもあるだろうか。もはや大砲と言っているサイズである。肉厚で、無骨で、重厚な造りだ。

「シュミット式歩兵銃改。ハウリング・ウルフ通称吼狼。口径二インチ、重量一五〇ポンド。遠距離から竜の鱗を貫通せしめる唯一の武器です」

二人のやり取りを聞いていたのだろう、少し離れた場所で馬を操っていたダイアナが説明する。

この銃は、対竜用に開発されたものだ。非常に扱いが難しく竜人以外はまともに撃つことすらできないが、その分威力は折り紙つきだ。通常弾のほか、竜の牙を削りだした被帽を用いた撤甲弾があり、これを用いた場合、入射角が深いという条件付ではあるものの、500ヤードの距離から竜の鱗を撃ち抜くことができる。この銃は、一発撃つだけで各部にガタが来て正常に動作しなくなってしまうため、一発撃つごとに整備が必要になるという困った代物だ。二挺用意されているということは、今回の作戦で撃てるのは二発のみということである。ちなみに、暴発の危険性も普通の銃よりはるかに高い。射手が常人の場合、暴発を起こすと死の危険性があるため、そういう意味でも竜人専用の武器であった。

「いささか信頼性に欠ける兵器ですが……何物にも替えがたい威力を持つのは確かです」

「少佐はアレでもう40以上も竜を倒してるんだよ」

「40ってどれくらいなんだろう」

数字だけ言われても、それがどれほどのものかピンと来ないフランス。

「少佐の次に多いのがエドガーで19だったかな。あたしが3、じやなかった4で、でサイラスが確か7。少佐より討伐数が多いのなんて隊長だけなんだから」

「へえ、凄いんですね」

フランススが、素直に感嘆の声を漏らす。

「私は皆が協力して弱らせた竜に、遠く離れた安全な場所から最後の一撃を加えているだけです。賞賛されるなら、部隊全員が賞賛されるべきでしょう」

そう言うダイアナだが、40以上という討伐数は、ダイアナの卓越した狙撃技術があつてこそのものである。いくら強力な火器とはいえ、当たる角度が浅ければ弾丸は弾かれてしまう。動き続ける目標相手に、一瞬のタイミングを見定め、確実に急所を狙い打つ。そんな芸当が可能なのは、部隊の中でもダイアナただ一人であつた。

一日の行軍ののち、部隊は作戦地区である平原に辿り着いた。そこは、綿密な生態調査によって判明した竜の縄張りから、僅かに外れた地域である。竜の縄張り意識の強さを利用して、作戦の失敗時退却しやすくするための選択だ。きわめて異例ながら、フランススが竜に襲われるという事例が起きてしまったため、安心はできないのだが。

ダイアナの号令のもと、陣地の設営が始まる。フランススは待機を命じられたため、することがなく手持ち無沙汰である。

「退屈そうね、フラン」

パトリシアが話しかけてきた。

「お前は何もせずに見ている、って少佐に言われちゃって。ほら、あそこで穴を掘ってる人がいるだろ？ あのくらいの仕事は手伝わせてくれてもいいのになあ」

「働き者ねえ。尊敬すべき美德だと思うけれど、今回は対竜部隊の作戦がどういうものか知ることが第一なんだし。しっかり見学するのも大事よ」

「そういうもんかな」

話をしているうちにも、設営は進む。平原の中でも小高い場所に二箇所、陣地が張られている。30門の大砲も、半分ずつ分けて設置された。

「あの大きな穴は何のために？」

「あの、って言われても……。私はあなたと違ってそんな遠くまで見えないのよ」

そう言って、パトリシアは双眼鏡を覗き込む。

「あれは落とし穴ね。もちろん、あの程度の深さじゃ足止めにしかないけど、膠が仕込んであるから多少竜の機動力を削ぐことができるわ」

「あの、大砲の横で組み立ててるのは？」

「あれはバリスタ。巨大な弩弓ね。竜に対しては大砲より効果的なんだけど、装填にかかる手間と命中率が問題ね」

「あそこで網を広げているのは？」

「あれは跳ね上げ式の罠ね。柔軟性のある網を竜に絡ませて、動きを止めるの」

他にも塹壕を掘ったり、目印となる地点に旗を立てたり。兵士たちが滞りなく準備を進めていく。

「凄い大規模な作戦なんだなあ。まるで戦争みたいだ」

「思っていたのと違った？」

「うん。竜人のみんなが正面から突っ込んで戦うみたいな感じかと思ってた」

竜の討伐は、竜人の白兵戦によって行うものだと思っていたのだ。物語に出でてくる、遍歴の騎士のごとくである。

「それは無茶よ。いくら竜人といっても、不用意に竜に近づくなんて自殺行為だし」

「そうなんだ。僕がクリスとエドガーさんに助けられたときは、二人だけで竜を倒してたから。そういうものだ」と

「それは非常時だったからよ。それに、あの竜はブレスをはくことも出来ないくらいに弱っていたみたいだしね。あなたを追いかけたのも、最後の力を振り絞っての行動だったのよ。それでも、何のサポートもないあの状況で竜に白兵戦を挑むには決死の覚悟が必要だったはず」

フランスは心の中で、クリスティとエドガーへの感謝の念を新たにする。クリスティも大したことではないように振舞っていたが、あの戦闘の裏には壮絶な覚悟があったのだ。

「トラップで足を止めて、大砲やバリスタをこれでもか、つてくらしに打ち込んで、そこで仕留められればそれでよし。駄目なら少佐の吼狼、最後の手段として竜人兵の白兵突撃の出番、つてのが常道ね。竜人兵というのはあくまで最後の戦力なの。とっておきってや

つよ」

機動力を削ぎつつ、遠距離からの一方的な砲火で仕留める。それが、竜殺しの基本だった。なるほど理に適っている、とフランシスはある。

程なくして、ダイアナのもとに伝令が。

「……先行隊、スオウ・モーガン中尉。報告にありました」

中背で痩身のその男は、年のころ20代後半。特徴的な黒髪と切れ長の黒い瞳を持っていた。どこことなく涼やかな、落ち着いた印象を与える男だ。

「彼はスオウ。見て分かると思うけど西方との混血で、彼も竜人兵のひとりよ」

小声でパトリシアが教える。

旧大陸エウレシアは、大陸中央部の山岳地帯・乾燥地帯を挟んで、大きく二つの地域に分けられる。ブリーディアはその東側、いわゆるルゲール文化圏と呼ばれるエリアに位置している。パトリシアによれば、彼は旧大陸西方の血を引いているらしい。

「ご苦労です。では、詳細を」

「二〇〇〇時点、目標は作戦予定地より16マイル地点で大きな動きはなし。アルフレッド・ニューマン大尉が目標の監視を続行中。ダニエル・フレッチャー軍曹による『釣り出し』の準備は既に完了」

一切の無駄を省いた、簡潔な報告であった。

「よろしい。設営は間も無く完了しますので、『釣り出し』の開始は当初の予定通り一四〇〇にて。着いたばかりのところ申し訳ないですが、再び伝令を頼みます」
「了解」

短く答えると、スオウは馬にまたがり走り去った。

「作戦開始まであと3時間です。作業が終わった者から食事を取り、戦いに備えるよう伝達を」

補佐役の将校にダイアナが指令を下す。

「3時間、か」

フランスは、独特の緊張感が部隊内に広がるのを感じる。戦いに参加することのないフランスが出来るのは、ただ作戦の成功を祈ることのみであった。

開戦のとき

遂に、作戦開始の時刻、午後2時を迎えた。周囲の空気はぴしりと張り詰めている。歴戦の兵士たちの顔にも、緊張の色が浮かんでいる。

フランスは、平原を南から見下ろす小高い丘に設置された陣にて、竜が現れるときを待っていた。

同じ陣地にはダイアナとクリスティ。そこから北西方向に張られたもう一つの陣地に、エドガーとサイラスが配置されている。二つの陣にはそれぞれ多数の大砲とバリスタが設置されていた。

戦場における竜人の役割は、単なる戦闘員に留まらない。卓越した感覚器官を持つ彼らは、まず大砲発射の際の観測手となる。

そして、もう一つ重要なのが、命令の伝達係としての役割だ。

戦場で兵士たちが連携を取るには、潤滑な命令伝達こそがもっとも重要である。遠く離れた場所の味方への伝達法としては、古来より様々な音であったり狼煙などが用いられてきた。しかし、それらはどれも伝わるまでに若干の時間を要する。ごく近い場所なら音による伝達方法でもほぼリアルタイムだが、数百ヤード、あるいはマイルを超える距離となると、数秒のラグが出てしまう。光による伝達は夜間ならば有効だが、白昼に遠距離まで光を届けられる光源は今のところ発明されていない。

竜人がいる場合、話は簡単だ。その卓越した視力があれば、ハンドシグナルや手旗を使うだけで、数百ヤード先まで容易に情報を伝えることが出来るのだ。望遠鏡があれば、その距離はさらに数倍となるだろう。

竜人兵が二つの陣に分けて配置されているのは、そういった理由があるからだ。

作戦は、『釣り出し』と呼ばれる行動から始まる。竜をわざと挑発して追いかけさせ、作戦予定地まで誘導するというものだ。『釣り出し』の開始予定時刻が、午後2時。計画ではおよそ30分後、平原東から竜が現れる予定である。

「それにしても、釣り出しって危険な作戦だよね」

フランスは傍らのパトリシアに話しかけた。竜に追われた実体験から感じたことを口にする。

「まあ、そうね。でも、作戦全体の成否を左右する重要な役目だから」

そもそも、『釣り出し』が失敗すれば、作戦自体が不発に終わってしまうのだ。

「まあ……今日は大丈夫だよ、フラン」

クリスティが口を挟む。

「なにせ、『釣り餌』はダニエルだからね」

「ダニエル？」

「ダニエル・フレッチャー兵長。騎士団に入るまでは、本国で競馬の騎手をしていた乗馬の名人よ」

「そんなに凄いの？」

「勝率4割以上、って本人は言ってたかな」

四割と言われても、フランスにはいまいちピンと来ない数字で

ある。

「私も競馬は詳しくないけど……。この記録、二度と破られることはないだろうとまで言われてるわね。彼がいるからこそ、『釣り出し』という作戦が成り立つと言ってもいいくらい」

「そんな人がどうしてこんな辺境に」

「竜に追われるスリルがどうのとか言ってたけど――」

と、クリスティが言葉を切る。

「どうしたの？」

「しっ、静かに！……………来たね。フラン、あんたなら聞こえるでしょ？」

言われて、耳をすませてみる。竜人の聴覚が、異音を聞き取った。――ドロドロという地響きが、はるか東方から響いてくるのだ。竜が近づく前兆であり――それは、『釣り出し』が成功したということだ。

ダイアナは、既に動いていた。

「全軍、戦闘配備！ 砲手は初弾装填せよ！」

号令とともに、部隊全員が動き出す。

「あたしも配置に着くから。フラン、あんたたちはここで大人しくしてるんだよ」

「うん。クリスも気をつけて。幸運を」

クリスティに向けて、親指を上にくぐつと突き立てる。エドガーに

教わった、幸運を祈るおまじないだ。

「ありがとう。じゃ、行って来る！」

小走りに、クリスティが自らの持ち場に向かって行った。

地響きは徐々に大きくなり――やがて、竜人ではない者の耳にも、それがはっきりと聞き取れるようになる。

戦闘準備はすっかり整い、きたるべき開戦に備えて誰もが口を閉ざす。あたりに響くのは、迫りつつある地響きのみ。

やがて、平原の東方、はるか彼方から土煙が上がる。疾駆する炎竜が巻き上げたものであろうことは、一目瞭然である。

作戦指揮官たるダイアナは、口を真一文字に引き締めて『その時』を待つ。

開戦のとき（後書き）

長くなりそうなので、一旦投下です。

寸止めのようになってしまい申し訳ありませんが、続きは次話の投稿をお待ちください。

激戦

「来た来た！ 3時の方角、距離4000！ 『釣り餌』は健在！」

望遠鏡をのぞきながら、観測手を務めるクリステイが叫ぶ。間髪いれず、ダイアナの指示が飛ぶ。

「第一砲隊は地点A、ポイント・アル第二砲隊は地点Cポイント・キャロルに照準合わせ、待機！ キ
ーッ少尉、速度は？」

「——12時方向に毎分600です！」

「予定どおりですね。ベイカー少尉、準備よろしいか」
「万端であります、少佐」

砲兵隊長の威勢のいい返事が響く。

ドロドロという地響きは、やがてドシン、ドシンとリズムを刻む、はっきりとした足音となる。

竜人の視力を持つフランススは、遂に炎竜の姿をその眼にとらえた。後足二本で平原を疾駆するその巨大な竜は、一人の騎馬の男を100ヤードほどの距離を開けて追いかけている。

「地点A到達まで、あと60秒！」

フランススにとっては永遠にも感じる60秒。そして『釣り餌』は竜に追いつかれることなく、フランススたちがいる南の陣から真北方向——地点Aを示す旗を通過した。

ズンという地響きと、短い咆哮。竜が、見事落とし穴に嵌った音である。落とし穴はそれほど深くなく、すぐに脱出されてしまうも

のであったが、中には膠が仕込んである。この膠が足の鱗と鱗の間に入り込み、竜の機動力を削ぎ落とすことができるのだ。このポイントAに竜を誘導するのが、『釣り餌』たるダニエル・フレッチャー兵長の最終的な役割であった。

「第一砲隊、一斉掃射！ 撃——っ！」

ダイアナの号令とともに、凄まじい轟音があたりに響く。南の陣に据えられた15門の大砲が、一斉に火を吹いた。土煙を上げ、砲弾が着弾する。

「命中——ゼロ、至近弾は多数！」

クリステイが報告する。もつとも、これは曲射弾道での最大射程ギリギリに向けた射撃であり、端から命中は期待されていない。

「次弾装填済み次第、任意に発砲！」

次々と、砲弾が撃ち出される。

「グオオオッ!？」

それまで『釣り餌』しか見ていなかった竜が、こちらを向く。竜の怒りの対象を『釣り餌』から逸らせ、南の陣に向かわせる。それが、この砲撃の目的であった。

「かかりましたね」

作戦通り。竜は、怒りの矛先を大砲に向けたようだ。落とし穴から這い出ると、『釣り餌』ではなく、陣地に向かい走行を開始する。

「砲隊はそのまま掃射！」

「了解！ 野郎ども、撃ちまくれ！」

発射音の合間に、砲兵隊長スコットの怒号が飛ぶ。

轟音に次ぐ轟音、やがて徐々に命中弾が出るようになる。砲に向けて真っ直ぐ進んでくる相手に対しては、狙いが付けやすい。左右の射角を気にする必要なく、とにかく目標の進行方向に砲弾をばら撒けばいいのだ。

「どうです、ベイカー少尉」

「いけませんな。奴さん、体格なりの割りに随分頑丈だ。ここまでタフなのは珍しい」

望遠鏡を片手に、スコットが答える。

数発の砲弾をその身に受けるも、竜はさしたる痛手は負っていないようだ。しかし、これも想定どおりである。

「『吼狼』を。ジョンソン大尉、作戦指揮を。予定通りをお願いします」

指揮を補佐役である若い将校に任せ、ダイアナは巨大な歩兵銃、『吼狼』を構える。地面にうつ伏せになった、いわゆる伏せ撃ちの体勢だ。

砲撃を受けつつも、竜の足は止まらない。クリスティの報告が飛ぶ。

「地点Cまであと300！」

「撃ち方止め！」

青年将校の指示により、発砲が止む。平原に響くのは、竜の足音と低い唸り声のみ。

やがて竜は、南の陣から真北に伸ばした直線、北西の陣から真東に伸ばした直線——その交差点に達する。地点Cだ。

地点Cに竜が到達した瞬間——三方から巨大な網が襲い掛かる。

弓のようになる木材によって跳ね上げられた、特殊ネットだ。塹壕に潜んだ歩兵が作動したトラップだった。

「ガオアアアッ！」

爪を振りかざし、全身をよじつてもがくも、伸縮性のあるその網は、竜の身体を絡め取って離さない。その間に駆け寄った騎兵が、歩兵を回収し全力で離脱する。

好機。

地面に伏せたダイアナは、500ヤード先の目標に慎重に狙いをつけ——引き金を引く。

引き金を引いた瞬間。いけない、とダイアナは思った。遠距離狙撃は、非常にデリケートなものだ。呼吸で揺れる身体、筋肉の僅かな伸縮。頭の上から爪の先まで、全身のあらゆる感覚が引き金を引くという行為に集約されなければ、狙撃は成功しない。

言葉で言い表すことはできないのだが——どこかに、『ずれ』が生じた。ダイアナは、引き金を引いた瞬間にそれを感じ取った。

パアン、という乾いた音が響き——弾丸は竜の鱗に弾かれた。入射角度が浅かったのだ。

「全軍、全力射撃！」

狙撃失敗を見て取った青年将校が、命令を下す。

耳を劈くような激しい発砲音が響き、二箇所陣に設置された全ての大砲、バリスタが一気に火を吹いた。二方向からの十字砲火だ。

「グルアアアーッ！！！」

恐ろしい竜の咆哮も、激しい着弾音にかき消される。至近弾が土煙を巻き上げ、竜の姿を隠すが、砲兵は構わず発砲を続ける。

『釣り出し』によって竜を誘導し、トラップで機動力を削ぎ、集中砲火を加える。知能があまり高くはないと言われている竜に対しては、古典的で単純な作戦がむしろ一番効果的だった。

「撃って撃って撃ちまくれ！　ありったけの砲弾^{たま}をくれてやれ！」

スコットの怒声が響く。

数分ののち、砲撃が止められた。土煙が収まるのを待ち、クリステイが戦果を確認する。

「損傷多数あるものの――目標は健在！　こちらに向けて進行を開始します！」

ふう、とため息を一つ漏らすダイアナ。竜は手傷を負いながらもゆっくりと身体を起こし、歩き始めた。

「ベイカー少尉、砲の稼働状況は」

「6門が作動不良であります」

「向こうは――8門が健在、だそうです」

北西の陣からの手旗信号を受け、クリステイも報告する。
大砲は連射するとさまざまなトラブルが起きる。砲身に歪み、ひ

び割れが起きたり、不発による弾詰まりが起きたり。また、砲身が熱を持ちすぎた場合、次弾を撃つまで冷却時間が必要になってくる。

「あたしたちの出番、ですネ」

緊張の面持ちで、クリステイが言う。

「……止むを得ません。ベイカー少尉、残りの砲のうち半分に榴弾を装填。弾幕とともに、竜人兵の突撃を行います」

榴弾と、はごく最近新たに開発された、炸薬を仕込んだ砲弾である。対人戦では威力を発揮するものの、炎竜にはあまり効果がない。ここで使われるのは、あくまで目くらましとしてであった。

クリステイは、弾薬入れなど余計な荷物を外して身軽になる。深緑の野戦服のほかに身に着けているのは、腰に挿した二本の小剣。背中には、スケイルピアサーをくくり付けた。

「いつでも行けます」

クリステイの言葉を受け、ダイアナが北西の陣に視線を向ける。エドガーとサイラスからも、準備完了の合図。

「よろしい。カウントののち、突撃開始」

ダイアナが右腕を高く掲げ、指でカウントを取る。三、二、一――ダイアナの腕が振り下ろされると同時に、クリステイが陣を走り出た。北西からは、ほんの僅かに遅れ、エドガーとサイラス。

ばねで弾かれたかのような加速だ。前傾姿勢で疾走するクリステ

イは、数歩のうちに最高速度に達する。その姿は、さながら豹か山猫か。

「支援砲撃開始！」

クリスティたちの背中を追い越すように、砲弾が飛翔する。着弾とともに上がる大きな爆炎が、大地を震わせる。

一番槍をつけたのは、クリスティ。500ヤード弱の距離を20秒からずに走破したクリスティは、爆炎と土煙を突っ切って跳躍する。

「でええーっ！」

逆手に小剣を持ち、身体を回転させるように叩きつける。その斬撃は、竜の首の辺りを浅く切り裂いた。

「先を越されちゃったか！」

長剣を振りかぶり、サイラスが突撃。袈裟懸けに切りつけた一撃で、足の鱗を斜めに削ぎ落とす。

「うおおおーりゃあっ！」

最後に到着したエドガーが、身の丈ほどもある戦斧を、立ち木を切り倒すがごとく横薙ぎに振るう。斧の刃先が、鱗深くまで突き刺さった。

一方でダイアナは二挺目の『吼狼』を構え、射撃体勢に入った。今回の作戦に持参したのは二挺のみであり、これが最後だ。外すとは後はない。慎重に、射撃のタイミングをうかがう。

「でえいつ、やつ！」

両手の小剣で矢継ぎ早に攻撃を繰り返すクリステイだが、そのほとんども鱗に阻まれる。

「まったく、えらく頑丈な野郎だぜ」

斧を振るいながら、エドガーが愚痴る。

「クリス、こいつは鱗が厚い、砲撃で出来た傷を狙え！」

「分かった！」

先ほどの集中砲火で、数箇所鱗がはがれて血が滲んでいる場所があった。三人は、そこを重点的に狙っていく。

「グオオオーッ！！」

竜の右腕が、クリステイに向けて振るわれた。しかし、その一撃は空を切り、地面を叩くのみ。

「当たらないよっ！」

その腕を足がかりに、クリステイが跳躍。背中のスケイルピアサーを抜き放ち、全体重をかけて頭部に突き立てる。――しかし、またも鱗に阻まれる。致命傷には至らない。

「ほんつと頑丈だな、コイツ！」

「エドガー、クリス、まずい！」

と、サイラスが叫んだ。竜の下腹の鱗が、波打つように動いてい

た。輔腹^{ふくはら}が動作している証であり、それは炎竜が持つ最強攻撃――ブレスの予備動作であった。

「やばっ！」

幸い、ブレスを吐くには数秒の『溜め』が必要であり、その間竜の動きは止まる。クリスティ、エドガー、サイラスは、その脚力をもって全力で離脱する。竜の腹がみるみる膨らんでいき、そして、その膨らみが胸、喉へと移動する。

――ブオオオオーッ！！

炎の塊が、竜の前方180度、数十ヤードにわたってばら撒かれた。

数百ヤード離れたフランシスの肌にも伝わる、圧倒的な熱量。鉄をも溶かすと言われるファイアーブレスが、一面を焼き払う。地面が黒く染まり、岩石が赤熱するさまはまさに地獄絵図であった。

「三人は無事？　――エドガーさん！？」

フランシスが、悲痛な叫びを漏らした。その眼がとらえたのは、地面に倒れ伏すエドガーだった。所々服が焼け焦げ、煙を上げている。やがて、エドガーは地面に手を突き上体を起こす。死んだわけではないようだ。

「くっ、俺としたことが、油断しちゃったぜ……」

「エドガー、離脱だ！」

エドガーに駆け寄りながら、サイラスが叫ぶ。

「支援砲撃！ 中尉の撤退を援護しろ！」

ダイアナの号令に、再び大砲が火を吹く。サイラスに肩を借りつつ、エドガーが離脱する。

「すまねえな、俺はもう大丈夫だ」

「分かった、早いところ本陣に戻れよ」

よろめきながらもエドガーは後退し、騎兵がエドガーを迎えに走り寄った。それを見届けたサイラスは、クリステイとともに再び竜と対峙した。

「どうやら大丈夫みたい。でも、危なかったわね」

「ああ、本当に良かった」

フランスとパトリシアは、ほっと胸をなでおろす。

「でも、攻めるなら今が絶好の機会よ」

「どうして？」

「あの規模のブレスを吐いたとなると、『炎囊』は空に近い状態のはず。しばらくブレスは吐けないわ」

クリステイとサイラスは果敢に竜に挑んでいる。しかし、致命傷を与えることはできていない。

「こうなったら、少佐の『吼狼』が頼りね」

ダイアナとて、同じことを考える。しかし、残された『吼狼』は一挺。これを外せば作戦はほぼ失敗、撤退を考えなくてはならない。必然、慎重にならざるを得ない。確実性を求めるならば、もっと接

近したほうがいい。しかし、作戦が失敗した場合、兵が撤退の指示も自らの責任をもって行わなくてはいけないため、みだりに本陣を離れることもできない。

——落ち着け。

先ほどは、名誉挽回に燃えるあまり、身体に力が入りすぎていた。呼吸は規則正しく。頭は冷静に。ダイアナは、自分に言い聞かせる。

（やはり狙いは、頭部。——しかし、キーツ少尉の攻撃に耐えたところを見ると、頭頂部は鱗が硬い。となると——）

「キーツ、ガーランド、こちらに向けて仰け反らせろ！！！」

大音声でダイアナが叫ぶ。竜人の聴覚が、それをはっきりと聞き取った。クリスティとサイラスが、頷きあう。

「サイラス、肩を借りるよ！」

クリスティが、サイラスの肩を踏み台にして跳躍。竜の肩を飛び越え、背中に取り付く。

「やああああっ！」

鱗の隙間から、スケイルピアサーを突き立てる。背中を傷つけられた竜が、上体をよじった。

「もう一丁！」

サイラスは一気に竜の懷に飛び込むと、跳躍しつつ竜の顎を斬り

上げた。

「ウガアッ!？」

思わず、竜が大きく仰け反った。顔は完全に上を向いた状態だ。

刹那が、何十倍にも引き伸ばされる感覚。極限の集中によって、自分の周りだけ時間が静止したような——そんな錯覚さえ感じるダイアナ。呼吸によって僅かに上下する照準が、狙いと定めた一点に合わさる。

——ああ、これだ。

かちりと、歯車が合わさった。頭で思い浮かべる理想と、自身の身体感覚との一致。あとは、人差し指にほんの少し力をこめるだけ。

「——喰い破れ」

巨大な発砲音。竜の牙によって作られた撤甲弾は、大砲並みの炸薬によって押し出され、砲身に刻まれた螺旋によって高速回転。唸りを上げて飛翔するさまは、まさに咆哮する餓狼のごとし。

乾いた破裂音と、ぐじゃ、という鈍い音が同時に響く。

ダイアナによって放たれた特殊弾頭が、仰け反る竜の下顎から、後頭部に抜けた音であった。

「グ……ガハッ……」

小さく呻き声を漏らし——竜の巨躯が大きく横に傾ぐ。地響きを立て、竜は倒れた。

遠巻きにその様子を見ていたサイラスが、恐る恐る竜に近づく。そして送られる、死亡確認の合図。

ダイアナ・ヘイワード少佐、実に46匹目となる戦果だった。

死者0名、負傷者1名。ほぼ作戦通りにことが進み、結果だけ見れば完勝だったといえる。しかし、薄氷の勝利だったのも、また事実である。

激戦（後書き）

アルファ、ブラボー、チャーリー……つてのをそのまま使うのは面白くないので、

独自に作ってみました。

異世界ファンタジーなのにアルファベットか、という突っ込みは勘弁してください。

ライフリングは、この世界においては最新鋭の技術。

ダイアナの『吼狼』以外の量産銃にはコストや手間の関係から採用されていない、

という設定です。

戦いのあと

竜を撃破したのちに行われること、通常の場合それは学者による検分である。今回の作戦には、客員研究者のパトリシアが随行している。なので、最初にパトリシアと数人の部下による詳細な竜の死体の検分が行われた。

「ダメね。体長に比べて鱗が厚いこと以外は、特筆すべき点はなし。まあ、炎竜は珍しくないし、新しい発見はそんなに期待してなかったけど」

とは、検分を終えた際のパトリシアの弁である。

学者たちの検分が終わると、待つてましたとばかり、200人からの兵士たちが我先にと争って竜の死体に群がる。

鱗、牙、爪……。竜の身体の一部は、好事家たちの間で高値で取引されており、それらの収奪が目的だ。本来ならば褒められる行為ではないのだが、『危険手当』代わりとして黙認されている。

そして、従軍神父による祈りが捧げられ、竜の巨体は火葬される。竜の身体が燃えていくさまを、部隊全員が沈黙をもって見送った。

速やかに撤収作業が行われ、部隊は帰路につく。本部基地まで、1日の道のりだ。

途中、幸運なことに、部隊はバッファローの群れに遭遇。兵士たちの手によって十数頭が仕留められ、その日の野営の思わぬご馳走となった。人に飼われた家畜と違い、筋が緻密で硬い肉だ。しかし、塩と野生の香草のみの味付けで、こんがりと炙られた野性味溢れるその肉は、戦に疲れた兵士たちにとっては最高の美味であった。

どこに隠し持っていたのか、やがて兵士たちはめいめいに酒を取り出し、ささやかな戦勝の宴が始まった。フランスもおすそ分けに与り、宴の輪に加わる。

「エドガーさん、大丈夫でしょうか」

焚き火の炎を囲みながら、竜のブレスで負傷し、一足先に緊急搬送されたエドガーを気遣う。ギリギリで直撃は免れたが、それでも身体 of 広範囲にわたって酷い火傷を負ってしまった。竜のブレスはその余波だけで、人を殺傷しうる威力を持つのだ。

「一般人なら危なかっただろうが……。エドガーは竜人だ、心配はいらないさ」

ワインの瓶をラッパ飲みしながら、サイラスが答える。

「まあ、さすがにしばらく酒は飲めないだろうね」

こちらは、両手に骨付き肉を持ったクリスティ。先の戦いでの消耗を取り返そうと、凄い勢いで肉にかぶりついている。

あたりからは兵士たちが奏でる楽器の音に歌声、それにを煽る手拍子や合いの手が聞こえてくる。戦場の帰り路とは思えぬ、ゆったりとした時間が流れていた。パトリシアは、毛布に包まって小さい寝息を立て始めている。

それにしても――フランスは考える。この人たちはどんな想いを胸に竜と対峙しているのだろうか。白兵戦を挑んだ竜人兵の三人は言うに及ばず、砲兵や工兵たちも、一歩間違えれば死ぬ可能性が

あつたはずだ。

「どうした、難しい顔して」

フランシスの内心を見透かすかのように、サイラスが尋ねる。

「いえ、その……。凄いな、って思っ

「ふごひ？」

肉を頬張りながら、クリステイが反復する。

「あんな戦いがあつたのに、みんな平然として……。心が強いんだな、と」

思ったことを素直に口にする。

「別に凄くなんかないさ。現に俺だって、あと十秒して倒せなかったら尻尾巻いて逃げちまおう、なんて考えながら戦ってたんだからな」

「そうだよ。……見て、これ」

差し出されたクリステイの両手は、わずかに震えている。

「戦ってる最中は興奮してて、怖いのが飛んで行っちゃうところはあ
るけど——戦いが終わると、しばらくはこんな感じ。夜中にうなされて目が醒めることだってある」

「中には、恐怖が快感に変換されちまってるようなタガの外れた野郎もいるが。みんな多かれ少なかれ、恐怖ってやつと付き合いながらやってるのさ」

しばし考えて、フランスは口を開く。

「どうしてそこまでしてこの仕事を？」

「命の危険がある仕事なんざ、それこそ世の中にごまんとある。船乗りだってそうだし、鉱山夫だってそうだろう。俺は、たまたま巡り合わせで騎士団に入っちまった。それだけのことさ」

サイラスは、一旦言葉を区切る。

「俺は今の暮らしが気に入っている。好きなように酒を飲み、気が向いたら娼婦を抱く。王都のお硬い第一騎士団にいた頃じゃ、こうはいかなかった。それに、だ。対竜部隊の連中は気のいいやつばかりだ。天から授かったこの力を、連中のために使うってのも悪くないさ」

柄にもないことを言っちまったな、とサイラスははにかんだ笑顔を見せた。

「あたしも、この人たちが好き。右も左も分からなかった小娘を、一人の人間として見てくれた。あたしが前線に立つことで、みんなが安全に戦えるなら、って思えば頑張れるんだ」

フランスは、二人の言葉を反芻する。偶然手に入れた、竜の力。大切な人のために、この力を振るえるなら、それはきっと素敵なことで。生まれ育ったジーン（ジーン）の村の人々、孤児院の神父と兄弟たち、ナタリー。そして最近出会った対竜部隊の面々。様々な人の顔が、頭に去来する。しばし黙考したのち――フランスは、ひとつの決意を固めた。

翌日。本部基地に帰還したフランスから、レナードに届出が出

された。コルドア辺境騎士団直属・対竜部隊への正式入隊を希望するものだ。届出が、即日正式に受理されたのは言うまでもない。

戦いのあと（後書き）

短いですが、次は場面転換ですので一旦投下します。

幕間その六

ここは、レナードの執務室。一人の男が、レナードを訪問していた。細身の長身。細く上品な口髭をたくわえ、頭髮は油できつちりと整えられている。細い目からは、抜け目のなさそうな鋭い眼光を放っている。

「ライオネルよ、いつものことだが直接お前が出向いてくるとはご苦労なことだ」

「ご挨拶だな、レナードよ。お前がなかなかニエマイア《こちら》に顔を出さないものだから、わざわざこうして様子を見に来てやっているというのに」

気安い雰囲気でレナードと話すこの男は、ライオネル・ダグラス少将。第七・辺境騎士団統合参謀長という肩書きを持つ、騎士団の幹部だ。レナードとは同期であり、ともに東方遠征を戦い抜いた戦友でもある。

「用件は何だ。顔を見に来ただけ、ということはないのだろう」

「ああ、順を追って話す。先日、コルドア近海で一隻の私掠船が拿捕された。エルダリア自由都市連合公認の船だ」

エルダリアは、海洋貿易が盛んな都市の連合体だ。近年、海洋でも大きな勢力を持つに至ったブリーディアとの関係は、あまりよろしくない。

「乗組員を尋問すると、一年ほど前から定期的にコルドアへ人員を運んでいたことを吐いた。密入国だな」

「一年前から、となると少なくとも人数だろう。第七騎士団の失態

ではないか」

「何しろ海岸線が長大だからな。大目に見てくれ」

ブリーディアが領有するコルドアの海岸線は、千マイルに及ぶ。監視の目が薄い場所を狙っての犯行だった。

「とにかくだ。正規の手続きを踏みさえすれば、他国民であっても移住は認められる。わざわざ密入国するということは――」

「後ろ暗いところがある、と。だがその話、なぜ私のところに持ってきた。密入国者の取り締まりは対竜部隊の任務ではないぞ」

「先日お前が報告を上げてきただろう。団員殺しの件だよ」

街道巡回中の団員5人が殺された、あの事件である。

「なるほど。……その密入国者の素性、どこまで割れている」

「それが、『エルダリアから乗ってきた』ということ以外、全く不明なのだ。果たして連中がエルダリアの人間であるかどうかかわらん」

「悩ましいな」

「お前の想像通り、どこぞの間者かもしれないし、ただ単に腕に焼き印のある連中だったというだけかもしれない」

腕の焼き印は、過去に服役経験があることの証だ。当然、正規に入国することはできない。

「その連中の足取りは？」

「搜索はしているが、芳しくない。間者だとすれば、どこかに根城を構えているはずだが、未だ見つかってはいない。……団員殺しが起きた現場を考えれば、都市部ではなく未開拓地に潜んでいる可能性も否定はできない」

「なるほど、話はわかった。うちからも人間を出して、平原を探らせる」

しかし、レナードに一つの疑問が残る。間者だとしても、目的が知れない。良質な鉱山が多数ある地域ならともかく、対竜部隊のあるシラーズ周辺は広大な平原が広がるのみ。耕作に適した土地ではあるものの、戦略的価値は低い。

（ここにあるもの。いや、ここにしかないもの――）

レナードは一つの可能性を考える。竜である。

しかし――竜をどうしようというのか。竜の捕獲は、長い竜との戦いの歴史の中で、一度たりとも成功していない。もし首尾よく捕獲に成功したとしても、人知れず運搬することは不可能だろう。

あるいは竜の血。いや、これも恐らくあり得ない。運搬は可能だが、竜の血は容易く腐敗してしまう。現地で活動する辺境騎士団でなければ、竜の血を使って戦士を作り出すことは難しい。

考え込むレナードに、ライオネルが声をかける。

「下手な考え休むに似たり、だ。お前は昔から頭を使うのが苦手なのだからな。頭脳労働はわれわれに任せておけ」

「余計なお世話だ」

「とにかく、引き続き捜査を続ける。お前のほうも用心しろ。以上だ」

そう言って、ライオネルは執務室を辞去しようとする。が、何か忘れ物をしたかのように振り返った。

「そうそう。今度本国から偉いさんを招いての晩餐会がある。『ド

ラゴンスレイヤー』のレナード・パーシヴァルにも、是非出席して欲しいそうなんだが」

「興味がないと伝えてくれ。ああいう場所でちやほやされるのは、どうにも我慢ならん」

ぶっきらぼうに言い放つ。

「そう言うと思ったよ」

ライオネルが、やれやれと肩をすくめる。

「それに、先日ヒヨッコが入ったばかりでな。ここを離れたくない」

「例の新人か。見込みはあるのかね」

「わからん。鍛え方次第だろう」

窓の外の練兵場を眺めながら、レナードが答える。レナードの視線の先には、訓練を受けるフランスの姿が。

「上手く化けてくれるといいんだがな」

そう言って、レナードは笑みを浮かべた。わが子の成長を願う父親のような、そんな表情であった。

訓練の日々／クリスティとの格闘訓練

正式入隊したものの、フランススの訓練課程はいまだ修了していなかった。規定の科目を全て受け、試験に合格しなければ階級は准尉のままであり、前線に出ることも許されない。中には竜と戦うのに役に立ちそうにないものもあるのだが、決まりは決まりだというのがダイアナの弁であった。

夕刻。フランススはクリスティと格闘訓練を行っていた。格闘訓練の相手は専らエドガーが勤めていたのだが、そのエドガーは先の戦いにより負傷。命に別状は無かったものの、当分妻子の暮らす家に戻り、療養することになった。サイラスは、所用で騎士団本部に出向いていて留守。必然的に、この日の訓練相手はクリスティとなった。

ブリーディアの騎士団で採用されている格闘術は、古来より騎士たちの間で培われた組み打ち術に拳闘術、そして西方はイードの国に伝わる伝統武術を組み合わせたものだ。打撃、投げ、関節技……。あらゆる技を駆使し、素手で合理的に敵を倒せるようにと考えられたもので、まだまだ発展途上の技術体系であった。

この日、フランススはクリスティにやられっぱなしだった。

そもそも一日の長があるクリスティと初心者のフランススとは、実力にまだまだ開きがある。そして、クリスティは同じ竜人であるフランススと比べても、相当に素早い。膂力や体重差による利点が少ないといえる竜人同士の戦いにおいては、敏捷性は大きな武器となる。

さらに、ダイアナに命じられ、一日数時間の座学をフランススとともに受けさせられるハメになったクリスティ。勉強嫌いのクリス

ティは、鬱憤を晴らさんとばかりに苛烈な攻撃を仕掛ける。初心者相手に少々大人気ない行為である。

少しは手加減してくれてもいいじゃないか、と思いながらも、フランシスは懸命にクリスティの攻撃を防ごうとする。

顔面に向けて、リズムを刻んで飛んでくる左右の拳。両手のガードで何とか防ぐも、今度は腹部ががら空きだ。

（！ いけない！）

クリスティの右拳が、下段に溜められるのを見て取ったフランシスは、とっさに腰を引き、上体をくの字に曲げ防御姿勢をとる。

しかし腹部に來ると予想した衝撃はなかった。目の前にすでにクリスティの姿はない。あっと思う間もなく、膝の裏を目がけ、とんでもない勢いの足払いが飛んできた。

「がはっ！」

一回転せんばかりの勢いで、フランシスの身体は背中から地面に叩きつけられる。腹部を狙うかのように見せかけた、クリスティのフェイントに引っかけた形だ。とっさに頭部は守ったものの、背中に受けた衝撃で、肺の空気が残らず押し出される。が、この体勢はまずい。仰向けに寝転がったままでは、好きにしてください、と言っているようなものだ。

「遅い！」

クリスティはその隙を見逃さない。うつ伏せになろうとするフランシスの身体にのしかかって右腕を取るや、両足でその腕を挟みこみ、一気に引き絞る。

フランスも負けじと、左手で右腕を掴んで踏ん張った。この手を離してしまうと、肘関節を極められてしまう。

と、右腕に柔らかいものが。

フランスの右腕を、胸元で抱えるようにして引っ張るクリステイ。その胸のささやかなふくらみの感触が、フランスの右腕に伝わっているのだ。筋肉の塊であるエドガーとの訓練では味わうことのない、絶妙な柔らかさだ。

格闘訓練を始めたときから、フランスは思っていたのだが。クリステイが相手というのは、拙い。戦場では凄まじい働きを見せるクリステイとて、年頃の女の子である。身体が密着しがちな格闘訓練と一緒に行うのは、色々問題がある。

女性の身体を触るなんて、孤児院の女の子たちと取っ組み合いの喧嘩をしたとき以来である。それも、相当小さかったころの話だ。初めて味わう成熟した女性の肉体の感触に、戸惑うやら恥ずかしいやら。ほんのちょっぴり嬉しかったり。余計なことは考えるな、と自分に言い聞かせれば聞かせるほど、意識はクリステイの胸のふくらみに集中してしまう。フランスがクリステイにまるで齒が立たない原因のひとつは、間違いなくこの気持ちの乱れであった。

「ん？ どうした、集中切れてるよ！」

「いただだっ、参った！ 参りました！」

思わず力が緩んでしまい、あっさり一本取られてしまう。腕を開放され、安心したような残念なような。

「まったく、フランがそんなじゃ張り合いがないよ」

文句を言いつつも、クリスティの表情は晴れやかだ。フランシスを散々痛めつけ、気分が晴れたのだろう。一方のフランシスは、もやもやした感情が晴れない。

「さて、このへんで終わりにしよっか」

日も傾き始めている。そろそろ部隊の活動終了を告げる鐘が鳴り響くころだ。

いい汗かいたな、と言いながら、クリスティはおもむろに上着を脱ぎ始めた。下に着ているのは、薄手の袖なしシャツ一枚。シャツは汗で身体にへばりつき、ほっそりとした身体のラインがあらわになる。フランシスは慌てて目を逸らす。

「どうしたの？」

フランシスの挙動に、怪訝そうな顔のクリスティ。フランシスは、赤く差す西日に感謝する。赤面を気取られずに済んだからだ。

（ちょっと、無防備すぎるよなあ……。本人に指摘したらしたで、怒られそうな気もするし……）

「さてと、今日の晩御飯はなにかな」

フランシスの葛藤をよそに、上機嫌で歩き出すクリスティ。こんなときどうしたらいいのか、サイラスあたりに相談してみようかとも思ったフランシスだが――ろくでもないことを教え込まれそうな気がしたので、止めた。

出撃前に

フランスが対竜部隊へ来て、1ヶ月が経過した。かなりの駆け足だったものの、訓練課程をすべて終了。格闘、剣術、射撃術などは及第点ギリギリだったが、座学ではその要領の良さを存分に発揮し、優秀な成績を収めた。フランスと同時に試験を受けたクリステイは、ダイアナによって二回の追試を科せられる散々な結果だったことを追記しておこう。

レナードの執務室で簡単な任官式が行われ、ここに竜人兵フランス・ファウラー少尉が誕生した。

数日後。基地内の作戦室に、フランス、クリステイ、サイラスの三人と、砲兵隊長スコットをはじめとした主だった士官が集められた。次に行われる作戦の説明を行うためだ。エドガーは、未だ療養中である。今回の作戦も、ダイアナに指揮が任されており、室内にレナードの姿はなかった。

「本作戦の目標は、バークリー峡谷地帯に生息する、アイランドドラゴン黒鉄竜です。体長は約45フィート。黒鉄竜は比較的希少な種のため、実戦経験のない者もいるでしょう。博士、よろしく」

ダイアナに促され、パトリシアが解説役として壇上に立った。

「黒鉄竜は、山岳地帯に多く生息すると見られている種類。黒光りする鱗は炎竜以上の堅牢性を誇るかわりに、かなり重量があるせいで敏捷性は低いわね。側頭部から生える、羊のように湾曲した角がチャームポイント」

一枚の写真画を示しながら、パトリシアが説明を続ける。

「最大の武器は、やっぱりブレス。体内に取り込んだ砂を、圧縮空気によって対象に一気に吹きつける、通称サンドブレスが脅威となるでしょうね」

砂を吹きつけられるくらい、何ともないんじゃないかと思うフラシス。同様のことを考えていた者は他にもいたようで、それを見て取ったダイアナが警告する。

「たかが砂と侮ってはいけません。竜の力によって吐き出されれば、砂であっても恐るべき威力となります」

「そうね。岩だろうが金属だろうが、ヤスリをかけるように削り取ってしまうわ。生身の人間が喰らえば全身が塵になるまで削られるわよ」

恐ろしい解説に、室内の空気が凍る。

「今回の目標は比較的体長が小さく、成熟しきっていないと予想されるのが幸いです」

「そうね。体長からいえば、まだまだ子供といえるわ。鱗もそこまで厚くないはず」

室内の幾人かからは、安堵の息が漏れた。

「さて。目標の生息地は起伏に富む地形ゆえ、砲撃は効果が薄いと見られます。しかし、地形を利用したトラップは大いに有効となるでしょう。ノックス少尉、頼みましたよ」

「イエス、マム！」

敬礼して起立したのは、工兵隊長のサムソン・ノックス少尉だ。

年齢は40手前、顎から口にかけてびっしりと濃い髭を生やしている、野性味溢れる風貌だ。

「騎馬による『釣り出し』も、今回の作戦には不向きです。今回は、先行して作戦地域に入っている調査隊のスオウ・モーガン中尉に『釣り出し』を行ってもらうことになるでしょう」

スオウ・モーガンは、前回の作戦において斥侯を務めた混血の竜人兵だ。戦いのあと、すぐに次の任地に赴いたため、フランシスとはまだ一言も言葉を交わしていなかった。

「結構予定日は、6日後。作戦の概要は以上です。ノックス少尉、ベイカー少尉は作戦予定地の地形図を受け取り次第、トラップと大砲の運用予定を組んでください。では、解散」

士官たちが、思い思いに退出していく。フランシスとクリステイもその場を立ち去ろうとしたが、ダイアナに呼び止められた。

「あなたにとっては初の実戦となりますね。気分はどうですか」

「……正直まだ実感がわきません」

「まあ、そんなものでしょう。さて、実戦に赴く前に、あなたには武器を選んでもらわなければいけません」

「武器、ですか」

「はい。剣術訓練で使用したものと同じ型の長剣でよいのなら、それでよし。しかし、もっと自分の手に馴染みやすい武器があるかもしれない」

言われてみれば、竜人兵の面々はそれぞれ異なる武器を使用している。サイラスは両手剣、クリステイは小剣とスケイルピアサー、エドガーは戦斧といった具合だ。

「わが部隊の工廠には、様々な武器が取り揃えられています。実際

に手に取ってみて、自分に合うものを選んでみてください。……キ
ーッ少尉、あなたも付いていって助言を」

「了解です」

「選んだのちは、出撃の日までひたすらその武器に慣れること。わ
かりましたか」

「はい」

「よっし、それじゃ行こっか、フラン」

クリスティに先導されて向かったのは、本部基地内に設置されて
いる武器工廠だ。大砲や銃をはじめ、部隊で使われる武器のほとん
どは、ここで生産されている。

工廠の建物に入った二人を迎えたのは、工廠長のゴドフリー・フ
ォースターだ。60がらみの初老の男性で、背は低いものの肩幅は
広く胸板は厚いずんぐりとした体型だ。綺麗に禿げ上がった頭に、
白い顎鬚。いかにも熟練の職人といった風情である。

「お前さんが期待の新人か。話は聞いてるぜ」

「期待だなんて、とんでもないですよ」

冗談めかした言い方ではあったが、思わず恐縮するフランシス。

「ハッハッハ、随分頭が切れるって聞いたもんだからな。こんな純
情な青年とは思わなかったぜ」

「親父さん、冗談はいいからさー。さっさと案内してよ」

「わかったわかった。そう急くなよ、嬢ちゃん」

ゴドフリーに従い、二人は工廠の一角にある武器庫に足を踏み入
れた。

「ほれ、竜人用の武器はその辺にまとまってる」

「……随分大振りな武器が多いんですね」

辺りを見回し、フランススが感想を漏らす。剣、斧、槍、弓……。そこには、様々な種類の、様々な形をした武器の数々。そして、そのほとんどに共通しているのは、極端に長大であるか、極端に分厚いこと。剣術訓練の際に使用した長剣も、同じ特徴を持っていた。

「竜に対して使うことを考えて造ったモンだからな。このくらいじやなきゃ、毛ほどの傷もつけられねえ。それに、あんまり華奢な造りだと、お前さんたちの腕力に耐えられねえからな」
「なるほど」

最近、ようやく自身の力が馴染んできたフランス。自らの腕力で通常の武器を振るえはどうなるか、ということは想像がつく。

「選び方のコツって無いんですか？」

「基本的に自分がしっくり来るものを、としか言えねえな。ただ、そうだな……。ホレ、そこに長柄の槍があるだろう」

ゴドフリーが顎でしゃくった先には、柄が5ヤードほどもある長槍が立てかけられていた。

「そいつのような、あんまり長すぎるのはオススメできねえ」

意外な答えだ。間合いが長ければ長いほど有利だと、フランススは考えていたのだ。

「まあ、お前さんの考えはもつともだ。間合いは長いに越したことはねえし、長ければ長いほど振ったとき先端に威力が乗るからな」
「じゃあ、どうして？」

「柄が長くなると、それだけ柄にかかる力がデカくなる。お前たち竜人ならなおさらだ。その力に耐えられるようにするには、柄をより頑丈に造らにゃならん。そうすると全体の重量がどんどん増えちまって、さすがの竜人でも扱いにくくなるのさ。そいつは言ってみれば失敗作だな」

「それにさ」

クリステイがその長槍を手にとって、フランスに突きつけた。

「竜と戦うとき、このくらいの間合いって実は結構危ないんだよ」

「どういうこと？」

「竜の攻撃ってさ、爪や牙は避けやすいんだよ。動きが大きいしね。避けにくいのは、尻尾。こう見えないところから、しかも凄いスピードで飛んでくるから」

身体の後ろから半円を描くように手を振って、尻尾の軌跡を説明する。

「で、60フィートか70フィートの竜の尻尾だと、ちょうどこの槍の間合いから先あたりが危なくなってくるの。尻尾って、先のほうがスピード出るからね」

「中途半端な間合いより、懐に入ったほうが安全、ってことか」

「さっすがフラン、話が早いね」

「まあ、そういうこった。長くても、自分の身の丈くらいのモンにしておくんだな」

二人の助言をもとに、あたりを見回す。これだと思ったものを手に取り、あるいは軽く振ってみる。

試していくうち――手にしっくりと馴染む感触が。それは、刃渡り3フィート弱、幅広の長方形の刃を持つ、剣とも何ともつかぬ武

器だった。刃の先端部は軽く湾曲し、小さな『返し』となっている。端的に言えば、ナタ。ただし、普通のナタと違うのは、やはりあまりに分厚く無骨な造りだということだ。

「気に入った？」

「うん。こういうの、村で開墾を手伝ったときに使ったことがあるから」

「ヘヴィーハチェットってんだ。なかなか悪くない選択だと思うぜ。ほれ、同じのもう一本持ってみな。両手に一本ずつのほうが、バランスはいいはずだ」

右手を一振り。刃先の重さを利用して身体を一回転、勢いのままに左手を一振り。言われたとおり、両手に持ったほうがスムーズに身体が動くようだ。

「これに決めました」

「そうか。俺が精魂こめて作ったモンだ。大事にしてくれよ」

こうして、フランスは二本のヘヴィーハチェットを手に入れた。以降、フランスはサイラスやクリスティに教わりながら、ひたすら武器を手に馴染ませることに専念した。数日間は瞬く間に過ぎ、とうとうフランスは出撃の日を迎える。

黒鉄竜

三日に及ぶ行軍を経て、対竜部隊はバークリー峡谷に辿り着いた。台地が川の流れによって縦横に侵食されてできた、雄大な景色が広がっている。この峡谷の奥に生息する黒鉄竜が、今回の作戦の目標である。

到着次第、陣の設営が行われ、砲やトラップが設置される。竜にとっての遮蔽物が多い地形となるため、砲は前回の作戦より少ない。代わりに、峡谷の地形を利用したトラップが数多く設置されていた。

作戦開始まであとわずか。フランスは、本陣にてクリステイ、サイラスらと待機していた。

「どう？ 緊張してる？」

クリステイに問われ、

「う、うん。大丈夫」

そう答えるフランスだが、これはただの強がりであった。気取られぬよう努めてはいるが、膝は震え、歯の根も噛み合わない状態だ。

「まあ、心配はいらないさ。今回の作戦は前回よりもさらに単純だ。誘導さえ上手くいけば、討伐は成功したようなものだ」

作戦予定地に誘い込んだ竜を、トラップや砲撃で谷底に叩き落とし、崖の上から集中攻撃、というのがこの作戦の概要だ。常道といえる

作戦だ。

「そうそう、大丈夫だよ。相手はちっちゃいらしいし」

フランスの内心は、見透かされていたようだ。二人からは、フランスを安心させるような言葉がかけられた。

二人の言葉に僅かに安堵しつつも、フランスは考える。自分は本当に闘えるのか。自分は場違いじゃないのか。自分は本当にこの部隊に入るべきだったのだろうか。グルグル思考が回る。

そうしている間にも作戦開始の時間は近づく。緊張のためか、フランスの喉元には酸っぱいものがこみ上げている。

「工兵隊、準備完了！」

「砲兵隊、同じく完了であります！」

「モーガン中尉による目標の誘導開始まで、あと何分ですか」

「35分であります」

「第一接触地点までの予定到達時間までは？」

「75分の予定であります」

「よろしい。各員待機。30分後をめぐに、戦闘配置につくように」

「イエス、マム！」

本陣内で、ダイアナから最終的な指令が下される。

（予定通りにことが運べば問題はない。あとは、初陣のファウラー少尉、ですね）

フランスの才気は、ダイアナも認めるところだ。現場で経験を積みませ、一人前に仕立て上げればレナードも喜ぶだろう、と考える。竜人兵の出る幕なく戦闘が終了すれば、それに越したことはないの

だが。

やがて、作戦開始時刻が訪れた。予定では、先行調査隊の一員であり、竜人でもあるスオウ・モーガンが、目標の竜を誘導してくる事になっている。フランスも、竜が現れる予定の方角へ望遠鏡を向ける。

「お、来たな」

と、サイラス。言われて望遠鏡を覗き込むと、一人の男が岩山の縁から姿を見せた。黒髪が特徴的な、スオウである。――少し遅れて、どしん、どしんと足音を轟かせ、漆黒の巨体とその全容を明らかにする。

「へえ、あれが黒鉄竜か。あたしも初めて見たよ。黒光りして綺麗だなあ」

「俺も3年前に一度見たきりだな」

竜のうちの9割を占めると言われる炎竜と比べ、その他5種の竜は極端に数が少ない。フランスはもちろん、部隊に入って二年目のクリステイにとっても初めての遭遇だった。

作戦室でパトリシアが示した写真画と異なり、側頭部から生える角は随分短い。体長もさほど大きくなく、その竜が年若いことを思わせた。

スオウは、岩から岩に飛び移るように、ごつごつした地面を身軽に進む。黒鉄竜は後を追うも、足取りはいかにも鈍重で、竜人の脚力ならば軽く振り切ってしまうくらいであった。スオウは、つかず離れずの距離を保つよう、所々で速度を調節する。

ポイント・アル
「地点Aまで、あと300!」

「砲兵隊、初弾装填よろしいか。くれぐれも中尉に当てぬように」
「心得てますよ、少佐。野郎ども、照準合わせはできてるな!？」

「もちろんでさ、隊長!」

「結構。では、カウントを開始します」

部隊全体の空気がピンと張り詰めた。フランスは吐き気をこらえつつ、彼方の竜を見つめる。第一地点にその巨体が到達するや、スオウは一気に加速して竜から離脱した。

「――砲撃開始!」

轟音が響き、大砲が一斉に火を吹く。砲弾が次々地面に着弾し、盛大な土煙が上がった。

「命中ゼロ! 至近弾も僅少です」

ダイアナはその報告に眉一つ動かさない。前回の作戦同様、第一射は牽制が目的であり、命中は期待していない。砲撃に驚いた竜が一瞬の戸惑いを見せたのち、その砲撃の放たれた方角に意識を向けた。ゆっくりとした足取りで、本陣に向かって歩き始めた。

「第二砲隊も斉射を開始!」

竜の進行方向側面からも、苛烈な砲撃が加えられる。数発の命中弾が出るもの――その黒鉄竜にはまるで通じていないようだった。

ポイント・ベニ
「進行止まらず! 地点Bまであと150!」

「100の時点で砲撃停止。予定通りをお願いします」

砲撃によって、竜を作戦通りの経路を進ませることに成功した。
現在、その竜はやや狭い谷の縁を、沿うように歩いている。

「地点Bまで十、九、八……」

そして、凄まじい轟音とともに、竜の足元が崩落した。地面に埋設された発破が、儀装して潜む兵士たちによって爆破されたのだ。

「ゴオオオウツ!？」

竜の体はバランスを失い――やがて、峡谷の底へゆっくりと滑り落ちる。

「いまだ、退路を断て!」

ダイアナの怒号とともに、次々と爆発音が轟く。仕掛けられた爆薬が連続して爆発し、峡谷の壁面が崩れる。竜の背後には土砂が積もり、壁が出来上がっていた。

罠にはまったのを理解したのか、竜は慌てるように峡谷の底を前進する。しかし、その先に待っていたのも工兵隊によるトラップだ。前回の作戦でも使われた、膠が仕込まれた落とし穴。一本道の峡谷を進む黒鉄竜を、それに落とし込むのは赤子の手を捻るように容易い。

追い討ちをかけるように、またもや峡谷の壁面が爆発、崩落する。

「グアアアアッ!!!」

凄まじい咆哮を上げてもがく竜に、大量の土砂が襲い掛かる。程なくして、竜の体は半ばまで、土砂に埋まってしまった。

儀装を解いた歩兵たちが、谷底を覗き込む。やったぜ、だのざま

あみろ、だのと歓声が上がる。自分たちの戦果を確認したくなる気持ちだが、我慢できないのも無理はない。

「馬鹿者、さっさと離脱しないか!!」

ダイアナが叫ぶ。が、時既に遅し。

豪、と烈風が吹きすさぶような音。黄土色の旋風が巻き起こる。サンドブレスが、あたり一面をなぎ払ったのだ。付近の岩肌をゴツそりと削り取るほどの威力。

数人の歩兵が直撃を喰らい――文字通り、粉微塵になって吹き飛んだ。

ダイアナをも戦慄させる、凄惨な光景だった。

「――っ、何をしている! 歩兵の離脱を急がせろ!」

炎囊に蓄えられた可燃性物質が切れると使用できなくなるファイアーブレスと違い、サンドブレスの素となる砂はそこらじゅうに存在する。一度ブレスを吐かれたとて、気を抜くことは許されない。

歩兵たちがある程度距離を取ったのを見計らい、ダイアナの命令が飛ぶ。

「全力射撃開始!」

号令とともに、崖の両側に設置された大砲、カタパルト、バリスタが一斉に火を吹く。砲弾や岩石が、身動きの取れぬ竜に向かって雨霰と降り注ぐ。

「この調子じゃ、俺たちの出番はないかもしれないな」

「そうかもね。……フラン、顔色悪いよ。大丈夫?」

コクコクと頷くフランシスだったが、腰が抜けそうになるのを堪えるのが精一杯だった。胃の中身が逆流しかけたのを、必死に飲み込む。

先ほど見た、サンドブレス。人間が、跡形もなく消滅してしまったのだ。あまりに凄惨な光景だった。なまじ視力が優れていたばかりに、兵士が血煙を上げて粉々になる様を、まざまざと見せ付けられてしまった。

視界がぐるぐると回る。油断すると、気を失いそうになる。

「あ、やったかも！」

クリステイの言葉に、フランシスは顔を上げた。見ると、竜の頭から大量の血が流れている。カタパルトによって打ち出された岩石が、上手いこと竜の頭蓋を打ち砕いたらしい。

竜の動きは徐々に鈍くなり――やがて、完全に事切れた。

フランシスは、思わず地面に膝を突いて大きく息を吐く。白兵戦の必要がなくて本当に良かった、と心から安堵する。しかし一方で、兵士としてこんなことでいいのだろうか、という思いが湧き上がった。

（――自分は、臆病なのだろうか）

傍らに立つクリステイとサイラスの姿を眺めつつ、そう自問する。フランシスの胸中に、漠とした不安が広がった。

「……申し訳ありません。私のミスです」

ダイアナのもとで、工兵隊長サムソン・ノックスが謝罪した。サンドブレスによって死傷者を出したことに對し、責任を感じての

行為だった。

「罨を作動させたら、速やかに撤退。この原則をもっとしっかり叩き込んでおけば、こんなことには……」

「いえ、作戦の全責任は私にあります。少尉が気に病むことはありません。――それより、今日の勝利は工兵隊の働きによってもたらされたものです。ご苦労でした」

「もったいないお言葉であります、ママ」

「ベイカー少尉、止めとなった一撃の射手は」

「アームストロング上等兵であります」

「見事と伝えてください。しかるのち、褒賞が与えられることも合わせて」

「了解です」

努めて感情を表に出さぬよう心がけつつ、ダイアナは労いの言葉をかけた。

「では、撤収を急いで。……死傷者については、帰還後報告書を上げてください」

「はっ、了解しました」

撤収作業に向かうサムソンたちの背中を見送りつつ、ダイアナは唇を噛み締めた。

作戦指揮官として出した、初めての死者。

油断したその兵士が個人が悪かったとしか言えないし、サムソンやダイアナがレナードから咎められることもまずないだろう。

しかし、それでも。

（悔しい）

両の掌から血が出るほどに、強く拳を握り締め。上に立つ者の重
圧を、改めてその身を感じるダイアナだった。こんなとき、レナ
ーは何を思うのだろうか。ふと、そんなことを考えた。

初任給の使い道

フランススが正式入隊して1ヶ月あまりが経ったある日の夜。

フランススは、自室で一人、悩んでいた。目の前の机に積まれた、金の使い道についてである。

数日前、フランススは入隊して初めて、満額の月給を受け取った。騎士団の中でも、対竜部隊の給料は特に高い。無論、危険な職務をかんがみてのことだ。フランススの月給は、なんとフロンティアの平均的な農家の年収に相当するほどの金額だった。

フランススは困惑した。なぜなら、正式入隊してから仕事らしい仕事をしていなかったからだ。出撃は、バークリー峡谷での黒鉄竜討伐作戦の一回のみで、しかも自分の出番はなかった。その他の期間は、ほとんどを訓練か勉強に費やした。

本当にこんなに貰っていいんですか、とダイアナに訪ねたのだが、「有事がなければ、常備軍とはそういうものです。それに、部隊の働きによってブリーディアの国富が支えられているといっても過言ではありません。遠慮は無用です」

との返答。その場は納得したフランスス。

しかしこのフランススは、悲しいかな、長年の貧乏暮らしが身に染み付いているため、いざ給料を手にしても、使い道が思いつかないのだ。

急に大きな金を手にした者は、えてして金遣いが荒くなりがちだ。しかし、フランススは実直、誠実な真面目人間だ。飲む、打つ、買うなどそもそも頭がない。唯一贅沢をするとすれば、仲間たちに付

き合ったときの飲食代くらいなものだ。

前日の晩、フランススはダイアナに許可を貰い、故郷であるジーンの村に馬を飛ばした。生まれ育った孤児院の、育ての親である神父に、初めての稼ぎを渡すためである。貰った額の実に9割を持参したフランススだが、神父にその大半を突っ返されてしまう。

「息子が必死こいて稼いだ金を、こんなにたくさん受け取れるかバカ野郎。だいたいお前、毎月これだけの額を仕送りするつもりだったのか」

神父の言葉を肯定すると、

「こんな金額、ガキどもに村一番の贅沢をさせたって使いきれもんじゃないだろう。都会に出て2ヶ月経つてのに、世間知らずは相変わらずか」

と、呆れられてしまう。

喧喧諤々なやり取りの末、子供たちが進学を希望したときのための蓄えとする、ということとで半分までを受け取ってもらうことに成功し、翌朝早朝基地に戻ったフランスス。

結果使い道の思いつかない金が残ってしまった、というわけだ。

「とりあえず貯金、かなあ」

一人ごちるフランスス。が、孤児院の神父の言葉を思い出す。

「貯金、大いに結構だ。しかしな、フランスス。お前も生まれたときから貧乏暮らしで苦労したんだ。初めての稼ぎくらい、自分のためにパーっと散財しちゃっても神様の罰は当たらんぞ」

自分のため、と言われても、思いつくのはせいぜいが美味しいものを食べるくらい。

「誰かに相談してみるか」

そう呟き、フランスは部屋を出た。部隊の仲間の部屋を訪ね、どんなことに給料を使っているのか聞こうと思ったのだ。

エドガーの場合。

先日、ようやく療養を終え基地に戻ってきたところだ。

「俺か？ 酒に使う以外は、全額女房に送ってるぜ。可愛い娘の将来を考えりゃ、貯金はいくらあっても困ることはねえわな」

意外に堅実な意見だった。しかし、貯金以外の使い道を模索するフランススにとっては参考にならない。

パトリシアの場合。

局員研究者である彼女も、騎士団から少尉相当の給料を受け取っている。

「私はだいたい本ね。最近は印刷機が普及し始めて、本の値段も下がってきてるんだけど。本国から船便で取り寄せることが多いから、どうしても割高になっちゃうのよね」

そう言うパトリシアの部屋には、様々な本がうず高く積まれていて、足の踏み場もないような状態だった。なるほど、これなら給料を使いきるというのも分からないではない。

本を読んで教養を高める、というのは悪くない。しかし、基地に

ある書庫には、まだ読んでいない本が山ほどある。それに、現在どんな本が出版されているのか全く疎いフランス。本を買うという行為はいまいちピンと来なかった。

サイラスの場合。

「まずは希少なワインのコレクションだな。実は、ここの倉庫番を丸め込んで、地下の一部屋をワイン庫にしてるんだ。今度見せてやるよ。他には――女を抱いたり、博打に使ったりだ。ん？ どうした、その顔は」

悪い大人の見本であった。

ダイアナの場合。

「実家に仕送りをして、残った余剰の金額は投資に費やしています。時代の流れを読み、他者とは異なる着眼点を持つことが必要であり、戦略眼が養われますよ。あなたもやってみませんか？」

増やしてもしょうがないし、損をしてしまったらそれはそれで空しい。またも、参考にはならない。

最後に、クリステイの部屋をノックしようとしたところで、名案が思いついた。

仮入隊の一ヶ月間、クリステイには指導役としてずっと世話になった。この初任給で、彼女に何かお礼をする。うん、これがいい、とフランスは思った。自分のために使え、という神父の言葉からは少々ずれているものの、誠実なフランスの人柄がよくわかる考え方である。

とはいえ、年頃の女の子に喜ばれること、というのがまるで思いつかない。一緒に街へ出て、本人の希望に沿うようなものをプレゼントでもすればいいか、とフランススは考えた。

都合のいい事に、翌日は大きな予定もない。部隊では月2回の休暇が認められているため、申請さえすれば外出できるはずだ。

「クリス、今いい？」

「ん？ フラン？ いいよ、開いてるから」

部屋には、ラフな服装でくつろぐクリスティの姿が。リンネルのゆったりとした部屋着の上下、という服装だ。騎士団の制服を着ている姿しか見たことがなかったフランススの目には、新鮮に映る。脱ぎ散らかした服が散らばるなど、部屋の中は雑然とした雰囲気だった。

「で、どうしたの？ こんな時間に」

「あ、うん。明日なんだけど……。お休みもらって一緒に遊びに行かない？」

「……………へ？」

一瞬ポカーンとした表情を浮かべるクリスティ。ハッとしたかと思うと、今度は頬がみるみる紅潮していく。

「あ、あんた、それって、もしかして——で、デートの誘い!？」
「へ？」

今度はフランススが絶句する番であった。恋愛経験が皆無に等しいフランススだが、そう取られても仕方のない言葉だったことに気付く。

「い、いや、そういうのじゃなくて！ その、訓練でお世話になったから、何かお礼でも、と思って！ 変な下心とかないから！」
「あ、そ、そうなの？ ふう、ちょ、ちょっと驚いちゃったじゃん、アハハ」

気恥ずかしい空気が流れる。一つ深呼吸して、フランシスが再び話を切り出す。

「そ、それで、僕はどうしたらクリスが喜んでくれるか分からなくて。一緒に街に行って、クリスの欲しいものを何かプレゼントしようかな、と」

「別にお礼とかいいのに。フランらしいっちゃらしいけど。――まあ、フランがそう言うなら、ありがたくお受けしますか」

「それで、明日はどう？」

「うん、いいよ。時間は――そうだね、10時くらいがいいかな」
「わかった。じゃあ、休暇の申請は、クリスの分も僕が出しておくから。お休み」

部屋を去ろうとするフランシスの背中に、クリスティの声がかかる。

「あ、せっかく遊びに行くんだから、騎士団の制服はナシだよ？」
「ええっ！？ 僕、外で着られるようなのは、ここの制服しか持っていないんだけど……」

入隊以来、ほとんどを基地で暮らしていたフランシス。必要最低限の衣類は支給されているし、服装に頓着するタイプでもなかったため、私服を買うという発想がなかった。

「ハア、しょうがないなー。礼服の下に着るシャツあるでしょ？

とりあえずあれでも着てきなよ。明日、あたしが街でフランの服を見繕ってあげるから。楽しみにしてて」

「……お手柔らかに頼むよ」

クリスティの部屋を出たとたん、フランシスに先ほどの気恥ずかしさが戻ってきた。年頃の男女が連れ立って出かける。そういうつもりはなかったが、一般的に言ってそれはデートと呼ばれる行為だろう。

「なんだか緊張してきた……」

その後、なかなか寝付けぬ夜を過ごすフランシスだった。

デート？

翌日。

フランススは、基地正門にて、クリステイが来るのを待っていた。デートではない、とは言ったものの、どうにも気分が落ち着かない。そわそわしながらクリステイを待つ。

「ごめん、待った？」

「わっ！」

背後からの声に、フランススは思わず飛び上がる。振り返ると、そこにはクリステイの姿が。

すみれ色のフレアスカートに、純白のブラウス。首元の桃色のリボンがアクセントとなっている。足には、花柄の装飾をあしらったサボを履いている。

いつもの無骨な軍服姿と違い、まるで花が咲いたかのような印象を受ける。パツと見では、彼女が対竜部隊の、それも最前線で戦う兵士であることなど、想像もできないだろう。

「……………」

「ちょ、あんまりジロジロ見ないでよ」

「ご、ごめん！　そういう格好してるの見たことなかったから、驚いちゃって」

「どう、似合う？」

「えーと、その……………」

どぎまぎするフランススを見て、クリステイがからからと笑う。

「まあ、とっさに気の利いた台詞が言えないのがフランススらしい

よねー。じゃ、行こっか」

赤面するフランススをよそに、クリスティは先に立って歩き出す。

季節は初夏。照りつける日差しも、次第に強くなってきている。街路に植えられた樹木の緑は、その色を濃くしている。少し汗ばむような陽気の中、二人はシラーズ市街に辿り着いた。

「とりあえず、どうしようか」

「こういうときは、男がリードするもんでしょうに……。まずは、フランスの服を買わなくちゃね」

フランススの服装は、シンプルなシャツにズボン。決しておかしな格好ではないが、華やかなクリスティと不釣り合いなのは否めない。二人は、辻に店を構える既製服店に入った。クリスティはあれこれと悩み、店員に相談しながらフランススのコーディネートを決めていく。

「野生的なものも意外に悪くないけどーフランスはやっぱり、清潔感がある格好が似合うかな」

彼女が選んだのは、水色の立て襟シャツと、紺色のズボン。シャツのボタンの一番上を外し、バックルが付いた新大陸風のベルトを締めるのが、最近の流行だとか。

「どう？」

「うん、似合う似合う。一気に都会風になった感じだね」

「じゃあ、すいません店員さん。これください」

会計を済ませ、店を出る。時刻は11時を少し回った辺り。

「少し早いけど、お昼にしょっか。この時間ならまだどこも空いてるし」

「わかった。今日は僕のおごりだから、好きなものを食べていいよ」
「いいの？ 竜人の本気、見せちゃうよ？」

「……お手柔らかに頼みます」

次に二人が入ったのは、洒落た感じのレストラン。旧大陸風のコース料理が食べられる、少々高級な店だ。

「いいの？ この店高いって聞くけど」

「大丈夫。僕がいくら給料貰ってるか、クリスも知ってるでしょ」
「まあ、そうだね。じゃ、遠慮なく」

慣れない作法に戸惑いながらも、食事を進めるフランス。一方のクリスティは、意外なほどに見事な手つきで食器を扱っている。

「クリス、食器の使い方上手だなあ」

「まーね。あたし、これでもブリーディアにいたころはちよつとしたお嬢さんだったんだから」

「そういえば、商人の娘、って言ってたっけ。……ところで、クリスは給料何に使ってるの？」

昨晚、他の仲間聞いた質問をクリスにぶつける。

「んー、だいたい実家に送ってるよ」

フランスにとっては、意外な回答だ。今までの話の流れから、てっきり裕福な家だと思っていたのに。

「うちって、ブリーディアで毛織物の仲買やってたんだけどね。父さんが、なんて言ったっけな、先物？　とかいうのに手を出して大損しちゃってね。母さんもカンカンで……あれは怖かったなあ」

ダイアナも投資をしていると言っていた。もともと、慎重で頭脳明晰なダイアナのことだ。大損を出すようなことはないのだろうが。

「んで、あたしが結婚させられそうになったのも、あたしを嫁にくれたら金を貸してやる、って人が現れたから」

「それで、こっちへ渡ってきたってことか」

「そういうこと。でも、欲をかいだ父さんが悪いって言っても、実家が潰れるのは嫌だしね。仕送りしてるってわけ。まあ、最近持ち直してきたらしいから、もう心配ないんだけど」

「へえ。でも、そんなに結婚が嫌だったの？」

クリスティがコルドアに渡ったのは16歳のとき。都市部に暮らす一般的な女性としてはやや早いが、結婚していてもおかしくない年齢ではある。

「相手っていうのが40過ぎのオッサンでさ。デブだしハゲだし脂ぎってるしで、おまけにやらしく眼であたしを見るわけよ。もう、無理、って感じ。同じ40過ぎでも、隊長みたいな人だったら考えないこともなかったけど」

確かに、レナードは格好がいい。男のフランスにすら、そう思わせるほどだ。単に外見だけの問題ではなく、内面からも溢れんばかりの魅力を放っている。余談であるが、レナードが舞踏会に出席しようものなら、会場の女性すべてが群がってくるほどの人気を見せる。しかも独身であるからなおのことだ。

「あ、フランみたいな人でもオーケーだったかも」
「からかわないでよ、もう……」

デザートをつつきながら、フランシスが赤面した。

レストランを出た二人が次に向かったのは、宝飾店。この日の主目的である、クリスティへのプレゼントを買うためだ。

自分の服を買い、レストランでの食事代を負担してなお、フランシスの懐には相当の金額が残っている。多少高くても気にせず買ってやろう、と意気込むフランシスだったが、クリスティが選んだのは比較的安価なペンダントだった。

大振りなルビーがトップに据えられたそのペンダント。店員曰く、石に不純物が多くて価値は低いが、その不純物を作る独特の模様をデザインとして好む人も多い、とのこと。また、それでもここまです安いの、多数の宝石が産出されるコルドアならではの、とも教えられた。

「これにする？ もっと高いのでも大丈夫だけど」

「いいって。それに、こういうのって値段じゃないでしょ」

「……うん、それもそうだね。店員さん、これを」

「あ、着けてくから包まなくていいです」

そう言って、クリスティは早速ペンダントをかける。ありがとね、と笑うクリスティの姿は、確かに『女の子』だった。

最後に、二人は雑貨屋に立ち寄った。もうすぐ嫁に行くナタリーへの祝いの品を買うためである。やはり実用品がいいだろう、ということで、こうして雑貨屋に来たのである。

あたしもお世話になったから、とクリスティも自分の分の祝いの品を選ぶ。

フランシスは、悩んだ末、切子細工が入ったグラスのセットを選んだ。クリスティが選んだのは、花模様の入った磁器の大皿。贈答用の梱包をしてもらい、店を後にした。

「今日はありがとね。楽しかったよ」

「良かった。ちゃんとお礼できたか不安だったんだけど」

「もう十分すぎるくらいに。また誘ってよ。オススメのお店がまだまいーっぱいあるからさ」

「うん、是非」

一日歩き回ったが、不思議と疲れはなかった。心地よい満足感が、体中に広がっている。明日からも頑張ろう、そうフランシスが思えるのは、隣のクリスティの笑顔が見られたからだろうか。

後日、ナタリーは街を去った。勤めていた酒場では、店員や馴染みの客による送別会が行われ、フランシスたちも参加した。

泣きながらも、幸せそうな笑顔を浮かべるナタリーと、それをを見送るフランシス。しかし、その胸にもはや痛みを感じることはなく、心から彼女を祝福するのだった。

恐怖

ナタリーの送別会から、1週間ほど経ったところ。フランシスをはじめ、対竜部隊の面々は、とある平原にて作戦行動に入っていた。今回の目標は、体長およそ70フィート、大型の炎竜だ。

作戦はいつも通り。『釣り出し』によって平原に誘導した竜をトラップにはめ、集中砲火、というものだ。二箇所陣地が設置され、一つにダイアナ、クリスティ。もう一つに、サイラス、エドガー、そしてフランシスが配されている。

出撃前、フランシスはダイアナからこう言い含められていた。

「今回の目標は、かなり大型です。前回の黒鉄竜と違い、遠距離からの撃破は難しいかもしれません。……言いたいことがわかりますか」

つまり、竜人による白兵戦を行う必要がある、そういうことだ。

緊張で高鳴る胸を押さえつつ、フランシスは大きく息を吐く。

——大丈夫だ。足も手も震えていない。僕はやれる。

そんなふうに、自分に言い聞かせる。前回の出撃のときに感じたような、酷い緊張感はない。そういう自覚はある。

ふと、腰に手を当てる。ヘヴィー八チェットの、冷たい感触。訓練にしか使われることがなかった、二本の武器。遂に、これを使うときが来るのかもしれない。

そして、作戦が始まった。

『釣り餌』による誘導、ここまでは上手くいった。第一接触地点にてトラップを発動、そして砲撃によってさらに次のトラップゾー

ンへ誘導しようとしたとき――不測の事態が起きる。

順調にトラップゾーンに向かって突き進んでいた炎竜。儀装して塹壕に潜んだ歩兵が、トラップ発動の瞬間を待ち構えている。ところろが、その手前、竜はピタリとその足を止めた。

「ありゃあ、いけねえ！」

エドガーが、焦りを含んだ声を上げた。同時に、もう一つの陣にて指揮を取るダイアナが、慌てて退避命令を出すも時既に遅し。

竜の腹部が見る見る膨れたかと思うと、炎の奔流が一面を紅く染めた。

塹壕から飛び出した歩兵数人が、たいまつのように燃え上がり――消し炭となって果てた。

トラップの手前で、竜に気取られてしまったのだ。儀装が甘かったのか、それともその竜が特別鋭かったのか。理由はわからないが、この時点で作戦の成功率はかなり低下した。

辛くも難を逃れた歩兵が、死に物狂いで駆け出す。竜は、その歩兵に向かって怒りの矛先を向けた。

「くっ！」

ダイアナは素早く狙いを付け、『吼狼』を発砲。右後足の付け根辺りに特殊徹甲弾が命中し、真っ赤な血が噴出する。竜の足が止まった。しかし、そこは急所とはいえない場所である。致命傷にはなりそうにない。

「砲隊、一斉掃射！ 騎兵は工作班の回収急げ！ 他の者は撤退に

「備えよ！」

大砲が一斉に放たれ、砲弾が次々と竜の周りに着弾する。竜は砲弾の雨の中を、まるで意に介さず前進し始めた。

「そろそろ俺たちの出番だな、サイラスよ」

「ああ。まったく、今回ばかりは貧乏くじを引くことになりそうだなぜ」

フランシスの傍らで、エドガーとサイラスが呟く。

「フランシス、準備はいいか」

サイラスに肩を叩かれ、フランシスはびくつとする。

「いいか、俺たちの仕事は足止めだ。残された手段は、少佐の『吼狼』一発だ。少佐が射撃体勢に入るまで、俺達が奴の注意をひきつけるんだ」

「……も、もし、少佐の弾が効かなかったら――？」

「そんなときゃ撤退するしかねえな。撤退が終わるまで、殿を務めるのも俺たちの役目だ」

ごくりとつばを飲み込むフランシス。やがて、ダイアナから指令が下った。サイラスとフランシスが突撃。負傷明けであるエドガーは、予備戦力として待機というものだ。

「行くぞ。合図とともに全力で突っ切れ」

「そんな青い顔すんなって。訓練どおりやりや大丈夫さ」

「ああ。それにお前は初陣だ、無理だと思ったらすぐに後退していいからな」

先ほどまでは、大丈夫、そう思っていたフランシス。しかし、ここに及んで、彼の身体に強烈な緊張と恐怖が襲い掛かる。

膝や掌は震え、喉はからからに渴いてくっついていようだ。動悸が信じられないほど乱れ、息が苦しい。こめかみには一筋の汗が流れた。

さしものサイラスとエドガーも、このときばかりはフランシスを気遣っている余裕はなかった。場合によっては、戦の中でもとりわけ難しいとされる撤退戦を強いられることになる。そして、その撤退戦の成否を左右するのが竜人兵なのだ。

——遂に下される突撃の合図。

サイラスが走り出す。行かなきゃ、と思うも、フランシスの足は地面に張り付いたように動かない。——動け、動け！

「フランシス！」

エドガーの叫びに、フランシスはようやく体の自由を取り戻した。足をもつれさせながらも、なんとか駆け出す。

それはわずか数秒のことだったが、先を走るサイラスとは、すでに数十ヤードの差をつけられていた。必死に両手足を動かす。

最初に竜に到達したのは、例によってクリスティ。二本の小剣を手にも、果敢に竜に挑みかかる。長剣を振りかぶり、サイラスが続く。フランシスも、二本のヘヴィーハチェットを抜き放ち、竜に向かう。

しかし、目標まであと15ヤードというところ。フランシスに、再び異変が起きる。——全身が、鉛の塊にでもなったかのように重くなり、足が止まる。いくつかの光景がフランシスの脳裏をよぎる。

サンドブレスで消し飛んだ兵士。ファイアーブレスで負傷したエドガーに、消し炭にされた先ほどの兵士。そして、手負いの竜に襲われた、永遠とも思えるあの時間――。

「あ……」

竜と眼が合った。蛇に睨まれた蛙、などという生易しいものではない。竜という存在が放つ圧倒的な存在感に当てられて、フランスの頭の中は真っ白になる。がくがくと全身が震え、指一本すら自分の意思で動かすことができない。

びゅう、という風切り音と、自分の名を叫ぶクリステイの声。はっと我に帰ったフランスの眼に入ったものは、唸りを上げて迫る竜の尻尾と、自分を突き飛ばしたクリステイの姿だった。

「きゃんっ！」

短い悲鳴。楯にしたスケイルピアサーは、飴のようにいとも簡単にひしゃげた。丸太のような重量と、鞭のような速度を併せ持つ一撃に、クリステイの華奢な体は木の葉のように吹き飛んだ。

水切りの石のように、地面と平行に飛ぶクリステイの身体。――フランスの眼には、首から下げたペンダントが光の尾を引くのが見え――二、三度バウンドし、土煙を上げて止まった。

「クリス！」

金縛りから解けたフランススが、慌ててクリステイに駆け寄る。息はあるが、ぐったりとして意識がない。目立った外傷はないようだが、骨か内蔵を痛めたか、揺すると小さな呻き声を上げる。

「フランス、クリスを連れて下がれ！」

「サイラスさん、でも……」

「いいから早く！」

くっ、つと唇をかみ締めながら、フランスはクリステイを背負って走り出す。振り返ると、一人奮戦するサイラスの姿が。比べて、自分のなんと情けないことか。敵を前に恐怖で動けなくなり、挙句自分をかばってクリステイが負傷してしまった。訓練で学んだことも座学で学んだことも、何一つ役に立てることができなかった。

悔しい。不甲斐ない。申し訳ない。様々な思いが、ずきずきとフランスの胸を刺し、苛む。

地面を蹴るたび、背中のクリステイが苦しそうな息を漏らす。いかに竜人といえど、果たして無事に助かるかどうか。

「ごめんよ、クリス。ごめんよ……」

目尻に涙を滲ませながら、フランスは懸命に走る。今自分がすべきは、クリステイを無事に逃がすこと。それだけははっきりしている。

「早く、キーツ少尉を！」

ダイアナだった。いつの間にここまで来たのか。竜までたった70ヤード、本来作戦指揮官が近づいていい距離ではない。必殺を期するためのこの距離だ。

「ガーランド、退け！」

一言叫び、ダイアナが立ち撃ちの体勢で『吼狼』の引き金を引く。

巨大な発砲音。あまりの反動に、ダイアナの身体は後ろに大きく弾かれる。

ぱあん、という音が響き、数瞬遅れて竜の側頭部から鮮血がこぼれる。二、三度痙攣し、竜は前のめりに倒れた。

作戦は辛くも成功した。まさに薄氷の勝利である。

しかし、ファイアーブレスにより歩兵4名が即死、7名が重症。クリスティはあばら骨を中心に十箇所の骨折、一人竜に立ち向かったサイラスは軽症、ダイアナも数箇所の筋肉が断裂する傷を負い、後味の悪さを残す一戦となった。

挫折、そして

作戦が終了してからというものの、フランスは塞ぎこむばかりであつた。

意識を失い、ただ苦しい表情で呻くのみの子クリステイの姿を思い出すたび、どうしようもない胸の痛みに襲われる。悔しさ、無力感、屈辱感、敗北感……。様々な負の感情が渦巻き、心を苛んでいた。エドガーやサイラスが言葉をかけるも、ただ力なく頷くばかり。温かい言葉は、かえってフランスの心を抉る結果となった。

しかし、フランスを誰が責められよう。竜を目の当たりにし、敵前逃亡を図った兵士の例は、枚挙に暇がない。竜に白兵戦を挑む意志を見せた、それだけでも大したものなのだ。

ところはレナードの執務室。レナードは、ダイアナから作戦の結果報告を受けていた。

「まあ、上出来だろう。それにしても、70ヤードからの狙撃とは、少佐にしては無謀な真似をしたな」

「……それが最善と判断しました」

「しかし、だ。作戦指揮官は、指揮を取るのが仕事だ。たとえ目の前で部下がやられようと、構わず最後まで部隊全体を指揮し続けなければならぬ。責任を取るのはその後だ。辛い役回りだがな」

「申し訳ありません」

「まあ、私の口から偉そうに言えることではないんだがな、ハハハ」

レナードは戦場に立つと、部下の制止も聞かず最前線に飛び出していくことが多々あった。副官時代のダイアナにとっては、頭痛の種だったものだ。

「それで、クリスティの容態は」

「未だ意識不明ですが、命に別状はないとのことです。じきに目を覚ますかと」

「そうか。……フランシスは？」

「塞ぎこんでいるとか。……なにしろ初陣でしたので、無理もないことですが」

しかし内心ダイアナは、もうフランシスは駄目かもしれないと考えていた。戦場で強烈なショックを受け、そのことが頭に焼きつき度々追体験に苛まれる。それほど珍しいことではない。特にこの対竜部隊では、精神的な傷を負ったために退役を希望するものが後を絶たない。

「まあ、そつとしておいてやれ。何しろ、短期間に色々なことが起き過ぎた」

「はっ」

「……初陣、か」

窓の外を眺めながら、レナードが感慨深げに呟いた。

クリスティが目を覚ましたのは、二日後のことであった。

慌てて病室に駆けつけた対竜部隊の面々の中に、フランシスの姿もあった。口々に安堵の言葉を漏らす隊員たちと、弱々しいながらも感謝の言葉を述べるクリスティ。医師の説明によれば、10日ほどは寝たきりの生活になるだろう、とのこと。竜人の回復力をもつてしても、完治までは一ヶ月以上を要するらしい。

クリスティを取り囲む輪の外側で、フランシスにはかける言葉が見つからなかった。自分の弱さが、目の前の少女をこんな目に合わ

せてしまったのだ。自責と後悔の念に、押しつぶされそうになる。

「あ、フラン。……大丈夫だったんだね。……良かった」

人の影に隠れていたフランシスを見つけ、クリステイが声をかけた。以前のクリステイからは考えられないような、か細い声。

——やめてくれ。心の中で、フランシスが叫ぶ。

自分のせいでそんなになったのに、なぜ自分を気遣うようなことが言えるのか。むしろ、いつそのこと激しく叱責してくれたほうがどれほどマシだっただろう。

「あ、あの、……ごめん、僕……」

いたたまれなくなり、フランシスは駆け出す。

「あ、フラン！」

背後から、クリステイの声が届く。しかし、今のフランシスは、クリステイの声を聞くことすらも苦痛に感じた。

病室から逃げ出したフランシス。夕闇迫る練兵場で、一人遮二無二剣を振り回していた。刃引きされた訓練用の剣を、力任せに藁人形に叩きつける。常人離れた臂力によって、藁人形は無残に碎け散った。

「はあ、はあ……」

肩で荒い息をしながら、フランシスは別の藁人形に向かう。

「くそっ！ このっ！」

数度剣を叩きつける。と、手元を誤り剣先が人形から逸れた。大きくバランスを崩したフランシスは、たたらを踏んで尻餅をつく。

「どうした、剣が荒れているぞ」

背後から、落ち着いた響きの男の声が。振り返ると、そこにいたのは隊長レナード・パーシヴァルだった。フランシスと同じ訓練用の剣を肩に担ぎ、仁王立ちしている。

「まったく、お前は訓練なにを学んだのだ。どれ、私が一手稽古をつけてやる」

「隊長……？」

「ほら、いいぞ。どこからでもかかって来なさい」

「でも……」

戸惑うフランシス。いくら稽古といえど、最高責任者に剣を向けるのは躊躇われた。

「来ないのならば——こちらから行くぞ！」

あ、っとフランシスが思ったときには、すでに眼前にレナードの姿が。反射的に剣を立てる。と、同時に凄まじい剣圧により、フランシスの身体は吹き飛ばされた。二、三度地面を転がる。

「気を抜くな、すぐ立つ！」

再びレナードの剣がフランシスに襲い掛かる。唸りを上げて迫るレナードの剣を、どうにか受け止める。

これまでクリステイ、サイラス、エドガーとは何度も一緒に訓練

をしてきたが――その誰にも増して、苛烈な一撃だった。その剣には、ただ単に力が強い、技術が高いということには留まらない『何か』が籠められている。これが、数多の竜を討ち果たし、英雄と呼ばれた男の剣だった。

「よし、まだまだいくぞ！」

続けて、一合、二合。剣と剣が激しくぶつかり合う音が、練兵場に響き渡る。上段、中段、切り上げ、袈裟懸け――攻撃を受けていくうちに、自然と身体が反応するようになってきた。サイラスから、ひたすら基礎の反復を命じられた成果だ。防戦一方のフランス。しかし遂に一瞬の隙を見出し、レナードに一撃を加えようとする。

「お、いいぞ。その調子だ」

フランスの剣を軽くないなすと、レナードはさらに苛烈な攻撃を仕掛ける。防ぎ、打ち込み、避け、また打ち込む。フランスの頭からは余計なものが消え、目の前の剣のことしか考えられなくなる。剣戟が支配する、自分とレナードだけの世界。

レナードの剣は、決して自分を傷つけようとしているのではない。フランスには、それがわかった。強烈ではあるが、どこか優しさを感じられる、何かを語りかけて来るような、そんな剣だった。やがて放たれた、大上段からの山のような重さを持つ一撃。はっしとそれを受け止めた。ふっと、レナードの力が抜ける。

「このくらいにしておくか。……どうだ、少しは気が晴れたかね」

「はあっ、はあ……。はい、ありがとうございます」

息も絶え絶えのフランスに対し、汗ひとつかいていないレナード

ド。あれでも手加減していたのだということくらいは、フランシスにも分かった。フランシスの呼吸が整うのを待ち、レナードが口を開く。

「この間の戦のこと、聞かせてくれるか」

フランシスは、素直にすべてを吐露した。竜を前にして動けなくなってしまったこと、クリスティにかばわれたこと。そして、自分が感じた悔しさ、不甲斐なさ――レナードは辛抱強く、その話を聞く。

「僕は、意気地なしです」

ポツリと一つ呟き、フランシスは言葉を切った。無言でその言葉を聞き続けたレナードは、フランシスの瞳をじっと見つめ、口を開く。

「一つ、話をしよう。東方遠征に従軍した、とある一兵卒の話だ」

どこか遠いところを見るような目で、レナードが語る。

「なんの取り得も無かったその男。戦場の片隅で這いずり回ることにできない。そんな男だった」

「……………」

「男の目の前で、幾人もの戦友たちがなす術もなく死んでいった。何もできない自分が惨めで、情けなかった」

どこことなく、今の自分の境遇と似たその男。フランシスは共感を覚える。

「あの時自分にもっと力があれば――後悔を糧に、男は身体を鍛え、技術を磨いた。そしてある日、討伐した竜の死体を見た男は、幼い頃に聞いた御伽噺を思い出す。『竜の血を飲んだ勇者は、不死身の力を得ました』と」

「あれ、それって……？」

「不死身にこそならなかったものの、男は強い力を手に入れた。そして、大きな武勲を打ち立てた。その男が成功したのはなぜか。改めて考えれば――それは、自分の弱さを受け止めて、強くあろうと努力したからだと思うのだ。竜の血など、瑣末なことに過ぎない」

レナードの話を、フランシスはその胸にしっかりと受け止める。

「自分の弱さを認めることは難しい。だが、お前は既に自分の弱さに気付いたはずだ」

「……はい」

「弱い自分を乗り越えること。これは、さらに困難だ。険しい路となるだろう」

「……………」

「お前はこれからどうする？ 戦い続けるか、諦めるか。どちらを選ぶのかは、お前次第だ」

突き刺すようなレナードの視線を受けながら、しばしの黙考。フランシスの脳裏に、竜の尻尾で弾かれたクリスティの姿が蘇る。転がり、傷つくそのさまは、はっきりと記憶に刻まれている。この記憶に背を向けて逃げ出すか、これを受け入れつつ前に進むか――フランシスの心は、既に決まっていた。

「僕は……逃げたくない。このまま、自分に負けっぱなしでいるのは御免です」

それはまだ、ほんの小さな種火。フランシスの心に、『勇氣』という名の火が灯った瞬間だった。

「よく言った。それでこそ男だ」

レナードが相好を崩した。その笑顔が、育ての親である孤児院の神父とだぶる。

「心しろ。お前が闘う相手は、自分自身なのだ」と

最後にそう言い残して、レナードは去っていった。山のように雄大な、『男』の背中だった。

フランシスは、すぐさまクリステイの病室に向かった。見舞いに訪れた人々の姿はなく、ベッドに一人横たわるクリステイ。

「フラン、心配したじゃない。いきなり飛び出しちゃうもんだから」「……ごめんよ」

「随分落ち込んでるって聞いたけど……。あんまり気にしないでいいからね？」

「いや、クリスの怪我は僕の責任だから。僕は、このことをずっと忘れない」

「フラン……」

「僕、もっと頑張るよ。みんなと肩を並べても恥ずかしくないように。自分自身に負けないように。それを、言いに来たんだけ」

クリステイの目に映るフランシスの姿は、少し前とはまるで違っていった。いったいこの短期間になにがあったんだろう、と思う。

「じゃあ、お休み。ゆっくり休んで早く良くなって」

去り行くフランスの背中を見つめるクリスティ。ドアが閉まり、再び一人きりになる。

「いい顔になっちゃって。……まったく、男の子には敵わないなあ」

病室の天井に向かって、ボツリと呟いた。

あくる日から、フランスはひたすら訓練に打ち込んだ。体力自慢のエドガーが舌を巻くほどの熱心さで、徹底的に心身を鍛え上げる。サイラスからは、「もう勘弁してくれ」と言われるほどに、毎日剣を振った。病室の窓からはクリスティが、隊長執務室の窓からはレナードが。それぞれ、フランスの姿を見つめる。

三週間後。対竜部隊はまた、出撃のときを迎える。

一歩

この日の作戦は、平原での炎竜討伐であった。体長約60フィート。ちょうど、フランシスを襲ったものと同程度だ。

傷が完治していないクリステイは、基地で留守番だ。ダイアナ、サイラス、エドガー、そしてフランシスの4名の竜人が、この作戦に参加している。

『釣り出し』による誘導、トラップ発動、集中砲火。作戦は、理想的な展開を見せた。しかし、後一步の所で止めを刺しきれない状態が続く。

「なかなかしぶといですな。……榴弾はまだ豊富ですが、通常弾はかなり少なくなっています。いかがいたしましょうか」

砲兵隊長スコット・ベイカーがダイアナに告げる。

「……白兵戦と、『吼狼』でケリをつけるしかないでしょう。――北のガーランド、ノリス両名に信号を。あと一斉射ののち、突撃を開始します」

遠く離れた陣にいるサイラスとエドガーに手旗による信号が送られ、了解したとの返答が返る。ダイアナは緊張の面持ちのフランシスに声をかけた。

「ファウラー少尉、準備はいいですか。無理だと思うのなら、待機していても構いませんよ」

「いえ……大丈夫です、行けます」

正直、恐怖心はまだ拭えていない。手足は軽く震えているし、心臓は口から飛び出しそうだ。しかし——ここで逃げてちゃ、自分はいつまで経っても弱いままだ。そんな想いが、フランスを奮い立たせる。

フランスは変わった、とダイアナは思う。その変化がレナードの助言によるものだということは、何となく察している。こういう部分は、真似できないとダイアナは嘆息する。戦術理解、状況判断などは、経験を積みばレナードに追いつけるかもしれない。しかし、人を惹きつける魅力、人望——それは、まさに生まれ持ったの力スマ。望んで手に入るものではない。軽い嫉妬さえ覚える。

「よろしい。では、突撃に備えてください」

ダイアナは、自分が新兵だったころのことを思い出す。初陣で、同期の連中は皆、小便を漏らさんばかりに緊張していたものだ。無論、自分とて例外でなく。戦闘が開始して、頭が真っ白になり——気が付いたときには、戦闘が終了していた。そんな時代が、ダイアナにもあったのだ。我知らず、口元に微笑が浮かぶ。

やがて、カウントが開始され——支援砲撃とともに、フランスは走り出した。

——大丈夫だ。足は動く。

心の奥から湧き上がる不安を、無理矢理押さえつける。

——闘う相手は自分自身。自分自身の弱い心。

自己に暗示をかけるように、繰り返しレナードの言葉を呟く。

次第に、周りの雑音が掻き消えていく。目に映るのは、彼方の炎竜のみ。恐怖とは違う、熱を持った何かが、フランシスの全身を支配していく。フランシスの脳内で、何かが切り替わる音がした。

気付いたときには、竜は既に目前だった。砲撃が巻き上げた爆炎の中で、竜の双眸がざらりと光ったように見えた。

――怯むな。

「おおおおおおおっ!!!!!!」

腹の底から咆哮し、跳躍。戦闘ナタ・ヘヴィーハチェットを、力任せに叩きつける。剣術の基本も何もない、ただ感情に任せた一撃だった。

ガスッ、という軽い手ごたえ。フランシスが力任せに放った斬撃は、竜の鱗を浅く削り取ったに過ぎなかった。

まるでダメージを与えられなかった、その一撃。しかし、それはフランシスにとっては大きな一歩。自分自身に勝利した瞬間だった。

「おいおい、俺が教えてやった剣技はどうしたんだ、フランシス。随分頭に血が上ってるじゃないか」

「いや、戦場じゃこのくらい熱くなるくらいがちょうどいいんだよ」

「サイラスさん、エドガーさん！」

サイラスとエドガーも、自らの武器を振るって参戦する。フランシスは多少落ち着きを取り戻し、再び竜に向かった。

足の親指に力を込めて、前方に向かって体重移動。剣を振るのは、腕ではなく足腰だ。ここ数ヶ月、ひたすら繰り返し返した基本を、頭の中で反芻し動きに反映させる。

フランシスは、恐ろしいほどに集中していた。竜の息遣い、筋肉の躍動――常人離れた竜人の感覚が、竜のすべてをフランシスに伝える。竜の右後足がわずかに引かれ、同時に右肩の筋肉が収縮――右腕による攻撃が来る。瞬時に判断するや、後ろに跳びすさりながら身体を捻り、回転を利用した一撃を振り下ろされた右腕に加える。

「いいぞ。その調子で俺の分まで働いて、少しは楽をさせてくれ」
「しょうもねえことを言ってるんじゃない、サイラス」

「俺はここ三週間、散々フランシスに付き合わされたんだ。少しくらいはいいだろう」

軽口を叩きつつも、サイラスとエドガーは見事な立ち回りを見せる。フランシスの好調に引つ張られるように、絶妙な連携で竜に痛みを与えていく。

と、遠くからダイアナの鋭い声。それを聞き取った三人は、パツと飛びのく。一瞬の間を置いて、巨大な銃声。

「グルルアッ!!」

『吼狼』から放たれた弾丸が、竜の尻尾の中ごろ辺りを貫いた。真っ赤な鮮血を噴出し、竜の尻尾は力なく垂れる。

「尻尾は気にせず戦いなさい」、そういうダイアナの気遣いだっただろうか。感謝しつつ、フランシスは剣を振るう。

「二人とも、下がれ!」

と、サイラスの警告。竜の下腹が膨らみ始めていることには、エドガーとフランシスも気付いている。前回の轍は踏まぬとばかり、素早く離脱するエドガーに、フランシスも続く。

「オオオオオオッ!!」

一声嘶き、灼熱の炎が撒き散らされる。一瞬にしてあたりを数十ヤードにわたって焼き尽くす、必殺の攻撃。しかし、フランシスたち三人は、首尾よく範囲外へ逃れていた。

「チャンスだな」

「ああ、奴さん、相当弱っていやがる」

ファイアーブレスは『炎囊』の可燃性物質のみならず、竜の体力も著しく消耗する。多数の手傷を負ったところでブレスを吐いたその竜は、もはや半死半生の状態だ。

すかさず、二挺目の『吼狼』が火を吹いた。銃口から放たれた弾丸は、狙いを違わず竜の眉間に命中。しかし――ほんのわずかな角度が浅かったか、鱗を深く抉り取ったものの、致命傷には至らない。

「あそこを狙うぞ！ エドガー！」

「応よ！」

エドガーが組んだ両掌に足をかけ、サイラスが宙を舞う。自らの脚力と、エドガーの腕力を加えた跳躍だ。

「ふっ！」

戦場という場には相応しくないとさえ思わせるほど、優美で華麗な一太刀。ダイアナが抉った眉間の傷が、さらに大きく開かれた。頭蓋骨をも切り裂く一撃だった。

竜は前に傾くが、前足を突いて倒れそうになるのを堪える。致命傷には、まだ少し足りない。

「フランス、今回は譲ってやるよ。お前がやれ」
「……はい！」

エドガーに背中を押され、フランスが走る。焼け爛れた地面の熱が靴底を焦がすが、意に介しない。竜の側面に回りこむと、その身体を伝って頭部に辿り着く。

「ウゴオアアーッ!!」

最後の力を振り絞り、身体を激しくよじってフランスを振り落とそうとする。片手で竜の鱗につかまりながら、フランスはヘヴィーハチェットを眉間の傷に叩きつける。

一撃、二撃——無我夢中で腕を振るうち、竜の動きは鈍くなっていき——遂に事切れた。地響きを立て、竜は地面に倒れ付す。

「や、やった……」

竜の身体から滑り落ちたフランス。地面に尻餅を突いたまま、動けなくなってしまった。極度の高揚から開放され、力が抜けてしまったのだろう。

「やったじゃねえか、フランス。これでお前も一人前だな」

フランスに肩を貸しながら、エドガーが大きな手でフランスの頭をがしとなでる。

「サイラスさん、エドガーさん、少佐、隊長、そしてクリス……。皆さんのおかげです」

「隊長にクリス？ 二人は戦ってねえじゃねえか」

エドガーは得心がいかない、という表情を見せる。と、そこに竜の死亡を確認していたサイラスが歩み寄った。

「ほれ、こいつを」

サイラスがフランスに投げてよこしたのは、一枚の鱗。大振りの硬貨ほどの大きさで、涙型をしている。

「こいつは竜の尻尾の一番先に生えてる鱗でな、テイル・ドロップといって俺たちの間では幸運のお守りってことになってる。初めて竜を倒した奴は、これを自分のものにしていいって慣わしでな。言ってみれば、竜を討伐した証だ」

フランスは、手の中のものをじっと見つめる。長年の風雨に晒され、角が取れて丸みを帯びた、赤銅色の鱗。それを眺めていると、自分が竜を倒したのだという実感が、じわじわと湧いてきた。同時に、心地よい倦怠感。引きずり込まれるように、フランスは深い眠りに落ちた。

「なんだ、寝ちまったぜ」

「緊張の糸が切れたんだな。寝かせといてやろう」

「ああ、そうだな。なにしろ今日のヒーロー様だ。丁重に扱わなきゃな」

エドガーの背に揺られながら、フランスは夢を見る。目覚めた時には忘れてしまったが、心地よい夢だったことは間違いなかった。

基地に帰還した一同。正門で帰りを待っていたクリスティに、フランスはテイル・ドロップを見せる。なにがあったのか察したク

リスティは、満面の笑顔とともに右手を高く上げる。夏の空に、二人が交わしたハイ・タッチの音が、気持ちよく響いた。

夏の日

盛夏。シラーズ周辺の夏は、非常に暑い。南西の海から吹き込む季節風が、低緯度地方の熱い空気を運んでくるのだ。

照り付ける日差しの中、フランススたちはいつものごとく訓練に励んでいた。その中には、負傷から回復した、クリステイの姿もある。

「おい、そろそろ休憩にしようぜ。こう暑くちやたまらない」
「あたしも賛成」

クリステイとサイラスが、建物の影にへたり込む。

「情けねえなあ。クソ暑いときこそ、訓練のしがいがあるってもんじゃねえか。なあ、フランスス」

「僕はどちらかというと、二人に賛成です……」

生真面目なフランススを辟易させるほどの熱波だ。しょうがねえな、と言いつつエドガーもその輪に加わる。桶に汲んだ井戸水を、皆で回し飲みして一息つく。

「次の作戦はいつだろうね。もっと涼しくなってからだといいんだけど」

「同感だな。しかし、聞いた話だが、当分は出撃はないそうだ」
「どうしてです？」

「それは――」
「人手不足、だよ、ファウラー少尉」

背後から、何者かがサイラスの言葉に割って入った。後ろに数名

の士官を従えた、一目で高級将校だと分かる出で立ちの男だった。

「わっ！ って、ダグラス少将！」

三人が慌てて直立不動の体勢をとり、フランスもそれに倣う。そこにいたのは、騎士団参謀長、ライオネル・ダグラス。フランスは初対面だったが、他の三人は面識があるようだ。

「楽にしたまえ。……ふむ、君が噂のファウラー少尉だな。私はライオネル・ダグラス少将だ」

「お初にお目にかかります。フランス・ファウラーです」

「そう畏まらんでいい。皆、楽にしたまえ」

高級将校にもかかわらず、気さくな雰囲気である。

「話には聞いているよ。任官三ヶ月で初討伐とは、なかなかのものじゃないか」

「いえ、とんでもありません！」

「謙遜は無用だ。その調子で頑張ってくれたまえ」

「ところでどうしたんです？ アレならまだ届いてませんよ」

サイラスとは個人的になにかつながりがあるらしい。そんな口ぶりだ。

「新入り君の顔を見に来た——というのは冗談でね。まさに、先ほど君たちが話していた件について、レナードと話をね」

（レナードって、隊長と仲がいいの？）

ファーストネームで呼ばわったことについて、フランスが疑問

に思ったことをクリスティに小声で尋ねる。

（うん、なんか同期らしいよ。対竜部隊にもちよくちよく遊びに来るし）

それにしても。

「人手不足、ですか。こんなにいっぱい人がいるのに」

辺りを見回せば、練兵場で訓練を行う多数の兵士がいる。小さな村育ちのフランススにとって、村の人口を上回る人員がいるこの部隊が、人手不足に悩まされていると言われてもピンと来ない。

「ここ半年で、この部隊から出た死者、退役者は50名を越える。

総勢600、そのうち常時出撃できるのは450ほどだ。50名の減少というのは憂慮すべき事態なのだよ」

「600名の中の50、ってそんなに大きいものですか」

今度は、クリスティが疑問を呈する。

「近年の戦術論では、3割の損耗で軍は機能しなくなる、といわれているからな。600名中50名というのは馬鹿にできない数字なのだよ」

「へえ、知らなかったな」

「いや、それは一緒に受けた座学で習ったでしょ」

さすがは、二度の追試を科せられたクリスティであった。

「東方遠征の評判のせいで、ただでさえ辺境騎士団はなり手が少ない。国王の承認が下りれば若者を強制的に徴発することも可能だが

——やる気のあるものでなければ、高い技能が必要とされる対竜部隊の隊員は務まらない」

二度行われた東方遠征。特に、第二次東方遠征は、最終的に6割を越す損耗を出すという凄惨な戦いだった。人間相手の戦争ならば、歴史的な大敗北と言われてもおかしくない数字である。従軍者の口から、いかに悲惨な戦いであつたかが広まったため、高額な報酬をぶら下げてもなお、辺境騎士団は入団希望者が少ない。

「まあ、クリスみたいな物好きが、そうそういるわけもないしな」
「物好きって、失礼だね」

「まあ、近頃の若いもんは意気地がねえからな。……ただし、俺の娘が大きくなってうちに入りたいて言ったら、全力で反対するが」
「まあ、そんなわけだね。人員不足解消のための方策を、レナードと練っていたのだよ」

実際のところは、ライオネルが考えた策をレナードに一方的に告げただけであつたが、そのことはフランシスたちが知る由もない。

「少将、そろそろお時間が……」

後ろに控えた士官が声をかける。

「おっ、すまんすまん。では諸君、引き続き励んでくれたまえ」
「はっ！」

敬礼を交わし、ライオネルは去っていった。
入れ替わるように、別の人影が一同の目に入る。

「お、あれはスオウじゃねえか？」

「あ、ほんとだ。おーい、スオウ！」

ぶんぶん手を振るクリスティに気付き、男が近づいてくる。黒髪が印象的な痩身の男。フランシスが始めて実戦に立ち会ったときに目にした、スオウ・モーガンであった。

「お前が基地にいるなんて珍しいな。いつ帰ってきた？」

「……今着いたところだ、……そっちは？」

「フランシス・ファウラーです。初めまして」

「お前が、新人か。……よろしく頼む」

フランシスが差し出した手は握られなかった。全く表情を変えず淡々としやべるスオウに、フランシスは困惑を隠せない。

「フラン、別に怒ってるわけじゃないから。スオウはちょっと無愛想なだけ」

フォローのつもりなのだろうが、さらっと失礼なことを口にするクリスティ。しかし、スオウはまるで気にしない素振りである。その外見とあいまって、フランシスは風に揺れる柳の木のような印象を受けた。

「フランシスは初めてだったか。スオウは竜の生態調査隊の一員で、隠密行動の専門家だ。普段は外を回っていることが多い」

「へえ、大変そうですね、モーガンさん」

「……前線に立つお前たち、ほどではない。それから……俺のことはスオウでいい」

「今日は調査報告に来たのか？ どこに行ってたんだ？」

「……報告と言われれば、その通り。しかし……これ以上は話せん」

「ん？ まあいいや。とにかく久しぶりだ、後で酒でも飲もうぜ」

「……うむ。では、失礼する」

飄々とスオウは去っていった。

「何か、含みのある言い方でしたね」

「まあ、俺たちは一応軍隊だからな。みだりに話せない機密、つてのもあるもんさ」

「どうでもいいが、そろそろ訓練再開するぜ。ダラダラしていると、ころをを少佐にでも見つかったら、どやされちまう」

「それだけは勘弁だね」

4人は、めいめい訓練に戻るのだった。

一方、隊長執務室。

レナードは、無然としていた。ライオネルから持ちかけられた提案が気に入らないのだ。

「奴め、私がああいう場を好まないのを知っていて……」

「しかし、閣下の知名度を考えれば効果はあるでしょう」

「それは、私もわかつちゃあいるんだが……」

ライオネルの提案は、こういうものだ。二日後に迫った、コルドア発見記念日。沿岸部に位置するコルドア首都アマディアスでは、毎年盛大な記念式典が行われる。多数の民衆が集まるその場で、レナードが演説を行う。大英雄であるレナードが感動的な演説を行えば、熱狂した若者が次々騎士団の門を叩くだろう、と。

「それに、閣下に有力者と繋がりを持っていただければ、予算獲得の際有利に働きます。いい機会かと」

「君は身も蓋もないな……。まあ、しょうがない。ひとつ、広報活

動とやらをしてみるか」

「では、早速荷物を用意させましょう。明後日の式典に参加するなら、早急に出立しませんと」

ダイアナが人を呼ぼうとしたところ、ドアがノックされた。

「失礼いたします！ スオウ・モーガン中尉がお戻りであります」

伝令係の下士官が、敬礼しながら報告する。スオウと聞いて、二人の顔色が変わった。

「すぐに通すように。あなたは下がりなさい」

「はっ！」

下士官と入れ替わりに、スオウが執務室に入ってくる。

「……モーガン、ただいま戻りました」

「ご苦労。首尾はどうだ」

「はっ。……サンドラ平原からさらに東。……怪しい輩が徒党を組んで潜むのを発見した」

ここ一カ月というものの、スオウはレナードの密命を受け、本来の竜の調査任務から離れて平地地帯を探索していたのだ。

「具体的な場所は？」

スオウが地図を広げて一点を指す。

「ここ、だ。平原東の、岩石地帯。……岩山の洞穴に、根城を構えている」

そこは、付近竜の討伐は終わっているものの、岩がちな地形で農耕には適さず、これといった鉱山資源も発見されていない。好き好んで住もうという者も当然おらず、未だ地名も付けられないまま放置された区画であった。

「人数は」

「20前後」

「ふむ。あんな辺鄙な場所に根城を構える間抜けな山賊はいるまい」

「やはり、例の間者だと」

「まあ、そう考えるしかないだろう」

スオウの探索行の目的。それは、少し前に起きた騎士団員殺害事件、そしてライオネルから知らされた密入国事件。それらに関連していると思われる、何者かの搜索だった。

「正体は割れたのか？」

「そこまでは。……わかったのは、全員ルゲール語を話すということだけだ」

ルゲール語は、旧大陸においてもっとも広く話される言語であり、ブリーディアの公用語でもある。それだけでは何の手がかりにもならない。

「……慎重な連中だった。なかなか、尻尾を出さない。常に見張りを立て、武装もしている」

「いかがいたしますか、閣下」

「直接聞くのが手っ取り早いだろう。少佐、君ならどう攻める」

「……大部隊を率いれば、察知されて逃げられる可能性が高い。武装した相手と洞穴での屋内戦になる可能性が高いことを考えれば――」

「少数精鋭、竜人兵による急襲です」

「妥当だな。決行はいつにする」

「一日でも早いほうがよろしいかと」

「……同意する。連中は、怪しい素振りを見せていた。近いうちに、動きがあるかも知れない」

しかし、ダイアナには懸案が一つ。レナードが数日間不在になることだ。

「心配のし過ぎではないかね？ 君を含め、竜人兵が6名。新兵が一人いるとはいえ、20そこそこの相手に万が一もあるまい」

なにせ、局地戦においては百人力とも言われる竜人兵が6人だ。戦力差は単純計算で30倍である。

「それはそうなのですが……」

なにか、胸騒ぎがする。すべてを理屈で考えるタイプのダイアナとしては、極めて珍しいことだったが――虫の知らせか第六感か。何かが胸に引っかかり、漠然とした不安が拭えない。

――いや、これ以上の不安は見せまい。

ダイアナは考えを切り替える。これ以上不安をのぞかせれば、もともと乗り気でないレナードが式典参加を取りやめると言い出しかねない。

「では、決行は明日。竜人兵による急襲班を編成し、闇夜に紛れ作戦を実行いたします」

「うむ。よろしく頼む」

大丈夫。レナードの言葉通り、戦力的に万一が起こるはずもない。

軽く一網打尽にして、尋問するだけのことだ。そう自信に言い聞かせるも、ダイアナの胸中から不安が晴れることはなかった。

急襲、そして

「ふぁーあ、いつもはもう寝てる時間なのに……いきなり召集されるから何かと思ったら、こんな荒野に駆り出されるなんて」

馬上でクリステイが愚痴る。ちょうど日付が変わろうとしている時刻。フランスス、クリステイ、サイラス、エドガー、ダイアナ、そしてスオウ。対竜部隊の6人は、間者の根城と思われる荒野の洞穴に向かっているところだ。

間者と目される者たちの活動は、綿密に計画された組織的なものと思われた。騎士団内に内通者がいるかもしれないという万に一つの可能性を想定し、作戦開始直前まで、出撃メンバーにすら情報は伏せられていたのだ。フランススたちが突然ダイアナに招集され、作戦の説明を受けたのが夕食後のこと。すぐさま支度をして、騎馬で荒野に出たというわけだ。

先ほどのクリステイの発言も、いつもならダイアナに叱責を受けてしかるべきなのだが、事情が事情だけにダイアナも軽く諭すだけにとどめる。

「眠いのは分かりますが、もう少しで目標地点です。それまでに気を引き締めなさい」

「了解……」

いささか緊張感に欠けるクリステイに対し、フランススは緊張の面持ちだ。訓練以外では、初めて人間と戦闘することになるかもしれない。竜と戦うときと違った緊張感があった。

「エドガーさん」

「ん、なんだ？」

「エドガーさんは人間相手の戦いって経験あるんですか？」

「ああ、もちろん。山賊相手にドンパチやったり、街でチンピラが暴れてるのを懲らしめてやったりな。――人間相手にするのが怖いかな？」

「怖いと言えば、怖いですよ」

竜人以外の兵士たちとも、合同で演習することはある。もちろん、個人の格闘術や剣術の訓練は竜人同士でしか行わないのだが。その経験からして、常人が20人ばかり集まろうと、自分たちは傷一つつけられることなく勝利できるだろう。経験は浅いが、そのくらいのことはフランスにも分かる。心配なのは――力余って不必要に大きな怪我を負わせてしまわないか、殺してしまわないか――そのことだった。

「まあ、心配はいらないさ。さすがにコイツを振り回せばやばいことになるが、20人程度なら素手で十分だろう」

剣の柄を叩きながら、サイラスが言う。念のため、ということでも、各々いつもの武器を身に帯びていた。ダイアナも、『吼狼』を一挺携帯している。防壁を作って抵抗された場合、それを破砕するのに使うためだ。

「狭い洞窟での戦いになるからな。乱戦になれば、相手もむやみに銃を使うことはできねえ。手加減はしやすいだろう」

「そうですね」

「しかし――」

ほっと安堵するフランスに、ダイアナが口を挟む。

「情報を得るなら、なにも全員を生かしておく必要はありません。身の危険を感じたなら、容赦なく殺す覚悟が必要です。自身の安全が最優先ですから」

冷徹な言葉。かなり特殊な部隊とはいえ、自分が『軍隊』に所属しているということを、改めて認識するフランス。

「今回、新兵のあなたと負傷明けのキーツ少尉には後詰めをしてもらいますので。硬くならなくともいいですよ」

フランスの表情が暗くなったのを見て取ったのか、ダイアナがフォローした。

「……そろそろだ。ここからは徒歩かちで行く」

先導するスオウに倣い、一同は馬を下りた。蹄の音で敵に気取られるのを防ぐためだ。手近な立ち木に馬を繋ぎ、夜の闇の中を注意深く進む。

やがて、荒野のはるか向こうに、小高い岩山の黒い影が見えてきた。岩山からは、小さな光が漏れ出ている。明らかに、人の手によるものだ。

「……あれだ。入り口は、二箇所。麓に一箇所と、中腹に一箇所。中腹のほうは、見張り台に繋がっている」

「作戦は、基地で説明したとおり。下から私、ガーランド、ノリス。上からモーガンが突撃します」

「了解」

「キーツ、ファウラーはそれぞれの入り口にて討ち漏らしに備えて

ください。別働隊がいる可能性もありますので、同時に荒野の物音にも気を配ること」

「了解」

「配置に着いたら、モーガンが見張りを排除。同時に一斉突撃を開始します。敵に暇を与えず制圧すること。――では、散開！」

フランス・スオウの2人と、クリスティ・サイラス・エドガー・ダイアナの4人に分かれ、一斉に走りだす。

月影の下を、まるで野の獣のように疾駆する6人。

「よろしくお願いします、スオウさん」

前を走るスオウに、フランスが小さく声をかける。

「……ああ。後詰めのお前たちに出番が回るような、ヘマはしない。……安心して見ている」

相変わらずの無表情だが、言葉にはどことなく優しい響きがある。思ったことを言葉や表情に出すのが苦手な男なのだ、ということはフランスにも何となく察せられた。

「……右手の岩場の影から回りこむ。足音に気をつけろ」

「はい」

岩から岩へと伝い、見張り台から死角になる場所を選んで慎重に接近する。気取られことなく、二人は見張り台の真下に到達した。岩山の中腹にぽっかりと開いた洞穴の出口部分に、木材で簡単な足場が組まれており、そこで男が一人、見張りに立っていた。

「……お前はここで待て」

極めて小さな声でそうフランスに伝え、スオウは岩山に取り付いた。見張り台へ直通する梯子は使わず、回り込むつもりらしい。すると、音もなく岩肌を登っていく。

(まるでヤモリみたいだ……)

フランスが感心している間にも、スオウは器用に岩山を登る。見張りには、全く気付かれていない。凄い技術である。やがて、見張り台のすぐ近くまで辿り付くと、一気に跳躍する。見張りの背後に着地するや、首筋に一撃。振り返る間も与えず、見張りを昏倒させてしまった。

上がって来い、とスオウの合図。音を立てぬよう注意しながら、梯子を上る。フランスが見張り台に辿りついたところで、スオウがダイアナに手信号を送った。

三、二、一——ダイアナが指でカウントを取り——突入が開始される。

「辺境騎士団である！ 不法入国のかどにより、お前たちを拘束する！」

先陣を切って突入したダイアナが叫ぶ。律儀なことに、規定に則ったの行動である。もっとも、九分九厘クロと決まっている相手だ。当然大人しく従うはずもなく——乱戦が始まった。

見張り台から、フランスは洞穴の中を覗く。天然の洞穴を、あの程度人の手で掘り進めて作られたらしいその空間は、ちょっとした広間程度の広さがあった。

間者と思しき男たちは手に手に刃物を持って応戦するも、圧倒的な力の前に蹂躪されていく。

特に活躍めざましいのが、スオウであった。敵の攻撃を『受け止める』のではなく、『受け流す』。騎士団式の格闘術とは違う、独特の技術だ。相手の動きに逆らわず、いなし、体勢を崩したところで急所を的確に突き、昏倒させていく。まるで、川のせせらぎを思わせるような立ち回りであった。

と、一人の男がナイフを振りかざし、背後からスオウに襲い掛かった。危ない、とフランススが叫ぶ間もなく、ナイフがスオウの背に迫る。——しかしナイフは、スオウの身体の直前で止められた。後ろ手にまわされた、スオウの二本の指によって。振り返りもせず、ナイフを摘み取ったスオウは、裏拳で男の顎を一撃。叫び声も上げず、男は昏倒する。まるで、後ろに眼が付いているかのような動きであった。

程なくして、戦闘は終了した。20人からの男たちは、あるいは昏倒させられ、あるいは関節を砕かれ行動力を奪われた。かかった時間は2分に満たなかっただろう。スオウの予告どおり、入り口を押さえていたフランススとクリスティの出る幕はなかった。

「速やかに捕縛してください。猿ぐつわを噛ませて、自害を防ぐのも忘れずに」

「やれやれ、こいつら全員を連行するのはホネだな」

「ぼやくなよ、サイラス。——おい、そこのお前、何をしてやがる！」

エドガーの鋭い声。一人の男が、怪しい動きを見せたのだ。男は、最後の力を振り絞って地面を這いずると、天井から吊るされた一本の紐を引いた。

ジッ、っと何かに点火される音が、フランススの頭上から響き、

一瞬遅れてヒュルヒュルヒュル、パーン。岩山の上に、花火が上がった。

「なに、今の!？」

「ファウラー、キーツ! 外を探れ!」

困惑するフランススたちに、洞穴内からダイアナの指示が飛ぶ。離れた場所にいる仲間に向けた、何らかの信号。そう判断したのだ。

「フラン、あっち! 馬の蹄の音!」

「……ほんとだ! これは――馬車か?」

蹄の音に混じって、車輪が地面を刻む音。竜人の常人離れた聴覚が、数マイルも離れているであろう場所から発せられたその音を聞き取った。

「抜かったか! 追いなさい! われわれもすぐに向かいます!」

「了解!」

クリスティと並んで、フランススが走り出す。目標までは数マイル。竜人の脚力をもってすれば、数分で追いつける距離だ。みるみる馬車の姿が近づく。二頭立ての幌馬車に、一人の御者が乗っているのが見えた。

「あたしが御者を捕まえるから、あんたは馬を抑えて!」

「了解!」

二人は左右に散らばると、同時に馬車に飛びついた。クリスティが御者を馬車から引き摺り下ろして押さえつける間、フランススは手綱を引いて馬車を止める。

「ふう、手間かけさせてくれちゃって」
「ぐっ……」

腕を極められ、うつ伏せに押さえ込まれた男が呻く。
ていつ、とクリステイが首筋に一撃をいれ、男は力なく意識を失った。

「それで、積荷はなんだったんだろう」

フランシスが荷台を覗くと、そこには一つの包みがあった。中身を傷つけまいとする嚴重な梱包で、高価な美術品を運んでいるかのようだ。

「これ、少佐が来るまでこのままにしておいたほうがいいよね」

「別にいいんじゃない？ 開けてみようよ」

「あ、待ってよ、クリス！ 重要機密だったりしたら……」

フランシスの言葉を全く気にせず、クリステイが梱包を解いている。そして、中から出てきたのは――ひとつの卵。灰色地に黒のまだら模様が入り、表面はざらざらしている。何の変哲もない卵。一抱えほどの大きさがある点を除いては。

「なにこれ……卵？」

「でも、こんな大きい卵なんて見たことある？」

「あるわけないじゃん。でも、どう見ても卵だよね」

「それはそうなんだけど。……もしかして」

「ひょっとしてフラン、あたしと同じことを考えてる？」

「……たぶん」

ありえない大きさの卵。卵が大きいということは、生まれてくる『何か』も当然相応の大きさだろう。ここコルドアで、それがなにを意味するのか――

「竜の卵」

二人の言葉が重なった。

「パティは竜の生殖についてはよく分かっていない、って言ったけど」

「それなら、これって大発見、なんじゃない？」

「本当なら、そうだろうね」

「でも、なんでこいつは竜の卵なんかを運んでたんだろ」

「それは尋問すればわかるんじゃない？――ん？」

と、二人の耳が異音を聞きつけた。荒野の彼方から、遠雷が轟くような、そんな音。

「クリス、これって……！」

対竜部隊員なら、『馴染み深い』その音。

「ヤバイよ、これ！」

やがて、月に照らされた地平の向こうから、巨大な影が現れた。

絶望的状况

「オゴアアアアア——ッ！！！！」

咆哮が、雷鳴のように夜の静寂を切り裂いた。

荒野の彼方から現れた影——言うまでもなく、それは竜であった。

「ど、どうして安全地帯に竜が！？」

フランシスが安全地帯で竜に襲われたときは、その竜は怒りに我を忘れた状態だった。極度の興奮状態でなければ、竜が縄張りを越えて行動することはないはず——

「って、あっ！」

二人同時に、一つの可能性に気付く。

「もしかして——『これ』のお母さん？ いやお父さん？」

パトリシアの座学で、竜には雌雄の性別がない、ということをお教わっていたフランシス。若干混乱気味だ。

「いや、そんなのどっちでもいいから！ 早くみんなの所に戻らなくちゃ！」

「わ、わかった！ この男と——卵はどうする？」

「こいつはとりあえず放っておいて、卵は少佐に見せたほうがいいよね」

「よし、じゃあ急ごう！」

卵を抱え、フランシスとクリステイが走り出す。

2人が戻ったとき、4人は既に異変に気づき、根城の外に飛び出していた。

「一体何があったのですか！」

さしものダイアナも、興奮気味だ。

「それが、一味のものらしい馬車からこんなものが――」

「これは、卵？ まさか――コルドア発見から一度も存在が確認されていない竜の卵が！？」

パトリシアら研究者も、「どうやら卵生らしい」、ということにはわかっていた。しかし、未だその現物は一度も発見されていなかったのだ。

「なるほど、アレはこの卵の生みの親、というわけですか」

わが子を奪われた親の怒り。たとえ異なる生物種だとしても、その怒りは十分推し量ることができる。その竜が、縄張りを越えて現れた理由も。

「……少し、静かにしてくれ」

スオウが、地面に耳を当て、注意深く足音を探る。

「……炎竜だ。相当、でかい。80、いや90フィート……！？」

「90だって！？ そんなデカブツは聞いたことがねえぞ！？」

「……時速40マイル以上だ。こちらに向かっている」

史上類を見ない巨大な竜が、全速力で向かってきている。メンバーを戦慄させるには、十分な情報だった。

「ど、どうしよう！ コレ返したら大人しく帰ってくれるかな？」

「キーツ少尉、落ち着きなさい！」

努めて冷静を装おうとするが、ダイアナも焦りは隠せない。眉間には深い皺がより、こめかみから冷や汗が流れている。

「とにかく、クリスの言うとおりに卵を返してやるのが一番じゃないですか？」

サイラスの提案に、ダイアナは考える。それで竜が引き下がるのなら、それでいい。学術的には大きな損失だが、致し方ないだろう。しかし、それでも竜が止まらなかったら。――人里まで数十マイル。ここで竜を止めることができれば、数時間のうちに大惨事が起こりうる。

「そうですね。とりあえず、やってみるしかないでしょう。モーガン中尉、これを竜の予想進路上に」

「……了解」

スオウが、卵を抱えて走り出した。

やがて、巨大な竜が、根城からまはつきりと目視できる距離に入った。大地を震わせ、荒れ狂って荒野を疾駆するさまは、さながら暴風雨か竜巻か。

スオウが、卵を竜の前方の地面に置き、素早く離脱。一同は、固唾を吞んで竜の動向を見守る。

200ヤード、100ヤード――遂に、竜は卵に到達。しかし竜

は、卵を素通りしてしまった。

「……いかん。卵すら目に入っていない。というより、もはや全く回りが見えていないのだろう」

竜に先んじ、一足早く戻ったスオウが報告する。

卵を返してもダメだとすると、もはやなにをもっても帰しても竜を止めることはできないだろう。

「来るぞ！ 隠れろ！」

6人は、めいめい手近な岩陰に隠れる。身を潜める一同をよそに、猛り狂った竜は間者の根城を通過していった。

ダイアナが、素早く地図を広げる。

「このまま直進したとすると――アリソン、ネスの村あたりが危ない」

ネス。その地名が、フランシスの頭に引っかかる。どこかで、その名を聞いたような――そうだ、ナタリーだ！

嫁ぎ先は、ネスの村の農場主。幼馴染のナタリーは、確かにそう言った。どうしよう、このままではナタリーの身に危険が及んでしまう。

一方、ダイアナの胸中也激しく揺れていた。

（基地に戻って部隊編成、出撃するまではどう短く見積もっても6時間。近隣の集落で避難誘導するにも、竜が到達するまでの猶予は数十分あるかどうか。くっ、なんにせよ時間が足りない！ 機密漏洩を恐れ、後方要員も連れずに作戦を行ったのが裏目に出たか……。

そして、一番の問題は閣下の不在……!」

「少佐、ネスには大事な知り合いがいるんです! なんとかならな
いんですか!?!」

「黙って! 今考えているところです!」

珍しく、苛立ちを露にしたダイアナの声に、フランシスは驚いて
押し黙る。

「……ノリス、ガーランドは近隣集落の住民に危険を知らせて。モ
ーガンは竜に張り付き、動向を追ってください。キーツ、ファウラ
ーは私とともに基地に戻り、部隊を率いて再出撃。これしかないで
しょう」

「だが少佐、それだとネスの村あたりがヤバイ。いくら急いでも、
竜の到達までほとんど間がない」

サイラスが、地図を見ながら指摘する。

「……止むを得ないでしょう。被害を最小限にとどめること、今で
きるのはそれだけです」

ダイアナとしても、苦渋の決断である。血が出るほどに、唇を噛
み締めた。

「そんな……!」

フランシスの目の前が、真っ暗になる。まさに絶望的な状況。た
とえ命が助かったとしても、村や農地は大打撃を受ける。送別会で
見た、ナタリーの幸せそうな笑顔が、胸に突き刺さる。自分にはど
うすることもできないのか。

——いや、諦めちゃダメだ。思い出すのは、レナードとの対話。無力感に打ちひしがれているだけでは、なにを成すこともできない。そう教わったじゃないか。

フランススは、必死に考える。今まで見てきた竜との戦い。基地でパトリシアから受けた座学。あの竜を止める手立てはないのか。フランススの頭脳が、未だ経験したことのない速度で回転する。

実際考えていた時間は、数秒だっただろう。遂に一つの案が、フランススの頭に浮かんた。人に話せば、荒唐無稽と笑われるかもしれない。しかし、ようやく見つけた細い細い一筋の光明。

「ファウラー、何をしているのです。急ぎなさい」

と、走り出そうとするダイアナの行く手を、フランススが遮った。

「少佐、提案があります」

「提案？ 何か知りませんが時間がありません。行きますよ」

「お願いです、話を聞いてください！」

フランススには珍しい必死の懇願に、ダイアナも多少落ち着きを取り戻した。

「わかりました。手短に」

そして、フランススは一同驚愕の策を口にする。しばし、沈黙がその場を支配した。

「いや、確かに理屈では可能かもしれんが……」

「ああ。トラップも大砲の支援もねえ状況で、しかも相手はあのデカブツだぜ」

「……成功の可能性は、極めて低い」

仲間たちが、口々に否定的な意見を漏らす。

「大事な人を想う気持ちはわかります。しかし、被害を最小限にするために、犠牲にしなければならないこともある。軍とは、そういうものです」

「……確かにナタリー姉ちゃんのこともあるし、少佐の言ってることも理解はできます。でも、被害が出るのを黙って見過ごすなんて、僕にはできません！ なんなら、僕一人で！」

必死に食い下がるフランシス。たとえ駄目でも、命を懸ければわずかなりと時間を稼げるだろう。そんな悲壮な決意がフランシスにはあった。

「フラン、あんた本気なんだね」

「うん」

クリスティの問いかけに、迷いのない真っ直ぐな瞳で頷く。

「……少佐、あたしもフランの作戦に賛成です」

「クリス！？」

「失敗したら終わりだけど……成功させればいいんでしょう？ フランは、やると決めたらかならずやる。この前の戦いで、それを証明してくれた。あたしは信じるよ」

「……ありがとう、クリス」

「フラン一人じゃ難しくて、二人なら可能性は倍です。少佐、お願い、許可を」

二人は、必死に頼み込む。

「しょうがない、俺も付き合うか。まあ、危なくなったらさっさと逃げさせてもらうがな」

やれやれ、と肩をすくめてサイラス。

「そうだな。ここまで言われてイモ引いちゃあ、俺も娘に会わず顔がねえや」

腕組みしながら、エドガーはニヤリと笑う。

「……新入り、いや、フランスの勇氣に敬意を表する。俺も、賛同しよう」

スオウは、相変わらずの無表情だ。

「みんな……!」

そんなやりとりを見つめるダイアナ。先程は否定したもの、頭の中ではフランスの策を真剣に検討していた。6人の竜人兵の戦力。そして、『吼狼』に装填された弾丸。確かに困難だが、不可能ではない。そして、成功すれば被害はゼロに抑えることができる。――この場にレナードはいない。決断できるのは、自身のみ。

「……わかりました、やってみましょう」

しばしの黙考ののち、ダイアナが答えた。

「少佐！」

「ただし、私が失敗と判断した時点で、必ず撤退すること。これだけは絶対に守ってください。全滅してしまつては、近隣住民を逃がすこともできませんので」

「はい！」

「そうと決まれば、時間を浪費している暇はありません。急ぎましょう」

「了解！」

6人は、遠ざかりつつある竜へ向かつて走り出した。

決戦

「左右に散開！　まずは足を狙え！」

騎馬のダイアナから指示が飛ぶ。

時速40マイルという速度で疾駆する炎竜。追いつきながらでは、相対速度の関係上攻撃の威力が削がれてしまう。人里への到達を遅らせるということも考えれば、足に少しでもダメージを与えてスピードを弱めることが肝要だ。

フランスたちは左右に散らばり、竜目掛けて突撃を開始した。

「おおおおっ！」

気合とともに、フランススが竜の後足に斬り付ける。しかし、分厚い鱗にはまるで歯が立たない。

「くっ！」

「フランスス、指だ！　地面から離れた瞬間を狙って足の裏から攻撃しろ！」

サイラスが、長剣を一閃。可動部ゆえに鱗が手薄な指の裏を、巧みに狙った一撃だ。鱗の最薄部を浅く切り裂き、一筋の鮮血が流れる。

仲間たちも、それに倣って指を攻める。足の裏に幾筋かの傷をつけられた竜は、次第に走行速度を落としていく。一つ一つは小さな傷だが、それは人間で言えば靴の中に小石がいくつも入った状態。全力疾走は難しくなる。

「よし！　そのまま攻め手を緩めるな！」

「言われるまでもねえ！ うおおおりゃああつ！」

エドガーが、巨大な戦斧を薙ぐ。刃先が、足首の間接部に深々と突き刺さった。

それまでは、フランスらをまるで意に介していなかった竜。

——うっとおしいぞ、虫けらどもめ。

竜にとってはその程度の認識だったのかもしれない。しかし、遂に竜は足を止めた。

——卵を奪った『あいつ』の前に、この虫けらどもを叩き潰してやる。

竜は、フランスたちとの対決姿勢に入った。

ここまでは、作戦通り。

馬上で指示を出しながらも、ダイアナの頭は高速回転を続ける。作戦を承認した以上、全責任は自分がとらねばならない。作戦が失敗したなら、わが身を犠牲にしても余力があるうちに他の5人を逃がし、次善策を取らせること。それには、メンバーの体力がどれだけ残っているかを見極めることが必要だ。

（それにしても、『あの方』と同じことを考え付くとは）

ダイアナがフランスの策を受け入れることになった、大きな理由の一つ。それは——過去に同様の成功例があったということだ。そして、そのときの作戦を考案行に移した人物こそが、対竜部隊隊長、レナード・パーシヴァルその人であった。第二次東方遠征の最

中、撤退しか考えられない絶望的な状況下。レナードはほとんどたった一人で『それ』を成し遂げた。

今、ここには竜人兵が6人もいるのだ。ここで諦めてしまったら、レナードに会わせる顔がない。一人ひとりの力はレナードに及ばずとも、力を合わせれば不可能はないはずだ。ダイアナを突き動かしたのは、ある種の意地。レナードに対し、崇拜に近い感情を抱くダイアナ。しかし彼女は、「いつかは越えてみせる」という強い意志をも兼ね備える、芯の強い女性だった。

「ここからだね、フラン」

「ああ」

ずしん、ずしん。竜がその場で足踏み。そして、しばしの静寂が訪れる。それは、嵐の前の静けさか。

「グロオオオオオオッ!!!!」

咆哮が、開戦の合図となった。

「でえりゃああっ！」

戦端を切ったのは、クリスティ。素早く走りこむや、逆手に持った小剣で竜の脇腹辺りに切りつける。

「くっ、やっぱり硬い！」

竜の鱗は、歳経るごとに厚くなる。これほど巨大な竜ならば、その強度は推して知るべしだ。

「先走るな！ 一点を狙って集中攻撃！ 先陣はノリス、ガーランド！」

すかさず、ダイアナの指示が飛ぶ。頑強な相手に対しては、速度をたのむクリスティよりも、一撃の威力が高いエドガー、サイラスの攻撃が有効だ。

「エドガー、左から行くぞ！」

「任せとけ！」

二人が狙うのは、比較的鱗が薄いとされる脇腹だ。繰り出された巨大な爪をかい潜り、エドガーの強烈な一撃。続いて、寸分違わぬ場所に、サイラスが鋭い斬撃を放つ。一枚の鱗に、大きな亀裂が走った。

「行くよ、クリス」

「うん！」

フランシスが、右手のヘヴィーハチェットを叩きつける。回転しつつ、その勢いを利用して左手の一撃。止めとばかり、クリスティによる神速の斬撃。鱗は、真中から千切れ飛んだ。下から、薄紅色の肉が露出する。

「……喰らうがいい」

スオウが弓を引く。分厚い板バネを幾重にも重ねて作った、竜人専用の特別製だ。背の筋肉が、みしみしという軋みが聞こえそうなほどに緊張し——開放される。風を切って飛翔する矢。大きく重たい矢尻が、深々と突き刺さった。

傷口から、鮮血が滴り落ちる。しかし、竜にとっては大した痛手

ではなかった。鱗が薄い部分の下には、重要な臓器が少ないのだ。急所と呼ばれる部分は、概して頑強な鱗に守られている。

しかし、これはフランスたちにとって想定範囲内だった。

「まだだ。まだ足りない」

フランススが呟く。

フランススが考えた作戦の目的――それは炎竜にあえてブレスを吐かせることだった。

炎竜のファイアーブレスは、確かに必殺の威力を持つ恐るべき攻撃だ。しかし、一度吐いてしまうとしばらくは再び吐くことができず、体力も著しく消耗する。そうすれば、のちの対処もし易くなるだろう。

しかし、フランススの作戦には、まだ先があった。それは、「ブレスを吐く瞬間を狙い、この場で竜を仕留める」というもの。レナードが実行して以来、誰一人として挑戦することを考えもしなかった仰天の作戦だ。

炎竜がブレスを吐く直前。それは戦いを挑む者にとってもっとも危険な瞬間だ。しかし、ブレスの発射体勢に入った竜は、きわめて隙が大きい。もっとも、隙が大きいだけで竜が倒せるわけではない。

ブレスの発射には、『輔腹』による空気の吸引が不可欠であり、大量の空気を取り込んだ竜の腹は大きく膨れ上がる。フランスが目をつけたのはそこだ。腹が膨れるのに対し、鱗の大きさは一定。表面積が広がった腹のすべてを覆うことができなくなるため、腹が膨れた瞬間鱗には隙間ができるのだ。

竜の腹部には重要な臓器がいくつも存在する。普段は分厚い鱗に覆われて手が出せない弱点も、この瞬間だけは守りが薄くなる。そして、狙うは一つ。数々の臓器の中でも外側に位置し、しかも可燃性物質がたっぷり詰まった『炎囊』だ。火矢などを用いて、これに引火させる。さしもの炎竜も、体内で大爆発が起こればひとたまりもないだろう。

これが、今までの戦闘経験とパトリシアの教えからフランシスが導き出した答えだった。

しかし、これを実行するにはいくつもの困難が待ち受ける。

まずは、ブレスを吐かせること自体が難しい。炎竜にとってブレスは『とっておき』であり、ある程度追い詰められなければみだりに吐くことはない。少なくとも、「こいつらはなかなか手強いぞ」と思わせる程度には痛手を与えなければならぬ。

また、鱗に隙間ができたとしても、『炎囊』は脂肪の膜と筋肉に守られている。腹が膨れた瞬間を狙い、これを切り裂かなければならない。

そして、攻撃を加えた者が離脱してから竜がブレスを吐くまでのわずかなタイミングで、『炎囊』に火をつける。少しでもタイミングがずれれば、攻撃者はブレスの餌食となるか、爆発に巻き込まれるハメになる。

幸運だったのは、ダイアナの『吼狼』に装填された弾丸の種類が、いつもの撤甲弾でなかったことだ。バリケードの破碎用にと、この日詰めてきたのは炸裂弾。竜は外部からの熱や衝撃に強い。最新の技術で開発されたものの、貫通力に劣るこの弾丸は失敗作扱いされていた。しかし、この作戦に限っては、遠距離から確実に『炎囊』に着火できるのは大きな利点となる。弾丸の開発者も、まさかこんなところで役に立つとは思わなかっただろう。

フランススたちは、休まず打撃を与え続ける。どれも竜の身体を小さく傷つける程度で、巨大な竜にとっては、蚊に刺された程度にしか感じられないのかもしれない。しかし――をちょこまかと攻撃をかわし、ちくちく刺してくる蚊トンボたちに、竜は次第にいらつき始めたようだ。

最初は、軽く振り払う程度だった竜の攻撃――無論、フランススたちにとってはそれほど生易しいものではないのだが――が、だんだんと苛烈になっていく。爪の一撃は大地を割り、尻尾の一撃は岩だろうと立ち木だろうとお構いなしに打ち砕く。

調子よく攻め続けていたフランススたちも、攻撃の手を緩めて回避に専念せざるを得ない。一旦距離を取り、尻尾の攻撃範囲外に逃れる。

「奴さん、相当イラついてるみたいだぜ」

「まったく、少し怒らせるにも一苦労だ。門限破っただけでおかむりな少佐とは大違いだぜ」

「……矢が、尽きた」

「……もう一息だね」

「うん」

フランススは、ごくりとつばを飲み込む。

戦いは、佳境を迎えようとしていた。

決着のとき

ダイアナが、竜から150ヤードほどの地点でうつ伏せになり、射撃の準備に入った。作戦が成功した場合、爆発から逃げ切れるだろうと思われるギリギリの距離だ。

竜は、両眼を爛々とぎらつかせ、フランシスたちを待つ。どこからでもかかって来い、とでも言わんばかりだ。竜という生物がこの世に誕生してから、冒険家アマディアスがコルドアを発見するまでの幾星霜。コルドアの大地に君臨してきた王者の風格が、そこにあった。

「突撃！」

ダイアナの号令の下、5人が突撃を開始する。矢を撃ちつくしたスオウも、幅広の曲刀を抜いて竜に立ち向かう。

竜は一つ嘶くと、まずは尻尾の一撃でフランシスたちを迎える。竜人兵とて、まともに喰らえばクリスティのように全身の骨が碎かれる。フランシス、クリスティ、サイラスは上に跳躍し、エドガーは横に跳躍。スオウは地を這うようにそれを避ける。

身動きの取れない空中で、フランシスに竜の巨大な右腕が迫る。

「危ねえっ！」

エドガーに引っ張られ、すんでのところで難を逃れる。その代わり、肩から地面に叩き付けられてしまったが。

「ありがとうございます、エドガーさん！」

肩の痛みなど意に介せず、フランシスはすぐさま起き上がり竜へ

向かう。

怒り狂った巨大な竜と、5人の竜人兵の戦いは、さながら竜巻のよう。竜の放つ凄まじい重量を持った攻撃と、常人離れした速度をもって矢継ぎ早に繰り出される竜人兵たちの攻撃がせめぎ合う轟音が、夜の荒野に響き渡る。

ダイアナは、じりじりしながらそれを見守っていた。皆はこれ以上ないくらいに奮戦しているが、竜も手強い。なかなかブレスを吐こうとしないのだ。このままでは、『燃料切れ』を起こしてしまう。特にダイアナが心配しているのはフランススだ。作戦を提案した責任感が突き動かすのか、他のメンバーと比べても、ひとときわ激しい戦いぶりを見せている。だが――少々入れ込みすぎている。あの調子だと、他の者より早く『燃料切れ』を起こしてしまうかもしれない。

ダイアナの心配は的中していた。いや、フランススの状態は、ダイアナが考えているよりも酷いものだった。自分が頑張らなくてはとの想いから、フランススは限界に近い、いや限界をはるかに超えた力で戦い続けていたのだ。ヘヴィーハチェットを振るうたび、ぷちぷちとどこかの筋が切れる音がする。間接がズキズキと痛む。パトリシアならば、それは常人をはるかに超えた自身の筋力に、身体がついていけなくなったからだと言明するだろう。それでも構わず、フランススは奮闘を続ける。

「いい加減ブレスを吐きやがれてんだ、クソツタレ！」

エドガーが、思わず愚痴る。その場にいる全員が、同じ気持ちだった。

直撃こそまだ誰も食らっていないものの、あるいは爪がかすり、

あるいは竜の尻尾が砕いた岩の破片を受けたりと、みな満身創痍である。そして、体力の限界――『燃料切れ』が、足音を立てて近づいているのを全員が感じている。

しかし、フランススたちの奮戦空しく、決定機はまだ訪れない。

「……これでは、埒が明かん」

「同感だな。フランススが限界だ。……一気に勝負をかけるしかないか」

「でもサイラス、どうするの？」

「気は進まんが……必殺技ってやつを見せてやる。みんな、合図をしたら一旦竜から離れてくれ」

「何だか分からんが、わかったぜ！」

他の4人が再び竜に向かうのを見ながら、サイラスは竜から大きく距離を取って呼吸を整える。剣は肩に担ぎ、上体を捻るように振りかぶる。足は大きく開き、後方の軸足に体重をかける。流麗を極める普段のサイラスの剣からは想像できない、大雑把な構えだった。一つ、深呼吸。

「今だ！」

4人が、一斉に飛びのいた。

「ハッ！！！」

呼吸とともに、一気に剣を振り下ろす。剣閃すら見えないほどの、神速の斬り下ろし。豪、と突風が拭きぬけたかのような音が響く。同時に竜の左手首が『見えない何か』に深く切り裂かれ、真っ赤な血が勢い良く噴出した。それは、サイラスの剣が生み出した、真空

の刃によるものだった。

「見たか、トカゲ野郎！」

言いつつ、サイラスは剣を取り落とした。人体の限界を超えた挙動により、肩から手首にかけての腱が一気に破断してしまったのだ。

「後は頼んだぜ、みんな！」

いくら竜人といえど、かなりの痛手である。戦闘不能になったサイラスは、仲間たちに後を託す。

「よし、あたしも！」

クリステイが、背中のスケイルピアサーを抜き放つ。竜の背後に回りこむと、尻尾を伝って竜の背中、頭部と一気に駆け上がる。狙いは眼球だ。分厚く、弾力性のあるゼリー状の膜で保護されている眼球に、全体重をかけてスケイルピアサーを突き立てた。

「グオオオオツ！！」

刃先は膜を貫通し、眼球深く突き刺さった。苦しむ竜は、激しく首を振る。クリステイは堪えきれず、空中に投げ出された。

「おっと、危ねえ！」

危うく地面に叩き付けられそうになったクリステイを救ったのは、エドガー。

「俺も負けてらんねえな！」

一足飛びで竜の懷に飛び込むエドガー。そこに、竜の右手が横薙ぎに振るわれる。エドガーは避けようともせず、逆にその右手に合わせて全力で斧を振るった。衝撃の反動で、エドガーの巨体が10ヤード以上も転がる。しかし、竜の掌は、エドガーの戦斧によってざっくりと斬り裂かれた。

続いてずっとスオウが進み出る。両手に傷を負った竜は、スオウを頭から丸齧りせんと、大きなあざとを開く。子供の腕ほどもある巨大な牙が勢い良くスオウに迫る――が、スオウは流水のような滑らかな動きでこれを避けた。

「……祖先伝来の技、味わうがいい」

曲刀を放り出し、高く跳躍。一つトンボを切ると、竜の後頭部に掌底を叩き込んだ。ずん、という鈍い音があたりに響く。

「グ、ウウツ……？」

素手によるその一撃。信じがたいことに、その一撃は竜をぐらつかせた。硬い頭蓋を通して内部に直接衝撃を与える、スオウの妙技だ。

「みんな、凄い……！」

フランシスも思わず見入ってしまうほど、凄まじい連携だった。

そのどれも、致命傷を与えるには程遠い。しかし――とうとう竜の怒りは頂点に達したか。

「ウゴアアアアアーッ!!!!」

万里に響き渡ろうかという、凄まじい咆哮が夜の荒野を引き裂く。ぶるっと一つ首を振ると、竜はその動きを止めた。

「来たか!」

『吼狼』を構えるダイアナの視線の先には、『鞆腹』を脈動させ、外気を体内に取り込んでいる。

ブレスの発射準備に入っただのだ。

「みんな、下がって!」

フランシスが、走り出す。

皆満身創痍で、特にサイラス・エドガーは激しく負傷してしまった。スオウ、クリスティも、『燃料切れ』が間近であることはフランシスにもわかっていて。

もとより、自分が言い出したことだ。一番危険なこの役目だけは、自分がやらなくてはいけない。フランシスは、最初からそう決めていた。

「フラン、絶対死んじゃ駄目だよ! 約束だからね!」

背中越しにクリスティの声。振り返って軽く頷き、さらに加速。みしり。ぷちん。身体のアちこちから、色々なものが壊れる音がするが、微塵も気にすることはなく、一気に竜の下へ到達する。

目の前には、不気味に膨らむ竜の腹部。パトリシアの座学で習った。『炎囊』は、『鞆腹』の下部、右から三番目大きな鱗。そのすぐ下にある。

みるみる膨らむ竜の腹。鱗と鱗の間隔が広がっていき――遂に、『炎囊』のあるべき部分が露出した。

「そこだ、やっちまえ！」

エドガーに言われるまでもなく。右手に持ったヘヴィーハチェットを、竜の皮膚へと突き立てる。全身全霊を賭けた一撃が、竜の身体を深く深く引き裂いた。ピンク色に蠢く『炎囊』が、遂に姿を現した。

――あとは少佐がなんとかしてくれる。

フランシスは、糸が切れたようにその場へ崩れ落ちた。それまで、興奮によって忘れていた痛みが蘇る。全身の関節、筋、腱――あらゆる場所から、悲鳴が上がっている。身体は、もはやいうことを聞かない。辛うじて動く首で、竜を見上げた。その腹ははち切れんばかりに膨れ上がり、ブレスの発射まで猶予がないことを示していた。

――でも、これでいい。こんな僕でも、みんなを守ることができたのだから。

最後に、仲間たちのほうを見る。皆フランシスに向かって口々に何かを叫んでいるが、良く聞き取れない。目の前が暗くなっていく。もう、このまま眠ってしまおうか――そうフランシスが思ったとき、ひととき大きなクリスティの声。

「フラン、立って！！！」

クリスティが、フランシス向かって駆けて来る。フランシスを助けるつもりだろう。駄目だ、戻れと叫ぼうとするが、それすらも今

のフランスには不可能だった。

——クリスを死なせるわけには行かない。

指先に力を込める。地面に手を付き、上体を起こす。震える身体を気合で支え、血反吐を吐いて立ち上がった。全身に走る痛みを堪え、走り出す。

その様子を、『吼狼』越しに見つめるダイアナ。竜の口からは、今にもブレスが吐き出されようとしている。よろよろと遠ざかるフランスの姿に、歯噛みする。早く、早く。フランスを犠牲にして『吼狼』を発砲する覚悟は、まだ決められなかった。

あまりの激痛に、一歩足を進めるごとに気絶しそうになるフランス。そして、遂にクリステイがフランスのもとに辿り着いた。フランスに肩を貸し、引きずるように走り出す。しかしそのスピードはいかにも遅く、とても間に合いそうにない。

——諦めちゃ駄目だ。クリスを、絶対生きて帰す。

強い想いが天に通じたのか。フランスの身体に、劇的な変化が起きる。全身を襲っていた激痛が、すっと引いた。いや、正確には痛みが快感に変わった、である。快感はあつという間にフランスの全身を支配した。ふわふわとした高揚感に包まれる。一瞬、頭の中が真っ白になった。

フランスは夢を見た。男が、竜と戦っている。見慣れない風景、見慣れない服装、見慣れない武器。しかし、遠い昔、どこかで見たことがあるような――

それは、刹那にも満たない、わずかな時間だった。覚醒したフランススは、頭の奥底からあふれ出た何かが、体の隅々にまで染み渡るような不思議な感覚に襲われた。みるみる、力が漲る。

逆にクリスティを抱えるようにして、フランススは走り出した。竜人の限界をも超えた、凄まじい速度だ。

これならば、間に合う。限界まで、フランススが離脱するのを待とうと決めていたダイアナは、これで心置きなく引き金を引ける。細心の注意を払って最後の照準調整を終えた。目標までは、わずか150ヤード。極度に集中した今のダイアナに、外す要素は一つもなかった。あとは、優しく引き金を引くだけだ。――それにしても、部下たちを随分酷い目に合わせてくれた。ダイアナの胸中に、怒りが湧き上がる。

「くたばれ、クソ野郎」

人生で一度も発したことのないような汚い言葉を一つ呟き、引き金引く。

銃口から放たれた直径五インチの弾丸は、寸分違わず竜の『炎囊』に命中。弾丸内部の炸薬が、爆炎が上がる。

竜の体が硬直し――ほんのわずかに遅れて、大爆発が起きた。身体の内部分から巻き起こったその爆発は、強固な竜の身体を跡形もなく吹き飛ばした。

爆炎が、フランススとクリスティに迫る。最後の力を振り絞り、フランススは走る。炎に追いつかれようとしたその時、荒野に谷間があるのを見つける。すんでのところで、谷間に飛び込んだ。頭上を、爆炎が通り過ぎ――数秒して消えていった。

「フラン、大丈夫！？　生きてる？」

フランシスは、寝息を立てて深い眠りについていた。クリステイが揺すっても、全く目を覚ましそうにない。

「もう、しょうがないなあ。……ちよつと格好よかったよ、フラン」

そう言っていると、クリステイはフランシスの頬に軽くキスをした。

エピソード

「皆、無事で何よりだった。よくやったぞ」

レナードから、労いの言葉がかけられる。

ここは、対竜部隊本部、医務棟。竜との戦いで、全身の筋肉や腱やらがズタズタになったフランススは、春以来の入院生活を強いられることになった。

数時間前ようやく意識を取り戻し、そこへシラーズから急遽帰還したレナードと、クリスティら竜人兵の面々が、揃って見舞いに訪れたのだ。

「しかし少佐、君にしては大胆な決断をしたものだ」

「……お恥ずかしい限りです」

「いや、見事な判断だった。あそこで竜を撃破できていなかったら、一般人への被害は免れなかった」

「ですが、隊員を危険に晒してしまいました。申し訳ありません」

「いや、あの作戦は僕が提案したんですから、少佐が謝ることでは——って、いてっ！」

慌てて身を起こそうとするフランススだが、激痛が全身を走る。

身動きがとれず、微妙な体勢で固まってしまった。

「ほら、寝てなきゃ駄目でしょ！ 絶対安静って言われてるんだから」

「……ごめん」

クリスティの手で、再び寝かし付けられるフランスス。

「フランス、君も無茶をしたものだ」

「面目ありません」

「いや、別に怒っているわけではない。私も若いころは随分無鉄砲な真似をしでかしたからな」

レナードの伝説的な武勇伝は、騎士団にいくつも残されている。それを知るフランス以外の面々は、苦笑を隠せない。

「そういえば、あの連中はどうなったんです？」

「それがな。残念ながら、皆が戦っている隙に逃げられてしまったようだ。足取りは第七騎士団が全力で搜索している」

「そうですか。……何者だったんでしょう」

「連中もさすがに慌てたと見えて、アジトには多数の遺留品が残されていた。正体が割れるのはこれからだろう」

「申し訳ありません、容疑者を取り逃がしたのも私の責任です」

ダイアナが、再び謝罪する。

「だから、あの状況なら仕方ないと言っているだろう。それに、もし竜による被害を見過ごして間者の確保を優先する、などという判断をしたのなら、ここにいる全員を張り倒しているところだ」

「あの卵は？」

「……あれは、俺が回収しておいた。今頃、研究班に回されているところだろう」

長年竜の研究をしてきた騎士団の研究班を差し置いて、他国の者が卵を発見したという事実は、パトリシアを大いに悔しがらせたのだが、これはまた別の話。

「それにしても、フランスは良くやったな。隊長、これは叙勲も

のですぜ」

エドガーの言葉に、レナードは表情を曇らせた。

「確かに大いに叙勲に値するし、私もそうしたいのは山々なのだが――今回の一件は、秘匿されることになった。皆も、口外はしないでもらいたい」

「どうしてですか!？ フランはあんなに頑張ったのに」

納得がいかない、という表情を露にし、クリステイが憤慨した。

「間者の正体はまだ割れていませんが、場合によっては国際問題になる可能性があります。相手に手の内を晒さないという意味でも、今回のことは伏せておく必要があるのです」

ダイアナが、レナードに代わって説明した。

「勲章をやることはできないが――」

レナードは、一同を見回す。

「フランスが負傷から回復したら、全員に休暇を与える。一日がかりの、盛大な宴会を開こうじゃないか。もちろん、私のおごりだ」
「……悪くない話だ。騎士団に特別手当を請求しようと思っていたが、今回はそれで手を打ちましょう」

と、サイラス。

「そいつは太っ腹だ。せっかくだから、女房と娘も呼んでいいですかね、隊長」

エドガーが笑う。

「……久しぶりの、酒だ」

スオウも、口元に笑みを浮かべる。

「私は、遠慮しましょう。口うるさい上官がいては、楽しめないでしょうから」

ダイアナはそう言ったが、

「馬鹿を言うな、少佐。久しぶりに、君の飲みっぷりを見せてくれ。上官命令だぞ」

と、レナード。

「少佐も酒をやるんですか？ そいつは意外だな」

「サイラス、少佐の酒の席での武勇伝は、私の若いころの話なんかよりよほど刺激的だぞ。そういえば、建国記念日のパーティでこんなことが――」

「お止めください、閣下！」

病室に、皆の笑顔の花が咲く。

「楽しみだね、フラン！ でもそのためには早く良くならなきゃだね」

「……うん、そうだね」

病室の窓から夏空を見上げ、フランシスはしみじみと呟く。みんな

なを守れて、本当に良かった。改めて、そう思うフランスだった。

エピローグ（後書き）

このエピソードは、一応の完結となります。
シリーズものとして次のエピソードを構想中ですので、
続きもご愛読いただけましたら幸いです。

新聞なるもの（前書き）

世界観補完的な文章になります。

新聞なるもの

フランスが食堂で夕食を済ませ、士官用兵舎に戻ろうとすると、二人の男が連れ立って入ってきた。

一人はサイラスで、もう一人は辺境騎士団参謀長、ライオネル・ダグラスだった。レナードの同期で同じく騎士団の幹部である彼は、この対竜部隊基地にも度々顔を見せる。

「ダグラス少将、お疲れ様です」

珍しい組み合わせだな、と思いつつ、背筋を正す。

「おお、ファウラー少尉か。頑張ってるようだね」

「いえ、まだまだ力不足です」

「ははは、精進したまえ」

「はい、努力します」

恐縮しながらも、敬礼する。

「ところでサイラスさん、それは？」

サイラスが、なにやら活字がびっしりと印刷された紙の束を抱えている。

「ああ、これは『新聞』っていうんだ」

「私がガーランド少尉に頼んで読ませてもらってるんだよ。君も読んでみるか」

「はい」

騎士団に入って様々な座学を受けて以来、知識欲が増しているフランス。活字ならとりあえず読んでみたくなる習性が身についてしまった。二人とともに、手近なテーブルに着席する。

「ええと……『アーチボルト伯とブルワー家長女が成婚』、『次期財務大臣にバイロン侯拔擢との噂』、『今秋にかけて羊毛が高騰するとの予測』……。サイラスさん、これは？」

「これは俺の王都時代の友人が作っているものでな。内政、外交に社交界のゴシップから競馬の結果まで、国内外の様々な話題を集めて週に一回こうして印刷して売り出してるんだ。本人はそのうち大きな商売になる、と言って借金してまで最新の印刷機を買ったりしていたが、まだあまり儲かっていないみたいだな」

「これがなかなかどうして面白いものでね。少尉に頼んで、定期的に本国から取り寄せてもらっているのだよ。数ヶ月遅れになるのが実に残念なんだが」

「へえ……」

じつくりと読んでみる。なるほど、あらゆる分野の様々な情報が詰め込まれていた。商売人や行政に携わる者には役に立つだろうな、と考える。

「おっ、クレメンスの野郎、結婚したのか。お祝いの手紙の一つでも書いてやらないとな。なにに、『第三王女フェリシア殿下が次期コルドア総督に就任との未確認情報』だと？ これはさすがにデマだろう。……ところで少将、『第四騎士団がカーペンター造船に艦船大量発注との噂』ってのは本当なんですか？ カーペンターの跡取り息子とは、王都にいたころのちよつとした知り合いなんですか」

サイラスが、一つの記事を指差す。第四騎士団とは、ブリーディ

アに三つ存在する海軍のうちの一つである。

「私に聞かれても、さすがに本国の第四騎士団のことまではわからんよ。しかし——現在の国際情勢を鑑みれば、ありえない話ではないな。ほら、こちらの記事を見てみる」

ライオネルが指し示した頁には、『エルダリア自由都市群連合、海軍を大幅増強』との記事が。

「今、各国ではブリーディアに倣って軍制改革を進めているが、一歩先んじた我々にはまだ遠く及ばない。ブリーディアに追いつかんとする各国が、わが国に手っ取り早く打撃を与える手段は、コルドアとの航路を断つことだ。なにせ、いまやブリーディアの財政はコルドアの富に大きく依存してしまっているからな」

「それに対抗するために、ブリーディアも海軍を強化するというわけですか」

「その通りだ、ファウラー少尉。目下、安全な航路の確保が、ブリーディアの最優先事項なのだ」

「なるほど。……うーん、それなら、僕ら竜人が海兵になることはないんですか？ 戦力的に考えて」

「確かに君たちは大きな戦力だが……。それはないだろう」

「だろうな。フランス、お前も『燃料切れ』は経験しただろう」

「はい、最初の体力試験のときに。アレはきつかったなあ」

当時のことを思い出すだけで、フランスは腹が鳴りそうになるくらいであった。

「俺たちは全力で戦うとすぐに燃料切れを起こすし、そのうえ大飯喰らいだ。限られた食料しか積めない船に、戦闘員として乗り組むのは不向きなんだよ」

「それに、だ。衝角で突撃し、白兵戦で船を落としていた昔ならともかく、現代の海戦はほぼ砲戦で大勢が決してしまう。君たちの出る幕はないんだよ。観測員としては大いに役に立つだろうがね」

「竜人ってのは意外に不便なもんなんだよな。同じような理由で、長期化しやすい包囲戦や防衛線にも向かない。結局は、コルドアで竜と戦うのが一番合ってるんだよ」

「竜人の力が存分に使えるのは局地戦ってわけですか」

なるほど、と頷くフランシス。

「ふむ、噂どおり、ファウラー少尉は理解が早いな。どうだ、ニエマイアの騎士団本部で参謀科に入らないか」

勧誘されたが、その場は辞退するフランシスだった。

プロローグ

「いたか!？」

「いや、そっちは!？」

「クソ、どこへ行きやがった!」

その豪華な屋敷にはおよそ似つかわしくない、剣呑な響きの声。男たちが走るたび、腰の武器ががちゃがちゃと音を立てる。武装したその男たちは、屋敷に雇われた私兵だった。

「まったく、ドジ踏んじまったなあ。あんなところでメイドと御者がイチャイチャしてるなんて思わないよな、普通」

悪趣味といえるほど、過剰に華美に造られた庭の中。東屋の柱に身を隠し、小柄な人影が一つため息をつく。フードを深く被っているため、その顔をうかがい知ることはできない。男たちが搜索しているのは、この人物のようだった。

「ウゝ、ワウツ!」

と、私兵たちが連れている犬に反応があった。東屋に向かって唸り声を上げる。

「そこかっ!？」

一斉に、男たちが東屋に駆け寄る。カンテラの光が、人影を照らし出した。

「しょうがねー、強行突破といきますか!」

小さな人影は、一抱えほどの包みを抱えて走り出す。身をかめて走るさまは、まるで猫のようだ。あっという間もなく、私兵たちの間をすり抜けて、外へ向かった。

「野郎、何て速さだ！」

私兵たちは必死で追うが、まるで追いつけない。それどころか、みるみるうちに大きく引き離されてしまう。

小柄な人物は猿のようにするする庭木を登ると、挑発めいた笑みを浮かべて私兵たちを一瞥。跳躍して屋敷の塀を乗り越えた。

「馬を出せ！ 急がなか！」

私兵の隊長らしき男が、焦りを露にしながら部下に命令する。十数名からの私兵が、慌てて馬で駆け出した。

塀で囲まれた大きな屋敷が立ち並ぶ閑静な街並に、たくさんの蹄の音が木霊する。

「へっ、掴まるもんかってんだ」

十数の騎馬に追われながらも、その人物は余裕綽々だ。それもそのはず、その人物はなんと馬をも凌ぐ速度で走っているのだから。夜の闇を切り裂くように、疾駆する。

「なんて野郎だ、人間じゃねえ！ あんなの捕まえられるかよ！」

「バカが！ 人間だろうが幽霊だろうが知ったことか！ 奴は旦那のお宝を盗んでいきやがったんだぞ！？ 捕まえられなきゃ俺たち全員クビになっちゃう！」

「――しめた！ このままいけば挟み撃ちにできるぞ！ 何人か右へ回れ！」

偶然にもその小柄な盗人は、挟撃に都合のいい区画へ迷い込んだ。道は立ち並ぶ屋敷の高い塀に囲まれ、他に逃げ道はない。一本脇道はあるものの、隊長の記憶によれば、そこもまた高い塀に囲まれた袋小路のはずだった。

前方からの蹄の音に気付いたか、盗人は隊長の思惑通り、脇道へ入っていく。

「よし、もらった！」

あとはひっ捕らえて、旦那の前に突き出すだけだ。そう考えながら脇道に入った私兵たちが見たものは――誰もいない袋小路だった。周りは4ヤードほどの塀で囲まれており、蟻の這い出る隙間もない。梯子やロープをかけた形跡もなし。なのに、盗人の姿は忽然と消えていた。

「こりゃ、どういうことだ？ まさか本当に幽霊の仕業なのか……？」

隊長が、呆然と呟いた。

翌日、コルドア首都・アマディアスの第七騎士団に、盗難の届出が提出された。被害者は、とある大手穀物商。宝石を中心に、被害総額は40万デイル（※）に上った。

（※）デイルは通貨単位

出張命令

うだるような熱気はなりを潜め、吹きぬける風は心地よい。林檎や葡萄の鮮やかな果実が市場を彩り始め、麦の穂はたわわに実って収穫のときを待つばかり。シラーズ周辺も、秋を迎えようとしていた。

炎竜との人知れぬ激闘から、数週間が経過した。フランシスたちの傷もすっかり癒え、今は再び訓練の日々だ。

この日、対竜部隊本部棟の作戦室には、フランシス、クリステイ、スオウの三人が集まっていた。スオウは、竜の生態調査から急遽呼び戻されての召集だった。

程なくして、パトリシアを伴ったダイアナが入室する。

「さて、早速ですが。3人には博士とともに出張に出てらうことになります」

「出張、ですか」

「行き先はブリーディア領コルドア首都、アマディアスです」

随分唐突な命令だった。何ごとだろう、とフランシスたちが顔を見合わせる。

「……出張の理由を、聞かせてくれ」

他の2人の心中を代弁するように、スオウが質問する。

「はい。……近頃、アマディアスで一人の盗賊が出没しています。豪商や貴族の屋敷に忍び込み、次々と金品を盗み出す。聞いたこと

はありませんか？」

「そういえば、街の酒場でそんな話を聞いたような……でも、あたしたちとどういう関係が？」

クリスティの疑問はもつともだ。対竜部隊は竜との戦いが専門だ。しかもアマディアスを管轄とするのは対竜部隊が属する辺境騎士団ではなく、第七騎士団。アマディアスの盗難事件を解決すべきは、第七騎士団なのだ。

街の酒場というクリスティの言葉に眉をひそめるダイアナだが、ここは話の本題を進める。

「その賊の特徴はこうです。性別・人相は不明、かなり小柄で年齢も若いと見られる。馬より速く走り、数ヤードの壁も跳び越える、と」

「……考えられん話だ」

「普通なら、そうでしょう。しかし、私たちには信じるに足りうる理由がある。違いますか」

「つまり、その泥棒は竜人である可能性がある、ってことですか」

「その通り。万一それが本当なら、一般の兵士の手に見えるものではありません。そこで、我々に出動の要請が下ったのです。3人を選んだのは、敏捷性を考慮してのことです」

対竜部隊でも、トップのスピードを誇るクリスティ。わずかに及ばないものの、クリスティに次ぐスピードのスオウ。フランスは竜人兵としては平均的なスピードだが、サイラスやエドガーに比べれば幾分かは速かった。賊を追跡するようなことになった場合を考えての人選である。

しかし、フランスには疑問が残る。竜人兵を増やそうという試

みは、とうに打ち切られたと聞いている。アマディウスに竜人が出没するのはいかにも不自然だ。

「そのあたりのことは、馬車の中で私から話すわ。さあ、早く準備しましょう」

パトリシアに急かされるように、フランシスたちは自室に戻るのだった。

準備を終えた一行は、ダイアナが手配した箱馬車で一路アマディウスに向かう。アマディウスまでは、3日ほどの道程だ。パトリシアの話を聞く時間は、十分すぎるほどあった。

「私も、正直ありえない、って思ってるのよね」

メガネを押し上げながら、パトリシアが切り出した。

「その泥棒の情報は何かの間違いじゃないか、って思ってるの?」
「そうね。まあ、フランみたいな例もあるし、絶対ってことは言えないのだけれど」

フランシスが竜人となったのは、天文学的確率による偶然と言っている出来事だ。絶対には言い切れない、程度の可能性だった。

「竜の血を摂取したことがある者を挙げるなら、第二次東方遠征の従軍者と、二年前までの騎士団志願者。そして、一般から集められた被験者ね。あるとすれば、この中の誰かということになるわ」

「東方遠征の従軍者は、選択肢から外していいかもね」

「へ? フラン、どうして?」

「犯人はかなり若いとみられる、って少佐が言ってたろ。東方遠征に行った人なら、隊長くらいの年齢にはなっているはずだよ」

「あゝ、なるほどね」

感心するクリスティ。フランシスとしては、大した推理をしたつもりでもなかったのだが。

「騎士団志願者と一般の被験者も、可能性は低いのよねえ」

「うーん……たとえば初めから竜人の力を悪用するつもりで、顕れた能力を騎士団から隠してた人がいた、とか」

「あり得なくはないわね。でも、その推理だと実験の内容と目的は事前に被験者に教えられない、って事実が穴になるわ。能力が発現するまではなにが起こるか知らないわけだから、私たちに隠すって発想がそもそも生まれないはず」

「そういえばあたしも、何も教えられずとにかくこれを飲め、ってドロドロの赤いのを飲まされたんだよね」

当時のことを思い出したクリスティが、顔をしかめる。

「他の人、たとえば既に対竜部隊に在籍していた人とかから予め話を聞いていた、ってことは？」

「それにしても、竜人はなろうと思ってなれるものじゃないから。」

『話を聞いて竜人の力を悪用しようとしたごく少数の不屈き者』が、『たまたま資質を持っていた』、っていうのは確率的にどうなのかしらね。それに、実験が打ち切られたのは2年前で、賊が出始めたのはごく最近。時間差があるのも腑に落ちないわ」

竜の力は、竜の血を摂取後1週間から10日ほどで顕れる。犯罪に手を染め始めるまで、2年間も待つ必然性がないのだ。

うーん、と頭を悩ませるフランシス。

「まあ、ここで考えるより、実際その泥棒を捕まえつほうが早いんじゃない？」

呑気な調子でクリスティ。必死に可能性を考えていたフランシスにとっては、身も蓋もない発言だった。

「……お前は、中々賢いようだな」

そこで、今まで黙ってやり取りを聞いていたスオウが、初めて口を開いた。

「へ？ 僕のことですか？」

「……ああ」

「いやあ、僕なんか全然ですよ」

天才と呼ばれるパトリシアの前で褒められて、フランシスは気恥ずかしさを感じる。

「あら、謙遜することはないわよ？ もしフランがきちんとした教育を受けていれば、ってこの私が残念に思うくらいだから」

「パティ、言いすぎだよ。……まあ、僕は孤児院育ちだからどっちみち学校になんて行けなかったけど」

しかし、フランシスの仕送りによって、孤児院の子供たちが就学可能な状況になっている、というのも皮肉な話ではある。

「そういえば、スオウさん」

「……何だ？」

話題転換がてら、スオウに話しかける。仲間想いの男だ、というのは分かっているが、なにしろスオウとは接する機会が少ない。口数は少ないし、そもそも基地にすることがあまりないからだ。今回の出張の間は、ずっと行動をとにもすることになる。せっかくだから、少しでも交流を深めようと思ったのだ。

「調査隊ってどういうことをするんですか？」

とりあえず思いついた質問をぶつける。

「……色々、だ。竜の種類、大きさ、生活習慣、行動範囲。野山に潜み、竜のあらゆる情報を収集する」

調査隊の集めた情報は、討伐作戦を立案する際に大いに役立てられる。また、研究班にとっても貴重な情報源であり、部隊の土台を支える役目といっていいだろう。

「長いときは何ヶ月もかけるんですよね。 大変そうだなあ」

「……まあ、愉快的仕事ではない」

スオウは多くを語らない。数週間も身を清められないなんてことはさらにあったり、補給が遅れたときは食料は現地調達。竜に気取られてしまうため、火もろくに使えない。時には蛇の生肉や未調理の野草で飢えをしのぎ、泥水や小便すら飲み水にする。こんなことを話しても、不快な思いをさせるだろう。スオウなりの配慮だったのだが、会話が途切れてしまったフランスは困惑気味だ。

「で、でも、何ヶ月も竜に見つからないように調査するって凄いですね」

「……俺一人では無理な任務だ。しかし、調査隊にはアルフ老がい

る」

「アルフ？」

「アルフレッド・ニューマン大尉。たしか御歳69だったかしら？
儀装術の達人で、部隊最年長のベテランよ。東方遠征で竜人兵に
なった3人のうちの一人でもあるわね」

「69歳!？」

フランスが驚くのも無理はない。当時、フロンティア地方の平均寿命は60前後(※)であり、フランスの育った村でも70歳以上の老人は稀であった。そんな歳なのに現役の軍人を続け、しかも過酷な調査隊の任務に従事している。竜人であることを差し引いても、十分驚嘆に値することなのだ。

「お爺ちゃん、しばらく見てないけど元気？」

「……ああ。調査隊の誰よりも元気だ。あの分だと、100まで生きてても不思議ではない。……まあ、俺も彼からはまだまだ学ぶことがある。早死にされては困るがな」

スオウの隠密行動の技術は、間者のアジトを襲撃したときにフランスも目の当たりにしている。そのスオウにここまで言わせるアルフレッドとは、どれだけの技術を持つのだろうか。

「クリス、その人ってどんな人なの？」

「うーん、基本的に陽気で面白いお爺ちゃんだよ。ただ、ちょっとスケベなのが困ったところだねえ」

「ふーん、会ってみたいなあ」

「そのうち会えるわよ。今やってる山岳地帯の調査がもうすぐ終わる予定だから。基地にも顔出すんじゃない？」

「……今回の任務は、長くて2週間。ちょうどそのころには、アルフ老も帰還しているだろう」

2週間とは、ダイアナが決めた今回の出張の最大期間だ。例の盗人による犯行はここ数ヶ月、月に2〜3度のペースだ。2週間アマディアスに滞在すれば、盗人の犯行に遭遇する可能性は高い。もしその間何も起きなかったら、というフランシスの問いに対しては

「われわれの本来の任務は、竜討伐です。それを蔑ろにしてまで第七騎士団に付き合う必要もないでしょう」

とのことであつた。

そうしている間にも、馬車は走る。会話はだんだん途切れがちになり、フランシスは本を読んで時間をつぶすことにした。本の内容で分からない箇所があれば、パトリシアに質問。パトリシアは、教えたがりの性分を存分に発揮し、長々と講釈する。クリスティはそのやりとりをうんざりした顔で見つめ、スオウは押し黙って馬車の窓の外の景色を眺めるばかり。

通り過ぎる町並みは次第に大きくなっていく。――3日ののち、一同はブリーディア領コルドア首都、アマディアスに到着した。

(※) 乳幼児の死者を含めない場合の数字

首都にて（前書き）

※ページ下部、怪盗『笑う猫』についての記述を加筆しました。ただの怪盗、では文が締まらないとの判断からです。た

首都にて

コルドア首都アマディアスは、コルドア大陸発見者の名前を取った、政治経済の中心地だ。コルドア西の海岸線から15マイルほど内陸に入った場所に位置し、人口は20万人。旧大陸の大都市に規模では及ばないが、人口の増加率は世界一の水準で、現在最も勢いのある都市と言える。

街の中心の小高い丘の上にあって、ひととき目を引く大きな建物がコルドア総督府だ。数本の細い尖塔が配された美しい城で、最新の建築様式が取り入れられている。旧大陸の歴史ある城の多くは、戦の際の砦としての役割が大きいために、おおむね頑強で無骨な造りだ。しかし、東方遠征終結を記念して約20年前に建築されたこの城は、繊細で優美な外観を持っている。

総督府の周りには、総督府に入りきらなかった官公庁、聖堂、上流階級の人間の邸宅が並び、さらにその周りを市場や一般市民の宅地が取り囲む。丘の上にある総督府から、標高が下がるにつれて建物の高さも低くなっていくため、総督府の高さが余計に際立って見える。

時刻は夕方に差し掛かったところ。照りつける夕日が総督府の白亜の壁を赤く染め、まるで絵画のような情景をかもし出す。

「見てよ、クリス！　うわー、凄いなあ！　大きなあ！」

フランシスが、馬車の窓から見える光景に思わず感嘆の声を漏らす。おのぼりさん丸出しであった。

「ちょっと、街に入ってからはいんまりはしゃがないでよ、恥ずかしいから。――でも、あの総督府は確かに凄いよね。王都でも、あそこまで綺麗な建物は見たことがなかったし」

クリスティも、その美しい情景をうっとり眺める。

と、御者を務める下士官が声をかけてきた。

「モーガン中尉、すみません。道が混んでいて、第七の本部まではもうしばらくかかりそうですねですよ」

見れば、街道はたくさんの人、馬、荷車で溢れている。収穫期ということもあり、様々な物産が流入しているのが混雑の原因の一つだろう。仕事終わりの人々が一斉に街にあふれ出す中、比較的図体の大きいフランスたちの箱馬車は、いかにも身動きが取り辛そうだ。

「……この調子だと、歩いたほうが早そうだ。お前たちも、それでいいか」

「もちろん。そのほうが街並みを見られるしね」

「クリス、遊び気分は駄目だよ。仕事なんだから」

「分かってるってば。さっきまで子供みたいにはしゃいでたフランには言われたくないよ」

「頭脳労働者の私としては、余計な体力は使いたくないのだけれど。しょうがないわね」

3人のやりとりに、スオウはわずかに苦笑する。

「……そういうことだ。ご苦労だった、馬車を預けたら一杯やるがいい」

「はっ！　ありがたく頂戴いたします！」

スオウが、その若い下士官に心づけを渡すと、彼は威勢よく敬礼をして去っていった。

「……さて、行くか」

夕刻の雑踏の中を、4人は歩き出した。

「へえ、シラーズの街と違って随分魚屋さんが多いんだ」

市の中を通り抜けながら、フランシスが呟く。

「ここは海が近いからね。フランは魚介料理なんてほとんど食べたことないでしょ？」

「うん。考えてみたら、秋に取れる川魚くらいかなあ」

生まれてこの方、コルドア内陸で暮らしてきたフランシス。秋に川を遡上する鮭、鱒の類のほかは、小型の川魚程度しかお目にかかる機会はなかった。

「すっごく美味しいんだよ。あゝ、晩御飯が楽しみ！」

「……今の季節なら、鱈にメダイ、太刀魚。カワハギなども美味しい」
「スオウさん、詳しいんですね」

「……俺の父の祖国の人々は、特に魚を好んで食べる民族だったそうだ。父も、そうだったのだな」

「どうでもいいけど、やることはやってしましましょう。晩御飯の話はそれから」

食事には頓着しないタイプのパトリシアだけは、あまり興味がなさそうだった。

「……それもそうだな」

第七騎士団本部の閉門時間を過ぎてしまうと、辺境騎士団の士官といえど入るのに手続きが必要になってしまう。一同は、足を速めて騎士団本部へと向かうのだった。

第七騎士団の本部は、総督府の周囲にある官公庁の一角にあった。閉門時間直前に滑り込むことができた4人は、入り口に控える下士官に所属と用件を伝える。しばらくして、一同は警備隊長の執務室に通された。

警備隊は、都市の治安維持を専門としており、今回の連続盗難事件の捜査を担当する部署である。

隊長は50手前のでっぷりした大尉であり、名をフレイザーといった。

「……モーガン中尉以下3名。特命により参上した」

ぴしりと敬礼する3人。とバトリシアしかし、フレイザー大尉は不機嫌そうな顔を隠そうともしない。足を組んで椅子にふんぞり返ったまま、ジロジロと3人をねめつける。

「ふん。上も余計なことをしておって。我々の管轄の問題に、外部の人間を呼ぶとはな」

明らかに、歓迎されていない雰囲気だ。

「まあ、命令だから仕方ない。ほれ、これが捜査資料だ」

紐でくくった紙の束を、ぞんざいに投げてよこす。あまりの態度

に、クリスティのこめかみには青筋が浮かんでいる。怒りの声を上げそうになるのを、必死に堪えているのだ。

「捜査をするなら、貴様らの勝手にしろ。ただし、我々の邪魔だけはするな。いいな」

「……我々の宿泊場所は」

「知らん。街で宿でも取ればいいだろう。……話は以上だ」

まるで、取り付く島もない。4人は、すごすごと部屋を退出した。

「なに、あの態度！ 3日もかけて来てあげたのに！」

本部を出るや、クリスティが憤りの声を上げた。

「仕方ないんじゃない？ 彼らにも面子があるのよ。わざわざ外部の者を招聘する、ってことは自分たちが無能だって言われているようなものでしょう」

「まあ、それは分かるけど……」

歳下のパトリシアに諭されるクリスティであった。

「それにクリス、あの部長さんは竜人のこと知らされていないんじゃないかな」

「……あの口ぶりだと、そうだろうな」

竜人のことを知らなければ、わざわざ外部からフランスたちが呼ばれた理由も当然分らない。フレイザー大尉が、わけも分らない上からの指示に憤るのも無理はない。

「でも……やっぱり、腹が立つものは腹が立つの！」

未だ憤懣やるかたなし、というクリスティ。

「クリス、いつまでも怒っていないで。美味しいご飯でも食べて忘れようよ」

「……ん、わかった」

ご飯という言葉を聴いて、クリスティの機嫌はいくらか上向きになったようだ。

「……独自に捜査できるのは好都合だ。第七に気を使わんで済む」
「まあ、それはそうかもね。……よし、とりあえず宿を探そっか」
「それがいいわよ。なにしろこの人出だから、うかうかしてたら泊まるどころがなくなっちゃう」

「……急ごう」

数件の宿で満室と告げられ、一行はようやく空室のある宿を見つけた。金持ちの邸宅が並ぶ区域から程近い場所にあり、賊が出没した場合都合がいい。宿の主に最長2週間の滞在になることを伝え、数日分の宿泊代を先払いする。取ったのは二部屋で、それぞれフランシススオウの男性陣と、クリスティ・パトリシアの女性陣に分かれることになる。

部屋に荷物を置き、平服に着替える。

「……とりあえず、酒場に行く」

「やったー！ やつとご飯が食べられるよ」

「……情報収集も兼ねている。飲みすぎるなよ」

浮かれるクリスティに、スオウが釘を刺した。

「私は遠慮するわ。ああいう煩い場所は苦手だから」

パトリシアは、ひとり部屋に残るつもりのようなのだ。

「晩御飯はどうするの？」

「亭主に頼んで何か簡単なものを作ってもらおうから。私のことは気にしないで行ってきて」

「まあ、パティがそう言うなら……じゃあ、行ってくるよ。何かお土産買ってくるから」

「ありがとう。行ってらっしゃい」

こうして3人は、夜の街に繰り出した。

夜のアマディアスの喧騒は、シラーズのそれをはるかに凌ぐものだった。食堂や酒場が立ち並び、呼び込みが仕事帰りの客を奪い合う。裏路地に目を向ければ、まだ夕飯時だというのに、多数の街娼が男たちに手招きをしている。青果、肉、魚などの食料品店も、これが最後の書入れ時と、大きな声を張り上げていた。

「……ここにするか」

3人が選んだのは、表通りの喧騒から外れた一軒の酒場だ。どちらかといえば住宅地に近い場所で、表通りの店ほどの客入りはない。知らない土地での情報収集の基本は、酒場。店主は幅広い客から様々な話を聞かし、酔った客はつい口を滑らせる。この店を選んだのは、客の流動性が高そうな表通りの店よりも、いわゆる地元の常連客が多そうだ、という理由からだ。

海産物が豊富なアマディアスらしく、その店のメニューには海鮮料理が多かった。

「僕は魚介料理はサッパリわからないから、二人で選んでよ」

「うん、それじゃあそうだね——すいません、このムール貝の酒蒸しとオイルサーデインのサラダ、それから鱈の香草ムニエルください！ 全部5人前で！」

「……魚のアラの煮込みと、帆立のバター炒め。それから赤座海老のバジルソース。……酒は、辛口のスパークリングを」

程なくして、湯気を立てた料理が山ほど運ばれてきた。周りの酔客も驚きの量である。

「いただきます。……うん、おいしい！」

フランススが、思わず舌鼓を打つ。貝類や海老などは馴染みのない未知の食材で、一瞬食べるのに抵抗を覚えるフランスス。しかし、一口食べてみれば、グロテスクにも思えたその外見も全く気にならない。

「あゝ、新鮮な魚って久しぶりに食べたけど、やっぱり美味しいね！」
「……うむ。ここの料理人はなかなか腕がいい」

スオウの言うとおり、調理は見事なものであった。大衆酒場にしては、どの料理も手が込んでいる。

「いやあ、そう言ってもらえると嬉しいねえ。それにしても良く食べるな、お客さん」

3人の食べっぷりに気分を良くしたのか、店主が話しかけてきた。頭の禿げ上がった、恰幅のいい中年男だ。

「はい、とても美味しいもので、つい」

「ここの親父は、貴族のお抱え料理人だったんだぜ。もっとも、まだ頭に髪があった頃の話だが」

隣のテーブルの客の声に、爆笑が起こる。

「髪の毛は関係ねえだろう！ ……お客さんたち見ない顔だが、この通りの店だ。やかましいだろうが、ゆっくりしていつてくんな」

こんなやりとりがあり、自然と周りの常連客とも気安い雰囲気になっていく。

フランスはスオウに目配せすると、話を切り出した。

「僕たち最近アマディアスに来たんですけど、最近凄い泥棒が出るらしいですね」

「ああ、今アマディアス《ここ》はその話題で持ちきりさ。『怪盗・ラフینگ・キャット笑う猫』なんて呼ばれてな」

たちまち、噂好きの常連客たちが集まってくる。

「『笑う猫』って？」

「そいつは、盗みの現場に必ず笑った猫の落書きを残していくらしいんでね。みんなそう呼んでるのさ」

「へえ、格好つけた真似するんだね」

「話を聞くようになったのは、ここ何ヶ月かのことだな。なんでも、金持ちの家ばかり狙うんだそうだ。俺たちみたいな貧乏人には関係ない話だが」

「その泥棒、一人なんですよ」

「ああ。兵隊に追われても、簡単に撒いちゃうんだと。たった一人で大したもんだよ」

盗みを働く悪人なのに、客たちの口ぶりからは嫌悪感が感じられない。むしろ、好感を持っている節さえある。

「おっちゃんたち、あんまりそいつのこと嫌ってないみたいだね」

クリステイが尋ねる。

「まあな。その怪盗は、悪どいことをして金儲けした連中ばかり狙ってるらしいからな」

「そうさ。この間怪盗にやられた穀物商のガードナーなんて、相場を操作して大儲けしやがったって話だからな。おかげで一時期小麦がバカみたいに値上がりしたもんだから、うちみたいに細々とやってる店は大打撃さ」

出荷をわざと抑え、品薄を煽って値上がりを待つ。卑劣なやり方だが、現在の法律ではギリギリ合法とされる行為だった。

他にも、何人かの豪商、貴族について尋ねてみた。フレイザー大尉から受け取った捜査資料にあった、被害者一覧にあった名前である。

「ああ、グレシヤム侯は自分が持つてる鉱山で、やたらに安い賃金で貧乏人をこき使ってるらしい」

だの、

「金貸しのジョイスは、詐欺まがいの証文でべらぼうな利子を取ってるんだ。俺の知り合いも一人やられてる」

だのと、皆市井の評判はよろしくなかった。

「それに、盗んだ金を貧民街でばら撒いてるって話だ。いわゆる義賊、ってやつだな」

「へえ、なんだかお話の中の人みたいですわね」

悪人から金を奪い、貧しい人に分配する。こういった筋書きは、大衆演劇などでもありふれた話だ。

「……フランシス、そろそろいいだろう。行くぞ」

「そうですね」

「あ、ちょっと待って！ この林檎のタルト、一個丸ごと包んでください！」

カウンターに陳列されたそれを、目ざとく発見するクリスティ。

「お、嬢ちゃん目が高いねえ。そいつはカミさん自慢の逸品さ。待ってな、今包んでやるよ」

パトリシアへのお土産にとケーキを買い、3人は店を後にした。

「義賊、か。そんなに悪い人じゃないのかも」

「……しかし、盗みは盗みだ」

「それはそうなんですが……」

貧しい境遇で育ったフランシス。その怪盗を憎みきれないところがある。

「でも、酒場の人たちは怪盗の能力については知らなかったみたいですわね」

「……うむ。第七が情報統制をかけているのだろう」

「誰か、実際にそいつを見た人はいないのかな」

「うん、被害にあった人に、直接話を聞けばいいんだろうけど」

「……明日、当たってみよう」

そんな話をしながら、3人は宿に戻った。長旅の疲れと満腹感から、一同はあっという間に眠りに落ちる。

しかし、けたたましい警鐘の音に、一同が安眠から引き戻されたのはわずか数時間後のことだった。

追跡

深夜。

皆が寝静まり、束の間の静寂が訪れていたアマディアスの街に、突如喧騒が巻き起こった。

警備隊が鳴らす警笛と警鐘、馬の蹄と焦りを含んだ怒号。それは、フランススの宿の宿泊客たちの眠りを妨げるには十分であり、常人よりも優れた感覚を持つフランススたちが、いち早くそれに気づいたのは言うまでもない。

フランススはベッドから飛び起きるや、廊下に出る。同じ部屋で寝ていたはずの、スオウの姿は既になかった。

「フラン、こっち！」

クリステイが、廊下のバルコニーから一足飛びで宿の屋根に上がり、フランススもそれに続く。

屋根には、スオウの姿があった。

「……運がいい。かなり近いぞ」

スオウは、夜の街並みに目を凝らしながら言った。

この宿は周りに比べ、高さが頭一つ抜けているため、かなり遠くまで見渡すことができる。喧騒の中心は、フランススたちの宿から、街の中心方面に数百ヤード程度の場所。高い三角の屋根と、鐘楼のある建物——聖堂のようだ。

この時間に、この騒ぎ。例の怪盗が現れた可能性が高い。

「アマディアスに着いたそうそう、運がいいんだか悪いんだか」

クリステイが愚痴る。

「……急行する」

4階建ての屋根から、スオウが跳躍。着地の瞬間に膝で衝撃を和らげながら、身体を捻りつつ前転。何事もなかったかのように走り出す。高度な受身の技術だった。

「……僕たちは階段から行こうか」

「そうだね」

眠気眼で部屋から顔を出したパトリシアに一言告げて、フランシスたちも夜の街を走り出す。

スオウの姿は、すぐに見つかった。100ヤードほど進んだところで、地面に伏して聞き耳を立てている。

「……遅いぞ」

「無茶言わないですよ。いくら^{あたしたち}竜人でも、普通ためらいもなくあんな真似できないって」

「……まあいい。あちらだ。急ぐぞ」

若干失礼な物言いのクリステイに顔色一つ変えることなく、再びスオウが走り出した。

「泥棒の足音が分かるんですか？」

併走しながらフランシスが尋ねる。

「……警備隊の者どもの足音から人の流れを読んだ。盗人の足音を

直接聞いたわけではない」

ひとりの足音を聞き分けるのは困難だが、それを集団で追跡する者たちの足音なら聞き取れる。そして、その集団の先には目的の人物がいる、ということだろう。

やがて、進行方向に警備隊らしき集団が見えてきた。何ごとかと家を出て来た野次馬に、解散を命じているようだ。

「……目立ちたくない。……上から行くぞ」

手近な商店の軒先を足がかりに、スオウはその建物の屋根に跳び乗った。二人も続く。屋根から屋根へと、曲芸のように跳び移りながら3人は進む。

「うーん……」

「どうしたの？ 難しい顔して」

「僕もいつの間にかこういう無茶に慣れてきたなあ、って思うと微妙な気分」

数ヶ月前まで、田舎の村で慎ましく暮らしていたフランシスのことだ。未だに時折、竜人の力に違和感を覚えることがある。

「あんなでかい炎竜倒しちゃった奴が、今更なに言ってるのさ」

「それはそうなんだけど……」

と、先を走るスオウが足を止めた。

「……見えた。あれが、『笑う猫』か」

視線の先には、複数の騎兵と、それに追われる一つの人影が。ど

うやら、件の怪盗に間違いないようだ。金持ちの邸宅が立ち並ぶ区画と、庶民が暮らす区画の境目あたり。大きな通りの真中を、怪盗『笑う猫』は爆走していた。

「かなり速いね」

「うん。情報はやっぱり正しかったみたいだ」

怪盗は、凄まじい速度で走っている。馬で追う警備隊たちも、もう撒かれる寸前だ。

「……しかし、追いつけぬほどではない」

「あたしの出番だね」

確かに速いが、対竜部隊でいえばエドガーより速いが、サイラスより遅い、という程度だった。部隊一の快足を誇るクリステイならば、十分追いつける距離だ。

「じゃ、先行するね！」

クリステイが手近な塀を蹴りつつ、屋根から下りる。着地と同時に、一気に加速した。

「やっぱり、クリスは速いな！」

走りながら、フランススが感嘆の声を漏らす。

「……あの分だと、じきに追いつくだろう」

フランススは、スオウとともにクリステイの背中を追いかけた。やがて、クリステイが怪盗を視界に納める。

「こら、待ちなさい！」

「自分から存在を主張してどうするんだよ、クリス！」

「……………」

大声で叫ぶクリスティに、スオウとフランシスは呆れるほかない。追っ手を撒いたと思っていたのだろう怪盗は、当然後ろを振り返って3人の存在に気付く。黒い外套に、顔を半ばまで覆うフードという出で立ちだ。男性だとしたら、かなり小柄だ。もしかしたら女の人なのかも、とフランシスと思う。

あっ、と怪盗の口元が動いたものの、驚きを見せたのは一瞬。ニヤリと口の端を上げると、角を曲がって横道に入ってしまった。

「逃がさないよ！」

挑発めいた笑みに腹を立てたクリスティが、物凄い勢いで横道に入っていく。が、直後。短い悲鳴と、何か物が盛大に崩れる音が響く。

後を追って横道に入ったフランシスたちが見たのは、飲食店のものらしきゴミの山に頭から突っ込んで倒れるクリスティの姿だった。よく見ると、地面から1フィートあたりの高さにロープが張られている。クリスティは、これに足を取られて転倒したのだろう。

「クリス、大丈夫!？」

「……俺は、先に行く」

クリスティに駆け寄るフランシスの脇を、スオウがすり抜けていく。クリスティは大した怪我はしていなかったものの、生ゴミを頭から被って酷い有様だ。

「クリス、しっかり！　って、うつ……」

ゴミの悪臭に、フランシスは思わず顔をしかめる。クリステイはというと、あまりの怒りに身体をわなわなと震わせている。

「……もう絶対許さない！　ぶちのめす！」

「あっ、待ってクリス！　頭に魚の骨が！」

怒りの形相も露に走り出すクリステイを、フランシスが追いかける。

一方スオウは、一人怪盗を追っていた。怪盗は土地勘があると見え、複雑な裏路地をすいすい進んでいく。クリステイの例があるため、怪盗が角を曲がるたびに注意しなければいけない。そのため、速度で勝るスオウも、なかなか距離を詰めることができなかった。

付かず離れずの追跡が続き――ふと、怪盗がスオウを振り返った。口元しか見えないが、「まだついて来るのか」と言わんばかりの、うんざりした表情なのが見て取れる。

「……それはこちらの台詞、だ」

毒づきながらも、スオウは内心驚いていた。いくら土地勘に勝るといえど、竜人兵3人相手に見事な逃げっぷりだ。感嘆に値する。

と、怪盗が角を曲がった。罠に注意しつつ、スオウが後を追うと――そこに怪盗の姿はなかった。

「――上か！」

スオウは、脇に立つ民家の屋根に駆け上がる。見回すと、数件先の民家の屋根から飛び降りる怪盗の姿が。慌てて後を追うスオウだったが――

「……やられたか」

怪盗が飛び降りた先、それは夜の街――歓楽街だった。深夜にもかかわらず、通りには人と灯火の光が溢れている。なけなしの金をはたいて女を買いにきた下層民から、お忍びでいけない遊びをしに来た貴族まで。多種多様な客たちと、それを奪い合う客引きたち。立ち並ぶ娼館のバルコニーでは、どぎつい色のドレスに身を包んだ娼婦たちが、通りに向かって手を振っている。

そこは、この時間帯のアマディアスにおいて、唯一多くの人が集まる場所だった。フードと外套を脱ぎ捨てて雑踏に紛れ込まれば、もはや怪盗『笑う猫』を見分ける術はない。

「スオウさん！」

フランシスたちが、ようやくスオウに追いついた。

「……すまん。取り逃がした」

目の前の光景を見て、フランシスも何があったのか理解する。

「ええーっ！？　じゃあ、あたしのこの怒りはどこに向ければ……」

身体を震わせ、クリステイが悔しがる。

「これからどうしましょう」

「……警備隊のフレイザー大尉に、詳細を聞いてくる。……お前たち、先に宿に戻れ」

「あたしも行く！ このままじゃ寝てもいられないよ」

未だ怒りが収まらぬクリスティは、身を乗り出して主張する。が、スオウは眉をひそめて言った。

「……お前は、とりあえず身体を清めてこい」

捜査（前書き）

※38話、39話にて若干の加筆を行っています。38話の下部に『笑う猫』という名前についての説明がありますので、今回の更新でその名前を初めて見た、という方はぜひ38話を再読ください。

捜査

スオウが宿に戻ったのは、フランシスたちに遅れることなく30分のことであった。

警備隊長フレイザーは、相変わらずの仏頂面で非協力的であった。そのため、スオウは必要最小限の情報のみを聞いて引き下がるしかなかったのだ。

被害に遭ったのは、フランシスたちの見立てどおりカーラム教の大聖堂。盗まれたのは、大司教が自室で所持していた宝飾品だった。カーラム教とは、旧大陸のルゲール文化圏と分類される地域で広く信仰されている、一神教の宗教である。ブリーディアでも篤い信仰を受けているし、コルドアでも各村落に必ずひとつは教会があるほどだ。フランシスが育ったのも、カーラム教の教会の孤児院だ。

「おかしくないですか？ どうして大司教様が宝石なんか」

カーラム教の聖職者は、宝石など不必要な装飾品の着用を戒律で禁じられている。教会で神父の説教を聴いて育ったフランシスでなくとも、皆常識として知っていることだ。

「……大司教本人は、寄進として物納された品を、一時的に預かっていただけだと証言している」

「それって、なーんか怪しくない？」

寄進を物品で行うことは珍しくはないが、それはワインや穀物などの場合が多い。よりもよって、聖職者が持つことを許されない宝石類を寄進するのはあまり考えられないのだ。

「賄賂、かもしれないわね」

パトリシアが、ぼそりと呟く。

カールム教は、かつてはエウレシウスの緒国を動かすほどの政治的発言力を持っていた。王権が強化された近年のブリーディアでは、その影響力は弱まったものの、大司教ともなればそれなりの力を持っている。

そんなことはないだろう、と思いたいフランススだが、孤児院の神父は折に触れて教会上層部の腐敗を嘆いていた。ありえない話ではない。

「……盗まれた品の素性は、我々には関係ない。大事なのは、盗みが行われた、という事実だ」

「それはそうだけどさー」

不満を口にしたクリスティ同様、フランススも納得のいかない気持ちで治まらない。

「……とりあえず今日はもう休め」

二人の懊悩を打ち切るように、スオウが命令した。一階級上のスオウの指示には、二人も従うしかない。渋々、ベッドに入るのだった。

翌日。

朝食を終えた一同は、今後の指針を話し合うべくフランススの部屋に集合していた。まず口を開いたのは、パトリシア。

「怪盗『笑う猫』の正体だけど……認めがたいことだけど、童人間違いないと思うわ。あなたたちのことだから、見間違えはないで

しょう」

「……たまたま、足が速くて身軽な一般人だという可能性は」

「うーん、竜人の力って、骨や筋肉の強度も一般人より高い竜人だからこそ持てるものなのよ。普通の人が竜人の水準の身体能力を持ったとしても、自身の力に肉体がついていかないの」

「どゆこと？」

さっぱり意味が分からない、という表情のクリスティ。

「たとえば、硬い壁を拳で殴るとするわね。加減すれば大丈夫だけど、思い切りやると骨を痛めてしまうでしょ。走るという行為だと、地面を蹴る際に足腰に衝撃がかかるわね。その衝撃は走るスピードが早くなればなるほど大きくなって、身体に跳ね返るの。そのほかにも、100ヤードを5秒以内で走り抜けるような真似をすれば、手を振る、足を上げるといった動き自体が身体の耐久力を超えてしまう。強すぎる力は、自分自身の肉体を傷つけてしまうのね」

「それって、この間のフランみたいになるってこと？」

この間とは、間者が怒らせた巨大な炎竜に立ち向かったときのことだ。その時フランシスは、限界を超えた動きによって自らの腱や筋をズタズタにしてしまった。

「まさにその通りね。竜人でも無理をすればあなる、ってこと。戦場などの極限状態で感情のタガが外れた人間が、限界以上の力を発揮した結果身体がボロボロになる。そんな報告例は、昔からたくさんあるのよ」

「……父の祖国の英雄譚でも、似たような話がある。話の主人公は、仇敵を鎧兜ごと一刀両断したが、代償として両腕の自由を失った」

「サイラスさんが前の戦いで両腕を痛めたのもそれが原因なんだね」

「そういうこと。まあ、竜人とよく似た身体的特徴を持つ別種のな

にか、という可能性はありえないわけじゃないけど」

科学者らしく、パトリシアは複数の可能性を考慮することを忘れない。

「……賊の正体については、そんなところだろう。あとはいかにして捕まえるか、だ」

「うーん、昨日捜査資料を読ませてもらったけど……この怪盗って、かなり狡猾ね。綿密に計画を立てて犯行を行い、決して自らの身体能力のみに頼ろうとはしない。たとえば、これ。ごく最近の事件なんだけど」

捜査資料の束から、パトリシアが一枚を抜き出す。穀物商・ガードナーが、多量の金品を奪われた事件の詳細が記されている。

「警備していた私兵たちの交代の隙を狙った、鮮やかな手口ね。運悪く逢引していたメイドに見つからなかったら、姿さえ見られることなく逃げおおせていたかもしれない。にもかかわらず、予め逃走経路を考えていたようなフシがあるわね」

「……それは、俺も思っていた。あのロープにしても、事前に用意されていたようだ」

ロープとは、クリスティを盛大に転倒させたロープのことだろう。怒りが再燃したのか、ぐぬぬ、とクリスティが唸る。

「……野の獣でもかからない単純な罠だが、相手に警戒心を与えるというだけでも効果は十分だった」

「ちよっと待って、それじゃまるであたしがバカみたいじゃない」

一同、沈黙。

「ちょ、誰か否定してよ！ フランまで！」

「……それはそうと、これからどうします？」

憤るクリスティの言葉を受け流し、フランシスが口を開いた。

身体能力が高い上に、慎重で狡猾、しかも土地勘にも優れている。手強い相手であるということを理解したうえで、対策を練らねばならない。

「とりあえずは、貧民街で聞き込みしてみたら？」

「そういえば、酒場の人が盗んだお金をばら撒いてるって言ってたね」

「……尻尾を出すような真似はしてしまいが、何らかの手がかりくらはいは掴めるかもしれん」

当面の方針が決まり、フランシス、クリスティ、スオウの三人は立ち上がった。

「……夕べは、俺も悔っていた。今度は、目に物見せてやる」

スオウも矜持があるのだろう。闘志を漲らせているのがフランシスにも見て取れた。

「そうだよ！ あたしに恥をかかせた罪は、たっぷりじっくり償ってもらうんだから！」

顔を真っ赤にして、腕を大仰に振りながら、クリスティが息巻く。

「頑張ってね。進展を期待するわ」

パトリシアに見送られ、3人は出発した。

貧民街は、アマディアスの東の外れに位置する一区画の通称だ。20年前までは、アマディアスの中心地だった区域である。新総督府竣工の際、同時に大規模な都市改造が行われた。丘の頂上にある総督府を中心に、より機能的な街造りを目指して行われたものだ。結果、経済の中心は新総督府に移動し、かつての中心街は徐々に衰退。現在では下層民や流民が多く暮らす区域となってしまった。このようないきさつがあるため、旧市街と呼ばれることもある。

崩れかけの古い家屋が立ち並び、まだ昼過ぎだというのに、道端には酒臭い息を吐く男たちが屯する。小奇麗なフランスたちの身なりを見るや、ボロをまとった子供たちがお恵みくださいと縋り付き、隙あらばポケットの中身を抜き取るうとする。ところどころで山積みになったゴミが悪臭を放ち、痩せこけた野良猫やカラスがそれに群がっていた。

フランスたちが足を踏み入れたのは、そんな場所だった。華やかな新市街が放つ光に生み出された影、そんな表現がぴったりの光景だ。

聞き込みの結果は、はかばかしくなかった。

「……予想はしていたが、難しいな」

まず、住民たちはフランスたちを余所者と警戒して、なかなか気を許さない。金をちらつかせれば顔色を変えるも、こと怪盗『笑う猫』の話しとなると途端に口を閉ざしてしまうのだ。

「でも、これだけ口が堅いつてくとは、お金をばら撒いてるって噂は本当なんでしょうね」

「……でなければ、かばい立てすることもない、か」

どうしたものかとフランスが思案に暮れていると、クリステイが袖を引っ張った。

「ねえ……なんか囲まれてない？」

見回すと、汚い身なりの男たちが十数人。下卑た笑みを浮かべ、フランスたちを遠巻きに取り囲んでいる。

「よおよお、綺麗なおべべを着た旦那方、哀れな貧乏人にちよつとばかりお恵みいただけませんかねえ」

ニヤニヤと笑いながら、一人の男が言った。慇懃無礼な物言いに、3人は眉をひそめる。とても、金を恵んでもらおうという者の態度ではない。男たちは、明らかに追い剥ぎだった。

「嫌だと言ったら？」

「野郎2人は荷車で帰ることになる。お嬢さんのほうは……まあ、想像に任せるぜ」

クリステイの肢体を舐るように見つめ、男たちが下品な笑い声を上げる。そうしている間にも、包囲の輪はじりじりと縮まっていた。中には、ナイフや棍棒を携える者もいる。

「どうすんの？」

「……大事になるのは避けたい」

戦えば、ものの数分もかからずに追い剥ぎ全員を打ち倒し、逮捕することは可能だろう。しかし、事件となれば第七騎士団の警備隊

が乗り出してくるだろうし、例の大尉がいい顔をするはずがない。そんな配慮から、スオウは交戦に乗り気でない。

「包囲を崩して、逃げるってことでどうでしょう」

「……そうするしかあるまい。2、3人殴り倒せば十分だろう」

「ほんとはこんなやらしい連中、全員ぶちのめしてやりたいんだけど」

「……竜人の力は、極力見せぬように。目立つからな」

3人は目配せすると、一斉に走り出した。

「てめえら、なにを——ぐへっ!？」

まずは、クリスティの拳がリーダー格と思しき男の顎をとらえた。無論、本気ではなかったが、歯が何本も飛び散るほどの一撃だった。フランススも、一人の男のみぞおちに前蹴りを放つ。胃の中身を吐き出しながら、男がのた打ち回った。

スオウはというと、一人の男の首筋に手刀を入れ昏倒させるや、その男を担いで走り出した。

「そいつ、どうするんですか？ 騎士団に突き出すってわけじゃないさそうですけど」

背後に追い剥ぎたちの怒声を聞きながら、フランススが尋ねた。

「……ついでだ、こいつから情報を聞き出す。追い剥ぎならば、『少々手荒な尋問』をしても問題あるまい」

「スオウ、それは拷問っていうんじゃないのかな」

3人は、一般人に比べればだいぶ速い、という程度の速度で逃走

する。全力疾走すれば楽に追っ手を撒けるだろうが、白昼の街中でそれは目立ちすぎる。――ややしばらく走り続け、3人は追っ手を振り切ったとみて、手近な廃屋に気絶したままの追い剥ぎを引きずり込んだ。

スオウが活を入れると、男は目を覚ました。しかし、手足はフラシスとクリスティにがちりと押さえ込まれ、身動き一つ取れない。事前に猿轡を噛まされていたため、男ができるのはくぐもった悲鳴を上げることのみ。

スオウは懷から短剣を取り出し、男の首筋に突きつける。

「……いいか、これから猿轡を外す。余計な声は立てるな」

押し殺した声でスオウが告げると、男は脂汗を流しながらこくくと頷く。

「……よし。これから質問をする。知っていることを洗いざらい吐け。さもなくば、死なぬ程度に痛めつけてから騎士団に突き出す。いいな」

「わ、わかった、何でも話すから、頼む、勘弁してくれ！」

人から無愛想と言われるスオウの鉄面皮も、こういう脅しの場面では妙な迫力が出て大いに役立つ。男はみるみる従順になった。『少々手荒な尋問』は必要ないようだ。

「……聞きたいのは、巷を騒がす怪盗『笑う猫』についてだ」

「な、なんだ、そんなことか。何が聞きたいんだ」

「そいつがここでお金をばら撒いてるって本当なの？」

「あ、ああ。それは間違いない。俺も、おこぼれに預かった」

「……金額は」

「大した金額じゃない。一度にせいぜい100デイルくらいなんだ。何度も貰ってるから、合計すりゃそここの金額にはなるだろうが」

その証言に引っかけりを感じたのか、スオウが顎に手を当てて考え込む。

「正体やアジトについて何か知りませんか？」

「知らねえよ。金を配るときも、家の軒先とか窓の縁とかに、誰にも気付かれずに置いて行くんだ。姿を見たって話すら聞かねえ。まるで幽霊さ」

「その金を配ったのが怪盗だってどうしてわかるんですか？」

「この街の教会——ほら、その窓から見えるだろう。金が配られた朝、あのボロ教会にある掲示板に、知らせが張られるのさ。『私服を肥やす悪人から、街の皆に富を分配します』って、例の猫の落書きと一緒にな」

「……なるほど。話は、もういいだろう」

「じゃ、じゃあ、早く離してくれ——ぐうつ」

男の言葉が終わるのを待たず、スオウが再び首筋に手刀を入れた。男は、力なく廃屋の床に横たわる。

「……表通りに放り出しておけば、問題あるまい。……一旦宿に戻るぞ」

そうして3人は、足早に貧民街を立ち去った。

3人が宿に戻ったのは、夕方に指しかかろうという時間。

「結局、具体的な手がかりはありませんでしたね」

部屋で一息つきながら、フランシスが口を開いた。

「しょうがないよ。泥棒の逮捕なんて、そもそもあたしたちの本業じゃないんだし」

「それはそうなんだけど。……ところでスオウさん、さっきから考え事してるみたいですけど……何か気になることでも？」

黙りこくって考え込むスオウに、フランシスが尋ねる。

「……うむ。……博士、貧民街の人口はどのくらい知っているか？」

「去年のコルドアの人口調査の資料で見たような……確か、70000ってところだったと思うけど」

「それがどうかしたの？」

「……先ほど、聞いただろう。一度に配るのはせいぜい1000ドルだと。ところが、資料によれば、『笑う猫』は一度の犯行で数万から百万デイル相当の金品を盗んでいく、とある」

「一度に配られる金額が少な過ぎるってことですか？」

貧民街の住民一人ひとりに配ったとして、ようやく70万デイルという金額だ。いかに怪盗とて、一夜にしてその全員に配るというのは無理だろうし、実際に配られる合計金額はもっと少なくなるだろう。スオウの言いたいことは、そういうことらしい。

「残りのお金はどうしてるんだろう」

「自分で使ってるんじゃないの？ あと貯金してるとかさ」

しかし、クリスティの想像は、悪人から金を奪って庶民に配る義賊、という今までのイメージにそぐわない。フランシスは、違和感

を覚える。

「泥棒の考えることなんて、べつにどうでもいいんじゃない？」

「それはそうなんだけどね」

「あら、犯人の心理を探ることも犯罪捜査には重要なよ。動機っていうのも、立派な手がかりになるわ」

「……うむ。俺も、何かの手がかりになると思ったのだが」

一同、うーんと考え込む。が、これだという犯人の行動原理は考え付かなかった。

「これからどうしましょう」

「盗まれた物の中には宝石、美術品も含まれているから、その線で調べてみればいいんじゃないかしら」

「……闇市か、それに類するもの。そして、裏社会の情報、だな」

「うんうん、方針も決まったところでご飯にしよう！ 『笑う猫』も、

昨日の今日で出てこないでしょ。今夜は飲むぞー！」

張り切って宿を出るクリスティの背を、フランシスたちはやれやれと肩を竦めながら追うのだった。

捜査、そして

首都アマディアスの総督府近くにある、一軒の邸宅。

広い敷地と豪華な造りの母屋。豪邸が並ぶその区画にあってなお、ひとときわ目を引く大きな建物だ。持ち主は、チェンバレン男爵。ブリーディア領コルドア筆頭財務官の肩書きを持ち、コルドアの莫大な富の流れをその手で操る権力者だ。

先日、この家も怪盗『笑う猫』の被害に遭っていた。持ち去られたのは、現金と宝石類。当初はそれだけかと思われていた。

しかし、フランスたちがアマディアス入りしてから数日後のこと。チェンバレンは、自室で異変に気付いた。数枚の書類が見当たらないのだ。それは幾人かの人名と数字の列、そしていくつかの署名が記されただけの紙切れにすぎない。関係のない人間には、何の意味も読み取ることができないであろうその書類。しかし、『ある程度の事情を知る者』がそれを見たならば、それは隠されたとある事実の証拠に早変わりする。

——まさか、怪盗が持ち去ったとでもいうのか。

チェンバレンの内心に、動揺が走る。怪盗にとって、それは一銭の価値もないはずだ。持ち去る道理がない。しかし——万が一ということもある。念には念を入れねばならない。まずは、騎士団上層部に圧力。しかし、警備隊長のフレイザー大尉は、偏屈などころはあるが堅物で一本気な男だ。警備隊にこの件を任せると、不味いことになりかねない。独自に手を打つ必要があるだろう。

チェンバレンはそう考え、とある人物と繋ぎをとることにした。

フランスたちがアマディアスに来てから、10日が経過した。貧民街に赴いたのち、フランスたちが行ったのは、裏社会の情報収集。

賭博、密輸、、地上げから人身売買に至るまで、人と金が集まるところには、必ず裏の稼業が存在する。アマディアスも例外ではない。

なぜ裏社会に探りを入れたのかといえば、『笑う猫』が溜め込んでいると考えられている多量の金品が流れ込んでいる可能性があったからだ。また、実行犯は一人であっても、計画や準備の段階で多数の人間が関わる組織的犯行の可能性も捨てきれない。

しかし、捜査の結果ははかばかしくなかった。非合法の品や用何品を取り扱う闇市、いわゆるブラックマーケットにも、『笑う猫』が持ち込んだと見られる品は見当たらず、裏社会においても大きな金が動いた形跡は見られなかった。

「結局空振りかぁ。サイラスさんあたりなら、もっとうまくやっただろうけど」

フランススが、がっくりと肩を落とす。

捜査に赴いた帰り道。時刻は深夜に差し掛かろうとしている。

この日、フランススはクリステイとともにとある賭場に潜り込み、情報収集を試みていたのだ。しかし、場慣れしていない二人のこと、ろくな話も聞けないまま退散することになった。

「でも、あれ絶対イカサマだよ！ おかしいじゃん、あたしときだけ反対の目が出続けるなんて」

クリステイがぷりぷりと怒る。

怪しまれぬようにと、賭場の客に混じってサイコロ博打に挑戦し

たクリスティ。しかし結果は惨敗。ついついむきになって勝負を続けた挙句、少なくとも金額をすってしまった。

（クリスは賭け事に向いていないよなあ……）

フランシスの考えは正しい。第一に、クリスティは感情が顔に出やすい性分である。さらに悪いことに、熱くなりやすい性格のため、引き際を見極められなくなるのだ。同じく考えが顔に出やすいフランシスと違うのは、この点だろう。

「もう、最悪！　なんかあたし、アマディアスに来てからろくな目に遭ってないよ……」

「まあまあ、元気を出してよ。そうだ、事件が解決したら、スオウさんをお願いして少し時間を貰おうよ。せっかくだから、遊びに行こう」

「お、それは名案だね！」

クリスティの表情がみるみる明るくなる。

「そうだ、パティも誘おうか。あの子、竜と学問のこと以外には全然興味持たないし、こっち来てからも部屋に籠ってばかりだから」

フランシスの言葉に、クリスティが大きなため息を付く。

「ん？　どうしたの？　僕何か変なこと言った？」

「いいよ、もう……らしいっちゃあらしいんだけど」

そんな話をしつつ、二人は宿に戻った。別口を当たっていたスオウは、既に帰還している。就寝しているパトリシアを起こさぬよう、報告会はフランシスたちの部屋で行われた。

「……首尾は」

「駄目でした。『あっち』の人から情報を聞きだすのって、やっぱり難しいですね」

「……まあ、仕方あるまい」

「スオウのほうは？」

この日、スオウは口入屋を訪ねていた。口入屋には多種多様な依頼人が集まるため、様々な情報が集まるのだ。スオウは騎士団入団前に用心棒をしていたことがある。その経験を活かし、用心棒としての雇い主を捜している、という触れ込みで潜り込んだのだ。

「……『笑う猫』に直接繋がる情報はなかった。しかし、妙なことはあった」

「本当ですか？」

「……技量を見せろと言われ、チンピラ相手にいくつかの技を披露してやった。すると、口入屋の主人はこう言った。『ちょうど良かった、いい仕事がある』と。珍しいことだ」

スオウによると、いくら腕の立つ者でも、信用商売である口入屋で一見がいきなり仕事にありつけるのは珍しい、とのことだった。

「……仕事の詳細はまだ聞かされていない。しかし、報酬は高額で、俺以外にも大量の人間が雇われているようだった。相当の金が動いているとみていい」

「それは怪しいですね」

「……明日、ある程度の人数を集めて説明会を行うらしい。『笑う猫』との関連は今のところ見えんが、とりあえず俺はそれに出てみる」

「あたしたちはどうすればいいの？」

「……街の噂を聞いて回れ。次に怪盗が狙う相手が分かるかもしれない」

怪盗が狙うのは、決まって悪い噂のある金持ちだ。噂話を聞いて、評判の悪い金持ちを捜せということだろう。

「じゃあ、明日は好きに歩き回っていいんだよね」

「……任務だということを忘れるな」

任務という大義名分の下、遊び歩こうと画策するクリスティに、スオウが釘を刺した。

翌日。

スオウは口入屋の説明会に出向き、フランシスはクリスティと連れ立って街に出た。パトリシアも一緒に誘ったのだが、この日パトリシアはアマディアスにある王立アカデミー分校に用事がある、とのことだった。

いつぞやシラーズの街でそうしたように、二人で街を練り歩き、様々な店を覗く。――初めは楽しげだったクリスティだったが、街の噂を聞くという本来の任務をこなすうち、その表情はだんだんと曇っていく。フランシスにしても同様だった。

二人の気分を沈ませたもの――それは、一つの噂だった。「騎士団のダグラス少将が、武器の横流しによって不正な蓄財を行っている」というものだ。

ライオネル・ダグラス少将。騎士団参謀長であり、対竜部隊長レナードとは同期の親友である。フランシスたちとも面識があった。

「うーん、あたしにはちょっと信じられないなあ」

「うん、僕もそんなことをする人だとは思えないんだけど」

しかし、その噂は街で広く流布していた。まるで根も葉もない噂である、とは言い切れないところがあった。

気さくでありながら理知的なライオネルの顔を、フランシスは思いつかべる。やはり、不正を働くような人物であるように思えない。

「人は見かけによらない、とは言うけど……」

フランシスたちがその噂を信じられない大きな理由の一つ。それは、ライオネルがあのだのレナードの信頼を勝ち得ている人物だ、という事実だ。尊敬するレナードから友と認められる人物が、そのようなつまらない不正をするのだろうか。

「とにかく、戻ってスオウに報告しようよ」

街歩きを楽しむ気持ちが失せてしまった二人は、宿への帰路に付いた。

宿には、既にスオウとパトリシアの姿があった。

「お帰りなさい。どうだった？」

「それが……」

フランシスたちは、ライオネルの不正の噂について話す。

「妙ね。ダグラス少将といえば、知略で知られた東方遠征の功労者の一人。そんなことをするとは思えないわ。それに――街の噂になるほど、安易な不正をするほど愚かじゃない。やるなら、ばれないように巧妙にやるはずよ」

「……同感だ」

「とにかく、街ではそんな噂がありました。スオウさんのほうは？」

「……多少の進展はあった。このたび人が集められたのは、騎士団に先んじて『笑う猫』を捕えるためだそうだ」

「誰が、何のためにそんなことをするんでしょう」

「……そこまでは、聞かされていない。しかし、高額な報酬に釣られたならず者どもが、大挙して参加している」

雇い主の狙いはなんなのか。それは不明だが、裏社会に通じた者たちが多数動けば、『笑う猫』に関する手がかりが集まりやすいのは事実だ。

「……警備隊よりも、有益な情報が手に入るかもしれん。俺は、しばらく潜ることにする」

「その間、僕たちはどうすれば――」

フランシスが言いかけたところで、部屋のドアがノックされた。宿の亭主が顔を出す。

「お邪魔して申し訳ございません。お客さんに、お手紙を預かりまして」

「手紙？ 誰から？」

「さあ、そこまでは……お客さんたちに渡してくれ、と言付けられただけです。では、失礼します」

渡されたのは、一通の小奇麗な封筒だった。封蝋には、騎士団の紋章が刻まれている。スオウが開封して中を改めると、中には二枚の便箋が入っていた。一枚には地図が記されており、もう一枚には簡潔な一文が記されている。

「……今夜9時、『跳ねる鯨亭』にて待つ。ライオネル・ダグラス」
「ダグラス少将が？　なんで？」

噂をすれば、なんとやら。当の本人からの呼び出しであった。

「なるほど、そういうことね」

合点がいったように、パトリシアがニヤリとする。

「パティ、どういうこと？」

「まあ、本人に聞くといいでしょ。……それにしても、あの人の考えそうなことだわ」

クリステイが尋ねるも、パトリシアは意味深に笑うのみであった。

「……9時か。少将を待たせるといかん。少し早いが出るぞ」

「ええっ、晩御飯もまだなのにく」

「まあまあ、『跳ねる鯨亭』って酒場みたいだし、そこで何か食べようよ」

「じゃあ、私は留守番してるわね」

パトリシアに見送られ、フランシスたちは夜の街へと繰り出した。

地図を頼りにたどり着いたのは、表通りから二本ほど中に入った裏路地にある建物で、看板も出ていない。建物の脇には地下へ通ずる階段があり、階段入り口の頭上には、鯨が跳ねる様子をモチーフにしたエンブレムが彫られている。ここで間違いないらしい。

分厚い扉を開けて一行が中に入る。店内は、カウンターのみの細長いつくりで、客は一人。約束の時間にはまだだいぶ余裕があった

のだが、ライオネルはそこで既に杯を傾けていた。

「諸君、呼び出して済まなかったな。かけたまえ」

ライオネルに勧められるまま、3人は着席した。

「3人にビールを。適当な肴も頼む。……さあ、遠慮なくやってくれ。ここは私が持つのでね」

フランシスたちは、おずおずと杯に口をつける。クリステイもさすがに遠慮がちだ。それもそうだろう。街で聞いた噂が気になってしょうがないのだ。

「怪盗の捜査は上手くいっているかね？」

ライオネルは、そう切り出した。騎士団参謀長であるライオネルは、当然フランシスたちの任務についても知っているのだろう。

「サッパリですよ。警備隊の人が全然協力してくれないんだもん」

クリステイが憤りを見せる。

「フレイザー大尉か。彼にも矜持があるんだよ。あれでも正義感の強い男だ、勘弁してやってくれ」

と、ライオネルはフランシスの顔を見やった。

「うん？ 浮かない顔をしているな、フラワー少尉。……ひょっとして、私の悪い噂でも聞いたかな？」

「ど、どうしてそれを？」

凶星を突かれ、フランシスは困惑する。

「……やはり、か。そんなことだろうと思っていた」

「スオウ、一人で納得してないでよ」

クリスティが口を尖らせた。しかし、スオウは答えを口にするのをためらう。酒場の店主に聞かれるのを気にしているのだ。

「ああ、彼なら心配いらぬ。我々の会話を漏らすようなことはしない男だ」

ライオネルは、微笑みながら先を促す。まるで、優秀な教え子の回答を待つ教師のような表情だ。

「……少将は、あえて自分で悪い噂を流布させた。そういうことだろう」

「どうしてそんなことを？　って、まさか――」

「そうだ。怪盗『笑う猫』を、我が家に招待しようと思ってね」

ライオネルは、『笑う猫』を誘い込む罠として、意図して自分の悪い噂を流させたのだという。

「怪盗が狙う相手の当たりがついていれば、君たちの任務もやりやすいだろうと思ってね」

犯行が行われてから犯人を追うのと、予め犯行現場がどこであるのか予測してそこに網を張るのとでは、犯人捕縛の成功率は段違いになる。それが、ライオネルの狙いだった。

「でも、少将の評判に傷がつくんじゃ……」

根も葉もない噂とはいえ、これだけ広まってしまえば簡単に収めることはできない。もしライオネルに政敵がいた場合、噂を利用してライオネルを貶めようとするする可能性もある。

「心配いらんよ、ファウラー少尉。私の実績は、この程度で揺らぐような脆いものではないからな」

自信たっぷり、ライオネルが答える。

「……我々は、どうすれば」

「諸君には、私の家に張り込んでもらうことになる。それほど大きな家ではないが、4人分の部屋くらいは用意させてもらおう」

「……俺は、少し気になることがある。別行動の許可を願いたい」

「うん……？ まあ、それは構わんだろう」

「……感謝する。繋ぎは欠かさぬようにする」

「うむ。さあ、前回の犯行からそろそろ10日だ。怪盗『笑う猫』も、そろそろ動きを見せるだろう。是非、直接尊顔を拝見したいものだな」

自分を囷にするという危険を冒しながらも、ライオネルが不敵に笑う。それを見たフランススは、呆れの表情を隠せないのだった。

不自然な命令、不自然な依頼

ライオネルの邸宅は総督府の程近く、豪邸が立ち並ぶ区域——いわゆる高級住宅街の一角にあった。

周りの家に比べれば小ぶりではあるものの、立派な門構えと質実ながらも確かな風格を漂わせるその家は、豪邸と呼んで差し支えないものだった。

「本来ならばこのような家は必要ないのだがね。上に立つ者として、ある程度上等な生活をしているように見せることも大事なんだよ」

とは、ライオネルの弁である。要するに、下の者たちに「いつかは自分もあなりたい」と思わせることも、士気を保つ上で大事だ、ということらしい。

フランスたち4人は部屋を宛がわれ、当分そこで暮らすことになった。ライオネルの妻子は、万一を考えて知人の家に退避させたいらしい。

さて、フランスたちが宿を引き払い、ライオネルの邸宅に移ろうとした朝。フランスたちは、第七騎士団警備隊から呼び出しを受けた。なんだろうと思いつつも、一同は騎士団本部へと赴く。

「ダグラス少将の家に厄介になる、だと？ まったく、コネのある連中は羨ましい限りだな」

相変わらずの仏頂面で、チクリと皮肉を言うのも忘れずにフレイザー大尉が切り出す。

「上から命令が下った。面倒だが、形式上お前たちは俺の指揮下に

あることになつとるから、伝えんわけにもいかん」

温厚なフランスにさえ、それなら別に無理して伝えなくてもいいだろうと思わせてしまうほどの言い草だ。

「例の怪盗についてだ。『非常に危険な人物と断定した故、発見した場合速やかに殺害すること』だそうだ」

「……馬鹿な話だ。ただの窃盗犯を即時殺害せよとは」

「そうだよ。だって、『笑う猫』は誰も傷つけてないんでしょ？」

おかしい命令に、スオウたちも反論せざるを得ない。フレイザーは、机を大きく叩いてその言葉を打ち切る。

「そんなことは、貴様らに言われんでもわかつとる。しかし、騎士団は階級が絶対であり、俺は貴様らの上官だ。言っている意味が分かるか」

苦虫を噛み潰したような顔で、フレイザー大尉が言う。

かなり特殊な任務を持ち、行動の自由度が高い対竜部隊に所属するフランスたちとて、フレイザーの言い分は分かる。それでも、この命令は異常だ。相手は誰も殺傷したことのない窃盗犯だ。逮捕の際に止むを得ず傷ついたり殺してしまうことはあっても、初から殺すつもりでかかれ、などとは法の番人たる警備隊のやることではない。

「それを踏まえたうえで、お前たちに命令する。決して『笑う猫』を殺してはいかん」

「へ？ 殺すなって言いました？」

予想外の言葉に、フランススが頓狂な声を上げる。

「確かに『殺すな』と言った。部下たちにもそう命じてある」

「……いいのか？ 明確な命令違反だろう」

フレイザーは面白くなさそうにふん、と鼻を鳴らす。

「俺は、余所者にデカイ顔をされるのは気に食わんが、こんな馬鹿げた命令を聞き入れるのはもっと気に食わん。罪人を裁くのは裁判官の仕事、殺すのは首切り役人の仕事というのが道理だ。俺は、そんな無理を通すために騎士団に入っただけではない。命令違反なんぞクソ喰らえだ」

フランスシスたちは、ダグラスの「フレイザーは正義感の強い男だ」という言葉を思い出す。フランスシスたちを邪険にしたのも、自らの職務への責任感がそうさせたのだろう。

「……命令の出所は」

「知るか。直属の上司は、さらに上から命令されたということしか教えはしなかった。……そんなことを聞いてどうする」

「……いや、失礼した」

「用件は以上だ」

ぴしゃりと言い放ち、フレイザーはフランスシスたちに背を向けた。

「それにしても、変な話だよね」

騎士団本部からダグラスの邸宅に向かう道すがら。クリステイが、一行の胸中を代弁する。

「そうね。ブリーディアの刑法だと、強盗じゃない、つまり暴力行

為を伴わない単純な窃盗犯なら、いくら回数と被害額が多くても終身刑が最高だし。殺せっていうのは穏やかじゃないわね」

パトリシアが法の知識を披露する。生物学や自然科学のみに収まらない、広範な知識を持つあたりは、さすがと言うべきであろう。

「でも、あの隊長さん、意外といい人みたいだね」

「まあ、あたしもちょっとは見直したかな」

先ほどまではフレイザーに強い不信感を抱いていたクリスティも、考えを改めざるを得なかったようだ。

「……俺は、例の口入屋の仕事に行ってくる。得心のいかぬ点があるのな。夜までには、少将の家に戻る」

そう言うのと、スオウはフランスたちと別れた。

「なんだろうね、得心がいかないって」

「あたしに聞かれてもわかるわけないじゃん」

フランスは、フレイザーから聞かされた命令、それとスオウの行動に関連があるように感じたが、具体的なことにまでには考えが至らなかった。

ライオネルの邸宅に入り、フランスたちが不自然な命令について話すと、ライオネルはふうむ、と唸ってしばし考え込んだ。

「なるほど、総督府が騒がしかったのはそのためか。……ファウラー少尉、君たちの出張を延長させるよう、シラーズのほうに連絡しておこう。少なくとも、次に『笑う猫』が現れるまでは滞在しても

らうことになる。――ただの窃盗事件と思っていたが、予想以上の大事になりそうだ」

「少将、大事って……?」

「うむ、それはモーガン中尉が帰還すればよりはつきりするだろう。夜になるまで、ゆっくりしていたまえ」

含みを持たせた言い方に、胸にもやもやとしたものを感じるフランススだったが、ライオネルがそれ以上語らない以上は仕方ない。ライオネルの蔵書を読みながら、スオウの帰りを待つのだった。

そろそろ先に晚餐を済ませてしまおうかと一同が思い始めたころ、スオウが帰還した。ライオネルは、食卓を囲みながら報告を聞くことにする。

「……さらに、具体的な依頼内容が判明した。『笑う猫』を捕えることに変わりはないのだが、そのアジトを突き止めた場合は殺害しても構わない、とのことだ」

「狙いはなんだろう。やっぱり『笑う猫』が溜め込んだ金品でしようか」

「それはどうかしらね。不可能と思えるような犯行を繰り返した怪盗を、あっさり殺しちゃうってのは不自然よ。仮に、依頼主が犯罪組織の類だったとしたら、ね」

「ああ、なるほど」

パトリシアの言葉に、フランススが頷く。

「フラン、どういうこと?」

相変わらずと言うべきか、クリステイはこの手の議論に付いていない。

「そんな凄腕なら、殺しちゃうよりも仲間に取り入れたほうがいい、
つてことでしょ、パティ」

「その通り。そんな優秀な人材を、むざむざ殺すとは思えないわ」

「……それに、俺を含め百人以上が動員されている。一人頭数千デ
イルという高額な報酬で、だ。これだと、アジトの金品を手に入れ
たとて、モトが取れるかどうかもわからん」

と、それまで黙って考え込んでいたライオネルが、ようやく口を
開いた。

「なるほど、大体の線は繋がったようだ。諸君も、おおよその見当
は付いたのではないかね？」

「まあね。裏で糸を引いている人間が誰なのか、ということまでは
わからないけど」

「盗みを働く間に、その誰かにとって都合の悪い事実を掴んでしま
った、ということですね」

「……ならず者どもに見られるなら問題ないが、騎士団に見られれ
ば拙いことになる。そんな何かを、『笑う猫』は握っているのだろ
う」

「よくわからないけど、要するに口封じってこと？　そういうの、
あたしは嫌いだな」

ライオネルは、一同を見渡すと、お決まりの不敵な笑みを浮かべ
る。

「正解だ。さて、それを踏まえて、これからの作戦を立てようじゃ
ないか」

追跡ふたたび

翌日より、ライオネル発案による作戦『鼠捕り』が開始された。フランシス、クリスティの二人は、ライオネル邸に待機。昼に睡眠をとって、夜は『笑う猫』に備えるという生活を送る。

スオウは、口入屋の仕事に参加しつつ、情報収集。その中で、こんな場面があった。

それは、数人のならず者たちとともに、とある地下賭博場に入入りしていたときのこと。

突如ドアが蹴破られ、十数人の男たちが飛び込んできた。全員騎士団の制服を着ている。

「手入れた！」

誰かが叫び、その場は大混乱。大捕り物が始まるか、と思いきや、そこでスオウが前に進み出る。

「……帰るがいい。官憲の犬に好きなようにはさせぬ」

ものの数分もしないうちに、騎士団員はスオウによって散々叩きのめされ、放り出されてしまった。

このことがきっかけで、ならず者たちの中でのスオウの評判は鰻登り。「あいつは凄腕だ」「騎士団だろうが、お構い無しの怖いもの知らずだ」という評判が、急速に広がることになる。

しかし、これは『仕込み』であった。スオウに叩きのめされたのは、ライオネル子飼いの騎士団員。無論、裏社会でのスオウ評判を上げるための行為である。信頼を得られれば、多額の報酬を用意し

て不審な依頼を行った『何者か』に繋がる情報も得られやすいだろう、そういう意図によるものだ。

1週間後。事件は動きを見せる。

草木も寝静まる深夜。ライオネルの邸宅にて不寝番を行っていたフランシスとクリスティは、ほんのわずかな異音――侵入者を警戒し気を張っていないければ、竜人ですら聞き逃していたかもしれない程度の小さな音――を聞き取った。それは、金属がこすれる音ともすれば風でドアや窓が揺れる音ともとれるが、卓越した聴覚を持つ二人は、それが人為的なものであると判断する。

フランシスとクリスティは頷き合うと、音の出所に向かう。そこは、邸宅の3階。ライオネルの私室だった。

月光差し込む部屋の中、二つの人影が対峙する。ひとつはライオネル。もうひとつはフードを目深に被り、口元を覆面で覆った小柄な人物のものだ。

「お前が『笑う猫』か！」

詰め寄ろうとする二人を、ライオネルが制する。

「待ちたまえ。せっかく私を訪ねて来てくれたんだ。少し話をさせて欲しいのだが」

そう言うと、ライオネルは侵入者に向き直る。

「金品が仕舞われている蔵ではなく、わざわざ私の部屋を訪ねて来たのは一体なぜだね？ 怪盗『笑う猫』よ」

『笑う猫』は、ふん、と軽く鼻を鳴らした。

「白々しい。あたいをここへ来るように仕向けたのはあんただろ？」

その声はくぐもっている。しかし、マスク越しにも甲高いのが分かる声だ。女性かもしれない、というフランスの予想は的中していた。

「横流しをしたと噂の武器商人。武器を運んだという運び屋。どっちにも『それらしい』証拠はあったけど、全部まやかした。上手く作ってはあるが、偽者ばかりだった。一体全体、どういうわけでこんなふざけた真似をしゃがった」

「……なるほど、君は私が思っていた以上に聡明らしいな。ならば、その理由も分かるだろう」

「もちろん。こんな回りくどい手を使ってあたいを罠に嵌めようなんて、どんな野郎なのか面を拝みたくなったんでね。こうしてお邪魔させてもらったのさ」

「ちょっと待って、じゃあ、あなたはいちいち悪事の証拠を掴んでから盗みに入ってたってこと？」

フランススが驚嘆の声を上げる。それもそうだろう。悪人を相手に義賊を気取るにしても、わざわざ悪事の証拠を掴んでから犯行に及ぶなど、普通の犯罪者の思考ではない。

「ふん。あたいはあんたらお上と違って、証拠もないのに人を裁いたりしないのさ」

「なるほど、耳が痛い話だな。――しかし、その正義感が仇となることもある。君は、今命を狙われているのを知っているかね？」

「町中のならず者どもが、あたいを探し回ってるのは承知してるさ。」

でも、あんなボンクラどもが何百人集まっても、掴まる気はしないね」

「ほう。それでは、この二人が相手ならばどうかね？ 大人しく捕まってくれば、悪いようにはしないのだが」

ライオネルの合図とともに、フランスとクリステイが身構える。無論、怪盗がライオネルの言葉に応じるはずもない。部屋の空気が、途端に剣呑なものへと変わっていく。

「あんたら、この間しつこく追い回してくれた連中か。あたいの同類が二人も三人もいたのは驚きだったね。でも、結果はあの通りだったろ？」

「あの時は油断したけど、今度はそうはいかないよ！」

「くくっ。この間は笑わせてもらったよ、姉さん。ゴミの味はどうだった？」

「くくっ！ ぶちのめす！！！」

クリステイが凄まじい速度で『笑う猫』に詰め寄る。が、『笑う猫』は一足先にひらりと跳躍、窓枠に足を掛けて一気に外へ飛び出した。3階の窓から落下する途中、『笑う猫』は鉤縄を庭木の枝に投げ、弧を描くように宙を舞うとそのまま邸宅の塀を乗り越えていく。

「では、手はず通りに頼む」

「わかりました！ ほらクリス、少し頭を冷やして」

「分かっているってば！ 行くよ！」

二人が、窓から身を躍らせる。2階の窓のひさしを一度蹴り、地面に着地するや猛スピードで走り出す。

同じころ、スオウはライオネルの邸宅から程近い、一軒の豪邸の屋根に立っていた。その場所からは、『笑う猫』が逃走する様がよく見える。

「フランシスはそのまま！ クリスティは左から回りこめ！」

スオウにしては珍しい大声で二人に指示を下す。自らは、常に『笑う猫』を視界に納められるよう、常に高所を維持するように移動する。

前回の失敗は、相手の知能を見誤ったこと、3人同じルートで敵を追ったことである。それを踏まえ、スオウはパトリシア、ライオネルとともに『笑う猫』が取ると思われる逃走経路を徹底的に予測した。そして、自らが指示を出すことでフランシスたちを先回りさせ、常に二方向から圧力をかけられるように動かす。

スピードでフランシスにやや劣る『笑う猫』は、じりじりと差を詰められていく。しかし、ここで『笑う猫』を捕えるのがフランシスたちの目標ではない。「捕まえられそうで捕まえられない」と、『笑う猫』が感じる距離を保って走る。

と、『笑う猫』が後ろを振り返った。

「今回は、ちゃんと頭を使ってるじゃないか。あたかも本気を出すとするか」

そう言うと、『笑う猫』は靴と外套を脱ぎ捨てた。靴は底の厚みが数インチもあるもの。外套の内側には肩当てが付いていたようで、小柄に見えた怪盗の身体が、さらに一回り小さくなる。

「……まさか、子供か？」

スオウも驚きを隠せない。そして、厚底の靴を脱ぎ捨てた『笑う猫』のスピードが、一段階上がった。クリステイにはわずかに及ばないが、その速度はフランスス、スオウよりも上に行く。

「……厄介だな。だが、逃がさん」

スオウは油断していない。相手が能力を隠している可能性までも考慮に入れて、作戦を立てている。

「くっ、しつけーな！ いい加減諦めなよ、兄さん方！」

「そういうわけにもいかないんだよ！」

いつの間にか、追跡劇はその舞台を貧民街に移していた。これも、フランススたちの作戦通り。

「……そろそろ予定地点だ。クリステイ！」

「あいよ！」

スオウの合図に、クリステイが加速。部隊一の快足が、瞬く間に『笑う猫』の背中に迫る。そして、その行く手には別ルートから近道をしてきたフランススが。とうとう、怪盗を追いつめることに成功した。

「くっ！」

身を翻して脇に逃げようとする『笑う猫』の前に、スオウが立ちはだかる。怪盗の腕を捕らえると、スオウは手首を一ひねり。ふわりとその身体が中を舞ったかと思うと、怪盗は背中から地面に叩き付けられた。

「ぐうっ！」

スオウが、『笑う猫』のフードと覆面を剥ぎ取る。そこにあったのは、果たして年端のいかぬ子供の顔であった。年のころは12、3歳だろうか。赤みがかった茶色の髪と、そばかすの浮いた頬。悔しげに歪む唇から覗く、八重歯が印象的な女の子だった。

「……やはり、子供だったか」

「ふん。悪かったな」

観念したのか、『笑う猫』はもはや逃げようもしない。ふてくされたような顔で、フランシスたちを見回す。

「あたいの負けだ。煮るなり焼くなり好きにしな」

地面にあぐらをかいて、怪盗が諸手を挙げ降参のポーズを取る。

「ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「あん？　なんだってんだい」

「君、竜の血って知ってる？」

なぜ、彼女が竜人の力を手に入れたのか。その疑問を、フランシスがぶつける。

「竜の血？　なんだいそりゃ」

「うーん、じゃあ騎士団の実験に参加したことは？」

「騎士団？　そういや昔父ちゃんが言ってたような――変な薬を飲むだけで結構な金がもらえた、楽な仕事だった、って」

「……父親が？　父には能力が出なかったが、その子に引き継がれて発現したということなのか」

「そういうことってあるのかな？」

「あたしに聞かれてもわかんないよ。パティに聞いてみないと」

3人の謎のやり取りに、『笑う猫』が思わず口を挟む。

「あんたら、さっきから何の話をしているんだ？」

「……今はどうでもいい話だったな。ところで、前は盗んだ金品をどうしている？ 全て貧民街で配っているわけではないだろう」

「配りきれなくて残った分は、ねぐらに仕舞ってある。一銭たりとも手を付けちゃいないよ」

「……自分のために溜め込んでいるのではないのか？」

「まさか。あたいは悪人を懲らしめるために盗みをやってるんであって、贅沢をしたいわけじゃないからね。ねぐらの金も、邪魔でしようにないくらいさ」

「じゃあ、貧民街でたくさん配っちゃえばいいじゃん。手元に残らないように」

「……あぶく銭を手にしたおかげで駄目になっちゃった人間を、ゴマンと見てきたからね。暮らしのちよっとした足しになる、くらいがちょうどいいのさ」

『笑う猫』がため息をつく。子供とは思えぬ、達観した表情だった。

それにしても、とフランススと思う。ただ、悪を懲らしめるためだけの行為だと『笑う猫』は言う。彼女を突き動かすものはなんなのだろうか。

「……最後に聞く。お前は金品とともに悪事の証拠を盗み出している。そうだな？」

「まあな。証文とか手形とか、きちんとした形で残っているものになるべく一緒に持ち出してる」

「……それをどうするつもりだった」

「別に、どうもしないさ。ただ、『どこかの誰かが自分の悪事の証拠を握ってるかもしれない』って思わせれば、そいつがこの先惡どいことをする気が起きなくなるかもしれないだろ」

「それは今どこに？」

「秘密の場所に隠してある。でも、その隠し場所だけは口が裂けても言えないね」

「……悪事を公に暴き立て、悪人を断罪する気はないのか」

「断罪？ はっ、一体どこの誰がその悪人を断罪できるって言うんだ。お上なんか結局、金持ちの味方だろう。いくら証拠を固めたって、握りつぶされるのがオチさ」

『笑う猫』が再び見せた、達観の表情。なにか苦い経験があっただろうことは、フランシスたちにも想像できた。

「国がそんなに信用できない？」

「ああ」

「何か理由があるんだろう？ 君がそこまで国を信じられなくなった理由が。良かったら、話してくれないか」

フランシスが、『笑う猫』の目を真っ直ぐ見据えながら語りかける。初めは頑なだった怪盗も、フランシスの真剣な眼差しに押され、口を開いた。

「……あたいの父ちゃんは、国に騙されて殺された。それが理由さ」

『笑う猫』は、ポツポツと語り始めた。

「あたいの父ちゃんは、大工だった。金は無かったけど、男手一つであたいを育ててくれた立派な男で、近所みんなからも頼りにさ

れてたもんさ。でも、一年前——あたいがちょうど11になったころだ。それは起きた」

『笑う猫』の表情が、翳る。硬い地面を掘り返すような、苦しい表情を見せながらも先を続ける。

「当時、あたいらは新市街の外れに住んでいた。そこへ、何人かの男が訪ねてきた。『このあたりの家を潰して、ため池を作りたい。金を出すから、立ち退いてくれ』ってね」

話によれば、街の上層にある高級住宅街で使用する水を確保するための、ため池を作る計画なのだそうだ。

「小さい家だったけど、真面目にコツコツ働いてやっと建てた家だ。簡単に立ち退けるわけがないだろ。父ちゃんが断ったら、やくざ者を使った嫌がらせが始まった」

立ち退きを拒否した家には、それは酷い嫌がらせが行われたという。玄関先に大量のゴミが投棄されたり、飼っている犬が殺されたり、壁に落書きをされたり。中には不審火で全焼しかけたり、若い娘が強姦された家さえあった。

「嫌がらせをやったのは、キャンベル商会っていうところさ」

「……名前は、聞いたことがある」

キャンベル商会は、国が大きな土木工事をする際、人足を斡旋することで利益を上げている業者だ。ため池の建設にも、大きく関わっていた。

「堪りかねた父ちゃんは、近所のみんなを代表して総督府に訴え出

た。――で、どうなったと思う？」

3人は押し黙る。今までの口ぶりから、何となく想像がついてしまったのだ。

「悪人を訴えに出た父ちゃんは、なぜか逆に牢屋に入れられちゃったのさ。『嘘の訴えをして、キャンベル商会の仕事の邪魔をした』って理由でね。何日かしたら父ちゃんは帰ってきた。……冷たい、死体になってね」

獄中で急病にかかった、という説明を受けたものの、その死体には無数の外傷があったという。このことについても彼女は訴え出たが、門前払いでまるで相手にされなかったらしい。

「しかも、『工事が遅れて損害が出た』とかいって、キャンベル商会は残されたあたいに凄い額の金を請求してきやがった。家は取られ、あたいは人買いに売られそうになったけど――すんでのところで逃げ出した」

貧民街に潜って生活していた『笑う猫』に、転機が訪れる。ある日、彼女は高熱を出して倒れてしまう。数日で回復したのだが、目覚めたとき、彼女には超人的な力が宿っていたのだ。

「あたいは、この力は神様がくれたものだと思った。この力で悪い奴らを懲らしめろってね。でも――殺したり、傷つけたりしちゃ悪人どもと同じだ。せめて、悪どい真似をして稼いだ金を盗み出して、鼻を明かしてやろう。そう思ったのさ」

フランシスは、『笑う猫』にかける言葉が見つからなかった。彼女は小さな身体に辛い過去を背負いながら、それでも確固たる

信念の持ち続けたのだ。一体、誰が彼女を裁けるというのか。

スオウは、内心いたく感心していた。ここまでの辛い境遇にありながら、その精神はいささかも歪んでいない。そしてその聡明さたるや、大人も舌を巻くほどだ。盗みという手段に訴えたのは確かにいけないが、信念を貫くさまには尊敬すら覚える。やがて、沈着なスオウには珍しい、ある種の感情がふつふつと湧き上がり始めた。

と、遠くから多数の人間の足音が響いてきた。がちやがちやという金属音から、武装していることがうかがえる。しかし、フランススたちはその場を動かない。なぜなら、それもライオネルの作戦の内だったからだ。

足音はどんどん近づき――程なくしてフランススたちは、百人からのならず者たちに取り囲まれた。

「……『鼠捕り』に、鼠がかかったようだな」

スオウが、小さく呟いた。

怒り

フランシスたちを、十重二十重に取り囲むならず者たち。手に手に剣、棍棒を携え、中にはマスケットを担いでいる者もいる。

「先生、そいつが例の怪盗ですかい」

ならず者の一人が、スオウに声をかける。

「ん、どういうことだい？ あんたら、騎士団じゃ……」

『笑う猫』が、怪訝そうな顔をスオウに向ける。彼女は、スオウが用心棒としてならず者たちの間に潜り込んでいることを知らない。そして、そのならず者たちがライオネル経由でもたらされた情報によって、ここに集まってきたことも。

「しっ、ちょっと静かにしてて。いまいい所だから」

フランシスが、『笑う猫』の口をふさぐ。

「……ああ。しかし、こいつらがなかなか手強くてな」

スオウが、フランシスたちを顎でしゃくって言う。

「なるほど、騎士団に先を越された、ってわけか」

と、人垣の奥から野太い声が上がった。それを聞いたならず者たちが道を開け、人垣に谷間ができる。奥から進み出たのは、一人の中年の男だ。中背ながらがっしりした体つきで、眼光鋭く、頬の大

きな傷跡が凄みを醸し出している。

「――アルフォンソ！」

「君、知ってるの？」

「ああ。『バジリーリオ党』の大頭目さ。あんたとも名前くらいは聞いたことがあるんじゃないかい？」

「いや、ごめん。僕田舎者だから」

「……………」

バジリーリオ党とは、アマディアスを中心に活動する犯罪組織だ。

もとは、ブリーディア以外の国の出身者が、少数派ゆえの迫害から身を守るために集まった互助組織だったのだが、やがて密輸に手を染めるようになり――いつしか、あらゆる悪徳を一手に引き受ける一大犯罪組織に成長してしまった。

フランシスたちの目の前にいるのは、そのバジリーリオ党の最高幹部の一人だったのだ。

「ため池建設のとき、キャンベル商会に頼まれてあたいたちに嫌がらせをしたのも、この連中さ」

「ため池……？ ああ、そういえばそんな仕事もあったな。『笑う猫』さんよ、お前えもあそこの貧乏人の一人だったか」

『笑う猫』はぐっと歯軋りして、アルフォンソを睨む。

「最低。あんたら、大の大人がそんなセコいことして恥ずかしくないの？」

堪りかねたクリスティが怒鳴る。

「威勢のいい姉ちゃんだ。だが、所詮この世は金だ。金さえ貰えり

や何でもやる、つてのが俺たちの信条でね。おかげで『お客様たち』にも満足頂いてるぜ」

実に下卑た笑いだった。フランシスも、怒りを隠せない。

「それで、今回は金を貰ってこの子の口を封じようって言うのか！」
「ほう、そこまで察しが付いているとはな。だが俺たちも、騎士団員を殺す危険は冒したくねえ。兄さん方、何も見なかったことにしてこの場を去ってくれば、お互い幸せなんだがな」

笑みを浮かべながら、アルフォンソが懐柔を試みる。しかし、言葉の端端に凄みを利かせたそれは、ほとんど脅しに近いものだった。フランシスたちは、沈黙する。

「……聞き分けが良くて助かるぜ。おい、捕まえろ」

アルフォンソの合図とともに、数人のならず者が『笑う猫』に駆け寄ろうとする。が、スオウの横をすり抜けようとしたとき——スオウの手刀が閃く。瞬きほどの間に、その男たちは意識を失った。

「お前え、どういうことだ」

味方と思っていたはずのスオウの裏切りに、アルフォンソが眉間に皺を寄せた。

「……どうもこうもない。こういうことだ」

スオウがそれまで纏っていた外套を脱ぎ捨てて。中から現れたのは、騎士団の制服姿だ。

「なるほど、凄腕の用心棒が、実は騎士団の犬だったってことか。

舐めた真似をしゃがるぜ」

「……舐めた真似をしているのは、貴様らの雇い主だろう」

「ふん、お偉方が金を使って自分の悪事をもみ消すなんざ、どこの国でも良くあることさ」

スオウの声色には、ほんのわずかにだが怒気がこもっていた。それは、フランシスとクリスティ以外には気付かれない程度のものだったが。

「なあ、兄さんよ。お前さん方がここで抵抗しても、犬死になるだけだ。騎士団は殺しについては追求できても、『あのお方』に手が及ぶこたあねえ。それに、騎士団にもそいつを殺せて指令が下ってるそうじゃねえか。ここでそいつを俺たちに引き渡そうがすまいが、結果は同じだぜ」

「……あのお方、と言ったな」

「つまり、この男を締め上げれば、黒幕が分かるってことですね」

「ぷぷっ。でも、笑えるよね。親玉自ら頼まれてもないのにノコノコ出てきて、自分からこっちが聞きたいことを喋ってくれるんだから。まさに小物って感じ？」

フランシスたちのやり取りに、アルフォンソは顔を引きつらせる。眉毛は小刻みに上下し、こめかみの血管がピクピクと動く。

「……てめえら、いい度胸をしてやがる。騎士団殺しはあとあと面倒だと思って優しくしてやりゃあ、付け上がりやがって」

「その台詞、ますます小物っぽいよね」

クリスティの言葉に、とうとうアルフォンソの堪忍袋の緒が切れた。

「もう勘弁ならねえ！ 殺っちまえ！ 罨り殺しだ！！！」

アルフォンソの掛け声とともに、ならず者たちが一斉にフランシスたちに迫る。

「……フランシスはその娘を守り、クリスティは俺に続け。体力は問題ないな？」

「もちろん！ あいつらまとめてぶっ飛ばしてやるんだから！」

「僕も大丈夫です！」

「……よし。行くぞ」

スオウが走り、クリスティがそれに続く。

「……勘弁ならぬ、と言ったな」

誰にも聞こえないような小声で、スオウが呟く。

「……それは、俺の台詞だ。思い知るがいい」

草原を襲う竜巻の如き、凄まじい暴力の嵐が、スオウとクリスティの周囲に吹き荒れる。

大乱闘

「でええーっ！っ！」

クリステイが得物を一薙ぎ。ただそれだけで、数人の男たちがまとめて吹き飛んだ。

この日のクリステイの得物は、大振りの頑丈な木剣だ。木剣といえど、竜人の手で振るわれればそれは必殺の武器となりうる。これでも、クリステイは手加減をしているのだ。

クリステイに群がるならず者たちは、まるで風の前の枯葉。そのさまは、まさに荒れ狂う暴風だ。

スオウは、いつぞやの間者との戦いと同じく、素手であった。流水のような動きで、鮮やかに男たちの攻撃を避ける。一人のならず者の手首を捕えるや、後ろ手に思い切り捻り挙げる。いつものスオウならば肩の関節を外す程度で済ませるのだが、この日のスオウは一味違った。手首を捻る腕に一気に力を入れると、男の肩、肘、手首の関節が一度に破壊されてしまった。

「てめえ！」

背後に、マスケットを構えたならず者が。カチリという撃鉄を上げる音を聞き分けたスオウは、常人離れた反射速度で射線から飛びのく。パァンという発砲音と、短くくぐもった悲鳴。同士討ちだった。

「……このような乱戦で銃を使う馬鹿がどこにいる」

背後から迫る棍棒を振り返りもせずに避けると、スオウはその手

を掴んで一捻り。ならず者の体は空中で3回転し、地面に激しく激突する。相手の力に自らの力を上乗せした、見事な体術である。

一方フランシスは、戦闘開始と同時に『笑う猫』の手を引き走り出した。クリスティと同様の木剣を一振りし、数人の男を吹き飛ばす。包囲に穴ができたところで、一気に囲みを抜け出した。

「さあ、僕の後ろに」

「どうしてそこまでしてあたいを庇う？ あんたら一体何者なんだろう？」

「僕たちは――ただの通りすがりの騎士団員。ちょっと特殊な力は持っているけどね」

悪戯っぽい笑顔を見せて、フランシスはふたたび迫るならず者たちと対峙する。

スオウとクリスティの周りには、たちまち倒れ伏す男たちで一杯になった。その実力を目の当たりにし、ならず者たちの間に動揺が走る。

「な、何をビビってやがる！ 数で押し切れ！」

アルフォンソの怒号に急かされるように、ふたたび男たちがスオウ、クリスティに迫る。

「あんたらみたいな腰抜け野郎、何人集まったって同じだよ！！」

クリスティの手には、さらにもう一本の木剣。二本の剣を振るい、ならず者たちを蹂躞するさまは、もはや暴風どころの騒ぎではない。その剣先が巻き起こす風圧のみで、男たちを吹き飛ばさんばかりの

勢いだ。

「……向かってくるなら、容赦はせん」

数人をまとめて蹴散らすクリスティとは対照的に、スオウは一人ひとりに着実に痛手を与えていく。ある者は関節技で骨を砕かれ、またある者は強烈な投げで意識を失う。合間に繰り出される掌底の一撃は、あるいはあばら骨を、あるいは顎を微塵に砕いていく。かつて竜の頭部に向けて放ったものと、同種の技である。

『笑う猫』を庇いながら戦うフランスに斃された者も含め、既に80以上のならず者が地面に転がっていた。残されたバジャーリオ党の手勢は、30人を切っている。

「……まだ、やるか」

スオウがジロリと一睨みすると、男たちは身を竦ませた。

「ひっ、こ、こんな化け物相手にしてられるかよ!」

一人の男が、スオウたちに背を向けて逃げ出した。それが引き金となったか、残りの男たちも、堰を切ったように逃走を開始する。

「てめえら! 何をしてやる! 逃げんじゃねえ、つてこら!」

アルフォンソの怒声も、恐怖心に駆られたならず者たちにはもはや何の意味もなかった。蜘蛛の子を散らすように、男たちは逃げ去っていく。その場に残されたのは、とうとうアルフォンソ一人となっていた。

じり、とスオウがにじり寄る。さすが大頭目と言うべきか、完全

に腰は引けているものの、アルフォンソは逃げようとしなない。

さらに、一歩間合いが詰まる。

「く、くそがああああーっ！」

スオウの身体から立ち昇る殺気に耐えかねたのか、アルフォンソが弾かれるように突撃した。長剣を大上段からスオウの脳天に向けて一気に振り下ろす。しかし、そんなやぶれかぶれの攻撃が、スオウに通じるはずもない。剣は空を切り、鈍い音を立てて地面を叩いた。

すかさず、スオウの手刀が走る。ただの一撃で、手首の骨が碎かれた。アルフォンソが悲鳴を上げる暇もなく、次は裏拳の一撃。顎の骨が碎け、何本もの歯が宙を舞う。止めは、腹部への横蹴り。アルフォンソの身体は地面と平行に数ヤードも吹き飛ばされ、壁に当たってようやく止まった。

「……さて、今回の依頼主を吐いてもらう。さもなくば——わかるな」

息も絶え絶えなアルフォンソに、スオウがナイフを突きつける。

「ひいつ、は、はいむはん（財務官）の、チェンハ（バ）レンらんしゃく（男爵）ら！ こ、これいいいらろ、もうはんへん（勘弁）ひてくれ！」

顎が碎け、まともに発音することもままならないアルフォンソの言葉を、スオウが鼻で嘲笑う。

「……貴様は今まで、命乞いをしてきた相手に赦しを与えたことがあるのか？」

「ほ、ほれは……」

「……必要なのは聞かせてもらった。貴様はもう用済みだ」

全くの無表情が、かえって凄みを出している。

「怖っ！ あれじゃどっちが悪役かわかんないよ」

クリステイも思わず呟くほどであった。

と、スオウがフランシスと『笑う猫』のほうを振り返った。

「……間接的にはあるが、お前の父を殺める原因となった男だ。好きにするがいい」

そう言つて、スオウは『笑う猫』にナイフを手渡した。

『笑う猫』は、ナイフを握る自らの手を、じっと見つめる。逡巡ののち、彼女はゆっくりとアルフォンソに歩み寄り始めた。

「ひいっ！」

アルフォンソは、尻餅をついたまま後ずさる。『笑う猫』は、大きくナイフを振りかぶると、投擲。――ナイフは、アルフォンソの首筋スレスレを飛び、後ろにあった立ち木に突き刺さった。

アルフォンソは、泡を吹き股を濡らして気を失った。

「なんだ、やっぱり情けない奴だったね」

クリステイが呆れて肩を竦める。

「……これで、良かったんだな」

「ああ、さっきも言っただろ。たとえ復讐のためでも、誰かを殺す

ようなことはしない。死んだ父ちゃんだって、そう言うに決まっているさ」

「……良く言った」

それは、スオウの期待通りの答え。改めて、感心を禁じえないスオウであった。

「でも、逃げなくて良かったの？ 僕もそこまで余裕があったわけじゃないし、君なら混乱にまぎれて逃げられたんじゃないかな？」

フランシスの言葉に、『笑う猫』は少し考えるしぐさを見せる。

「あんたらの姿を見ると、逃げる気がなくなっちゃった。あんたらになら、捕まってもいいって思えたんだ」

そう言って、彼女は両手を差し出した。

「ほら、早く逮捕してくれよ。世間を賑わせた怪盗『笑う猫』だ。あんたらも大手柄だろ」

「本当にいいの？」

「ああ。騎士団にも、あんたらみたいな立派な男がいるってわかっただけで満足さ」

「あたしは女なんだけど……」

とその時、遠くから多数の馬蹄の音が響いてくるのを、フランシスたちは聞いた。

「警備隊かな？」

「あの騒ぎだっただし、そうだろうね。スオウ、どうする？」

「……少将の家に戻る。あとのことは少将に任せようと思う」

「な、なんだい、逮捕するんじゃないのか？」

事情を飲み込めていない『笑う猫』の手を引き、3人は走り出した。

エピローグ

ところは変わり、ライオネルの邸宅。

『笑う猫』を連れて帰還した3人は、事件のあらましをライオネルとパトリシアに語った。

「父親が被験者で、父親には能力が出なかった……？ そんなことがあるなんて……統計も何もかもやり直さなくちゃ……」

と、なにやら考え込んでしまったパトリシアをよそに、ライオネルが『笑う猫』に語りかける。

「ふむ、おおよその事情は理解した。さて、『笑う猫』くん。君の持つ悪事の証拠、私に預ける気はないか？」

「まあ、この3人があんたは信用できる、って言うからあたしも信じないこともないが――でも、下手につつくと、あんたの身が危うくなるんじゃないかい？」

権力者や、それに群がる金持ちたちの悪事を暴こうとすれば、強引にもみ消されて口封じに遭ってしまふ。『笑う猫』の心配は、そこだった。

「ふふっ、心配はいらんよ。まあ、見ていなさい。数日中に、この街に吹き溜まった塵芥を綺麗に掃除してみせよう」

口髭を指で整えつつ、ライオネルが不敵に笑う。

「自信満々なのは結構だけど、あたいはどうなっても知らないよ。――で、あたいはどうしたらいいんだ？ この3人に捕まるのなら

いいけど、他の連中に捕まるのは納得いかないよ」

「それについても考えがある。当面は、私の家に滞在してもらいたい」

「まあ……今さら逃げる気もないし、別にいいけど」

「よし、決まりだな。さあ、私は小腹が空いた。ひとつ夕食と洒落込もうじゃないか」

一週間が過ぎた。

ライオネルの働きは迅速かつ効果的だったらしく、財務官チェンバレンは即刻本国に強制送還。他にも悪徳商人が多数摘発され、何人もの高級官僚が誅首された。バジャーリオ党も、大幹部アルフォンソをはじめとして多数の逮捕者を出し、その勢力は大きく削がれることになった。

まるで魔法のような手腕に、フランシスたちも驚くほかなかった。フランシスたちは与り知らぬところであるが、ライオネルの卓越した働きは、レナードの存在によるところが大きかった。絶大な人気と知名度、そしてコルドア総督を越える時まで言われた発言力を持つレナードの威光は絶対で、これには誰も表立って逆らえなかったのだ。

さらに数日後、フランシスたちはシラーズの本部に向けてアマデウスを発つことになった。

出発前、警備隊のフレイザー大尉に帰還する旨を報告に行った4人。一連の逮捕劇で、警備隊は上へ下への大忙しだった。

「誰がやったかわからんが、一度に大量の悪事を暴いてくれたおかげで忙しくてかなわん。まったく、余計なことをしてくれたものだ。そう思わんか、お前ら」

フレイザーが、意味ありげな視線を4人に送る。一連の動きが、

ライオネルによって起こされたものだということは、警備隊でも暗黙の事実だった。そして特別に招聘された対竜部隊のメンバーと、彼らがライオネルの邸宅に滞在していたという事実。フランシスたちが一枚噛んでいるということは、薄々感づいているのだろう。

「……ご苦勞は察する。一体、誰の仕業だろうか」

スオウがそら惚けて見せた。

「ふん。気に食わん連中だ。あのレナードの部下なのだから、仕方もないか」

聞こえないように言ったつもりだろうが、竜人の優れた聴覚ゆえに、フランシスたちにはフレイザーの呟きは筒抜けであった。

「とにかく、俺は忙しい。用件が終わったのなら、とっとと帰れ」

追い出されるように第七騎士団本部を出た3人を待っていたのは、往路で御者を務めた下士官と、一台の立派な馬車だった。

「さっき皆さんを迎えに行こうとしたら、警備隊の人がやって来て、馬車を取り替えてくれるって。凄いですよ、モーガン中尉。こいつは、前の馬車より随分上等だ。しかも、こんなたくさん食料まで」

4人は、顔を見合わせた。笑顔が広がる。

「……フレイザー大尉に、感謝せねばな」

「うん、実は結構いい人だったんだね」

態度にはおくびも出さなかったが、フレイザーなりの感謝の印な

のだろう。

そんなフレイザーに心中で感謝しつつ、4人はシリーズに向けて旅立った。その旅路は、アマディアスへの往路に比べ、格段に快適なものとなったのは言うまでもない。

3日後、フランスたちは対竜部隊本部に到着した。レナードの執務室で、報告を行う。

「おおよそのあらましは一足先に伝え聞いているが……よくやってくれたな。ご苦労だった」

「……出張期間が長引き、申し訳ない」

「ライオネルの頼みだったからな。それに、お前たちの力がなければこう上手く行かなかっただろう」

「……それは、どうだろうか。フレイザー大尉なら、自力でどうにかしたかもしれん」

フレイザーの名を聞き、レナードが少し驚いた表情を見せる。

「やっぱり、お知り合いだったんですか？」

「ああ。私が騎士団に入った当時の先任でな。私もライオネルも、随分しごかれたものだ。まあ、今思えば——彼にとってはかわいげのない後輩だっただろうな」

遠い目をしながら、レナードが昔を振り返る。

「そうか、彼が警備隊長だったとはな。さぞかし嫌味を言われただろう？」

「はい。あたしなんか我慢するのが大変でしたよ」

「でも、正義感の強い、真面目な人でした」

「そうだろう、そうだろう」

とその時、執務室の扉がノックされた。

「ダイアナ・ヘイワード少佐です」

「おお、入りましたまゑ」

ダイアナが敬礼をして入室する。その背後には、小柄な人影が付き従っていた。

「ほう、それが例の……うむ、挨拶したまゑ」

ニヤリと笑うレナードに促され、ダイアナの影から小柄な人物が飛び出した。

「見習いとして入団しました、デージー・ロックウェルです！　よろしく願います！」

元気よく敬礼して、自己紹介するその人物。赤茶けた髪に、そばかすの浮いた顔。にっこり笑う口元に、特徴的な八重歯。髪は切りそろえられ、すっかり小奇麗な印象になったものの――その姿は見間違えるはずもない。

「え！？　ど、どうして君がここに？」

フランシスが素っ頓狂な声を上げたのも、無理ならぬことであろう。その人物は、3日前にアマディアスで別れたはずの、かつて怪盗『笑う猫』と呼ばれたその人だったのだから。

「ライオネルのオッサンに頼まれたんだ。力を貸してくれないか、って。なんでも、優秀な子飼いの密偵が欲しいって話でね」

竜人の身体能力と、用心深さ・聡明さを兼ね備えた彼女のことだ。密偵にはうってつけの人材である。

「まずは訓練のために、当面こちらで預かって欲しいと要請されまして。我々には、竜人を手元に置くことを断る理由はありませんから」

ダイアナによれば、全てライオネルの指図だったらしい。

「でも、それならあたしたちと一緒に帰って来ればよかったじゃん。わざわざ先回りまでしてさ」

「まあ、皆を驚かせようと思ったのだろう。ライオネルのやりそうなことだ」

レナードが苦笑する。

「……デイジー、それがお前の本名だったのか」

「ああ。『笑う猫』は、もう廃業さ」

「でも、いいんですか？ 盗みの罪は……」

「大丈夫だよ、兄ちゃん。そのあたりは、オッサンが上手くやってくれるってさ」

「いわゆる司法取引です。情報提供と引き換えに、罪の軽減を行う。それに、怪盗による被害者は、その全てが失脚・逮捕されたか、ダグラス少将の働きかけにより被害届を取り下げました。もはや、『笑う猫』の罪を問う者はなくなったのです」

「まあ、そういうことさ。これからよろしくな！」

そう言って、『笑う猫』改めデイジー・ロックウェルは、ひまわりのような笑顔を浮かべた。

こうして、
辺境騎士団・対竜部隊に新たな仲間が誕生したのであ
った。

プロローグ

「ふむ、どうしたものか」

対竜部隊隊長、レナードが唸った。彼の頭を悩ませているのは、辺境騎士団本部から送られてきた一通の指令書である。

「正式な指令書ですので、本来拒否することはできないのですが……」

副官のダイアナが、語尾を濁らせた。「本来は拒否することなどできないが、レナードならば話は別」と、言外に含ませているのだ。

「通常の指令ならば、きっぱりと断ることもできよう。しかし、今回の指令書は『コレ』だからな」

レナードが、執務机にその書類を投げ出す。『わが国にとって、きわめて重要な鉱物資源が存在する可能性あり。早急な再調査を求む』、とある。かなり強い調子が伝わってくる文面であった。

ことの起こりは、つい最近騎士団本部に送付した、とある竜の生態調査報告書である。

竜の討伐は、百人単位の人員と相応の装備を投入する、大規模な作戦だ。討伐作戦を行う際は、まず対象となる竜の綿密な調査が行われる。そして、その結果を辺境騎士団本部が吟味。討伐作戦が実行可能と判断されれば、正式に認可が下りる。こうした段階を経て、初めて作戦が実行されるのだ。調査の際にはその土地が耕作に適しているか、また何らかの資源があるか、ということも同時に調べられ、開拓の優先度が低いと判断された場合は、討伐作戦は後回しに

される。

「『討伐には困難が予想される』と申し送りしたにも関わらず、この指令ですか」

「うむ。本部がここまで必死なのも珍しいことだ」

調査の対象は、とある丘陵地帯に生息する竜だった。起伏が激しい地形に加え、強固な地盤。砲撃やトラップに不向きな地形であり、竜の撃破には困難が伴うと報告書には記された。耕作には全く適さない土地であることだし、この竜の討伐は先送りになるだろう、レナードもダイアナもそう考えていた。

しかし、問題は報告書とともに送った岩石のサンプルだった。

「ダイヤモンド金剛石、か。あんな土地から採れるとはな」

金剛石の美しさは昔から知られていたものの、あまりの硬く加工が難しいため、そこまで珍重はされていなかった。しかし、近年、旧大陸において画期的な加工法が考案され、その価値は一気に跳ね上がった。

ブリーディアはコルドア産出の金によっておおいに潤ったが、一方で大量に流入しすぎたために金価格が下落傾向であった。そのため、コルドア総督府には、金に代わる新たな収入源を確保せよ、という本国からの強い要求が度々寄せられていた。

今回の指令は、そうした本国の意向を受けてのことなのだろう。

「ここで議論しても仕方ないじゃろ。ほれ、指令書をよこせ。とつとと済ませてくるわい」

ここで、部屋の隅に気配もなく控えていた老人が口を開いた。70前後と思われる高齢ながら、腰は曲がらず肉体には張りがある。

すっかり白くなった髪を短く刈り込み、口髭と顎鬚も同じく真っ白だ。右目には、大きな眼帯。

「……仕方がないか。しかしアルフ老、前回の調査から帰還してまだ何日も経っていないだろう。今回はスオウに任せてゆっくり休まれているかがか」

「ふん、心配は無用じゃ。これしきのことで参っちまうほど老け込んではおらん」

アルフと呼ばれた老人は、そう言って胸を張る。

「ニューマン殿、それは結構ですが。今回の調査には、アマディアスから派遣される地質学者を随伴させろ、とのことです。到着までは数日を要しますので、その間はごゆるりとなさってください」

「うむ。それに、アマディアスに出張に行っていた連中もじきに戻るころだ。顔を出してみるといい」

「おお、そういえば新人が入ったという話じゃったな」

「先日の炎竜の騒動は知っているだろう。期待の新人だ」

「それは楽しみじゃわい」

老人は、ニヤリと笑い、部屋を出て行った。

「しかし、琥珀竜アンバードラゴンとはな。手ごわい相手だ」

「はい。戦わなくて済むのなら、それに越したことはなかったのですが」

「金剛石が産出される、というのが間違いであってくれば助かるのだがな」

しかし、それが叶わぬ願いとなることを、二人はまだ知らない。

老兵登場

アマディアスでの出張から戻ったフランシスたちは、元怪盗少女・デイジーを伴い、本部基地内を練り歩いていた。デイジーに基地の案内をしながら、仲間たちに彼女を紹介するためだ。

「お、そいつが例の怪盗少女か」

練兵場にて、サイラスとエドガーにデイジーを紹介しようとしたフランシスは、サイラスに出鼻をくじかれる形になった。

「あれ、もう知ってたんですか」

「ああ。話は聞いてるぜ」

「ええ、知らなかったのあたしただけだったの？」

ライオネルのちょっとした悪戯に引っ掛けられたのは、フランシスたちだけだったようだ。

「どうでもいいけど、怪盗呼ばわりはやめてくれよ。あたいはもう足を洗ったんだから」

「ハッハッハ、すまねえな。俺はエドガー・ノリスだ。エドガーでいいぜ」

「俺はサイラスだ。よろしくな」

「ああ。基礎訓練が終わるまでの短い間だけど、よろしく頼むよ」

デイジーが、二人と握手を交わす。

「さて、新人が入ったからには早速今日アレをやらなきゃな」

サイラスが、ニヤリと笑った。

「アレってまさか……」

「ああ。もちろん歓迎会だよ」

「……子供に酒を飲ませるつもりか」

スオウが眉をひそめる。

「酒場に行ったからって酒を飲まなきゃならねえわけじゃねえだろう。あの店は料理だってなかなかだしな」

あの店とは、かつてフランシスの幼馴染、ナタリーが勤めていた酒場のことだ。フランシスも数度訪れており、その料理の味は保証済みだ。

「まあ、あたしたちは飲ませてもらうけどね」

と、クリスティが身も蓋もないことを言う。

「でも、今日は僕たちは休暇だけど、サイラスさんたちは通常勤務ですよ。少佐に見つかったらまずくないですか？」

出張から戻ったばかりのフランシスたちは、レナードの配慮で翌日いっぱいまで休暇扱いとなっているため、門限を気にする必要がない。一方、急な話なので、サイラスやエドガーが休暇申請を出しているはずもなかった。

「心配するなって。バレないようにやるのも醍醐味って奴だ」

フランシスの歓迎会の際、ダイアナに手酷く折檻されたにもかか

わらず、サイラスは全く懲りた様子がない。それどころか、フランシスには規則破りを楽しんでいるような節すら感じられる。サイラスは、時折こうした子供っぽい一面を見せることがあった。

「何だか面白そうな話じゃないか」

さすがは元怪盗、帰りは忍び込まなければならぬという話を聞きながらも、デイジーは乗り気であった。

「本人もこう言っていることだし、決定——ひゃっ！」

と、クリスティが突如悲鳴を上げる。——音も気配もなく忍び寄った何者かが、クリスティの胸を背後から揉みしだいているのだ。

「なんじゃ、相変わらず育つとらんもう」

「~~~~~っ！」

その男の言葉に、クリスティの顔が見る間に真っ赤になる。ぐつと強く拳を握り締めると——

「余計なお世話だっ！！！」

「ぐほっ！」

振り向きざま、怒号とともに右の拳を振りぬいた。拳は男の腹にめり込み、男は土煙を上げて地面を転がる。10ヤードほど吹き飛ばされたところで、ようやくその身体は停止した。

「ちょ、クリス！ それはまずいだろ！」

傍目からみても、かなりの本気度がうかがえる一撃だった。下手

すれば、死んだかもしれない——そう思って、フランシスが男に駆け寄った。が、男はけろりとした様子で立ち上がる。小柄で白髪、右目の眼帯が特徴的な老人だった。

「まったく、相変わらず荒っぽい奴じゃ。少しは老人を労わらんかい」

「いい年してエッチなことばかりしてるお爺ちゃんに言われたくないよ！」

「減るもんじゃなし、胸の一つや二つ、揉ませてくれてもいいじやろうに」

「ええと……大丈夫みたいですな」

クリスティの本気の一撃を喰らっても立ち上がれる耐久力に、騎士団には似つかわしくない高齡。そして何より、竜人であるフランシスたちにさえ、全く気取られることなく接近した技術。心当たりは一つだった。

「もしかして、ニューマン大尉ですか？」

「いかにも、わしがアルフレッド・ニューマンよ。そういうお前さんは、新入りじゃな」

「はい。フランシス・ファウラーです。よろしくお願いします」

「うむ、なかなか礼儀正しい若者じゃのう。しかし、わしのことはアルフでいいぞ」

この老人こそ、第二次東方遠征で竜人となった一人であり、部隊の最高齡。竜の生態調査の専門家、アルフレッド・ニューマンその人だった。

「あと、そっちのちっこいのは？」

アルフレッドが、デイジーを見て言う。

「ほら、アマディアスの怪盗騒ぎの件、聞いてないか？」

と、サイラス。

「おお、あの……ライオネルの小僧も、おかしなことを考えよるわ」
アルフレッドにかかれば、ライオネルも小僧呼ばわりであった。

「それについては同感だね。あたいはデイジーだ。よろしくな、爺さん」

「うむ、よろしくな。……ときにお前ら、わしのいないところで飲みに行く相談なんぞしよってからに」

この老人も、飲みに行くことに関して乗り気のようだ。

「すまねえな。もちろん爺さんにも声をかけるつもりだったんだぜ」
「まあ、わしも先ほどまでレナードに呼ばれていたところじゃからな」

ちなみに、隊長であるレナード・パーシヴァルをレナード呼ばわりできるのも、部隊ではアルフレッドのみである。

「……調査に不備でも？」

スオウは怪訝顔である。アルフレッドがレナードに呼び出されるのは、調査に関連する案件があるときだけだ。

「うむ、まあ……それはおいおい話すでしょう。とにかく、飲みに

行くならさっさと行くぞ！ ほれ、お前らもとつと支度せんか」

そう言うと、アルフレッドはずんずん歩いて行った。

「元氣な人だなあ……クリス、アルフさんっていつもあんな感じなの？」

「まあ、あんな感じだね。元氣なのはいいんだけど」

「……調査隊の任務では、長期間にわたって荒野に身を潜め、声すら立てられない状態が続くこともある。基地にいる間、多少羽目を外すのは勘弁してやってくれ」

同じ調査隊であるスオウだからこそのわかることもあるのだろう。アルフレッドに代わって弁明する。

「爺さんの言うとおり、俺たちもとつと準備しようじゃねえか」

エドガーに促され、一同は身支度を整えるため自室に向かうのだった。

酒場に向かう道すがら、アルフレッドは前回の調査の顛末について語った。

「琥珀竜、ですか」

「あたしは見たことないなあ。エドガーは？」

「俺もねえなあ。少なくとも、俺が部隊に入ってから一度も出てないはずだぜ」

「うむ、東方遠征でも討伐記録はかなり少ないからのう。黒鉄竜よりも数は少ないじやろう」

「強いんですか？」

「手ごわい相手ではあるんじゃないが……強い、というよりは倒しにく

い、というのが正しいじやろう」

「どういうこと？ お爺ちゃん」

「……人が増えてきた。この話はまた今度にしてはどうだ」

スオウが話に割り込んだ。基地は郊外にあるため、街に近づくにつれ人通りが増えてくる。作戦に関わることなので、あまり人に聞かれない方がいい、という配慮だった。

「しかし……あんたら、本当に竜と戦ってるんだな。アマディアス育ちのあたいにはなんだかピンとこない話だったんだが」

「フロンティア育ちの僕だって、あの時までは竜なんて自分と関係ないものだと思ってたよ」

「なんだい、あの時って」

「ふふっ、デイジーが騎士団入りした理由も珍しいだろうけど、フランの場合はもっと凄いだよ」

「クリスの入団の経緯も、結構凄いと思うけど……」

「面白そうな話じゃないか。聞かせてくれよ」

互いの身の上などを話しながら、7人は酒場に向かうのだった。

歓迎会ふたたび

いつもの酒場に到着した一行。

『紅い雄牛亭』という名のその酒場は、フロンティアの豊かな大地で育まれた鳥獣の肉料理が名物となっている。

「おじさん、とりあえずビールね！ 甕で！」

フランススの歓迎会のときのごとく、ビールが甕で注文された。

「あととにかく肉だ！ 豚の骨付きばら肉の炙りを一本丸ごと頼むぜ」

「エドガー、もっと早く出てくるものも頼めよ。鴨の燻製サラダとピクルスの盛り合わせ、たまねぎのフライも頼む」

「お前ら、この季節は野鳥や野獣の肉じゃろうが。雉か野兎はないかの？」

「……鶏の砂肝のコンフィ。それとナッツ入り田舎パンを」

「えーと、デイジーは葡萄のジュースでいい？」

「あたいは別に酒でもいいんだけどね」

常人よりもはるかに旺盛な食欲を持つ竜人が7人も集まったこともあり、注文だけで大騒ぎである。店主は、「お客さんたちにかかったら店の食材が食い尽くされちゃうよ」と言いながらも、大量の金を落としてくれる常連の来店に嬉しさを隠せない。

「お爺ちゃん、乾杯の音頭取ってよ」

「うむ、では僭越ながら……ゴホン。えー、本日は晴天で空も高く、このようなよき日に、新たな仲間を迎えられることは実に喜ばしいことじゃ。万人に一人と言われる竜人を、偶然にも迎えられたのも

全ては神のお導きというもののじやろう。折しも、コルドア発見より70年の節目の歳じゃ。第一次入植でコルドアに入ったわしも、もう69歳。思えば色々なことがあったが……」

「爺さん、前置きが長げえよ」

「まったく。歳をとるとこれだからいかん」

「しかも、途中から自分の話になってるし」

「やかましいわい！ ……とにかく、新たな仲間を大いに歓迎するぞ。乾杯！」

皆の声が合わさり、タンブラーがぶつかり合う音が店内に響いた。

「くうくう、美味しい！」

エドガー、クリステイは早くも杯を干し、二杯目を注いでいる。アルフレッドも、高齢ながら飲むペースは速い。甕一杯分のビールは、あれよあれよという間に底をついてしまった。

サイラスはいつものごとくワインを追加し、アルフレッドとスオウは度数の高い蒸留酒をやりはじめる。注文した料理も次々運ばれ、宴はますますの盛り上がりを見せた。

「よく飲むね、あんたら。あたいの育ったアマディアスの下町も酒飲みばかりだったけど、こんなに飲むのはいなかったよ」

デイジーは、あまりの飲みっぷりに呆れ顔だ。

「僕もはじめは驚いたけど……でも、この身体はあんまり酔っ払わないらしいからね」

フランシスが、ビールをちびちびと飲みながら答える。

「……大人ばかりが盛り上がっているようで、すまん」

「いいってことさ。あのでかいの、エドガーが言ってた通り、料理は美味しいね。……ところでスオウ、あんたの体術は凄かったね。ああいうの、どこで教わったんだ？」

「……父祖伝来の格闘術だ。俺は、父に教わった。極めれば、徒手空拳で巨像をも屠る、と言われている。俺はまだまだ未熟だが」

「へえ。詳しく聞かせてくれよ」

「……元は、虐げられた民が、自衛のために編み出したものだ。得物を取り上げられた状況でも、素手や身近にありふれたものを武器にして、多数の敵を征圧できるようになることを旨としている」

いつになく饒舌なスオウ。自らの技術に誇りを持っているということもあるが、酒がスオウの口を軽くさせているのだろう。

「……使い方によっては、相手に傷を負わせることなく無力化することができる。アマディアスでの一件では、俺も少しやりすぎてしまったが」

怒りに任せ、ならず者たちに無用な怪我を負わせたことを、多少なりと後悔しているらしい。クリスティに言わせれば、あんな連中はあれでもやり足りないくらいだ、とのことであったが。

「凄いな。でも、それってあたいの仕事にぴったりだな。今度教えてくれよ」

訓練が終われば、デイジーは密偵として働くことになる。素手で相手を制圧できるスオウの格闘術は、デイジーにの仕事に向いていると言えるだろう。

「……それは、構わんが」

目を輝かせるデイジーに押されるように、スオウが承諾する。

「なんか、すっかりスオウに懐いちゃったみたいだね」

その様子を見ていたクリステイが、フランスに話しかけた。

「うん、そうだね。アマディアスでのスオウさんは大活躍だったもんなあ」

「まるで、劇の主役みたいだったもんね」

アマディアスでは、デイジーを助けて、100人からの悪人相手に大立ち回りをしたスオウ。デイジーの目には、彼が英雄のように映ったのかもしれない。

「なんじゃ、まだビールなんぞやっとするのか。男ならこいつをやってみい」

不意に、アルフレッドの声がかかる。突き出されたグラスには、薄い緑色をした液体が注がれている。フランスは、恐る恐る口をつけた。

「……ブツ、ゲホッ、ゲホッ！ これってなんなんですか？」

強いアルコールと、甘さと苦さが混在した独特の風味に、フランスは思わずむせ返った。

「こいつは薬草酒じゃ。ブランデーに薬草を漬け込んだものでな、土地によっては薬や気付けに使われる。しかし、一人前の男ならこのくらい平気で飲み干せるようになるとの」

「でも、それそのまま飲むのなんてお爺ちゃんくらいじゃん。普段はお菓子や料理の風味付けに使う、ってここのおじさんが言ってたよ」

「戦場では、このくらい強い酒がいいんじゃないよ。さっき言ったように気付けになるし、身体が温まるのでな。特に、わしらのように長期にわたって野に潜まねばならん任務に付く場合、この種の酒はまさに命の糧となるんじゃない」

そう言いつつ、アルフレッドはぐびぐびと薬草酒を飲み干す。

「ほんと、元気な年寄りだよー」

「ふん、若い者にはまだまだ負けんぞ。『こっちの方』でもな」

アルフレッドは自らの下半身を指差して言う。すかさず、クリスティの平手打ちが飛んだ。アルフレッドが、椅子から転げ落ちる。平手打ちの瞬間、とっさに手にしたグラスをテーブルに置くことができたあたりは、この老人も竜人であるという証拠だろう。

酒を守る余裕があるなら平手打ちのほうを防げばいいのに、とフランシスは思ったのだが、口にはしなかった。

「あいたたた……まったく、お前さんは容赦がないのう。酷いと思わんか、フランシスよ」

「今のはアルフさんが悪いと思いますけど……」

まるで懲りていない様子に、フランシスも呆れるしかない。そのうちクリスティに撲殺されるんじゃないかと、本気で心配になる。アルフレッドはというと、今度は女給にちょっかいを出そうとして、お盆で殴られていた。サイラスが歳をとったらああなるのでは、などと失礼な想像をするフランシス。

「全く、娑婆にいる間くらいはサービスしてくれてもいいじゃろうに」

フランシスは、スオウの言葉を思い出す。「任務中は声を出すこともできない状態が続く場合もある」と。この老人がここまでではしゃいでいるのは、その反動なのかもしれない。

「調査隊の仕事って、大変なんですか？」

以前スオウに聞くも、あまり多くの言葉が返ってこなかった質問をしてみる。

「うむ、まあ……地味で地道な任務じゃよ。前線で身体を張ってるお前さんたちに比べりゃ、取るに足らん仕事じゃ」

「そんなことないですよ。調査隊がいなければ作戦が成り立たない、って少佐も言っていましたし、パティも調査隊の集めた情報が随分役に立ってるって」

「ほう、嬉しいことを言ってくれるの。お前さん、ここの連中に比べりゃ随分礼儀がなっとる」

「まあ、フランシスの場合、少々老成しすぎてる感はあるがな」

「若いうちは、もっととはっちゃけちまってもいいと思うぜ」

と、サイラスとエドガーが茶々を入れる。

「そうですね……村でも、よくつまない奴って言われましたし」

「フランのそういうところ、あたしは嫌いじゃないけどね」

「……うむ。フランシスの奥ゆかしさは美徳と言える」

「ふむ、気に入った。近頃稀に見る若者じゃ。……そうだ、お前さん今度調査隊に参加してみんか？」

「えっ、僕がですか？」

突然の提案に、困惑するフランシス。

「うむ。ちょうど、再調査が命令された案件がある。なに、相手は動きがのろくて耳もあまり良くない。初心者にぴったりの任務じゃ」

フランシスの肩をがっしり掴んで、アルフレッドが返答を迫る。

「でも、僕には通常の訓練が……」

「何ごとも経験じゃよ。一の現場は、百の訓練なんぞよりよほど身になるぞい」

酒臭い息を吐きながら、アルフレッドが顔を近づけてくる。フランシスは、クリステイラに助けを求めようとするも、皆は「もう諦めろ」という表情だ。

「よし、決まりじゃな。レナードの奴にはわしから言うておく。スオウは今回は休んでいていいぞ」

こうして、フランシスはなし崩し的に調査隊に参加することになってしまった。

余談。

門限を大幅に越えて基地に帰りついたフランシスたちを待ち受けていたのは、鬼の形相をしたダイアナだった。新人が入ったことから、こうなることを予測していたのだろう。

デイジーは、皆に言われる前に空気を読んでいち早く逃亡。さすがの逃げっぷりを見せた。

結局、この日捕まったのはエドガー。強烈な鉄拳制裁を受けたのは、言うまでもない。

調査隊（前書き）

11月15日、加筆修正を行いました。中段やや下の部分です。

調査隊

数日後。

フランシスは、デブラ台地にいた。シラーズから100マイル以上離れた場所で、独特の縞模様のある切り立った岩山が林立する険しい地形だ。赤みがかった岩山と、まばらに生える樹木の緑がコントラストを織り成し、雄大な景観を生み出している。

なぜここにフランシスがいるのかといえば、アルフレッドに強引に勧誘されて調査隊に参加することになったからである。この台地の奥に生息する琥珀竜を観察しつつ、鉱物のサンプルを採取する地質学者のサポートをするのが、フランシスたちの任務だ。

この調査隊に随行している地質学者は、ブライアン・チョーサーという中年の男である。学者という言葉にフランシスが抱いていたイメージと違い、がっしりとした体格と野生味のある風貌を持つ、精力的な男だった。パトリシアによれば、「地質調査は実地が命だから、あのくらいタフな男でないと地質学者は務まらない」とのことだ。

今回の調査隊は、リーダーのアルフレッドにその補佐役のフランシス、地質学者チョーサーとその部下3名、そして対竜部隊の隊員15名という構成で行われる。まず、竜の縄張りで見られる範囲から大きく外れたところに、一次キャンプを設置。そして、次に縄張り範囲ギリギリの地点に二次キャンプを設置。近隣の町から必要物資を運伝（※）し、最前線のアルフレッドたちに届ける仕組みだ。

フランシスたちは、二次キャンプ地点で準備を整えているところだった。この任務では、通常の制服ではなく、黄土色に染め上げら

れた特別誂えの制服を着用する。地面の色に溶け込んで、竜の目を欺くためである。スコップや折りたたんだ天幕を背囊にくくり付け、保存食と飲み水を背囊に詰め込んで準備は完了。そこで、アルフレッドから最終的な説明が行われる。

「まずは、予め伝えた手はずどおり、わしとフランスが先行する。安全が確認できたらフランスを伝令に出すので、チョーサー博士たちが動くのはそれからじゃ。それと、撤退の指示には絶対に従うこと。よいな」

「われわれはどのくらいここで待機していればいいのかね？」

と、チョーサーが質問する。

「ふむ。相手の竜の行動にもよるが……長くて10日というところじゃろう」

「その間、このキャンプ付近を調査してもいいかね？」

「ここより西に入らなければ問題あるまい。……質問は以上か？」

よし。フランス、行くぞ」

「はい」

荒涼とした大地を、二人は歩き出す。

「いいか、調査任務では耳が頼りじゃ。わずかな音も聞き漏らすでないぞ」

「わかりました」

それきり、アルフレッドは口を閉ざした。基地や酒場で見せたひょうきんさはすっかり影を潜め、まるで別人のような雰囲気だ。険しい眼差しで前を見つめるその横顔からは、確かにこの老人が歴戦の兵士であるということがえる。

険しい地形をほぼ無言で歩き続ける二人。交わされた会話は、必要最小限のことのみだった。この調子なら、基地に戻った際に多少羽目を外したくなる気持ちもわかる、とフランシスは思う。

撤収時の目印になるように、所々の樹木に赤い布をくくりつけながら進む。野営を挟んで半日ほど歩いたころ、アルフレッドがふと足を止めた。

「フランシス、聞こえるか」

「はい。……あっちですね」

小さく声を交わす。

アルフレッドは、スオウがよくやるように、伏して地面に耳をつける。

「ふむ。あの岩山の向こうに、開けた平原と水場があるはずじゃ。

……足音が乱れておる。おそらくは、狩りの最中じやろう」

琥珀竜は、水場に集まる獣や鳥を捕食しているのだとアルフレッドは言う。

「少し急ぐぞ。この距離ならば、さほど足音を気にする必要もあるまい」

そう言うと、アルフレッドは駆け出した。高齢ゆえに、フランシスほどの速度は出せないものの、常人に比べればはるかに速いスピードで、身軽に岩場を駆け抜ける。アルフレッドのペースに合わせるようにしながら、フランシスが後に続く。

やがて、岩山が途切れ、視界が開けた。その平原にはいくつかの湖があり、樹木の植生も周り比べて濃い。そして、平原の中央に

は、その名の示すとおり全身から琥珀色の光沢を放つ、巨大な姿が。このデブラ台地に王者として君臨する、琥珀竜であった。

「止まれ。……この距離を保てば、おおよそ気取られることはない。大声を出さなけりゃ、話しても大丈夫じゃ。まずしばらくは、観察するんじゃ」

アルフレッドが望遠鏡を取り出し、フランシスもそれに倣う。

琥珀竜の体長は、およそ60フィートほどだろうか。炎竜ならば中型からやや小型という大きさだが、アルフレッドによれば琥珀竜の中ではかなり大きい、とのことだ。全身を覆うのは、光沢のある琥珀色の鱗。その一枚一枚が縦長で鋭角なため、全身が黄金の剣で守られているようにも見える。後頭部から斜め上に向かって伸びる、一本の角が特徴的だ。

「なんだか綺麗ですね」

フランシスが、見たままの素直な感想を漏らす。

「ふむ。旧大陸の好事家の間では、あの鱗がとてつもない値段で取引されるらしいの。……む、動くぞ。既に狩りは終わっていたようじゃな」

琥珀竜は、踵を返して平原の奥に向かって歩き始めた。

「向こうの岩山の間に、奴のねぐらがある。平原の北から先回りするぞ」

「はい」

狩りを終えて満腹になったためか、竜の歩みはゆっくりだ。フラ

ンシスたちは、大きく回りこむようにして竜に先回りする。

やがて、切り立った岩山の間の少し開けた場所で、竜は足を止めた。けだるそうに地面に横たわる。

「運がいいぞ。どうやら、ちょうどこれから休眠期に入るようじゃ。今回の任務、思ったよりも早く終わりそうじゃわい」

「休眠期？」

「うむ。竜という生き物は、10日ほどの周期で活動期と休眠期を繰り返す習性があるんじゃ。何せあの凶体じゃ。無駄な体力を使わんようにするための行動じゃろう」

無防備に横たわる琥珀竜。これほど悠然としていられるのも、コルドア生物界の頂点に君臨するものの特権だろう。人間以外に、竜に傷を付けうる動物などいないのだから。

「完全に休眠期に入るまでは、もうしばらくかかるはずじゃ。それまではここで待機じゃな」

1マイル以上離れた岩陰から、遠巻きに竜を観察すること数時間。竜は完全に動きを止めた。ゼイ、ゼイという深い呼吸音が聞こえ、それに合わせてゆっくりと背中が上下する。

「眠ってしまったんでしょか」

「それが、そうでもないんじゃ。『休眠期』とは言っても、人間や他の動物がするような睡眠状態に陥るのはそれほど長い期間ではないようなんじゃよ」

アルフレッドによれば、休眠期の竜は浅い睡眠と覚醒状態を繰り返しているのだという。

「遠目からは眠っとるんだか起きとるんだか、判別が付かぬところがある。東方遠征の頃は、眠っとるものと油断して、不用意に攻撃を仕掛けた結果大痛手を被った、なんてこともあったの」

「じゃあ、まだ危険なんですか」

「いや、あの状態に入れば、下手に刺激をしない限り竜は動かん。1マイル圏外ならば、まず安全じゃよ」

完全に竜の行動が止まったのを確認し、アルフレッドがフランシスに指示を下す。

「よし、お前は学者先生達を呼んでくるんじゃ。お前の足なら、片道1時間もかかるまい。あの竜の様子なら、帰りは馬を使っても大丈夫じゃぞ」

「了解しました」

unnecessary 荷物をアルフレッドに託し、フランシスは走り出した。目印の赤い布を辿りながら、全力で駆ける。本気を出した竜人の脚力をもってすれば、徒歩で半日以上かかった道のりもあっという間だ。程なくして、二次キャンプに辿り着いた。

「チョーサー博士、安全が確認されました」

「おお、思ったより早かったな。では、早速案内を頼む」

チョーサーとその助手たちを伴い、フランシスがアルフレッドの元に戻ったのは数時間後のことだった。

「大尉、例の鉱石を採取した場所へ案内願いたい」

「うむ、こちらじゃ」

アルフレッドが案内した先は、岩山の間を流れる小川のほとりで

あった。到着するや、チョーサーたちは早速調査を開始する。付近の石くれを虫眼鏡で覗いたり、岩壁をつるはしで突いて欠片を採取したり。小1時間ほどで、調査は終了した。

「あれ、もういいんですか？」

「うむ、われわれがここに赴いたのはほんの確認のためだからな。

それに、これ以上詳細な調査となると、大規模な人材と資材を投入しなければならぬ」

「結果はどうだったんじゃ？」

「金剛石の鉱脈がある可能性は十分にある、と言えるだろうな」

「へえ、石を見るだけでそんなことがわかったやうですか」

「古くて硬い地盤で、特定の岩石が見られる場所、という条件に当てはまっているからな。しかし——あくまで経験則に基づく判断であって科学的な根拠に乏しいのが、学者を名乗る者として恥ずかしいところではある」

様々な鉱物が、地面の中でいかにして生成されるのか。それが解明されていないため、鉱脈の有無は過去の事例の積み重ねによってしか判断できないのだという。

「よし、さっさと撤収するぞい。いかに休眠期とはいえ、こんな場所に長居は無用じゃ」

時刻は、夕方にさしかかろうとしている。荷物を手早くまとめ、フランススたちは二次キャンプ地点に向かうのだった。

(※) リレー方式で受け渡しすること

老人との対話

フランスたちが二次キャンプ地点に辿り着いたのは、日はどっぷりと暮れ、秋の星座が夜空を彩り始めたころのことだった。

時間が時間ということ、ここで一泊し、翌日基地に向けて出発するということになった。休眠期ゆえ竜の危険性がない、ということなので、焚き火を起こして皆でそれを囲む。フランスとアルフレッドにとっては、一日ぶりとなる温かい食事となった。

「ところで、博士よ。重ねて聞くが、金剛石が出る可能性が高い、というのは確かなんじゃない」

瓶に詰めた例の薬草酒をちびちびやりながら、アルフレッドが尋ねる。

「可能性が高いことが確かだ、というのもおかしな表現ではあるが……そう、報告はするつもりだが」

その言葉を聴くと、それきりアルフレッドは押し黙り、なにやら考え込んでしまった。フランスは、干し肉と幾許かの根菜を煮込んだスープをすすりながら、そんなアルフレッドの様子に気付く。

「アルフさん、どうかしたんですか」

「うむ、金剛石が採れるということは、あの琥珀竜の討伐作戦が実行されるのも時間の問題じゃ。少し思うところがあったの」

「思うところって？」

「ふむ……ときにフランスよ、お前は竜と戦うことについてどう思っどるかね？」

藪から棒に質問を返され、フランシスは言葉に詰まる。しかし、持ち前の思慮深さを発揮し、じっくり考えたのち答える。

「戦ってる最中は怖いやら興奮するやらで、正直何も考えられません。でも、改めて考え直してみると——少し、竜が可哀想だな、とは思います」

「それはどうしてじゃ？」

「竜は、もともとこのコルドアで静かに暮らしていただけのはずです。それを、よそからやってきた僕たちが、自分たちの領土を広げるために徒に狩り殺している。そんなふうに思えてしまつて……国から給料を貰っている身で、こんなことを言うもあれなんですけど」

「しかし、コルドアに限らず、人は獣たちを駆逐して自らの領域を広げてきた。その歴史をなかったことにはできません」

「それは僕にもわかりますし、仕方のないことだとは思っています」

フランシスとて、竜を討伐することによって獲得された土地で育った身だ。それに、コルドアという新天地がなかったら、フランシスの両親は旧大陸で野垂れ死にしていたかもしれないのだ。

しかし、先日の間者騒動のことを思い出す。あのとき暴走した竜は、わが子を奪われた怒りで我を忘れてしまった結果、フランシスに討たれることになったのだ。竜にどれほどの知性があるのかはわからないが、わが子を思う気持ちはどんな動物でも同じはず、とフランシスは考える。

「僕が、この手でしてきたこと——僕が殺したのはまだ2匹だけ——それを、決して忘れないようにしたい。そして、上手く言えないけど——農夫が大地に感謝するように、竜たちにも感謝の気持ちを持たなければいけない。そんなふうに思うんです」

「……お前さんの考えは、人としてごく真っ当なものじゃ。だがしかし、あまり大っぴらに公言してはいかんぞ」

場合によっては反逆的思想ととられかねない、とアルフレッドが苦笑する。

「しかし、新入りがお前さんのような人間で安心したわい」

「どういうことですか？」

「軍隊や、あるいは国家そのもの——人の集まりってのは、図体が大きくなればなるほど人間性ってもんが失われ、思考が硬直していくものじゃからな。しかしお前さんなら、その中にあっても自分の考えを貫けるじゃろうて」

基地や酒場ではしゃいでいたときとは、まるで別人のような顔を見せるアルフレッド。

物凄く過大な評価をされている気がして、フランシスが赤面する。

「思えば、コルドア開拓以前のエウレシウスは、末期的と言っている状態じゃった。各国とも増える人口を支えきれず、国は疲弊し税金は上がる。コルドアという新天地がなかったなら、おそらくは大きな戦乱が起こったじゃろう」

歴史の体験者であるアルフレッドの言葉には、えも言えぬ重みがあった。

「わしとて、徒に竜を狩るのは本意ではなかった。レナードたちほかの東方遠征の従軍者たちも、多かれ少なかれ同じような感情を抱いていたじゃろう。しかし、旧大陸で人間相手に戦うか、それとも新大陸で竜と戦うか。人間には、二つの選択肢しかなかったんじゃないよ」

焚き火に照らされたアルフレッドの横顔。竜を探して荒野を歩い

ていたときは、歴戦の兵の顔であつた。しかし、今はまるで賢者だ。
フランスにはそう見えた。

「竜を殺すことに対して、罪の意識を持てというわけではない。しかし、まさしくお前さんが言ったように、自分たちのしてきたことは忘れるべきではない。竜たちの屍を乗り越えたところに、今の自分たちの生活があるということをやな」

「はい、肝に銘じます」

「わしは、新入りが入るたびに、『竜に対しての敬意を常に忘れるな』、と口を酸っぱくして教え込むんじやが、お前さんには必要ないようじやの。……うむ、お前さんのような若者がいれば騎士団も安泰じや、わしも安心して調査任務に専念できるわい！」

薬草酒をあおり、アルフレッドが豪快に笑う。

フランスは、てっきり「若い者に任せて自分は身を退こう」といった言葉が続くものと思っていたので、アルフレッドの言葉に驚きを隠せない。この老人、齢69にしていますます意気盛んであつた。

翌朝。フランスが目を覚ましたとき、アルフレッドは基地とは逆方向、つまり竜がいる方向に歩き出そうとしていた。

「アルフさん、どこへ？ 基地に戻るんじゃないんですか？」

「うむ、あの琥珀竜を相手にした討伐作戦が行われるのは確実、と昨日言ったじやろう。いまし、あの竜を監視して特長や習性を掴んでおこうと思つての」

「一人ですか！？ 僕も行きますよ、今支度を……」

「ああ、よいよい。お前さんは貴重な戦力じや。わしは、もはや戦場では役に立てんからの。こんな地味な仕事はわしに任せて、はよ帰って戦に備えるがええ。では、皆によろしくな」

そう言うと、アルフレッドはスタスタと歩いて行ってしまった。
その背中を心配そうに見つめるフランシスに、撤収作業中の下士官
が声をかける。

「少尉、あの人なら大丈夫ですよ。なんせ、補給なしで山中に2ヶ
月って無茶な任務も、楽にこなしてしまう人ですから。あのモーガ
ン中尉ですら値を上げそうになったって言ってましたけど、大尉は
平気な顔して帰ってきましたからね」

3週間後。下士官の語ったとおり、アルフレッドは平気な顔をし
て基地に帰還した。竜の行動パターンなど、膨大な情報が記された
資料を片手にである。これにはフランシスも呆れるやら驚くやら。
しかし、一番強く感じたのは、この小柄な老人に対する尊敬の念だ
った。

作戦会議

対竜部隊本部棟、会議室。

隊長レナードとその副官ダイアナ、そして数名の士官が、手元の資料を見ながら頭を悩ませていた。

議題は、もちろん件の琥珀竜討伐作戦についてである。資料には、アルフレッドが入手してきた琥珀竜の詳細な情報や、その生息地の地形図などが記されている。

「……現場の地形、竜の特徴については以上です。いかがいたしましたか、閣下」

一通りの説明を終え、ダイアナがレナードに意見を求めた。

「ううむ、やはり厳しいと言わざるを得ないな。スコット、どう思う」

レナードが指名したのは、砲兵隊長スコット・ベイカーだった。

「こう起伏が激しくては、どうにも射線が取れませんな。それに、この竜の縄張りまで大量の砲を運び込む時点で困難が予想されます。組み立て式のカタパルトかバリスタなら、比較的運搬は簡単ですが、射線が取れないことには変わりません」

「まあ、そうだろう。……サムソン、お前はどうか」

次に指名を受けたのは、工兵隊長サムソン・ノックス。

「この報告書の通りだと、我々としても打つ手があまりないというのが正直なところですね。地盤がかなり固いと思われるので、落と

し穴を掘るのも大仕事だ。谷間に誘い込んで発破をかけようにも、この地盤を崩すほどの爆薬を仕込むには作業にかかる時間が大きすぎる。そんなことをしている間に、竜に気付かれちまう。ワイヤーカネットを使ったトラップくらいなら、何とかなりそうですが」

砲兵にしても工兵にしても、竜の生息地での作業は設営の速度が命だ。ちんたら作業をしているでは、竜に気付かれて先制攻撃を受けてしまう。デブラ台地の険しい地形と強固な地盤は、砲撃やトラップとの相性が最悪だった。

「休眠期を狙い、少佐の狙撃で一撃必殺を狙う、というのは？」

一人の士官が、手を挙げて提案した。

「それができれば楽なのだが……実は、『吼狼』と琥珀竜の相性はよろしくない。まあ、100ほどの距離まで近づければ話は別だが。しかしそれだと、初弾で決められなければ少佐の身に危険が及ぶことになる」

と、レナードが却下。

「東方遠征時も、琥珀竜を相手にするときには、基本的に物量で押し切る作戦をとっていたからな。ここまで険しい地形で琥珀竜を相手取るというのは、私も経験がない。……さて、どうしたものか」

ここで、ダイアナが口を開いた。

「やはり、できうる限りの砲と長射程兵器を運び込み、ここ——竜が狩場としている平地にて総攻撃をかける。いかにも安易な作戦ではありますが、これしかないのでは。ベイカー少尉、いかがか」

「ふーむ、こちらの高台から曲射で射程に入れば、何とかならんこともないでしょう。命中率は期待しないでいただきたいが」

スコットが、地図を示しながら答える。

「それしかない、か。まあ、これで駄目なら一旦退いて、改めて本部のほうに物申すでしょう。幸い、この琥珀竜の足は速くないとアルフ老の報告にもある。撤退は難しくないはずだ」

レナードの一声で、結論が出た。

「では、そのように。——明日、ふたたび会議を行いますので、各責任者はそれまでに計画書を作成すること。では、解散」

士官たちが退出し、レナード一人になったところで、壁にもたれかかって佇むアルフレッドが口を開いた。

「なかなか、大変そうじゃのう」

「そうだな。……アルフ老、気配を殺して会議に紛れ込むのは止してくれ。言ってくれば、ちゃんと席を用意したのに」

いつの間にアルフレッドが会議室にいたのやら、レナードにさえわからなかったらしい。

「細かいことは気にするでない。で、勝算はどのくらいと踏んでおる」

「五分五分といったところだろう。先ほども言ったように、無理なら諦めるという選択肢もある」

「それでは上の連中が黙ってしまい。金剛石という存在に、すっかり目が眩んでおるようじゃからの」

「まあ……ライオネルに頼んで、上手いこと言いくるめてもらおうさ。あの男のことだ、上層部の弱みの一つや二つ、握っているだろう」

アルフレッドが、白い髭を撫でながらしばし考え込み、口を開く。

「よし、今回はわしも行こうではないか」

「いや、あなたは調査から戻ったばかりだろう。しかも、他の者を先に帰しての単独行だ。あまり無理はしないでもらいたいのだが」

「若い者にはまだまだ負けん、といつも言っておろうに。それに、新入り、フランスの戦いぶりも見ておきたいのでな」

「ふむ、フランスはアルフ老にも気に入られたか。……わかった、いいだろう。それにしても、あなたが前線に立つのは何年ぶりのことだろうか」

「確か最後が60になった年のことじゃから、もうすぐ10年じゃないか」

「どうする？ 久しぶりに『吼狼』を撃ってみるか？」

レナードが、銃を構えて引き金を引くしぐさを見せる。

「いや、あれは今はダイアナ嬢ちゃんのものじゃ。わしは、観測手でも務めさせてもらうことにするよ」

「なるほど。少佐や若い隊員たちに、勉強させてやってくれ」

「さて、この老いぼれに教えられることなどあるじやろうか」

そう言いつつも、アルフレッドはニヤリと勝気な笑みを浮かべた。

同日、お昼時を少し過ぎたころ。

フランスは、午前中の訓練を終え、食堂に来たところだった。そこでは、パトリシアが何やら文字がびっしりと印刷された紙の束を読みながらサンドイッチを齧っている。

邪魔をしてはいけないと思い、フランスが少し離れた席に着席しようとする、逆にパトリシアのほうから声がかかった。

「あら、フランもお昼？ 随分遅いわね」

「うん。今日もサイラスさんにしごかれちゃって」

そう言いながら、フランスはパトリシアの向かいの席に着く。手にしたお盆には、山盛りの料理が載せられている。腹を空かせた竜人向けの、特別メニューだ。

「相変わらず竜人は^{あなたたち}凄^{すごい}い食欲ね。見てるこっちが胸焼けしそう」

「こればかりは僕自身の意思ではどうにもならないからなあ。僕たちばかりこんなにくさんご飯食べて、他の人に申し訳ない気はするけど」

「いいのよ、あなたたちの戦力評価を考えれば、十人分食べたってお釣りがくるわ」

「そんなもんかねえ」

話しながらも、パトリシアは手元の紙束を物凄い速度で読破していく。

「ねえ、何を読んでるのか聞いていい？」

持ち前の好奇心が鎌首をもたげてきたフランスは、遠慮がちにパトリシアに尋ねた。

「ああ、これ？ さっき本国から届いた論文。三ヶ月前にアカデミィで発表されたものね。……ここは竜の研究にはもってこいだけど、最新の情報が手に入らないのが難点よねえ」

「ふうん。どんな内容なの？」

「『進化論』に関する論文ね。生物種の多様性を、長期の世代交代の中で起こった形質変化の積み重ねによる分化、という考えで説明しようとする学説」

「うーん、ごめん。ちょっとよく分からないや」

部隊に入ってからには様々な座学を受け、隊の蔵書なども読み込んでいるフランスだが、専門用語を並べられては混乱するのも無理はない。

「そうね。例えば、うちの騎士団で使ってる軍馬とあなたの村で使ってた農耕馬、違いはわかる？」

「そうだな、軍馬はすらっとしていて足が速い。農耕馬はずんぐりしていて力強いって感じかなあ」

「そうね。で、同じ『馬』でもどうしてそういった違いが出るのか。その理由を考えたことはある？」

「品種が違うから、という答えを期待しているわけではないんだよね」

学問、特に自然科学というものを学ぶ上で大事なものは、原因と結果、その関係を探ること。パトリシアがいつだったかそう言っていたのを、フランスは覚えている。

「そういうものだ、としか考えてなかったよ」

「そういう違いがなぜ起こるのか、それについての仮説がこの『進化論』なのよ」

「へえ、面白そうだね」

「聞きたい？」

頷くフランスを見て、ニヤリと笑うパトリシア。教えたがりの虫が騒いできたらしい。

「あ、でも食事しながらでもいいかな。お腹がペコペコでさ」
「もちろん。……さっきの馬のたとえ話で説明するわね。ここに、全く同じ品種の馬の集団がいるとするわね。この集団が、平地の広がる草原地帯と、凹凸が激しい湿地帯に、それぞれ別れて生活すると考えてみて」

フランシスが、その光景を思い浮かべる。

「擬態したりして上手く身を隠せない馬が身を守るには、天敵よりも速く移動できなければならない。足が速い馬が多く生き残る、というのわかるわよね」

「うん」

「草原に暮らす馬は、足が速ければそれでいい。でも、湿地帯に暮らす馬はどうかしら」

フランシスが考える。湿地帯で、足場が悪い。子供の頃、耕したばかりの畑を駆け回り、大人にこっぴどくしかられたことを思い出す。柔らかな地面の上を走るのは楽しかったが、相当に足が疲れた記憶がある。

「足腰が強くなっちゃいけないかな」

「そうよね。それで、草原では足の速い馬、湿地帯では足腰が強い馬が生き残りやすい。そして、それぞれの特徴が親から子、子から孫に受け継がれて……これを遺伝って呼ぶんだけど、その遺伝を繰り返して少しずつ特徴が変化した結果、全く違う二つの馬が誕生した。そう考えるのが、進化論者なの。まあ、これはサッパリと単純化した説明で、実際のところはもう少し込み入った話になるけどね」

「なるほどなあ。人間でも、出身地によって随分違うもんね」

たとえば、ブリーディア出身であるフランスたちと、西方の血が流れるスオウとでは、顔のつくりからしてかなり異なっている。

「まあ、それなりに説得力のある説なんだけど……全ての項目に『ただし、竜類を除く』と付け加えなければならぬのが厄介よねえ」

パトリシアが嘆息する。

臓器の構造、骨格など、あらゆる面で竜は他の動物とかけ離れている。そのため、この学説を適用することができないのだ。

「まあ、謎に包まれた存在だからこそ、研究意欲が掻き立てられるのだけど。……せめて、あの卵から竜の遺伝について何かわかれればいいんだけどね」

「ああ、あの卵ってまだ研究班が持つてるの？」

あの卵とは、間者騒動の際回収した卵のことである。

「ええ。万が一にも孵化する可能性があるから、温かくして保管してるわ。おかげで、割って中を確かめたい、という欲望と戦う毎日よ」

ふたたびパトリシアが嘆息。

「アルフレッドやスオウなら、卵を抱いた竜を長期にわたって観察できたかもしれないのに」

「うん、うちが先に発見できていれば良かったんだけど。ごめんよ」
「別に、あなたたちを責めているわけじゃないのよ。悪いのは、どこかのバカなんだし。……あーあ、本当にあの卵が孵ってくれたらいいのに」

そう言って、パトリシアはテーブルに突っ伏す。フランシスは、苦笑してそれを眺めるしかなかった。

作戦会議（後書き）

本文中で触れられている進化論について。

この世界ではまだ提唱されたばかりの学説であり、

示された事例は正しいものではありませんのでご注意ください。

作戦準備

討伐作戦の出発前日。

いつものごとく、主だった士官と竜人兵の面々が集まり、作戦会議が行われた。

「手元の資料を見てください。まずは、スタンフォード博士より琥珀竜についての説明があります。琥珀竜との戦闘経験がある者は少ないでしょうから、不明な点があれば随時質問するように」

ダイアナの前置きが続いて、これまたいつものごとくパトリシアの解説が始まる。

「琥珀竜。その名の通り、琥珀色の鱗に包まれた竜ね。鱗の硬さは炎竜と同程度、足はあまり速くないわ。正直、サンプルが少なすぎて私からもあまり説明できることはないのだけど。……最大の特徴といえるのは、ブレスを吐かないことね」

ブレスを吐かないのなら比較的安全な相手なんじゃ、と幾人かの者は考えたに違いない。そうした表情を読み取ったのか、ダイアナが注意を促す。

「油断禁物です。ブレスがなくとも、この竜には大きな武器があります」

「大きな武器、ですか」

先日琥珀竜の調査に赴いたフランシスも、それは初耳だった。フランシスが見たのは、狩りを終えてねぐらに戻ろうとするところと、休眠期に入ろうとしているところだけだったのだから、仕方のない

ことではある。

「それは、雷撃と呼ばれているわ。その名の通り、雷に良く似た現象を、ある程度自在に操ることができるのよ。まあ、私も実物を見たことはないのだけど」

「実際の落雷ほどの威力はないのですが、常人が喰らえば気絶は免れません。竜人兵でも、痛手を被るのは避けられないと聞いています」

「一発の威力は大したことなくても、ブレスと違ってわずかな予備動作で発動できるのが脅威であると言えるわね」

「それって避けられないの？」

クリスティが、挙手して質問した。部隊一のスピードを誇る自分ならば、という考えがあつてのことだろう。

「空の雷を見たらわかりそうなものだけど……正確に測る手段はないけれど、一瞬で何十マイルという距離に届いてしまうスピードよ。あなたたちの反射速度でも、放たれるのを視認してから避けるのは絶対に無理」

「射程は数十ヤード。この距離に立ち入るのは基本的にわれわれ竜人兵のみですが、そのわずかな予備動作を見落とさないようにしないと、確実に雷撃の餌食となつてしまいます。ニューマン大尉」

ダイアナに指名されたアルフレッドが壇上に立つ。こと竜の生態に関しては、レナードでもダイアでもパトリシアでも、この老人に敵うものはいない。

アルフレッドは首を曲げ、下を向いてみせる。

「こうじゃな。こう、項垂れたあと、すつと頭を上げる。頭が上がった瞬間、雷撃が放たれる。基本的に雷撃は顔の正面に向けて飛ぶ

から、この動作に気が付いたら、竜の正面から飛びのくことじゃ」

アルフレッドが実演するさまを、フランシスはしっかりと心に刻み込む。

「それと、もう一つの特徴が、身体全体を『電気』で覆っているということね。電気ってものは知らない人がほとんどだろうけど、詳しい説明は省かせてもらうわ。大事なのは、この電気に触れてしまうと、雷撃と同じように雷に打たれたような衝撃を受けるということ。雷が金属目掛けて落ちる、ってことは知ってる人も多いと思うけど、特に金属武器にはこの電気が流れやすいの」

「つまり、俺たちが近接攻撃をしようとしても、その電気とやらに阻まれちまう、ってことか？」

挙手して質問したのは、サイラス。

「そうね。雷撃ほどの威力ではないらしいんだけど、本気の一撃を打ち込めなくなるほどには衝撃を受けるそうよ。このあたりは、隊長から直々に聞いた話だから間違いないはず」

「そいつは、厄介だな」

エドガーが唸る。全力で打ち込むことができないと、いかに竜人兵といえどその鱗を破ることはできない。

「……少佐の『吼狼』なら？」

今度はスオウが挙手した。

「それも難しいのよ。弾丸の貫通力は入射角、つまりこう——弾丸が対象に命中したときの角度」

パトリシアが、右手の親指を開いた左の掌にぶつけるしぐさをしてみせる。

「この入射角が垂直に近ければ近いほど、貫通力は高まるわ。少佐が狙撃する際も、必ずこの入射角を気にしているはず」

パトリシアの言葉に、ダイアナが首肯する。

「この竜の身体に流れる電気ってのは、徹甲弾の弾芯の金属に微妙に影響を与えるの。そして、着弾をほんのわずかに狂わせる」

「つまりは、私が完璧な入射角を保って狙撃したつもりでも、着弾にわずかなズレが生まれ、弾丸が弾かれてしまう。そんなことが起こり得るのです」

「まあ、貫通力頼みでない、弾自体に重さがある大砲なら、影響を受けられない程度のもものんだけど」

トラップや砲撃に向かない土地であるのは資料を見れば明らかだし、竜人兵の近接攻撃や『吼狼』による狙撃も困難。隊員たちは一様に、いったいどうするんだ、という困惑の表情を浮かべる。

「この程度の作戦しか考えられなかったこと、恥ずかしく思います……地図のこの地点、わずかに開けた場所に竜をおびき寄せ、運びうる限りの砲で一斉攻撃。……この作戦、成功率が低いだろうことはパーシヴァル閣下もご承知です。無理をせず、早めの撤退をするようにとのことです」

そう話すダイアナの唇は、わずかに歪んでいる。一見冷静なタイプに見えるダイアナだが、その実かなりの負けず嫌いだということ、フランスも薄々気が付いていたし、多くの隊員が知っている。

失敗を見越した作戦を伝えるというのは、さぞかし悔しいことだろうとフランシスと思う。

「おおよその説明は以上となります。他に質問のある者は……では、解散。各員、明日の出発に備えるように」

ダイアナの言葉に、隊員たちは席を立って退室していく。

「でも、なんか悔しいなあ。あたしたちなんにもできないってことでしょ」

歩きながら、クリステイが漏らす。

「うん。何かできることはないのかな」

「金属製の武器は駄目だ、って話だったように思うが。ゴドフリーの親父に相談してみるか」

「お、そいつは名案かもしれないねえな。俺も、撤退の支援以外なにもできないまま帰ってくる、なんざ我慢ならねえ」

そうしてフランシスたちが向かったのは、基地内にある工場だ。工場長ノゴドフリーを見つけて、相談を持ちかけた。

「金属以外の武器？ そんなものはねえな」

返ってきたのは、いたって単純な言葉だった。

「ええ、何かないの？ ほら、石とかさ」

クリステイが、不満げに口を尖らせる。

「相手が普通の獣なら、石斧か何かでも十分有効だろうよ。しかし、お前たちの相手は竜だ。いくら硬い石を使っても、石には伸びたりしなかったりする性質がねえから、竜の鱗にぶつけりゃあっという間に碎けちまう。武器に使われる素材が鋼に統一されてるのは、結局のところ鋼が一番武器に向いているからなんだよ」

「そうですか……お仕事にお邪魔して、済みませんでした」

踵を返して立ち去ろうとするフランスたちを、ゴドフリーが呼び止める。

「待て、待て。金属以外の武器はないと言ったが、『琥珀竜向け』の武器がないとは言ってねえぞ」

そう言うゴドフリーは、なにやら怪しい笑みを浮かべている。

「作った方がいいが、琥珀竜自体がなかなか出てこんで蔵入りになるとる武器がある。それを持って行け」

ゴドフリーの笑顔に一抹の不安を覚えるフランスたちだったが、とりあえずはその武器を見せてもらうことにする。

「中距離から有効な打撃を与えられないか、ちゅう発想で作ったのがこいつらよ」

そう言うゴドフリーが示した一角には、奇妙な武器が並んでいた。たとえば、巨大な金属の輪。輪の外縁は鋭く研がれた刃になっており、内縁にはいくつかの取っ手が付けられている。たとえば、鎖の付いた棘のある鉄球。鉄球が人の頭ほどの大きさであることを除けば、一見フレイルのようにも見える。しかし、鎖の先は棒でなく把手になっていた。どれも、武器としてはあまり一般的でない形

状であり、中には本当に武器なのかということさえ怪しいものまである。

「……面妖な」

スオウが思わず呟いたのも、無理ならぬことであった。

「喜べ、まだ誰も使ったことのない武器ばかりだ。言ってみりゃ初物だぜ」

ガハハ、と豪快に笑うゴドフリー。

「俺たちを試作品の試し切りに使おうって腹か、ゴドフリー爺さん」

サイラスが眉をひそめる。

「そう言ってくれるな。兵器開発には失敗がつき物なんでな。実戦で試してもらえると大いに助かるんだよ」

「……じゃ、じゃあ、とりあえずいくつか借りていきますね」

「おう、帰ったら使い勝手や威力についてたっぷり聞かせてもらうぜ」

こうしてフランスたちは、いくつかの怪しげな武器を携え、作戦に赴くことになった。

野営地にて

ところは、デブラ台地。

かつて、フランシスとアルフレッドが調査任務に赴いた際、二次キャンプ地点として選んだ場所である。

時刻は夕刻。現在、この地点には琥珀竜討伐のための中継基地が設営され、大量の物資が集積されていた。この日はここで野営し、翌朝早くに出発する予定である。

「少佐、モーガン中尉から伝令であります！」

先発隊として、一足先に琥珀竜の監視についているスオウから、繋ぎが入った。

「読み上げてください」

「はっ！ 『1500現在、竜は休眠中。指示を請う』」

「ニューマン殿、作戦予定地に辿り着くまでの行軍で、竜は起きてくるでしょうか。今一度聞いておきたいのですが」

「うむ、半々といったところじゃろう。一人二人の足音ならば気にも留めんじやろうが、なにせこの大所帯からな。ただ、それでも作戦予定地から10マイルあたりまでは、恐らく安全じゃろう」

ダイアナは、口に手を当てて考える。作戦は事前に詳細に煮詰められているが、当然ながら、実際に現場に入れば思い通りに行かないことのほうが多い。今回の誤算は、行軍速度が思ったほど出ないということだった。10マイル地点までは、安全に物資を運搬できる。ダイアナも、このことは予めアルフレッドから聞いている。そこからいかに作戦予定地まで早く辿り着き、いかに早く設営を終わらせることができるかが、この作戦の肝だった。

10マイル。現在の行軍速度だと、2時間半はかかってしまう。一方、竜のねぐらから作戦予定地までの予想到達時間は2時間だ。

「まあ、スオウの奴なら竜を引きつけて1時間くらいは余分に時を稼げるはずじゃよ」

それでも、作戦予定地に着くまでの時間はこちらが2時間半、竜は3時間だ。設営には30分しかかけられないことになる。

「作戦を変更し、竜に気取られぬよう少量ずつ物資を運び、陣を完成させる方法に切り替えてはいかがでしょうか。時間はかかりますが」

と、ダイアナの補佐役を務める士官、ジョンソン大尉が具申する。

「その案は考えていましたが……」

しかし、それだと何かの弾みで途中で竜が起きてしまった場合、半端な陣営で戦うことになる。電撃的に、一気に物資を運搬する現行の作戦と比べ、リスクはあまり変わらない。それなら、大量の武器を用意できる現行の作戦をとったほうがいいだろう。ダイアナは、そう結論を出した。

「というわけです。ベーカー少尉、いかがか」

砲兵隊長のスコットに話が振られた。

「それだと、砲を固定したり、きちんと照準を合わせる余裕もなくぶっ放すことになりますな。個人的な職業意識には反しますが……まあ、仕方ないでしょう」

「無理は承知の上です。では、よろしくお願いしますよ」

一方フランスは、自分を含む数名が泊まる天幕を建て終え、クリステイ、パトリシアと焚き火を囲んでいた。

パトリシアは、数少ない琥珀竜を見る機会を逃すまいと、ダイアナに無理を言って付いて来た。ダイアナとしては、成功確率の低い作戦に非戦闘員を随行させるのは本意でなかったのだが。

「とうとう琥珀竜をこの目で見られると思うと、興奮が止まらないわ。今晚眠れるかしら」

「パティは相変わらずだね」

そう言いながら、フランスは火にかけたケトルに乾燥茶葉を投入した。こうした野外での炊爨も、すっかり手馴れてきた様子だ。

「あ、フランお茶持ってきたんだ。あたしにもちようだい」

「もちろん。パティもどう？」

「いいわ。お茶なんか飲んだら、ますます眠れなくなっちゃう」

フランスは、金属のカップに茶漉しを添えて、ポットの中身を注ぐ。あたりに茶葉の香りが漂った。

「それにしても、電気で身を守る、か。何だかピンとこないや」

「まあね。あたしも、さすがに雷に打たれたことなんてないし」

「電気自体、ごく最近概念が確立されたばかりのものだからね。そう思うのも無理はないわ。……まあ、実際体験するのが一番速いかしら」

そう言うと、パトリシアは上着の袖で身体をこすり始めた。その上着は騎士団の支給品で、厚手のフェルト地でできている。

「フラン、ちょっとこっち来てみて」

「ん、なに？」

フランシスが近づいたところに、パトリシアが指を伸ばす。指がフランシスの頬に触れようとした瞬間――

「痛っ！ なにするんだよ、パティ！」

パチッという音とともに、フランシスの頬に刺すような痛みが広がった。

「今のが電気よ。クリスも経験あるでしょ？」

「ああ、毛とか絹の布をこするとぱちぱちするやつ？ 髪の毛が逆立つのが楽しくて、子供の頃よく遊んだけど。あれが電気なんだ」

「そういうこと、琥珀竜の身体に流れているのは、これが物凄く強化されたものと考えればいいわ」

「うーん、確かにそれは攻撃したくないかも」

先ほどの痛みが何十倍にもなって襲ってくる、というのはフランシスにとってあまり想像したくないことだった。

「でも、琥珀竜はどうやって電気を作ってるのかな」

「仕組みは、今のと同じ感じね。鱗の裏にある種の毛のようなものが生えていて、それをこすり合わせて電気を生み出してるっていうのが有力な説。どうやってその電気を任意の方向に打ち出してるのか、ってのはまだわかっていないんだけど」

「へえ、よくできてるんだね」

クリスティも、これには思わず感嘆する。

「本当ね。これだから、進化論者も苦勞するわよ。竜という生物だけ、あまりに他とかけ離れているんだから」

そう言つて、パトリシアは肩をすくめるのだった。

野営地にて（後書き）

この世界では電気概念が固まりつつある段階で、
本来電流と表されるべき部分も、一緒くたにして電気と呼ばれてい
ます。

強行軍

「全軍、全速前進！ 速度が命だ！ 死ぬ気で押せ！ 走れ！」

ダイアナの号令が、岩山の間に轟く。

その号令を合図に、対竜部隊は一斉に移動を開始した。ある者は騎馬で、ある者は徒歩で、そしてある者は馬が引く荷車を押す。

突出しすぎず、遅れすぎず。足場の悪い岩石地帯で、出しうる限りの速度を保ちながらも、隊列にはいささかの乱れもない。日頃から、弛まぬ訓練を続けてきた精鋭、対竜部隊だからこそ可能な強行軍だ。

先頭に立つのは、竜人兵サイラスとエドガー。ダイアナが中央で指揮を執り、クリスティ、フランシス、アルフレッドは散開して周囲に気を配る。目指す先は、10マイル向こう。そこまで、いかに早く着けるかが作戦の成否を左右する。

「スオウの狼煙を確認！ 赤です！」

クリスティから、ダイアナに報告が入る。赤い狼煙が示すのは、『竜が行動を開始した』ということ。

「踏ん張れ！ ここからが正念場だ！」

「イエス、ママ！」

いっそうの気合を入れ、隊員たちが行軍の速度を速めんとする。

「砲を撃つばかりが砲兵の仕事じゃねえ！ 現場まで砲を運んで、撤収するまでが俺たちの仕事だ！ 気張れ！」

砲兵隊長スコット・ベイカーが、自らも荷車を押しながら部下に発破をかける。

「俺たちは荷物が軽いんだ、砲兵隊に負けたら承知しねえぞ！」

こちらは、工兵隊長サムソン・ノックス。今回の作戦では設置できるトラップが限られるため、工兵隊の荷物は少なめだった。

「おい、ダイアナ嬢ちゃんや」

周辺警戒に当たっていたアルフレッドが、ダイアナに駆け寄る。いつものことながら、嬢ちゃん呼ばわりに軽く眉根を上げるダイアナ。しかし、今は細かいことを気にしている場合ではない。

「足音を読む限り、スオウのやつ、なかなか上手くやっとなるようにじや。竜は相当大回りをさせられとるぞい」

「竜が平原に出てくるのはどのあたりになるでしょう」

「地図でいえば……このあたりじやな」

と、アルフレッドは地図の一点を示す。少しでも時間を稼ぐためとはいえ、想定していた地点とはかなりのズレがあった。余分に大回りして竜を誘導する分、部隊の設営予定地からの距離が遠くなっ
てしまっている。

「稼げる時間は」

「1時間10分ほどじやろう」

こちらは、想定していた時間より10分長くなっていた。10分でも無いよりマシか、とダイアナは考える。

「ベイカー、ノックス！」

ダイアナが、二人を呼びつけた。

「予定が若干変更になりました。第一接触地点は、こちらになります」

「ふうむ、砲の設置予定地からは遠くなっていますな。しかし、今から設置場所を変えるのは難しい。行軍路の変更が必要ですので」
「砲の設置場所は、そのまま構いません。命中率が下がるのには目をつぶりましょう。ノックス少尉、そちらはどうですか」

「仰ったとおりに竜が平原に侵入してくるなら、平原の間口の部分でネットによるトラップを仕掛けることは可能でしょう。しかし、距離が離れたので、設置場所まで辿り着くのに時間を食ってしまいます」

「ファウラー、ノリス、ガーランドを派遣します。何とか間に合わせてください」

「了解しました」

本来ならば、取って置きの戦力である竜人兵には、無駄な体力を使わせたくないというのがダイアナの本音だ。しかし、とにかく時間との勝負となる今回の作戦では、そんなことも言っていられない。人並みはずれた腕力、脚力を持つ3人なら、工兵隊にとって心強い援軍になるはずだ。

「目標地点まで2マイルを切りました！」

前方から、伝令の声が響く。

「もう一踏ん張りだ！ 対竜部隊の誇りを見せてみろ！」

これが最後とばかりに、ダイアナが号令をかけた。

そして、遂に部隊は作戦予定地となる平原手前まで辿り着いた。ダイアナが懐中時計を見る。出発から2時間13分。想定より、17分早く到着することができた。しかし、ダイアナはここで隊員たちを労うようなことはしない。

「予定よりも遅れているぞ！ 急げ！ 竜の餌食になりたいか！」

隊員たちの尻を蹴飛ばさんばかりの勢いで、さらに大きな声を張り上げた。

その間、フランシス、エドガー、サイラスの3人は工兵隊を手伝い、アルフレッドとクリステイは少し突出してスオウと竜の動向を覗う。

「砲の固定はナシだ！ とにかく設置でき次第弾を込めろ！」

スコットの指示の音が響く。

通常対竜部隊の大砲は、着弾を集めるために砲架をしっかりと固定し、すべての砲の基準となる方角を合わせて運用するのだが、この作戦では時間が命。それらの過程を飛ばし、とにかく設置を急ぐ。弾道学に基づく計算も、今回は省略された。完全に砲手の勘と経験頼りの射撃となる。

「キーツ少尉から伝令！ 11時方向より、銃声とのことです！」

先行するクリステイから、ダイアナへの伝令。この銃声は、『あと10分で竜が作戦予定地に到達する』、というスオウからの合図だった。

「各員、準備はどうか！」

「砲兵隊、あと7分で全門発射可能！」

「工兵隊、なんとか設置完了しました！」

厳しい表情はそのままに。――何とか間に合ったか。ダイアナは内心ほっとする。無理な行軍、そして休む間もなく急ぎ足の設営と、並みの部隊では到底できない芸当だ。作戦終了後には、何がしかの手当てを出してやらなくては。そんなことを考えるダイアナだったが、未だ作戦開始前という状況を思い出し、ぴしゃりと頬を叩いて気を引き締め直した。

「まったく、こんなドタバタな作戦は初めてだぜ」

トラップ設置を終えたフランスたちは、本陣まで下がっていた。エドガーが、思わず愚痴をこぼす。

「それに、少佐が作戦前に失敗の可能性を口にする、ってのも初めてだったな」

「ああ。でも、あの少佐のことだ。内心では、絶対に成功させたいと思ってるんじゃないか」

「やっぱりですか。負けず嫌いっぽいとは感じてましたけど」

「負けず嫌いっつーか、プライドが高いっつーか。難儀な性格だよ」

サイラスが、肩をすくめた。

そこへ、斥候に出ていたクリスティも合流する。

「もう、すぐそこだね」

クリスティが呟く。

竜の足音は、もはや竜人でない一般の兵にもはっきりと聞き取れるようになっていく。

クリスティと同じく斥候役だったアルフレッドは、ダイアナのところに向かった。

「そろそろじゃぞ。少し、皆を黙らせてくれ」

「わかりました。――皆、静粛に！」

辺りが静まり返ったところで、アルフレッドが地面に耳を付ける。

「……竜の進路は予定通り。……あと1分じゃな」

「砲兵隊、射撃準備は！」

「完了であります！」

「よろしい、第一射に備ええよ！」

「イエス、マム！」

沈黙があたりを支配し、竜の足音だけが大きく響く。竜が現れるはずの地点を、部隊全員が固唾を吞んで見つめる。

まず現れたのは、小さな姿。ここまで竜を誘導してきたスオウであつた。

そして、どしん、どしんと荒々しい足音を轟かせて。遂にこのデブラ台地の王者が、琥珀色の鱗をきらめかせながら姿を現した。

鉄壁

「あれが琥珀竜なんだ。へえ、綺麗だねえ」

クリステイが、フランスと同様の感想を漏らす。

「王都にいたころ、あの鱗を大枚はたいて買った奴を知ってるが……あれを見たら、その気分もわからないことはないな」

幅広の剣のような琥珀色の鱗が、陽光を乱反射してきらびやかに輝く。

「ああ、俺は芸術ってやつにはとんと縁がねえが、芸術品ってのはああいうののことを言うんだろっぜ」

サイラス、エドガーもそれぞれに感嘆の声を上げた。

「まあ、俺たちが気にしなくちゃいけないのは、どうやってあいつを倒すか、ってことなんだが。……そろそろ、ポイント・アル地点Aだぞ」

サイラスの視線の先にあるのは、ネットによるトラップが仕掛けられた場所だ。これを発動させるのが、作戦の第一歩なのだ。

琥珀竜の歩みは、馬に近い速さで疾駆する炎竜に比べればゆっくりしたものだ。先に立って誘導を行うスオウは、時折銃弾を打ち込んで竜を挑発し、竜の速度にあわせて付かず離れずの距離を保ち続ける。

竜は、先の平原に歩兵が潜んでいるのにも気づかず、スオウに誘導されるまま地点Aに向かっていく。

「今だ！」

フランススも、思わず叫んだ。同時に、ぎゅん、という音とともに、3枚の網が宙を舞う。伸縮性のある弦の仕掛けによって跳ね上げられたものだ。

網は、狙いを違えず竜に絡みついた。

「騎兵は速やかに工兵を回収せよ！ モーガン中尉の離脱と同時に一斉射！」

これで竜の動きは鈍くなるはず——部隊の誰もがそう考えていた。しかし、その期待はすぐに裏切られることになる。

竜が身体を震わせる。稲光のような閃きが竜の全身を走り、そしてぱちっ、と何かが弾けるような音。竜の身体を捕らえた網が焼き切れる。網は、黒い煙を上げて竜の身体の回りに散らばった。

「雷撃！？ 聞いていた話より随分威力が高いじゃない。あれじゃ、竜人はともかく、一般人が食らったら即死もあり得るわよ！」

パトリシアが驚愕する。竜は、自らの身体に向かって雷撃を放ち、網を焼き切ったのだ。

「ベイカー、砲撃できるか？」

「無理です！ いつもならともかく、今日の状態じゃ工兵の離脱が完全に終わるまで砲撃できない！」

いつもなら、入念な準備のもと精緻を極める砲撃を行う、ベイカー以下の砲兵隊。しかし、この作戦ではその準備が端折られたため、命中率が下がっている。工兵が撤退しないことには、友軍を誤射する可能性があるのだ。

竜は、トラップを発動させた工兵に気づき、そちらに足を向けようとする。

「……いかなな」

スオウは背中から弓を取り出すと、素早く矢を番えて撃つ。矢は、竜の鼻先あたりに当たると、かつんという音を立てて弾かれた。その一撃に、竜はふたたびスオウのほうに注意を向けた。

「……俺に任せて、離脱しろ」

工兵の回収に駆け寄ろうとする騎兵にひと声かけて、スオウが竜と対峙する。

矢を放つては距離をとり、また矢を放つ。接近しすぎぬよう細心の注意を払いつつ、スオウが竜の中尉を引き付ける。

と、竜がぐつと首をもたげた。フランシスたちがあつ、と思う間もなく、竜の頭部あたりから紫電が放たれた。

「……っ！」

直撃は免れたものの、スオウの右半身から黒い煙が立ち上る。衣服がところどころ焼け焦げてしまったらしい。

「スオウさん！」

「心配するな、たいした痛手じゃない」

サイラスの言葉通り、スオウの動きは鈍っていなかった。雷撃を警戒してか、さらに大きく距離を取る。

「しかし、ありゃあ確かに厄介だぜ」

「うん。パーティが言ってたのも、大げさじゃなかったみたい。あれは避けられないよ」

エドガー、クリスティも、琥珀竜の能力に驚きを隠せない。

「工兵の離脱はまだか……！」

ダイアナの顔にも、焦燥がにじむ。そこで、ようやく、騎兵隊が工兵と合流を果たした。工兵たちが、飛び乗るように馬の背中にかじりつく。

「……よし、砲兵隊、全門斉射！」

「アイ、ママ！」

凄まじい轟音が岩山に響き渡り、20からなる大砲が一斉に火を噴く。30ポンドの鉛の塊が、放物線を描き飛翔した。

一瞬遅れ、着弾が大地を轟かせる。大きな土煙が舞い上がった。

「着弾報告を！」

「……命中ゼロ！ 至近弾は2の模様！」

ダイアナが唇をかむ。いつもの砲兵隊なら、ありえない成績だ。しかし、状況を考えればよくやったと言うべきなのか。

「アオオオオオーッ……！！！」

甲高い嘶きを上げた竜は、身体を一振りして網の破片を振り落とすと、砲撃が放たれた方角へ向かって突進を開始した。

「砲兵隊、全力射撃！」

激しい轟音が連続的に鳴り響く。砲弾が次々と琥珀竜に襲いかかるが、琥珀竜はまるで意に介さない。そもそも、20門の大砲から一斉に砲弾を放つても、そのうち命中するのはせいぜい1、2発がいいところ、という状態なのだ。

「『吼狼』を。あと一斉射ののち、砲撃をいったん中止せよ」

遠距離狙撃があまり効果的でないことは、当然ダイアナも承知している。しかし、試すこともしないうちに諦めるのは彼女の性分に合わなかった。

伏せ撃ちの体制で『吼狼』を構える。砲撃が止み、土煙が収まりかけた瞬間――

「そこだっ！」

引き金が引かれる。狙撃自体は、ダイアナのイメージどおりだった。撤甲弾はダイアナが思い描いていたとおりの軌跡で、竜の眉間に直撃。入射角も申し分なし――ダイアナとしては手ごたえ十分の一撃。しかし、弾丸は竜の頭部の鱗を浅く抉っただけで、明後日の方向に弾かれてしまった。

「……あれが、電気というやつですか」

電気ので、着弾を歪ませる。それはほんのわずかな力に過ぎないが、そのわずかな違いがダイアナの一撃を阻んでしまった。

「少佐、あたしたちに行かせてください」

クリステイが、ダイアナに申し出た。

「許可できません。作戦前の説明を聞いていなかったのですか」

「それは覚えてますって。でも、あたしたちゴドフリーの親父さんのところから武器を借りてきたんです。離れたところから攻撃できるやつ。何もしないで撤退、っていうのは面白くないし」

その気持ちには、ダイアナにも共感できる部分があった。駄目でもともと、危険が迫る前に撤退するのなら、と思い始める。

「わかりました。しかし、撤退時の後詰に戦力を残したいので、突撃は2人までです」

「しょうがねえ、俺が付き合いますよ」

そう申し出たのはエドガーだった。2人は、ゴドフリーから借り受けた奇妙な武器をいくつか持って、突撃に備える。

「クリス、無理しないでよ」

直情的な行動をとることがあるクリスティを心配して、フランシスが声をかける。

「大丈夫、あいつは足遅いし。ヤバくなったらすぐ逃げるって」

そう言うクリスティだが、いかにも好戦的な表情を浮かべられては説得力がない。いつでもフォローに行けるようにしておこう、とフランシスは内心で思う。

そこへ、スオウがようやく本陣に合流した。

「スオウさん、大丈夫ですか？」

「……心配いらん。腕に、軽い火傷を負っただけだ。それにしても」

スオウが、クリスティたちのほうを見やる。

「……二人は、本当にアレを使うつもりなのか？」

スオウにしては珍しい呆れ顔だった。

「竜人兵が出ます。砲兵隊、榴弾を装填し支援砲撃準備」

エドガーとクリスティが陣を飛び出すとともに、大砲が再び火を噴く。疾駆するクリスティたちの頭上を跨ぎ越すように、砲弾が飛翔する。大きな爆炎が琥珀竜の周囲に巻き起こった。

「まずはこれから！」

クリスティが手に取ったのは、外縁が刃状に加工された、巨大な金属の輪だ。内側の把手を握り、大きく後ろに振りかぶって横手投げで投げつける。手首の捻りにより回転力を与えられた金属輪は、緩い弧を描いて琥珀竜に襲いかかる――！

が、その輪は、竜の鱗をごく浅く切り裂いたのみ。与えられたダメージという点では、皆無と言ってよかった。

「なにこれ、使えないじゃん！」

「よし、じゃあ次は俺が！」

エドガーが取り出したのは、巨大な鉄球。鎖につながれた把手を持ち、身体を回転させて勢いをつけ、竜に向かって投擲。

そかし、これも効果はわずか。一枚の鱗に、小さなひび割れを起こせただけに留まった。

他にも、螺旋状の矢を用いることで矢に回転力を与えられる特殊

弓、先ほどの金属輪と同じく回転を与えて投擲する星型の金属板、『吼狼』の銃身を切り詰め、弾丸の代わりに金属の杭を発射できるようにしたもの――さまざまな武器を試したものの、どれも効果は芳しくない。

「……あつ！ クリス、駄目だって！」

フランシスの視線の先には、スケイルピアサーを引き抜いて突撃を開始するクリスティの姿が。ゴドフリーの試作品があまりに使えないのに業を煮やしたのだろう。

「でえええーっ！ いっ！」

気合とともに、クリスティは竜の横腹あたりに突きかかる。が、ぱちっという音が響き、クリスティのスケイルピアサーは、竜の身体に触れる前に地面に落ちた。

「なに今の、ビリってきた！」

クリスティに怪我はないようだった。フランシスもほっと胸をなでおろす。

「馬鹿、撤退するぞ！」

エドガーが叫び、クリスティは渋々といった様子でそれに従った。

「親父さんの武器、全然駄目！ 不合格！」

クリスティが、肩を怒らせながら戻ってきた。

「まあ、期待はしていなかったがな。それでもありゃあ酷いもんだ」
「あの親父は基本的に優秀な鍛冶職人だが、時たま思いつきで妙な武器を作るのが困ったところだな」

エドガーやサイラスも、呆れるほかなかった。

砲撃によって進路を阻まれながらも、琥珀竜は本陣に向かって進み続ける。結局、どの手段も有効打には至らなかった。

「やはり、駄目でしたか。……仕方ありません、撤退の準備を――」
「ちよっと待て、ダイアナ嬢ちゃんよ」

撤退命令を出しかけたダイアナの言葉に、アルフレッドが割り込んだ。
んだ。

「『吼狼』がまだ一丁残っているじゃろう。ひとつ、わしに任せてみんな」

「しかし、撤退の時間が……」
「必要なのはわしと、お前さんと、そうじゃな――フランスにでも手伝ってもらうか。他の者は先に退かせるがいい」

相手は足の遅い琥珀竜だ。竜人の脚力ならば、逃げ切ることは難しくくない。どの道、フランスとサイラスに竜の誘導をさせている間に、歩兵の撤退を行うつもりだったのだ。ベテランのアルフレッドの言うことでもあるし、試してみてもいいか、とダイアナは考える。

「……わかりました。お任せします」

ダイアナが首肯した。

老兵の智慧

アルフレッドの作戦、それは至って単純なものだった。

フランシスが竜を挑発し、アルフレッドの指示通りの経路で逃走する。ダイアナは、アルフレッドの指示するタイミングで『吼狼』の引き金を引く。それだけであった。

工兵、砲兵などの歩兵部隊の撤退がある程度進んだところで、フランシスが竜の前に立つ。数百ヤード離れた高台にある本陣からはすでに大半の人員が引き上げており、フランシスを見守るのは竜人兵の面々のみ。

「フラン、大丈夫かなあ」

クリステイが、心配そうな瞳で平地部を見下ろす。

「……適切な距離を保ちさえすれば、大きな危険はあるまい」

「スオウだって、さっき一発食らいそうになってたじゃん」

クリステイの言葉に、スオウは少々ばつの悪そうな顔をする。

「……あれは、俺も油断した。あのときの竜の動きをフランシスが覚えていれば、雷撃のタイミングは読めるはずだ」

スオウの言葉通り、フランシスは先ほど竜が雷撃に前に見せたしぐさを、頭の中で反芻していた。食らうと即死もありうる、とのパトリシアの言葉を思い出し、一層気を引き締める。未だ、竜に対する恐怖心が完全に消えたわけではない。気を抜くと震えを起こしそうな両足に、しっかりと力を籠める。とにかく、アルフレッドの言葉を信じて頑張ろう。そう心の中で決意した。

一方、ダイアナはアルフレッドの隣で『吼狼』を構えている。

「竜の身体を流れる電気が、一瞬消える、ですか」

「そうじゃ。しかし、ほんの一瞬のことじゃからな。雷撃が放たれると同時に引き金を引くくらいでなければ、間に合わん。狙撃のタイミングはわしが指示するから、嬢ちゃんは狙いをつけることに専念するんじゃ」

アルフレッドの言う『竜の電気が消える瞬間』。それは、竜が雷撃を放った直後、とのことだった。

「理屈としては正しいでしょうね」

と、パトリシアもその言葉を保証した。

しかし、『吼狼』による狙撃はきわめてデリケートなものだ。あつ、電気が消える、と思っても、予め完璧に準備ができていなければ、狙撃は成功しない。しかし、今回はアルフレッドが狙撃のタイミングを指示するぶん、ダイアナの負担は軽い。

それにしても、アルフレッドはそのタイミングをどうして察知するのか。疑問を胸中に残しつつも、ダイアナが声を上げる。

「ファウラー、作戦開始です！」

「了解！」

ダイアナの号令とともに、フランススが動き出す。まずは、竜を挑発し、注意を引き付けること。マスケットを取り出すと、竜に向けて一発。竜が足を止め、フランススを見やる。――まだ、弱い。先ほどまで苛烈な砲撃を加えていた本陣か、それとも目の前の『小虫』か。竜はフランススに注意を向けたものの、どちらを叩くべきか、決めかねている様子だ。

フランシスは、さらに竜に近づく。竜の進路を横切るように、近づいては離れ、近づいては離れを繰り返す。眼前をうろちよろされて、竜は次第に苛立ちを見せ始める。そしてフランシスが放ったマスケットの銃弾が最後の引き金となった。

「グロアアアアアー！！！！」

竜が、甲高く嘶く。ぱちっ、という破裂音とともに、竜の全身に紫電が走った。

「かかったぞい！ あとは、フランシスのやつが指示通りに竜を誘導できるか、じゃな。嬢ちゃんよ、いつでも撃てるようにしておけよ」

ダイアナが、無言で『吼狼』を構える。緊張しすぎず、弛緩しすぎず。心拍数、発汗にも問題はない。狙撃の準備は整っている。

（まずは、あの岩に向かって100ヤード）

フランシスは、アルフレッドの指示通りのルートを走る。琥珀竜は竜人と比べて足が遅いため、引き離し過ぎないように距離を保つ。走りながらも、竜の頭部の動きに気を配るのを忘れない。首をもたげて頭を下げるのが、雷撃が放たれる合図だ。

と、フランシスがそう考えているそばから、竜の頭が動いた。

「っ！」

反射的に、横に飛びのく。バディッ、という音とともに、フランシスの数ヤード横を抜けて、雷撃が走る。かなりきわどいタイミングだった。スオウが雷撃を食らうのを見ていなかったら、直撃して

いたかもしれない。『雷光のような速さ』というもののたとえば方があるが、まさにそれを身をもって体感するフランシスだった。

「よしよし、うまいぞ。それ、もうすぐじゃ。あの大きな木を回ったところに狙いをつけておけ」

アルフレッドの指示通りの方向に、『吼狼』の銃口が向けられる。

（あの木を大きく回ったら右に方向転換、だっけ）

アルフレッドが最終目標とした、大きな木が近づく。そこを回ったところで、狙撃が行われるという。スピードを調整しつつ、立ち木を巻くような軌道でフランシスが走る。

その後を追って竜が立ち木を過ぎたのを見計らい、フランシスは大きく右に進路をとる。

「準備はいいか!? あと3つ数えたら発射じゃ!」

未だ半信半疑ながら、ダイアナが『吼狼』の発射体制に入る。大きくひとつ、深呼吸。

「そろそろのはずだけど――って本当に来た!」

まさしく、アルフレッドの語ったタイミングどおり、琥珀竜が雷撃の予備動作を見せた。

「くっ!」

フランシスは両足に力を籠め、急制動。きびすを返して逆方向に飛びのく。

「ほれ、今じゃ！」

まるで、竜のほうからダイアナの照準内に入ってきたような動き。ダイアナが引き金を引いた瞬間、先ほどまでフランスがいた場所に、ひととき大きな雷撃が放たれた。『吼狼』から放たれた弾丸は、1秒もかからず琥珀竜に到達。――今度は電気にその軌道を歪められることなく、その眉間を貫いた。琥珀竜は、自らの身になにが起ったのかがわからなかったかのように、ひとつ首をかしげる。数瞬の間を置いて、ゆっくりと地面に崩れ落ちた。

竜の身体から電気が消えた、そのわずかな隙を突いた、完璧な狙撃だった。撃ったダイアナでさえ、未だ信じられないといった様子である。

「……なんか、すごくあっさり終わっちゃったね」

「ああ。俺たちの苦労はなんだったんだ、と思っちゃまうぜ」

クリステイとエドガーは、釈然としないようだ。

「……さすがは、アルフ老といったところか」

「あの爺さん、これだから馬鹿にできないんだよな」

サイラスは、苦笑いを浮かべている。

「ニューマン殿」

「ん、なんじゃ？」

「なぜ、竜の雷撃のタイミングがわかったのですか？」

ダイアナが、皆が持っているであろう疑問を、アルフレッドにぶつける。

「ふむ。ダイアナ嬢ちゃん、お前はあの琥珀竜がわずかに右後ろ足を引きずっていたことに気づいたかの？」

「……いいえ」

「どうやら、あの竜は右足を負傷しておったようでの、右方向への対応が若干遅い。そして、そのことは竜自身も承知しておったようだな。あの竜は狩りをする際、右側に回った獲物に対しては無理に追おうとせず、進行方向を先回りするように雷撃を放つという癖がついていたんじゃない」

「それで、ファウラー少尉を竜の右側に回らせた、ということですか」

「そのとおりじゃな。わしもここまで上手くいくとは思わなんだが」
そう言つてアルフレッドは笑った。

「まあ、今回は右足が悪いというわかりやすい特徴があったから、すんなりとことが運んだがの。……ただ、ひとつ覚えておくがいい。生き物を撃つというのは、的当てとはわけが違ふ。とにかく観察することじゃ。一挙手一投足をつぶさに観察し、特徴を見極める。野生の動物は、人をはるかに超えた知覚と身体能力を持っておる。それに対抗できるのが、人間の知恵というものじゃ。竜人の力に頼りすぎないことじゃ」

長期間荒野に潜む忍耐力と、対象の特徴をつかむ洞察力。アルフレッドが持つ、この二つの力がもたらした勝利であった。

ダイアナの射撃の腕は弛まぬ訓練で磨いたものだ。しかし、狙いをつける際は、確かに竜人の並外れた知覚に頼み、対象の特徴を掴むことなど考えてもいなかった。ダイアナは、レナードがこの作戦にアルフレッドを随行させた理由をぼんやりと察するのだった。

「さて、まずは私たちの仕事の時間ね。申し訳ないけど、何人か手を貸してくれるかしら」

パトリシアが、数名の助手を従えて進み出る。琥珀竜を検分する貴重な機会だが、無論死体をそのまま持ち帰ることはできない。なので、その場で解剖し、必要ならばサンプルを採取する。しかし、常人の手で竜を解剖するのは多大な労力が必要なため、竜人兵の力が要るのだ。とエドガーとサイラス、アルフレッドがこれに手を貸す。

「パトリシア嬢ちゃんや、少しだけ待ってもらえるかの」

そう言うと、アルフレッドは竜の頭部に手をやり、しばしの黙祷をささげた。目を閉じてじっと祈りをささげる老人は、いったいなにを思っているのか。それは、いつか彼がフランスに語った、『竜に対する敬意』を表す行為だったのかもしれない。

「……すまんの。もういいぞい」

パトリシアの指示のもと、竜の解体が始まった。フランスは食用の牛や鶏の屠殺を手伝った経験があるため、動物の解体という行為にそれほど抵抗はなかった。しかし、相手は硬い鱗と分厚い筋肉を持つ巨大な竜だ。竜人の臂力をもってしても、生半なことではない。腹部を開いて臓器を露出させるだけで一苦労である。

「俺も何度かコレを手伝っているが、やっぱりきつい作業だな。討伐作戦で一番大変な作業かもしれん」

サイラスが、流れる汗をぬぐう。

「そうだな。コレをやると、しばらく血生臭いのが取れなくていけねえ。一度、娘に『パパ、くさい』なんて言われちゃったこともあるしな」

「確かに、気持ちのいい作業ではないですよ。……パティはよく平気だなあ。若い女の子なのに」

パトリシアは、研究に没頭するあまり、竜の血が飛び散って服が汚れるのもまるで気に留めていない。顔や髪の毛にも、べっとりと血糊がこびり付いている。

「さすがに、わしもあれは勘弁じゃのう」

元猟師のアルフレッドにまでそう言われる始末である。

「次は、この臓器を切り開いてくれるかしら？ あ、酸性の消化液が漏れるかもしれないから気をつけてね」

そう言うパトリシアの表情は、溢れる研究意欲できらきらと輝いていた。

内臓の内容物を採取したり、身体各部を絵師にスケッチさせたり。結局、パトリシアの検分は6時間に及んだ。フランシスたちは食事を取りながら交代交代で手伝ったのだが、パトリシアはその間まったく休むことはなかった。普段のパトリシアとは打って変わった、活動的な姿であった。

「……そろそろ終わりにしましょうか。名残惜しいけど、部隊に迷惑をかけるわけにもいかないし」

時間さえあればまだまだ作業を続けていたと言わんばかりの口ぶりに、フランシスたちは苦笑するほかなかった。

空の茜が色濃さを増し、東の空には一番星が輝き始める時刻。恒例の収奪行為――鱗や牙など、金になりそうな竜の身体の部位の奪い合いが行われるのを、フランシスたちは遠巻きに眺める。

「……ニューマン殿、このたびはありがとうございました。大変、いい勉強をさせていただきました」

ダイアナが、アルフレッドに感謝の言葉を述べた。

「礼を言う必要はないぞい。それに、お前さんはわしより階級が上じゃ、みだりに頭など下げるものではない」

「ありがたいお言葉です。それから、ニューマン殿は本来ならば調査任務後で休養されるはずの期間です。基地に戻ったのち、何からの形で手当てをさせていただきたい」

「そんなもんは無用じゃよ。5年前家内も死んじまったし、今は任務が唯一の生きがいなんじゃから」

「しかし、それでは……」

食い下がるダイアナを見て、アルフレッドはにやりと笑う。作戦中とはうって変わって、だらしない表情だ。

「そうじゃな。……ならば、オッパイのひとつくらい揉ませてもらえんかの。家内が死んでからというもの、こう両手が寂しくてのお」

そう言って、アルフレッドは両手をわきわきと動かす。実にいやらしい動きだ。ダイアナのこめかみに血管が走るのを、アルフレッドはまったく気付いていない。空気を讀んだフランシスたちは、そろりそろりと後ずさった。

「多少ポリウムに欠けるが、なあと、クリスティの奴よりはななばかマシ——ぐぼおっ！——！」

言い終わる前に、クリスティとダイアナの鉄拳が、アルフレッドの腹部と顔面に同時に突き刺さる。盛大な土煙を上げて、アルフレッドの身体が地面を転がった。

「サイテー！ 見直したところだったのに！」

「台無しだな」

「ああ、台無しだ」

「……懲りないお人だ」

「そろそろ撤収に入ります。体力に余裕があるものは、砲兵を優先的に手伝ってください」

「……お、お前ら、年寄りを置いていく気か……」

アルフレッドの言葉を背に、フランススたちは撤収作業に向かうのだった。

エピソード

「大成功じゃないか。よくやってくれた」

琥珀竜討伐作戦から帰還した直後のことである。

執務室にて、レナードがダイアナに労いの言葉をかけた。なにせ、成功が危ぶまれた作戦で、死者ゼロ・装備の損耗もほぼなしでの琥珀竜撃破、という結果だ。普通なら、指揮官の手腕が絶賛されて然るべきである。

「いえ、この成功はニューマン殿のご指導の賜物でした。自らの未熟さを改めて思い知りました」

謙遜ではなく、ダイアナ本心からの言葉であった。

「どうだ？ アルフ老と一緒に作戦は」

「はい。とてもいい勉強をさせていただきました」

「うむ、そうだろう」

ダイアナの表情を見て、レナードは満足げに頷く。

「それで、アルフ老はどうしてる？」

「ニューマン殿は、調査任務から帰還して、すぐにまた討伐作戦という強行軍でしたので。お休みにいられているのでは」

「そうか。いい酒が手に入ったから、久しぶりにアルフ老と飲み明かそうと思っていたのだが」

レナードは、椅子に深く腰掛けて腕組みする。アルフレッドは斥侯としてきわめて優秀だが、もう70になろうかという高齢だ。い

つまでも負担をかけるわけには行かない。引退も視野に入れ、後継者のスオウの育成を急がなくては。

そんなレナードの思考を乱したのは、窓の外から聞こえてくる喧騒だった。ドタドタという荒々しいいくつかの足音と、何か物が崩れるような騒音。

「待ちなさい！ 乙女のお尻を何だと思ってるの！！！」

「ええじゃないか、尻の一つや二つ。減るもんでもあるまいて」

「こら！ もう、歳のわりにすばしっこいんだから！」

「まったく、そこまでムキにならんでもいいじゃろう。胸と一緒に、度量の小さい女子じゃの」

「~~~~っ！ 絶対許さん！！！」

「ちょ、クリス！ 真剣は拙いって！ 二人とも待って！」

喧騒は、しだいに遠ざかっていった。

「……元氣そうだな」

「ええ。賑やかなことです」

「まだまだ引退の心配は要らないようだな。アルフ老には、もう一頑張りしてもらおうでしょう」

レナードとダイアナは、揃って苦笑するのだった。

スオウの格闘術講座

対竜部隊基地、練兵場。時刻は、日がやや傾き始めたころ。

スオウの眼前に、フランシスと見習い隊員・デイジーが集合している。デイジーの歓迎会で交わされた、スオウが格闘術を教えるという約束を果たすためだ。格闘術があまり得意でないフランシスも、便乗する形でこれに参加することになった。

「……では、始めるか」

「はい！」

声を揃えて、二人が元気良く返事する。

この日、二人はいつもの騎士団訓練服を着ているが、スオウは独特の民族衣装を着ている。手足の生地に余裕を持たせた、ゆったりとした縫製。朱色というか、赤茶色に近い変わった色をしている。

「……これから教えるのは、カルジュ式格闘術というものだ。前に語ったかもしれんが、父の祖国に古来より伝わる格闘術だ。フランシス、そちらへ」

促され、フランシスがスオウと対峙する。二人の距離は10ヤードほど。

「……カルジュ式思想を、端的に表す技を見せる。いつもの格闘訓練と同じように対応しろ」

「はい」

フランシスは両腕を上げ、顔の前に構える。身体を半身に開き、膝を柔らかく保つ。

「……準備はいいようだな」

一方のスオウは、両腕をだらりと弛緩させ、構えらしい構えを取っていない。なにかのリズムを取るように、上体を軽く左右に揺らしている。

スオウは傾き始めた目を背に立っており、その服の色もあいまって、フランシスの目には夕闇に溶け込んでいるように見えた。やりにくい、とフランシスと思う。

「……行くぞ」

スオウが、一步足を踏み出す。ゆっくりとした足取りで、二歩、三歩。四歩目を踏み出した——フランシスはその動きを視界にとらえた瞬間だった。スオウの姿が、突如フランシスの眼前に現れた。まだ数ヤードはあったはずの距離が、一瞬にして詰められた。

拙い、とフランシスが思ったときには、すでにスオウの掌底がフランシスの腹部に迫っていた。

「ぐふうっ！」

言葉で表現するなら、真綿で包んだ大きなハンマーで殴られたような。そんな衝撃を受け、フランシスは数ヤード吹き飛んだ。

「……陽炎。黄昏と薄暮にわが身を溶かす。夢幻のごとく」

さっきのはいったい——地面を転がりながらも、フランシスの頭にあったのは、先ほどのスオウの動きに対する疑問。まるで、途中の過程をすっ飛ばしたかのように、突如フランシスの目の前に現れたスオウ。あれはなんだったのだろうか。

「……立てるか」

「はい、なんとか……」

スオウに手を引かれ、フランシスが立ち上がる。

「……どうだ、今の技は」

「はい、なにがなんだかさっぱりでした」

フランシスが、素直な感想を漏らす。

「ん？ 今のってそんなにビックリするほどの技なのかい？」

一方で、デイジーはまったく驚いていない様子だ。

「えっ！？ だって、今のスオウさんの動き……」

デイジーの物言いに、フランシスは納得がいかない。

「……まあ、待て。今のは、実際に相対した者にしか真髄はわからない、そういう歩法だ」

今度は、デイジーがスオウに相対し、フランシスが横からそれを見守る。

「……へっ!？」

結果は、フランシスと同じ。ただ、スオウはデイジーに掌底を打ち込むことはせず、寸止めにとどめた。

「まるで、妖精に化かされたみたいだ」

デイジーも、驚愕の表情を見せた。

「……フランシス、どうだ。カラクリに気付いたか」

投げかけられた質問に、フランシスはしばし考える。横から見ると、確かに何ということのない動きだったのだ。唯一気づいたことを、口にする。

「歩幅、でしょうか」

急にスオウが加速したように見えた、四歩目。そこで、スオウの歩幅がにわかに大きくなっていたのだ。

「……正解、だ。正面からの見た目の歩行姿勢を変えず、歩幅のみを大きく変化させる。そうすると――」

スオウが、ふたたびフランシスの眼前に迫った。

「なるほどね。錯覚ってやつだな」

デイジーが納得する。

「……そうだ。しかし、この技は、歩法のみで完成するわけではない。人間の目というものは、そう簡単に騙せるものではないからだ」
「歩法のみじゃない、とは？」

「……まずは、環境だ。この時刻、そしてお前たちを西日と正対するように立たせたこと、これが第一段階だった」

さりげなかったためにフランススは気が付かなかったが、スオウはわざとその位置にフランススたちを立たせたらしい。

「……そして、この衣装だ」

「西日に溶け込んでいるみたいで、見辛かったな」

「そうか、裾がゆったりしてるのも、足の動きを隠すためなんですね」

「……二人とも、理解が早くて助かる。この技は、まずは歩法の訓練。次に、相手を不利な環境に立たせること。そして、歩法に適した服装。この三つがないと、完成しないということだ」

スオウの話を聞き、フランススはかつて座学で習ったことを思い出す。戦術論だ。

「……カルジュ式とは、単なる格闘術ではない。個人の闘争にも兵法、つまりは戦術・戦略の考え方を適用するという、思想面も含めてこそそのカルジュ式だ」

「技術とともに、考え方も学べってことだね」

「……そのとおりだ。お前も、かつて自らの逃走経路に事前に罠を張っていただろう。考え方は同じだ。闘う前から、相手より優位な立場に立てるように努める。これが、重要なことだ」

格闘訓練というより講義みたくなってきたな、と思いつつも、フランススは話に聞き入る。勉強好きなフランススにとっては、実に興味深い話だった。一方のデイジーも、なるほど、といったふうに頷きながらスオウの言葉を聞く。

「……日常では、いつ理不尽な暴力に襲われるとも知れない。何が起きても対応できるよう、常に心身の状態を維持し、極力危険に巻き込まれぬよう留意すること。カルジュ式で、最初に教わるのはこ

のことだ」

「なるほどねえ。日頃からの心がけておけば、いざって時にもすぐ対応できるってわけだ」

「……まさしく、そのとおり。やはり、お前にはカルジュ式が向いているようだ」

「そうかい？ あんたに褒められるとこそばゆいな」

デイジーが、頬を紅潮させた。

「……それでは、そろそろ実技を――」

スオウが言いかけたところで、基地の鐘楼の鐘が鳴った。

「あっ、訓練終了の時間……」

気が付けば、あたりは夕闇に包まれている。練兵場で訓練をしていたほかの隊員たちは、あるいは兵舎の自室に、あるいは食堂にと引き上げていく。

「……すまん。話が長くなりすぎた」

スオウが、ばつの悪そうな表情を浮かべた。

結局、フランスとデイジーが実際に技を習うのは、翌日に持ち越されるのだった。

プロローグ

「はーくしょん！」

木々の間に、フランスのくしゃみの音が響いた。森の中を走る、街道筋。うっそうとした針葉樹林の中、ほとんど獣道に近いようなその街道を、フランスは歩いていた。

「どうした、隊長さん。風邪かい？　ここいらはシラーズに比べて随分冷えるからなあ」

傍らの中年男が、心配そうに声をかける。

「確かに寒いですけど。大丈夫、風邪とかではないので」

薄く積もった雪を踏み締め歩きながら、フランスが答えた。

「ほう、するとアレか。シラーズに残してきた『コレ』が噂でもしてるのか」

そう言って、男は立てた小指をフランスに見せ付ける。

「そんなんじゃないですって！」

フランスが赤面する。

「なんだ、見かけどおりというか、純情なお人だなあ。エリート士官様とは思えないぜ」

「エリートは止して下さいって要ったじゃないですか、曹長」

「ハハハ、これは申し訳ない、少尉どの」

ふと、フランスの顔に冷たいものが当たる。

「また、降ってきましたね」

「ああ。本格的に振り出す前に、さっさと見回りを終わらせちゃいましょうや」

「そうですね」

フランスは、ふと空を見上げる。のっぺりとした分厚い雪雲から、粒の大きな雪がちらほらと舞い落ちる。

「……シラーズ、か。クリスやみんなはどうしてるかな」

ぼつりと一人ごちた。

「おーい、隊長さん、どうした？ 早く行こうぜ」

「あ、すいません！」

二人は足を速め、先を急ぐのだった。

ここは、コルドアフロンティア最北端、アスカムの村。フランスは、村の駐屯部隊の小隊長としての任についていた。なぜそのようなことになったのかを説明するには、時をしばし遡らなくてはならない。

ことの起こりは、数週間前。琥珀竜の討伐作戦から、1ヶ月あまりが過ぎようというところであった。

その日、フランスたちは1匹の炎竜の討伐に赴いていた。炎竜の身体は小ぶり。小高い丘に囲まれた広い平地という、討伐に適した地が作戦に選ばれた。

作戦はほぼ計画通りに進行し、執拗な砲撃とトラップをその身に

受けた炎竜は、竜人兵の登場を前に斃れることになった。

隊員たちは、いっになく上機嫌だった。作戦がすんなり終わったからだ。フランスは考えたが、それにしても浮き足立っているように見える。

「ねえ、みんな随分機嫌がいいんじゃない？　どうしたのかな」

撤収作業を手伝いながら、クリステイに尋ねてみる。

「ああ、今年の討伐作戦は多分今日で最後だからね。そのせいじゃない？」

「最後？　どうしてわかるの？」

「基本的に冬、特に雪が降るようになると、作戦はやらなくなるから。この間シラーズでも初雪降ったじゃん」

対竜部隊の竜討伐は、冬季には行われない。行軍が困難になることが理由の一つ。

そして、雪が深く積もった場合、図体の大きい竜よりも、人間のほうがより機動力を削がれることになるというのが大きい。たとえば2フィートも雪が積もると、人間ならば歩くのも困難になる。一方巨大な竜の場合、足先がちよっとぬれる程度にしか感じないだろう。機動力がないと、『釣り出し』を行う際の『釣り餌』役や、トラップを発動させる人間が大きな危険に晒されるし、万一作戦が失敗した場合の撤退が大きく遅れてしまうのだ。

フランスは、そんな話をのちに聞いた。

「ファウラー少尉、いますか」

遠くから、ダイアナがフランスの名を呼ぶ声がする。

「少佐？　なんだろうね」

「わからないけど……とにかく、行ってくるよ」

作業の手を止めて、フランスは声のするほうに向かった。

「ああ、いましたか。少尉、あとで隊長からお話があります。基地に帰還し次第、隊長執務室に出頭するように」

「お話？　いったい……」

「別に説教をしようというわけではありませんから。そんな心配するような顔をしなくても大丈夫ですよ」

「はあ、了解しました」

そんなわけで、基地に戻ったフランスはレナードの執務室のドアを叩いた。

「フランス・ファウラー、ただいま参りました」

「ご苦労、君も敬礼が板についてきたようだな」

「はっ、もう半年以上経ちましたので」

レナードの合図で、休めの姿勢をとるフランス。

「今日来てもらったのは、他でもない。君には出張……というか、転属をしてもらうことになった。一時的に、だが」

「転属、ですか」

現在のフランスの正式な所属は、辺境騎士団対竜部隊長・レナード直下の遊撃隊ということになっている。任務の特殊性もあり、通常の騎士団の枠組みからは独立したポジションだ。

「騎士団の決まりとして、新任士官は最低一度、地方の駐屯部隊で

小隊長任務に就かなければならないというものがある。君にも、そろそろこれをやってもらいたい。これからの季節は出撃もなくなるからな」

「そういうことなら、わかりました。……一時的に、って仰いましたけどどのくらいですか？」

「5ヶ月だ。年をまたぐ中途半端な期間なのだが、とある駐屯部隊の隊長が病気になってしまった。ちょうどいい機会だと思ってな。面倒は早く済ませてしまったほうがいいだろう？」

フランシスが頷く。

それを見たレナードは、一枚の書類を取り出した。

「これが、正式な辞令——わかりやすく言えば人事に関する命令書だ。受け取りたまえ」

「はっ！ 拝命します！」

敬礼をして、辞令を受け取るフランシス。その書類には、以下の文面が記されていた。

『フランシス・ファウラー少尉 貴殿を、○月○日付をもってアスカム村駐屯小隊長に任ずる。 辺境騎士団対竜部隊隊長 レナード・パーシヴァル少将』

最果ての村

「アスカムとは、また随分辺鄙なところに飛ばされちまったなあ」

対竜部隊の食堂。フランシスの転属の辞令が出された日の、夕食の席である。フランシスは、クリステイ、エドガー、サイラス、デイジーとテーブルを囲んでいた。

「まだ詳しく調べてないんですけど、エドガーさんは知ってるんですか？」

「まあ、多少はな。フロンティアの北の果てだぜ、アスカムっていやあ」

「ここからどのくらいかかるんですか？」

「そうだな、馬で片道1週間ってところだろうな」

往復すれば2週間だ。いちど行ってしまうと、おいそれと戻ってくることもできないだろう。

「ええ、せつかくみんな一緒に新年のお祝いしようと思ってたのに」

クリステイが、不貞腐れたように口を尖らせた。

「わがまま言うなよ、クリス。お前が小隊長任務に出たのだから、このくらいの時期だっただろう」

サイラスが言うように、竜人兵に小隊長を経験させるのは、大概冬季だ。理由は言うまでもなく、冬には出撃がないからである。

「それはそうだけど……」

「ごめんよ。でも、手紙書くから……」

「ほんと？ 絶対だよ」

「うん、約束するよ」

クリスティは、いくらか機嫌を直した様子だ。そんなやり取りを、サイラスとエドガーは微笑ましく見守る。

「でも、かなり北だろ？ 冬は随分冷えるんじゃないのかい？」

「そりゃあ、そうだろうな。雪も相当積もるらしいぜ」

「うへえ、あたいは勘弁だね。今の季節のシラーズ《ここ》でさえすでに寒いって感じるのに」

デイジーが顔をしかめる。シラーズは、コルドア領の中でそこまですで寒い地域でもない、しかし、より温暖であるアマディアス育ちのデイジーにとっては、寒さがこたえるようだ。

「北のほうの任地にいた奴から聞いた話だが、それこそ鼻毛も凍るくらいの寒らしいぞ」

「サイラス、ちょっとオーバーなんじゃないの？」

「いやいや、これが大真面目なんだ。桶に入れた水を外に出しておいたら、一晩でカチンコチンに凍るほどらしい」

シラーズ周辺では、冬季でも気温が氷点下になることは少なく、フランスの故郷も似たようなものだ。氷といえば、水溜りや井戸の表面に薄く張った状態のもの、程度の認識しかないフランスには、とても想像のつかない世界だった。

「話を聞いてると、凄く大変そうですね」

フランススが、思わず不安を口にする。

「まあ、そんな場所でも人が暮らしてることとは、寒さを乗り切る知恵があるんだろ？」

「デイジーの言うとおりだ。それに、ビールや白ワインをいつでも冷やして飲めるのは羨ましいぜ」

シラーズでは氷は高級品であり、氷を使って飲食物を冷やす氷室など、とても維持できるものではない。酒飲みのサイラスらしい意見である。

「まあ、決まっちゃったもんはしょうがねえだろう。腹をくくるしかねえわな」

そう言って、エドガーはフランススの肩を叩くのだった。

翌日。

基本的な装備品と、衣類など最小限の荷物を馬に積み、フランススは慌しく出発した。北へ進むごとに、徐々に寒さが増していくのが、フランススにも実感できた。街道筋の町や村で宿を取りつつ、目的地のアスカム村に着いたのは、エドガーの言葉どおり1週間後。気温がぐっと下がり、雪がちらつく日の昼下がりことであった。

アスカムは、うっそうと生い茂る針葉樹林の外れにある小さな村だ。拓かれてから7年足らずという、フロンティアでも歴史の浅い村である。人口はわずか300人。主産業は、林業。紙の原料となる木材を切り出し、近くを流れる川を使って運び出している。そのほかの産業は、酪農と耕作が細々と行われている程度である。

フランススは、木製のアーチを潜り、村に足を踏み入れた。村には、丸木で組まれた家が、ぽつりぽつりと点在している。まず駐屯部隊の駐在所に向かわなければならぬのだが、あいにくフランス

スには場所がわからない。誰かに道を聞こうにも、村に人影は全く閑散とした雰囲気だ。手近な家のドアをノックしようかと考えていたところで、ようやく一人の村人を見つけることができた。

その村人は、年のころ15、6くらいの少女だった。茶色の髪をお下げに結び、くりっとした眼と低めの鼻、太目の眉。取り立てて特徴はないが、愛嬌のある顔立ちだ。

「きみ、ちょっといいかな？」

「ひっ！」

突然声をかけられて驚いたのか、少女は両手に抱えていた枯れ枝を取り落としてしまう。恐らく、焚き木として集めていたものだろう。フランスス自身もそうだったのだが、このくらいの規模の村だと、村民全員が顔見知りという状態だ。見慣れない男がいれば、警戒されるのも無理はない。

「ご、ごめん！ 驚かせちゃったみたいだね」

フランススは馬から飛び降りると、地面に散らばった枯れ枝を拾い始める。程なく、枯れ枝を集め終えた。

「あ、あの、ありがとうございます！ さっきはごめんなさい、私ったら変な声上げちゃって」

「イヤ、突然声をかけた僕も悪かったから」

「ええと、騎士団の方ですよね？」

少女は、フランススの服装を見てそう察したのだろう。先ほどまでのおどおどした雰囲気はなくなった。

「あっ、ひょっとして新しい隊長さんですか？」

「うん。よくわかったね」

「私、駐在所でお食事とかお洗濯のお手伝いさせてもらってるんです。そろそろ新しい隊長さんが来る、って聞いてましたから」

「ああ、なるほど。僕は、フランシス・ファウラー。これからお世話になると思うけど、よろしくね」

「あっ、私ったら自己紹介もしてませんでしたね。私はドロシー・ハミルトンです！ ドロシーって呼んでくださいね、ファウラー隊長！」

少女が、元気一杯に自己紹介する。

「僕のこと、フランシスでいいからね」

「そんな、失礼じゃ……」

「いいんだ。本部のほうでも、僕のことをファウラーなんて呼ぶ人はほとんどいないし。それに、君は騎士団員でもないんだから」

「そうですか……じゃあ、フランシスさん、早速駐在所にご案内しますね」

「ああ、その焚き木を置いてきてからでも——」

「いいんです。これ、もともと駐在所のほうに運ぶつもりでしたから」

そう言って歩き出したドロシーを追い、フランシスは馬を引く。

駐在所までは、あつという間の道のりであった。村落の治安維持と防衛が目的である駐屯部隊が村の入り口付近に置かれているのは、当然といえば当然のことである。

周りの民家は丸木組みのものがほとんどなのに対し、駐在所はどっしりとした石造りの建物だった。広さ、高さともに周囲から抜きん出ており、かなり目立つ。脇には、厩と納屋が併設されている。

「ハンターさん、新しい隊長さんをお連れしましたよ！」

ドアを開けるや、ドロシーが大声で呼ばれる。駐在所の中では火が焚かれていたのか、フランスはふんわりとした温かい空気に包まれた。

「そんな大声を出さないでも聞こえる、っていつも言ってるだろう……お、今度の隊長さんは随分若いんだな」

駐在所の奥から顔を出したのは、中背ながらがっちりとした体つきの中年男だった。白髪混じりの短髪に無精髭。細めのブラウンの瞳が、どこことなく人の良さそうな印象を与える。

「フランス・ファウラー少尉です。よろしくおねがいします」

「こいつはご丁寧に。俺は、ジュード・ハンター曹長であります」

そう言って、ハンターが敬礼した。

「それで、他の団員は？」

フランスが、あたりを見回しながら尋ねた。駐在所の中からは、他の人の気配がしない。

「一人は今見回りに出ている。……それで全部だ」

「全部？　でも、駐屯部隊って最低1個小隊で構成されるって……」

騎士団では、小隊はどんな小規模なものでも最低6名で編成されることになっている。なので、ここには6名以上の人員がいらないとおかしいのだ。

「それが、ここ最近病気だの怪我だので立て続けに欠員が出ちまっ

てなあ。補充の申請は出ているはずなんだが、一向に人員が回ってこないんだ」

「たった二人で大丈夫だったんですか？」

「まあ、見てのとおり小さな村だ。犯罪なんか起こったためしがないし、人手が必要なきは村の男衆が手伝ってくれるからな」

「……はあ、そうだったんですか」

村の規模や位置を考えれば、十人、二十人といった人員が必要でないことは確かだ。しかし、合計3人というのはあまりに少ないのではないか。フランススの胸中に、不安が募る。

「そこへ、やっと新しい隊長さんが来てくれたってわけだ。2人はさすがに大変だったからな。頼りにしてるぜ、隊長さん」

そう言って、ハンターは人懐こい笑顔を浮かべた。

「そうだ、着任の書類を書かないと。認印はどこですか？」

「書類なんかは全部まとめて隊長室の机の中だな。案内するよ」

「じゃあ、私はご飯の支度しますね。フランススさん、長旅でお腹すいてるでしょ？」

「ドロシー、新隊長殿の着任祝いだ。少し早いが、今日は豪勢に頼むぜ」

「任せてください！」

ハンターに案内されたのは、最上階――3階にある、見晴らしのいい部屋だった。中には執務机と空の本棚、クローゼットとベッドが据えられている。部屋の隅には、鋳物で作られた小型のストーブがあった。床は綺麗に掃き清められており、ベッドの寝具も清潔そう。うだ。予め掃除をしておいてくれたのかな、とフランススと思う。

「印鑑なんかは、机の一番上に入っているはずだ。……ああ、それだな」

事前に下書きを済ませておいた書類に、隊長印を押す。これを本部に郵送すれば、フランススの着任手続きは完了だ。

「食事の支度ができるまで、もうしばらくかかるだろう。少し休むかい？」

確かに疲労はあるが、今睡眠をとるのはいかにも中途半端だ。少し考えて、フランススが答える。

「それじゃあ、せっくなので村を見て回ってもいいですか」

地方での任務では、その土地に慣れることが一番大事だ、とエドガーから聞いている。村の様子を知るのが、その第一歩だ。

「よし、じゃあ俺が案内しよう。見回り中のアントニーにも会えるかもしれない」

ふたたび上着を羽織り、フランススたちは村に出た。相変わらずあたりは閑散としており、人影は少ない。

「随分、人が少ないように見えますけど」

フランススが生まれ育った村も大きくなかったが、いくら冬だとしてここまで寂しい雰囲気ではない。

「ああ、ここいらじゃ、冬の間若い男たちは出稼ぎに行くからな。そのせいだろう」

フランスの故郷では、ワイン、ビールなどの酒の仕込みや乾燥豆の選別など、冬の間も仕事は多い。しかし、この村では主産業の林業が、冬になると休止される。川の水温が下がって、木材の運搬の際に危険が生じるためだ。人手が余るため、冬の間男たちは出稼ぎに行くのだという。

と、二人の行く手に、周り比べて大きな、一軒の家が見えてきた。

「あそこが村長の家だ。とりあえず村長に紹介を——ん？　なにかあったのか？」

村長の家の前には人だかりができていて、みな一様になにやら深刻そうな表情を浮かべている。その中に、騎士団の制服を着た、ひとときわ背の高い青年がいた。年齢は20を超えたばかり、といったところだ。

「おい、アントニー！　こりゃ一体何の騒ぎだ」

「あっ、ハンター曹長！　ちょうど呼びに行こうと思っていたところで——そちらは？」

アントニーと呼ばれる青年が、フランスに視線を向けた。

「ああ、こちらは新任隊長のファウラー少尉なのだ」

「フランス・ファウラーです。よろしくお願いします」

「はっ、アントニー・ハミルトン上等兵であります！　お見知りおきを！」

アントニーが、折り目正しい敬礼をする。長い顔に太い眉、いかにも朴訥で実直といった風情だ。

「それで、いったい何が起きたんだ」
「はい。実は――『マダラ』が出たそうで」

人食い熊

「マダラだと!? 場所はどこだ」

「東の山のほうです。ロブの爺さんが見かけたそうで」

「東の山……って、村のすぐ裏のか?」

「そのようです」

ハンターとアントニーが緊迫した様子で話しているが、その間フランスはすっかり蚊帳の外だ。

「あの一、マダラって?」

堪りかねて、ハンターに尋ねる。

「ああ、隊長さんは知らなくて当然だな。マダラ、ってのはこの村の周辺に出没する熊のことさ。灰色地の毛皮に茶色の斑模様があるからマダラって呼ばれてる」

「巨大な人食い熊です。ここ数年で、数名の死者がでています」

と、家の中から村長が顔を出した。60過ぎの、白髪の老人である。

「おお、ハンターさん、来てくださったか」

「話は聞いた。それにしても、ロブ爺さんはよく無事で済んだな」

「ああ、わしも無我夢中だな。肩の辺りに一発ぶち込んでやったら、それで怯んで逃げていったんじゃない」

人だかりの中から、一人の老人が答えた。彼が、件のロブ爺さんらしい。

「しかし、中途半端に手傷を負わせたとなると、厄介だぞ」
「そうなんじゃよ。加えて、冬眠前のこの時期じゃ。相当気が立っているに違いない」

村長もハンターも、うーんと唸って頭を悩ませる。

「すまんのお。わしが半端なことをしてしまったから」

ロブが、申し訳なさそうに謝罪する。

「爺さんのせいじゃないさ。命が助かってよかったよ」

ハンターが、そう言ってロブの肩を叩いた。

「やっぱり、この機会に山狩りして仕留めちまうのがいいんじゃないか？」

一人の男が提案するが、ハンターはそれを却下した。

「やめておいたほうがいいだろう。男衆が山狩りに出ている間に、手薄になった村が襲われたら大変だ。実際、過去にそういう事件があったんだよ」

それを契機に、男たちの間で喧々諤々の議論が始まった。

「しかし、おちおち木の実や茸も取りに行けねえぜ。それはちよつと困るんだが」

「人手を半分に分けて、山狩りと村の守りに当たったらどうだ」
「それでは効率が悪いじゃろう。ただでさえ男手が少ないんじゃない」

「山に入るのは諦めて、村に籠るほうがいんじゃないか」

「村にいるからとて、油断はできんわい。3年前、リチャードのころの羊が食われたのを忘れたか？」

「完全に冬になるまで、マダラに怯えながら暮らすってのもなあ」

男たちは口々に意見を言うが、さっぱり結論は出ない。皆が一通り言いたいことを言った後、沈黙があたりを支配した。村人たちの視線は、自然と村の守り手であるハンターに集中する。なんとかしてくれ、との期待が込められているのが、フランススにも見て取れた。

「あー、皆の言いたいことも分かるが。実は、今日新しい隊長が着任してきたところだな。隊長を差し置いてあれこれ決めるわけにはいかんのだ」

「隊長？ ひょっとしてそちらのお若い方が……？」

フランススを見る村長の目には、落胆の色が浮かんでいた。無理もないことだ。パツと見では、フランススは兵学校を出たばかりの若造にしか見えないだろうから。エドガーのように男臭さを全身から発しているようなタイプならともかく、フランススはいかにも人のよさそうな青年だ。頼りなく思われるのも仕方ない。本来は、竜との近接戦闘を数度経験した、数少ない人物の一人なのだが。

「フランスス・ファウラーです。このたび、アスカム村駐屯小隊長に任命されました。よろしくお願いします」

「うむ……まあ、一人でも人手が増えるのは僥倖じゃ。で、どうしたらいいかね」

村長は、まるで期待はしていないが、一応聞いてみたという様子だ。

「そうですね……」

任せられたからには、隊長職を全うしなければならぬ。人を指揮することは不慣れだが、責任案の強いフランシスは必死に考える。

「応援を呼ぶにはどのくらいかかりますか？」

「一番近い村でも、往復2日はかかるだろう。夏場ならともかく、今の季節夜に移動するのは危険だから。無理を言えば、1日半ほどで済むかもしれないが」

「集められる人員は？」

「うーむ、他の村の駐屯部隊も、村を完全に空けるわけにはいかんだろうしな。3つの村を回って10人集めるのがやっとというところだ。それ以上となると、大きな町の騎士団支部まで行かなくちゃならぬ」

腕組みをして考えるフランシス。

「安全に山狩りをするにはどのくらいの人数が必要ですか？」

「10人ほどの隊が5つか6つ以上あったほうがいいだろう。相手は並みの熊ではないからな」

ハンターの代わりに、村長が答える。

「今、村で戦えるのは？」

「今村にいるのは、老人と女子供ばかりじゃからのう。12、3とあったところか」

山狩りに必要な人員を集めるには、どうしても数日を要することになる。過去に村の中まで進入してきたこともあるらしいので、村

に籠るにしても、四六時中警戒をしていなければならない。

本当は、手っ取り早く解決する方法が、すでにフランシスの頭の中にはあった。竜人兵たる自分が山に入り、熊を打ち倒すというものだ。しかし、熊というのは未知の相手だ。今回、フランシスはヘヴィー・ハチュットを持ってきていない。本来それは対竜用の武器であり、長旅をするのには無用の武器だと考えたからだ。装備しているのは、騎士団標準のナイフ二本とマスケット一挺。本当にこれでやれるだろうか――そんなことを考えていると、一人の女性が血相を変えて駆け寄ってきた。

「マダラが出たって本当ですか!？」

開口一番、女性が叫んだ。

「今、対策を話し合っているところだが……どうしたんだ、ポッターの奥さん」

「子供たち――アンとサムがいないんです! あの子たち、私の目を盗んでよくちよく村の外へ出歩いてるみたいで……」

ポッター夫人の顔面は蒼白だ。危険な熊が村の近くを徘徊しているというのだから、無理なからぬことである。

「まあ、落ち着くんだ。……しかし、弱ったな」

ハンターが唸る。一刻も早く捜索に行くべきだが、何せ人手が足りない。男衆が村を空けるわけにもいかないのは、上述の通りである。ことここに至っては、フランシスも躊躇している場合ではなくなった。

「僕が東の山に行きます! 他の皆さんは、手分けして村の近くを

搜索してください」

「隊長一人でか！？ 無茶だ、マダラに遭っちゃったらどうするんだ。それなら、俺も一緒に行くぞ」

と、ハンター。

「私も、当然お供いたします！ 東の山のあたりなら、子供の頃から知っていますので」

アントニーも力強く言う。

2人の身に危険が及ぶことも考えたが、この土地に全く不慣れなフランスス一人で搜索に向かうよりは、ハンターたちがいたほうが効率がいい。それに、2人として騎士団所属の軍人である。子供2人の安全を、より優先すべきだろうという結論に達する。

「……わかりました。では、早速出発の準備をしましょう。ハンターさんは、村の人たちの搜索班を編成してください」
「わかった！」

フランススたち3人は、慌しく村を飛び出した。

一騎打ち

フランシスたち3人は、馬に乗って東の山に向かう。

アントニーが言うには、その山は昔から村の子供たちの遊び場になっているため、ポッター夫人の子供たちがいる可能性は十分にあるのだという。無論、マダラがそこに出了たというのは今回が初めてであった。

平原をほんの少し進んだところに、その山はあった。フランシスたちは馬を降り、山に分け入る。

針葉樹林が広がる周辺と違い、この山には人の手によって有益な樹木が植林されている。足元には、色とりどりの落ち葉が厚く積もっていた。

3人は、弾丸が装填されたマスカットを手に、注意深くあたりを探る。

「ちょっと待ってください」

そう言うと、フランシスは地面に耳をつけてみる。スオウやアルフレッドの真似事だ。

確かに、いくつかの足音らしきものは聞こえる。が、それが子供たちのものなのか、野生の獣のものなのか、はたまたマダラのものなのか。フランシスには判別できなかった。一応、アルフレッドから足音の聞き分け方を教わってはいしたが、厚く積もった落ち葉が音を吸うこの環境では、聞き取りは難しい。

とりあえずは、一番近くの足音を目指すことにする。

「隊長さん、まるで獵師みたいだな。そんな特技があったのか」
「まあ……いちおうですが」

しばらく山中を歩く。が、その足音の主は、一匹の鹿であった。ふたたび、地面に耳を付ける。今度は、ひとつ特徴的な足音が聞こえた。どしん、どしんといかにも重量感のある足音だ。もしや——と思った瞬間、山中に響き渡る甲高い悲鳴、そして地面から伝わる乱れた複数の足音。

「こりゃあ、拙いぞ！ アントニー！」

「はい！」

2人が、慌てて駆け出す。

「僕が先行します！」

そう言うと、フランシスは一気に加速した。事態は一刻を争うかもしれない。竜人の脚力をいかになく発揮し、落ち葉を舞い上げながら走る。そのあまりの速度に、ハンターとアントニーは呆然とするほかない。二人の視界からフランシスが消えるのに、そう時間はいかなかった。

「あそこか！」

フランシスの視線の先。木々の間から、灰色の大きな影が見える。そして、数十ヤード先には、小さな二つの人影。件のマダラと、ポッター夫人の子供たちに違いない。必死で逃げる二人だが、所詮は子供だ。全力を出せば毎時20マイルにも達するといわれる熊の足からは、逃げ切れるはずもない。見る見る熊が2人に迫る。

「くっ！」

いっそう足に力を込め、さらに加速。男の子が足をもつらせ、転

倒した。熊の片手が無情にも振り上げられ――

「危ない！」

すんでのところでフランシスが間に合った。熊との間に割り込むと、とっさに子供を突き飛ばす。

「ぐううっ!？」

薙ぎ払われた熊の右手を、フランシスはその身に受けた。マスクットで防御したものの、フランシスの身体は軽々と吹き飛ばされる。熊の爪によって、マスクットは真中からへし折れた。常人ならば、即死してもおかしくないほどの威力だ。

「兄ちゃん、大丈夫!？」

男児がフランシスに駆け寄る。

「ぼ、僕は大丈夫。君は早く逃げるんだ！」

頭を振って立ち上がると、子供を背に庇ってナイフを抜き放つ。

2人の子供は、心配そうな眼をフランシスに向けながらも、その場から遠ざかっていく。

マダラは後足で立ち、狩りの邪魔をしたフランシスを睨みつける。ハンターが語ったように、灰色の毛皮には茶色の斑模様が混じっている。いや、もともと茶色の毛皮が色あせて灰色になり、ところどころ茶色が残ったというのが正しいだろう。身の丈は、フランシスの2倍を優に越える。生まれ故郷のジーンの村の近くでも、何度か熊を見たことのあるフランシスだったが、どれも大きさは6フィートを越えなかった。全身に傷跡らしきものが見え、この熊が古強者

であることをうかがわせる。

——怯むな。竜に比べれば、どうということはない。

フランシスも負けじと、マダラを睨み返す。先ほど一撃を受けてしまったものの、骨に異常はない。両手のナイフを逆手に構え、戦闘体制に入る。

「グオオオオツ！」

咆哮とともに、マダラが猛然とフランシスに襲い掛かる。振り下ろされる爪をかい潜り、ナイフを一閃、二閃。腹部のあたりを十字に切り裂くが、マダラは全く怯まない。ふたたび爪を振りかざしてフランシスに迫る。

「浅いか！」

フランシスは、後ろに跳んで距離を取る。熊というのは、分厚い毛皮と筋肉、並外れた生命力を持つ動物だ。しかも、マダラはとりわけ巨大で強靱だ。いかに竜人といえど、生半なことで倒せる相手ではない。

繰り出される爪は、竜人たるフランシスにとって大したスピードではない。コマのように熊の周りを回りながら、フランシスは矢継ぎ早に斬撃を繰り出す——が、どれも有効打とはならなかった。ナイフの刃渡りが短いのと、刃自体に重量がないために、深く傷を付けることができないのだ。

熊の血糊がナイフにたまり、みるみる切れ味が鈍っていく。斬撃が駄目ならばと、フランシスは熊の懷に飛び込むと、腰だめに構えたナイフを全体重ごと思い切り突き刺す。

「グオアッ!？」

さしものマダラも苦悶の声を上げる。しかし、やはり刃渡りが短い。内臓まで達しなかったことは、フランシスもその手ごたえでわかった。

「くっ！」

慌てて引き抜こうとした瞬間、そのナイフは根元からぼっきりと折れ、フランシスの手元には柄だけが残った。これで、フランシスの武器はあとナイフ一本のみ。どうしたものか、とフランシスが考えていると、熊は前足を下ろして四本足になる。地面を馴らすように数度足踏みすると、フランシス目掛けて一気に突進した。

「つて、うわっ!？」

横に飛びのこうとしたフランシス。しかし、落葉に薄く積もった雪に足を滑らせ、反応が遅れる。とっさに腕を交差させ、後ろに飛びのいた。が、それでも衝撃は殺しきれず、フランシスは数ヤード吹き飛ばされて、背中から立ち木に激突した。幹が大きく揺れ、梢に積もった雪が降り注ぐ。

竜人の反射速度なら、決してかわせない攻撃ではなかった。一瞬の油断が招いたダメージだった。

気が付くと、フランシスの手の中にナイフがない。見回すと、マダラの足元に光るものが見えた。マダラの体当たりで、思わず取り落としてしまったのだろう。これで、フランシスはとうとう丸腰になってしまう。

と、パァンという乾いた音が響き、熊の太ももあたりから血が流れ出した。

「隊長、無事か!？」

煙を吹くマスケットを手には、ハンターが走り寄る。続いて、銃声
がもう一つ。アントニーによるものだ。しかし、弾丸は熊の身体を
かすめ、後方の木の幹にめり込んだ。

銃弾を受けてもお、マダラは全く怯まない。それどころか、ま
すすいきり立った様子だ。

「退却しましょう！」

アントニーが叫ぶ。しかし、フランスはともかく、他の二人が
マダラから逃げ切れる保障はない。そして、フランスたちの後を
追って、この熊が村になだれ込む可能性もある。

「ここで、仕留めます」

不退転の決意で、フランスがふたたび熊と対峙する。

「おい、無茶だ！」

ハンターが止めるのを無視して、フランスが一気に熊に肉薄す
る。振り下ろされた爪を、左手でいなしつつ、懐に入り込んだ。

無手となったフランスの頭にあったのは、スオウから教わった
カルジュ式格闘術のある技だ。スオウ曰く、基本中の基本であり、
同時に極めれば最終奥義となる。まさに、カルジュ式の技術の粋を
体現した技だ。

幅広に足を開き、右手を腰から後ろに引き絞る。短く、鼻から息
を吸う。――軸足の指先から、右手の先まで。体全体が、一つの螺
旋を描くように。スオウの教えを思い出し、足先に蓄えられた力を、
回転運動に変えながら腕に伝える。呼気とともに、右の掌を突き出
した。

「はあぁっ！」

どすん、という鈍い音とともに、フランシスの掌底がマダラの胸板に突き刺さった。最後の仕上げに、捻り込むように手首を回転させる。

「グ……オウ……!？」

自分の身に何が起こったのかわからない、という表情でマダラの身体が硬直する。一瞬の間を置いて、その口から鮮血が零れ落ちた。マダラは、ゆっくりと地面に倒れ伏す。

その名も『螺旋』という。かつて間者騒動の際、スオウが巨大な炎竜をぐらつかせた、その技だ。骨や筋肉を透過して、対象の身体の内部に直接衝撃を伝える。スオウに比べ、まだまだ稚拙なものだったが、竜人の膂力から放たれたその一撃は、マダラの内臓を破壊するのに十分な威力を持っていた。

「や、やったのか……?」

思わず、その場に尻餅をつくフランシス。竜とは比べるべくもないが、手ごわい相手だった。『螺旋』もまだ付け焼刃の段階であり、正直一か八かだったのだ。安堵感から、力が抜ける。

「驚いたな、こりゃ。村の連中になんて説明したらいいんだ」
「同感です」

ハンターとアントニーは、呆然とマダラの死体を見つめる。

「そうだ、子供たちは？」

ハンターに手を引かれ、フランシスが立ち上がる。

「心配要らないさ、子供にとってここいらは庭みたいなものだ。すぐ見つかるだろう。それより隊長、怪我は？」

言われて、フランシスは自分の身体を見回す。擦り傷や打撲はあるものの、骨折・脱臼などの大きな怪我はないようだ。

「大丈夫みたいです。……すみませんでした、独断専行しちゃって」「いや、隊長のあんたが謝るこっちゃないが……それにしても、驚いたよ。あんた、『竜人』だったんだな」

「竜人のこと、知ってるんですか!？」

「ああ、俺もヒョッコのころ、東方遠征に従軍したからな。パーシヴァル将軍が戦うのを見たことがある」

「あの……できれば、このことはあまり大っぴらにしないでもらいたいんですけど」

極秘というほどのことではないのだが、竜人兵に関することは極力公言しないように、というのが対竜部隊での決まりごとなのだ。

「うん? まあそれは構わんが。しかし、就任早々大手柄だな」

「自分も、感激いたしました! このような隊長の下で働けることを、誇りに思います!」

「アントニーさん、大げさですって。……で、この死体はどうします?」

「そうだなあ」

ハンターがマスキットに弾を込めると、死体の眉間に弾丸を撃ち込んだ。

「隊長の放った弾丸が、見事コイツの急所を撃ち抜いた、ということにでもしておこう。まさか、素手で仕留めた、なんて言っても誰も信じないだろうしな」

「熊の死体からは、肉や毛皮が取れます。村人たちに知らせれば、引取りに来るでしょう」

「そういうわけだ。あとは皆に任せて、俺たちは引き上げるとしようや」

ハンターたちに肩を借りつつ、フランシスはその場を後にするのだった。

宴

2人の子供と合流したフランスたち3人は、程なくして村に帰り着いた。

集まる村人たちに、ハンターが宣言する。

「なんと、このファウラー隊長が、マダラのやつを仕留めてくれたぞ！」

ハンターの言葉に、村人たちからざわめきが起こる。

「ハンターさん、それは本当かね」

「嘘を言ってもしょうがないだろう。なあ、アントニー」

「はい！ 隊長は実に見事な戦いぶりでした！」

それでもなお、信じられないといったふうに顔を見合わせる村人たち。

「とにかく、実際に見たほうが早いだろう。それに、肉が新鮮なうちに取りに行ったほうがいいんじゃないか？」

「う、うむ、わかった」

村長の合図で、数名の男たちが駆け出した。

マダラ死亡の報が村に届けられたのは、それからすぐのことだった。知らせを聞いた村人たちは大騒ぎだ。熊の毛皮は高価なため、喜び勇んで東の山へ向かって行く。

「いやあ、正直あんたのことをみくびったよ。すまんかった」

村長が、フランシスに頭を下げる。

「いえ、とんでもないです。それより、子供が無事で良かった」

と、ポッター夫人が駆け寄ってきた。

「ありがとうございます！ 本当に、なんてお礼を言ったらいいやら……こら、あんたたちもお礼なさい！」

2人の子供たちは、フランシスの両腕にまわり付いて、お兄ちゃんすごい、すごいと感嘆の声を上げている。その瞳はきらきらと輝き、まるで物語の中の英雄を見るようだ。

「2人とも、お母さんに黙って村の外に出ちゃダメだよ」

2人の頭を撫でながら、フランシスが優しく諭す。その言葉は、母親の小言よりもよほど効果的だったようだ。2人は、素直に頷いた。

「ほれ、隊長はお疲れだ。今日のところは、引き上げさせてもらおうぞ」

ハンターが子供たちを引き剥がす。口を尖らせて文句を言う2人を、ポッター夫人がしかりつけた。

「隊長、駐在所に戻りましょう。ドロシーのやつが、温かい料理を作って待っているはずですよ。それに、手当てもしませんと」

村に着いて早々のドタバタで、さすがにフランシスも疲れ果ててしまった。アントニーの言葉に従い、駐在所へ向かった。

駐在所の入り口では、ドロシーがフランスたちの帰りを今か今かと待ちわびていた。フランスたちの姿が見えると、息せき切つて駆け寄った。

「フランスさん、無事ですか！？ 帰りが遅いから探しに行ったら、マダラが出たとか子供がいなくなったとか大騒ぎで。心配したんですよ」

「ごめん。それは、悪いことをしたね」

思い返せば、フランスは村を見て回ると言つて駐在所を出て、そのままゴタゴタに巻き込まれてしまったのだ。ドロシーもさぞ不安だったに違いない。

「ドロシー、聞いて驚くなよ。この隊長は、たった一人でマダラを斃しちまったんだぞ」

ハンターの言葉に、ドロシーも驚愕する。

「一人で！？ 大丈夫だったんですか？」

「うん、この通り。ちょっとだけ怪我をしちゃったけど」

「大変、すぐ手当てをしなくっちゃ！」

そう言うと、ドロシーは駐在所の中に駆け込んでいった。

「隊長、忙しい妹で申し訳ありません」

アントニーが、ばつの悪そうな顔をする。

「妹？ あっ、そういえばハミルトンって……」

「アントニーは、外から赴任した俺や隊長と違って、この村で育ったいわゆる現地雇用組だからな。ドロシーも、兄貴について来る形でこの手伝いに入ったんだよ」

「そういうわけです。さあ隊長、早く中へ」

駐在所の中からは、煮込み料理と思わしきなんともいえないいい香りが漂う。暖炉で燃える薪が発する熱が、部屋の空気を優しく暖めていた。そこへ、ドロシーが盆に湯気の立つカップを載せて戻ってきた。

「とりあえず、これを飲んでください。身体が温まりますよ」

言われて、フランシスはカップに口をつけた。芳しい香りとほのかな甘みが口の中に広がる。少し間を置いて、じんわりと温かいものが腹に染み渡った。

「あ、おいしい」

フランシスは、思わずそう口にする。

「こいつは、楓の樹液から作ったりキールを、お湯で割ったもんだ。寒いときにはこれが一番さ」

そう言って、ハンターもカップの中身を飲み干した。

「さあ、隊長。服を脱いでください」

たらいにお湯を張ったアントニーが、フランシスを促す。しかし、ドロシーの視線が気になって、服を脱ぐのを躊躇する。

「ほら、早く！ 傷が悪くなったら大変ですよ！」

「いや、ちょ、自分で脱げるから！」

ドロシーが無理矢理服を脱がしにかかったため、フランシスは仕方なく下着姿になる。

「まあ、ドロシーのことは気にするな。こういうことは慣れっこだからな」

と、ハンター。

大きな怪我こそなかったが、フランシスの身体には多数の擦り傷と打撲ができていた。まずドロシーがお湯で傷口を清め、アントニーが清潔な布を当てて包帯で固定する。その間、ハンターが薬草をすりつぶし、お湯で練る。これを患部に塗って当て布をすると、湿布になるのだという。程なくして、手当ては完了した。

「ありがとう、随分楽になった気がするよ」

ドロシーが用意した新しい服に袖を通しつつ、フランシスが礼を言った。

「さあ、腹も減っただろう。ドロシー、料理の準備は？」

「完璧です。腕によりをかけて、ご馳走を作りましたから！」

「よし、アントニー、お前は酒を買って来い！ 隊長の就任祝いとマダラの討伐記念だ。今日は、派手にやるぞ！」

「了解であります！」

「せっかくだ、村の衆も呼んで来るか」

「でも、お料理が足りないかも」

「自分が村で食料を調達してきます！」

どたばたとアントニーが駆けていく。フランスを置いてけぼりにして、着々と宴会の準備が進んでいった。フランスはその様子を見て、対竜部隊の面々と酒を飲みに行ったときのことを思い出す。やがて、台車に積んだ大量の酒とともに戻ってきたアントニーを皮切りに、続々と村人が集まってきた。皆、手に手に料理や酒を携えている。村一番の広さを持つ駐在所もすぐに手狭になったため、駐在所前の空き地に大きな焚き火をいくつも焚いて、そこで宴が行われることになった。テーブルや椅子が並べられ、次々料理が運ばれる。まるで、お祭り騒ぎだ。

「随分な大ごとになっちゃったような……」

フランススが、思わず呟く。

「マダラが死んで、大きな不安が取り除かれたからな。まあ、俺もここまで大掛かりな宴になるとは思わなかったが」

ハンターが、笑いながらそう言った。

陽が山の向こうに姿を消したころ、宴の準備は整った。雪がちらつくほどの気温だが、大きな焚き火のおかげで寒さはそれほど気にならない。こういうのも悪くない、とフランススは思う。駐在所前には、100人近くの村人が集まっている。この場にいないのは、小さい子供や病気の家族がいる者だけだとか。

アントニーが、赤紫色の酒が入った杯を、フランススに手渡した。

「これは？」

「すぐりの実から作った酒を、白葡萄酒で割ったものです。すぐりの酒は、村の名産品です」

「この村じゃ、一杯目は大体これなのさ」

周りを見渡すと、確かに大人たちのほとんどがこの酒を手にして
いる。

そこで、村長が杯を片手に進み出た。

「皆の衆、すでに聞いておると思うが、駐屯部隊の手によって憎き
マダラが成敗された。この村が拓かれてより、これほどめでたい日
があったであろうか。まこと、喜ばしいことじゃ」

村人たちから、喝采が上がる。

「そして、見事マダラを仕留めたというのが、そちらのファウラー
隊長殿じゃ。今日着任したばかりで、まだ皆に紹介も済んでおらん
かったな。ひとつ、ご挨拶をお願いしたい」

「ええっ、ここですか!？」

村人たちの期待の視線が、フランスに集中する。退くに退けな
い雰囲気である。仕方なく、フランスは皆の前に進み出た。

「ええと、このたび駐屯部隊の隊長職に任命されました、フランシ
ス・ファウラーです。若輩者ですが、精一杯頑張りますので、よろ
しく願います」

実にフランスらしい、当たり障りのない挨拶であったが、今日
の彼は村の英雄だ。大きな拍手喝采が浴びせられる。

「さて、細かい前置きはこのくらいにしておこう。マダラ討伐と、
ファウラー殿着任を祝して、乾杯!」

村長の音頭とともに、宴が始まった。フランスも、手にした杯
を傾ける。すぐりの酒と白ワインが互いの風味を引き立てあって、

口の中で芳醇な味わいが広がった。

「フランスさん、これ私が作ったんです！ 食べてください！」

ドロシーに手渡された器には、煮込み料理が盛り付けられていた。羊肉とたっぷりの根菜、キャベツが入ったポトフだ。

「うん、すごく美味しい。ドロシーは料理上手なんだね」

「えへへ、お口に合って良かったです」

ドロシーが赤面して照れる。お世辞ではなく、そのポトフは美味だった。肉は長時間煮込まれて口の中で解けるような柔らかさ。野菜は、しっかり味が染みているものの煮崩れしていない、絶妙な火の通り方だった。控えめな香草の風味が、それらの素材の味を引き立てている。じんわりと五臓六腑に染み渡るような、優しい味付けだ。

「隊長さん、さっき絞めたばかりの鶏の丸焼きです！ ぜひ食ってください！」

「うちで漬けたピクルスだよ。あたし自慢の一品さね」

「おーい、だれか酒を持って来い！ 隊長さんの杯が空だぞ！」

フランススの労を労おうと、村人たちが続々と集まってきた。先ほど助けたポッター夫人の子供たち――アンとサムをはじめとした村の子供たちも、フランスにすがり付いて熊と戦ったときの話をせがむ。実にかشましい雰囲気だ。

「隊長、申し訳ないな。村の衆も嬉しくて仕方ないんだよ。お疲れだろうが、もう少し付き合ってやってくれ」

ハンターに耳打ちされ、フランシスも頷く。疲労感はあるものの、
こういう雰囲気も悪くない。

やがて、解体されたマダラの肉が運ばれ、焚き火にくべられた。
塩と香草で簡単に味付けをして、大きな塊のまま豪快に炙る。仕上
げに葡萄の蒸留酒がかけられ、盛大な炎が上がったところで熊肉の
炙りの完成だ。村人一人に一切れずつ、その肉が配られる。フラン
シスには、特別にひととき大きな肉の塊が与えられたが、それに文
句を言う者はもちろん誰もいなかった。

やがて一人が楽器を演奏し始めると、次々に楽器を持ち出すもの
が現れ、焚き火を囲んでのダンスが始まった。

宴会は遅くまで続き、焚き火の火が弱くなったところでようやく
お開きとなった。

大量に飲み食いしたフランシスは、その日の疲れもあって、ベッ
ドに入るや深い眠りに落ちるのだった。

フランススの書簡

親愛なるクリステイへ

小隊長に着任して3日。身の回りの整理も終わり、ようやく落ち着いてきたので筆を取りました。

こちらでは、毎日雪が降っています。ハンターさん——隊員の曹長さんです——が言うには、もうすぐ本格的に雪が積もるのだとか。シラーズはどんな様子ですか？

さて、着任して早々起こった出来事を教えます。

僕は、熊と闘いました。まさか、こんなことになるとは想像もしていなくて、自分でもビックリでした。とても大きくて強い熊で、危ないところでしたが、ハンターさんたちの助けもあり、なんとか斃すことができました。竜ほどじゃなかったにしても、正直怖かったです。

熊を倒した記念にと、その熊の牙を一本もらいました。どうしようかと悩んだけど、結局ペンダントにしてテイル・ドロップと一緒に首から下げることになりました。

それから、村の人に熊の肝を食べさせてもらいました。身体にいいとのことですが、すごい味でした。正直二度と食べたくないと思いました。

村の人たちは気さくでいい人ばかりです。僕の就任祝いも、盛大にやってくれました。まだここへ来て3日目ですが、顔を合わせればみんな挨拶をしてくれるし、駐在所に差し入れをしてくれたりもします。はじめはあまり自信がなかったけど、何とかやっていけそうな気がしています。

小隊のメンバーは2人です。合計3人と聞いたときはびっくりしたけど、小さな村なのでこの人数でも大丈夫らしいです。さつき書いたハンターさんは、東方遠征にも行ったことがあるというベテランで、頼りになる人です。もう一人のアントニーさんは、若くてすごく真面目な人。堅苦しいのはやめてくれ、と頼んでも、まるで聞いてくれません。そこが、彼のいいところでもあるんだろうけど。あと、炊事洗濯の手伝いをしてくれる、ドロシーって女の子がいます。とても料理上手な子で、毎日食事が楽しみです。

手紙を書くのは初めてなので、なんだかとりとめのない文になってしまいました。短いけど、今日のところはこれで筆を置きます。実は、これでもここまで書くのに2時間かかってしまったので。

部隊のみんなにもよろしく伝えてください。それでは、またすぐに手紙を送ります。

追伸

スオウさんに習った格闘術がなかったら、熊を倒せなかったでしょう。スオウさんにそう伝えておいてください。

小隊長の一日

シラーズの対竜部隊本部基地と違い——ここ、アスカム村駐屯小隊駐在所には、起床ラッパを吹き鳴らしてくれる者はいない。

旧大陸では、歯車に細工を加えることで、決まった時間に鈴や鐘を鳴らすことのできる時計が普及し始めていたが、無論そんなものがあるはずもなかった。

しかし小隊長フランシスは、教会の孤児院時代から変わらず規則正しい生活を送ってきたため、夜明けとともに起きなければならぬ『朝当番』にも、寝過ぎすことは皆無であった。

『朝当番』とは、駐在所広間の暖炉や台所の竈に火を入れたり、水を汲んだり、お湯を沸かしたり——朝やらねばならない細々とした雑事を担当する係のことであり、常駐するのがわずか2人というこの駐在所においては、2日に一度回ってくることになる。

朝。

目を覚ましたフランシスは、しんとした冬特有のの空気に包まれる。隊長室備え付けの小型薪ストーブの火はとうに絶え、吐く息がわずかに白く染まる。ぶるっと一つ身震いをしてから、大きく伸び。眠い目をこすり、ベッドから立ち上がった。

とりあえず寝巻きの下のみを着替え、上に厚手の外套を羽織る。

「ううっ、やっぱり寒いなあ」

思わずひとりごちる。季節的には厳寒期はまだまだこれからだが、村の生まれでないフランシスにとっては堪える寒さだ。シラーズの寒さに辟易していたデイジーの気持ちを理解するフランシスだった。

まず最初にやるのは、広間の暖炉に火を入れることだ。暖炉に火

口と着火剤――ボロ布にランプ油を染み込ませたもの――そして細い枯れ枝の順に放り込む。火打石を叩いて、火口に火をつける。火口の火はやがて着火剤、枯れ枝へと燃え移る。枯れ枝の炎が十分大きくなったところで、細めの薪から投入していく。

完全に火がついたのを確認すると、同様の手順で竈に着火。大鍋に汲み置きしてある甕の水を張って、竈に載せる。お湯を沸かしている間、村の井戸まで新しく水を汲みに行く。普通なら数回に分けて運ばねばならないのだが、そこは常人離れした臂力を誇る竜人だ。一抱え以上ある水瓶一杯に井戸水を入れ、それを担いで駐在所に戻った。その光景を目にした村人たちは、一様に口をあぐりと開けて驚くのだが、「見かけによらず随分力持ちなんだ」ということで納得しているようである。

水汲みから戻ったところにはアントニーが出勤し、ハンターも自室から出てくる。顔を洗ったり、髭を剃ったりして身だしなみを整え、制服に着替える。ここで、ようやく駐屯小隊の一日が始まるのだ。

「ええと、夕べのシチューの残りとおパンと……あつ、卵がまだ残ってますね。ハンターさん、目玉焼きでいいですか？」

「ああ、悪いな、隊長さんに食事まで作ってもらうなんて」

「2人しかいないんだし、当番なんだから当然ですってば」

そう言いながら、熱したフライパンに慣れた手つきで卵を二つ落とす。ちなみにアントニーは自宅で朝食を済ませてくるため、ここで食卓に加わることはない。

「隊長、なかなか見事なお手前ですな」

「そうかな？ まあ、孤児院にいたころも料理はしていましたしね」

「自分は料理に関しては何で不器用でして、いくら練習しても上

手くならないのですよ。羨ましい限りです」

感心しきり、といった様子のアントニー。

「アントニーさんはドロシーに作ってもらえるからいいじゃないですか」

「隊長、ドロシーはそのうち嫁に行っちゃまうんだぜ」

「あ、それもそうか。……ハンターさん、黄身はどうします？」

「できれば両面焼きにしてもらいたいんだが」

わかりました、とフランシスはフライパンを振って目玉焼きをひっくり返す。アントニーの言うとおりに、会話をしながらにも関わらず手際がいい。

「兄としては、あの喧しい妹に貰い手があるのか心配ですが」

「バカ、あんないい娘、この村の男共じゃ釣り合わないくらいだろう。……そうだ、隊長なんかどうだ」

「か、からかわないでくださいよ。結婚なんて考えたこともないんですから」

困惑しつつも、フランシスは目玉焼きを皿に盛り付ける。付け合せにキャベツの千切りのピクルスを添えた。

「残念です。隊長のような方なら、兄として大賛成なのですが」

「まあ、よく考えりゃアントニーの嫁を捜すほうが先だったな」

「そうですよ、僕より年上なんですから」

ちなみにハンターは男やもめであり、子供もいない。再婚の意志も、現在のところないとのことだ。

暖めなおしたシチューを深皿に盛り、干し葡萄入りのパンを切れ

はこの日の朝食は完成だ。

「じゃあ隊長、いただきます」

ごく簡単なお祈りをして、朝食が始まった。

「アントニー、今日の予定は？」

「ええと、午前中は隊長とハンター曹長が巡回で、私が駐在所待機です。午後は3時まで訓練、夕方は隊長と私で巡回、曹長が待機です」

3人しかいない小隊だ。駐在所を空にするわけにもいかないので、巡回2人に待機1人という組み合わせで順番を回す。

「隊長、午前の巡回路はどうする？」

「そうですね……西のほうにまだ行っていないお宅がありましたよね。あっちのほうにしましょう」

「わかったよ。しかし、律儀なお人だなあ。全部の家を回って挨拶したいだなんて」

「短い間ですけど、僕もこの村の一員になるわけですし。そういうことはきっちりやっておきたいんです」

熊を討伐した夜、現在村にいるほとんどの村民と顔を合わせているフランスだったが、それでも挨拶に回りたいというのは彼の人の柄の表れだろう。

しかし、フランスが赴任してすでに数日が経過している。たかだか数十戸の村で、まだ回っていない家があるというのはなぜなのか。その理由は、すぐに明らかになる。

「ごちそうさま。じゃあ、行きますか」

フランシスが立ち上がる。

「了解した。アントニー、悪いが皿を洗っておいてくれ」

「お安い御用です。あ、洗濯物がありましたらその前に出してください。昼前にはドロシーのやつが来ますので」

そんなやり取りのあと、フランシスとハンターは巡回に向かった。最初に訪れたのは、老夫婦が暮らす家だ。

「おおい、ダンさん、いるか？」

ハンターが扉を叩くと、中から1人の老婆が顔を出した。

「こんにちは、駐屯小隊のフランシス・ファウラーです。今日は改めてご挨拶に参りました」

「あらまあ、ご丁寧にどうも。お爺さん、隊長さんが来てくださったよ！」

「おお、こりゃ熊殺しの少尉さんではないか。ありがたいことじゃない。すっかり村の英雄扱いである。フランシスもこれには恐縮するしかない。」

「ダンさん、何か手伝うことはないか？」

「いつも済まんもう、ハンターさん。そうじゃもう、裏の薪を割ってくれると助かるわい。ちと太すぎて、運ぶのに難儀しとるんじゃない」

「お安い御用だ」

ハンターは、壁に立てかけてあったまさかりを手取る。

「僕も手伝いますよ」

そう言ってハンターの後を追うフランスだが、老夫婦に引きとめられる。

「隊長さんに、そんな手間をおかけするわけにもいきませんよ」

「婆さんの言うとおりじゃ。茶でも入れますゆえ、ゆっくりしとってください」

村を救った英雄に手伝いなんてさせられない、ということらしい。

「遠慮は要りませんよ。隊長である僕が、部下を差し置いて楽をするわけにはいきません」

上に立つ者は、率先して部下に範を示せ。士官教育の中で、フランスが耳にたこができるほど聞かされた言葉だ。年上のベテラン相手とはいえ、部下に働かせて自分は観ているだけ、というのは隊長失格だとフランスは考えている。

もう一本まさかりを借り受け、フランスも家の裏手に向かう。小一時間ほどまさかりを振るい、備蓄してあった薪を細かく割る。薪割というのはなかなかの重労働だ。寒風に吹かれながらも、2人の額には汗が滲む。

「ふう、そろそろいいだろう」

汗を拭いながら、ハンターが手を止めた。

「そうですね。時間も時間ですし」

しきりに茶や菓子を勧めてくる老夫婦の誘いを固辞し、2人は巡回に戻った。

老夫婦はフランスをいたく気に入ったらしい。いかにも人のよさそうなフランスの風采と、その風采どおりの純朴さは、特に彼らのような田舎の年寄りにとっては好ましく思えるものなのだろう。次に訪れたのは、若夫婦と2人の子供が暮らす家。しかし、夫は出稼ぎに出ているため、家にいるのは妻と子供たちだけであった。ここでも、2人は家の仕事を手伝った。なにぶん男手がない家なので、家の修繕や水汲みなど、力仕事を積極的に行う。

「マダラを一騎打ちで斃した」フランスは、とりわけ子供たちに英雄視されている。子供たちがまわりついて離れないため、フランスは仕方なく手伝いをハンターに任せ、子供たちの遊び相手をするのだった。

こんな調子で一軒一軒回っているため、巡回は非常にゆっくりとしたペースだ。未だ全ての家を回りきれていないのも、そのためである。ハンターによれば、夏場は農作業を手伝ったり、厳寒期には雪かきや屋根の雪下ろしを行ったりするそうだ。

「すまないな、こんな仕事をやらせてしまって。しかし、対竜部隊で最前線に立っている隊長にとっちゃ、普段と随分違う生活なんじゃないのか」

「そうですね。シリーズでは、訓練して訓練して勉強して、竜と戦ってた訓練して、って感じでしたから。でも、故郷の村ではこんな毎日でしたよ」

「そういや、ジーンの村の生まれって言ってたな。俺も、若いころネスって村の駐屯部隊にいたことがある」

「ネスですか？ 僕は行ったことがないけど、知り合いが1人入るんですよ」

「そいつは奇遇だな。あそこはなかなかいい村だったぞ」

そんな会話をしつつ、巡回は続く。結局、午前の巡回で2人が回ったのは4軒に留まるのだった。

お昼前に駐在所に戻ったフランスたちを迎えたのは、洗濯籠を抱えたドロシーだった。

「あ、お帰りなさい！ ごめんなさい、まだお食事の準備ができてないんです。すぐ作りますから！」

駆け出そうとするドロシーだが、籠から垂れた洗濯物に足を取られ、前につんのめる。

「危ない！」

フランススが竜人の速度でドロシーに駆け寄り、前から抱きとめるような形で肩を支える。

「ふう、大丈夫？」

「はい、大丈夫……って、ごめんなさい！」

ドロシーは自らの体勢に気付き、慌ててフランスから離れる。顔は茹で上がったように赤くなっている。

「本当にごめんなさい！ じゃ、失礼します！」

そう言うと、ドロシーは凄いスピードで奥の部屋へと消えていった。

「どうしたんだろう……？」

首をかしげるフランシスと、それを生暖かい視線で見守るハンターであった。

昼食は、ドロシーの手によるサンドイッチと野菜スープ。ドロシーは自宅の家事をするため、帰宅している。

「相変わらずドロシーの料理は美味しいなあ。凄くお腹が空いてたからありがたいよ」

フランシスが思わずこぼす。

「しかし、竜人ってのも不便なもんだな」

「はい。あんまり全力で働きすぎると、本当に文字どおり一步も動けなくなっちゃいますから」

村人の手伝いをした際、実は竜人の力をそこそこ使ったフランシス。かなりの空腹状態だった。

「しかし、竜と戦っている間その『燃料切れ』とやらが起きてしまった場合、どうなるのですか？」

「あまり想像したくないですね……でも、そうならないように作戦前はしっかり腹ごしらえして、非常食も常に持ち歩くようにしていますけど」

「なるほどなあ。ところで、昔から気になってたんだが、竜と戦うときはどういう気分なんだ？」

「もう、怖くて無我夢中で。死に物狂いですよ」

「そんなもんか。パーシヴァル將軍なんか、笑いながら戦ってたなんて逸話があるが、やはりあの方は特別なのか」

レナードならあり得るかも、とフランシスと思う。

「隊長のお話を聞く限り、ハンター曹長も東方遠征の際に竜の血を飲まれたのでは？」

「ああ、一応な。あれは不味かったなあ。思い出すのも嫌な味だった。……まあ、俺には竜人の力が出なくて良かったよ」

「どうしてですか？」

「東方遠征で遠くから竜を見るだけでもビビっちまったくらいだぞ。あんな化け物と正面切って戦うなんて、ご免被る。隊長は本当に大したもんだよ。力があるからといって、誰しも勇敢に戦えるわけじゃないからな」

「僕はそんなじゃないですよ。さっきも言ったけど、今でもまだ怖いんですから。思い出すだけで震えが出るくらいに」

「謙遜することはありません。マダラのやつに立ち向かう隊長の姿は、実にご立派でした。やはり、ドロシーを嫁に——」

「だから、その話はもう止して下さいば」

昼食は、和やかな雰囲気に進むのだった。

午後は、訓練だ。

本来は体力作りの必要がないフランススだが、2人に付き合って走り込みをする。1時間ほど走ったところで、今度は格闘訓練が始まった。常人であるハンターとアントニーにはフランススの相手は務まらないため、2人が取っ組み合うのを横目に剣術の型の訓練を行うフランスス。

「型というのは、先人が剣を効率よく振るための経験則を積み重ねて作ったものである」、というのはサイラスの言葉だ。足の位置から剣を振る角度に至るまで、無駄なことは一つもない。サイラスの教えを思い出しながら、動作を確認するように一振り一振り丁寧に振る。

時折手を止めて2人の組み打ちを見るフランススは、ハンターの

格闘技術が高いことに気付く。無論スオウのような超人的なレベルではないにせよ、体格に勝るアントニーを軽々地面に転がしている。一方のアントニーは、技術では劣るものの見た目どおりの馬力で、諦めずにハンターに向かっていく。

「待った、アントニー！　そろそろ終わりにしようぜ」

音を上げたのはハンターだった。額にびっしりと玉の汗を流し、肩で息をしている。

「自分はまだやれますが」

「おい、お前と俺れみたいなおっサンと一緒にするな！　過労で殺す気か」

「むう……今日も曹長から一本を取ることができませんでした」

アントニーは残念顔だ。

「それじゃアントニーさん、巡回に行きましょうか」

「やれやれ、隊長も元気だな。悪いが、俺は中で休ませてもらうぜ」

手ぬぐいで顔を拭きながら駐在所に戻るハンターを見送り、フラシスたちは巡回に出るのだった。

夕方の巡回も、午前中と似たようなものであった。3軒の家を回ったところには、どっぷりと日が暮れていた。気温は急激に下がり、はらはらと雪がちらつき始めている。

駐在所に戻った二人を迎えたのは、心地よい暖かな空気と、肉が焼ける香ばしい香り、そしてドロシーの元気な声であった。

「おかえりなさい！　寒かったでしょ」

「うん、かなり冷えてきたね」

「さ、隊長、暖炉で暖まってくれ」

ハンターが暖炉の前に椅子を置く。フランシスは、それに座り、手袋を脱ぐと暖炉の火に手をかざす。冷え切った身体が、芯からじんわりと温まり始める。

「ドロシー、この匂いは？」

アントニーが尋ねる。塩漬け肉のそれとは明らかに異なる、新鮮な肉の焼ける匂い。駐在所には、そんな肉はなかったはずなのだ。

「あ、これ？ ロブさんが鹿を撃ったからお裾分けもらっちゃった。隊長にぜひ食べさせてくれ、って」

「へえ。今度お礼を言わなくちゃいけないね」

ちなみに、畜産が盛んでなく、雪に閉ざされる冬のアスカムでは、新鮮な肉は貴重品である。

「奥にお湯が用意してあるから、身体を拭いてきてください。その間にお夕飯用意しちゃいますね」

実によく気が利く娘であった。

この日の夕食は、ドロシーを含めた4人でとった。鹿肉の炙りはやや癖があるもののどっしりとした食べ応えのある味わいで、一同舌鼓を打った。フランシスは、サイラスならば赤ワインを欲しがっただろうな、などと考える。

食事が終わると、ドロシーとアントニーは帰宅。この時点で、駐屯小隊の一日の勤務は終了ということになる。葡萄の蒸留酒をちびちびやりはじめたハンターを横目に、フランシスは自室に戻る。

自室の机で、フランチスはペンをとった。活動日報を書くためだ。とはいえ、村は平和で事もなし。巡回で回った家の様子など、数行で書くことがなくなってしまう。

「うーん、こんなんでいいのかなあ」

思わず呟くが、部屋に残されていた前任者の日報も、似たようなものであった。悩んでも仕方ないかと思い直し、寝巻きに着替える。ランプの火を吹き消し、ベッドに入る。

（ドロシー、シーツ取り替えてくれたんだー）

清潔な寝具の柔らかな感触に包まれ、フランチスはあつという間に眠りに落ちるのだった。

決断すること

フランシスがアスカムに赴任して、1ヶ月ほどが経過した。

寒波はますます厳しくなり、降り積もる雪は根雪（※）となった。近隣の村とアスカムを結ぶ街道にも分厚く雪が積もり、村はじきに閉ざされた陸の孤島となる。

その日、いつものように日報を書き終えたフランシスは、床にっいていた。カーテンの隙間から、こうこうとした月光が漏れるのを見て、明日は寒くなるだろうな、などと考える。一般に、雲がない晴天のほうが、気温は低くなるのだ。

屋根を支える木製の梁が、びしりびしりと寒さで軋む音を聞きながら、眠りの世界に旅立とうとしていたフランシス。しかし、その優れた聴覚が、異常な物音を聞きつける。ベッドから跳ね起きたフランシスは、カーテンを開け放って窓の外を見る。と同時に響く、村人の声。

「狼だ！」

その声をきっかけに、寝静まりかけていた村が、にわかに騒がしくなる。家屋にはランプの火が灯り、大人たちが慌てて家を飛び出す。フランシスも、寝巻きの上に外套を引っ掛け、ナイフとマスケット、弾薬入れを手に部屋を出た。

「隊長、聞いたか？」

ハンターはまだ就寝前だったようで、既に装備を整えて待機していた。

「はい、急ぎましょう！」

寒風の中、2人は先ほど声が上がったほうへ走る。2人が現場に着いたとき、そこには既に村人たちの人だかりができていた。場所は、村の北の外れに近い一軒の家。

「駐屯小隊です！ 何があったんですか？」

フランシスの声に、村人たちが一斉に振り向いた。

「隊長さん、ご覧のとおりですわ。鶏がやられてしもた」

家の主である老人が、家畜小屋の中を示す。中には鶏の羽毛が散らばり、地面には何かを引きずったような血の跡がある。

「狼の姿は見たのか？」

ハンターが問いかける。

「ああ。鶏が騒ぐもんじゃから、様子を見に来たら、何匹かが鶏を啜えて走っていくのが見えた」

「どっちへ向かった？」

「北の林のほうじゃ」

「なるほどな。……隊長、どうします？」

狼なら、フランシスの故郷の村にも出たことがある。しばし考えたのち、口を開く。

「とりあえず、今晚は僕たちで不寝番をします。みなさんは、手分けて村の北側にたくさんかがり火を焚いてください。本格的な対

策は、明日夜が明けてからにしよう」

「うん、妥当だろう。アントニーもじき駆けつけるはずだ。……皆の衆、そういうことだ。よろしく頼むぞ」

ハンターに促され、村人たちが駆けていく。やがて、村の境界線上にぽつぽつと灯りがつき始めた。と、大柄な人影がフランシスたちのほうへ全力疾走してくる。

「申し訳ありません、遅れました！」

肩で息をしながら、アントニーが敬礼した。

「お、来たな。隊長、一旦着替えに戻ったほうがいいだろう。そのままじゃ風邪をひいちゃうぞ」

「ありがとうございます、そうさせてもらいます」

フランシスの身体は冷え切っていた。寝巻きの上に外套一枚という出で立ちだったので、無理もない。

「アントニー、来たばかりのところで悪いが、お前も一旦家に帰って、ドロシーに明日は朝から出るように伝えてくれ」

「了解しました」

フランシスは、寒さに身震いしながら駐在所に戻った。しっかりと重ね着をして、分厚い手袋をはめたフランシスは、ハンターのところへ舞い戻る。アントニーの姿も、既にそこにあった。かがり火の点火も完了したようで、村の外縁を囲う柵に沿って、いくつもの炎が燃え盛っている。

「ただいま戻りました」

「隊長、こいつは村人からの差し入れだ」

ハンターから、湯気の立ち昇るカップを手渡された。中身は、かぼちゃのポタージュであった。弾丸が装填された銃を手に、3人が見張りに立つ。

「この村では狼はよく出るんですか？」

「よく、というほどではありません。1年に一度出るかどうか、といったところです」

フランシスの質問に、アントニーが答えた。

「隊長も運が悪いな。1ヶ月やそこらで、立て続けに事件が起こるなんてこの村じゃ珍しい」

「……なんだか、疫病神みたいで申し訳ないです」

「いや、そんな意味で言ったんじゃないんだ。悪かったな」

「それに、ここ数年村の者を悩ませてきたマダラを討ち果たしていただいたんですから。感謝こそすれ、隊長を悪く言う者などいませんよ」

「そのとおりさ。……しかし、熊の次は狼と来た。この調子だと、来月には竜でも出るんじゃないか？」

冗談めかして、ハンターが言う。

「止めてくださいよ……ところで、見張りをするなら、ばらばらに散らばったほうがいいんじゃないですか？」

「いや、狼ってのは慎重で臆病な動物だからな。これだけガンガン火を焚いて警戒してるんだ、さすがに同じ日のうちにまたのこのこ現れるような真似はしないだろう」

「同感です。本格的な対策は明日から、ということになるでしょう」

な」

果たしてハンターの言葉通り、その晩は何事もなく過ぎた。朝日が差し込むころ、村人たちが起きてきたのを見計らって、3人は駐在所に戻るのだった。

駐在所では、ドロシーが暖かな朝食を作って3人を出迎えた。

「お疲れ様です！ ベッドも整えてありますから、ご飯食べたらし休んでくださいね」

一晚寝ずの番をして、心身ともに冷え切ったフランシスたちにとって、まことにありがたい心遣いだ。

「朝早くからありがとう、ドロシー」

フランシスの労いに、ドロシーは顔をほころばせる。

「すまん、ドロシー、あとで村長のところに言づけを頼む。仮眠が終わったところ――そうだな、昼過ぎに対策会議をするので、男集を連れてここに集まるように、と」

「わかりました！」

ドロシーが用意した朝食は、大麦と雑穀を煮込んだミルク粥、玉ねぎと人参とベーコンの干しトマト風味スープに胡桃パン。パンはわざわざ早起きして焼いてきたらしく、割ると中から湯気が立ち上った。そして、フランシスの赴任初日にも出された楓リキュールのお湯割りを飲めば、身体がぽかぽかになった。

「じゃあドロシー、申し訳ないけどあとは頼んだよ」

「はい、任せてください、フランシスさん！」

そうしてフランシスとハンターは仮眠に入り、ドロシーとアントニーはいったん自宅へ戻る。フランシスが目覚めたのは、ちょうどお昼前のことだった。朝の残りを暖めなおしてハンターとともに食べていると、村長をはじめとした村人たちが続々と集まってきた。その中には、アントニーの姿もある。

「さて、隊長殿にハンターさん、いかがしたもんかのう」

「うーん、狼って人里の奥まで入ってきて人を襲う、なんてことはしないですよね」

フランシスが、故郷の村での経験を元にそう言った。

「それは、そのとおりですじゃ」

「なら、しばらく警戒を続けていればそのうち諦めてどこかへ行ってしまうんじゃないか？」

「そうならいいんだがな。しかし、狼が立ち去っていくまで、どれだけかかるかわからない。その間、ずっと警備を続けるのは厳しいんじゃないか」

「そうじゃのう。これからますます寒さが厳しくなる。あんたがただけに負担をかけたくはないんじゃないじゃが、なにぶんこの村は年寄りと女子供がほとんどじゃ。持ち回りにするにしても、なかなか辛いもんがある」

村長が、ハンターの言葉に同意する。

「それじゃ……退治するしかないんでしょうか」

「まあ、完全に退治してしまう必要はないさ。さっきも言ったが、狼は慎重な動物だ。群れにある程度打撃を与えて、『こいつらは手強い相手だ』と認識させることができれば、もう村を襲うことはな

いだろう」

「それに、狼を狩り尽くしてしまうのは、必ずしも良いことではないんじゃない」

そう言ったのは、ロブ老人だ。コルドアに移住する前は、旧大陸で猟師をしていたという。

「狼を狩りすぎると、狼に狩られるはずの草を食む動物が増えすぎてしまう。そうすると、森の木々が食い尽くされて不毛の地になってしまうことがあるんじゃない」

「あ、その話は僕もアルフさんから聞いたことがあるなあ」

「では隊長、どうなさいますか？」

アントニーが、フランシスの決断を促す。顎に手を当ててしばし考えたのち、フランシスが口を開いた。

「……狼の群れの規模は？」

「多くても20程度じゃろう。それ以上というのは見たことがない」

ロブが答えた。フランシスの頭の中では、すでにある程度の計画が出来上がっていた。しかし、懸念材料がある。フランシスの懊悩を察したのか、ハンターが席を外してフランシスに手招きをした。

「どうしたんだ？ 悩んでいるのか？ 部下である俺がこんなことを言うのも差し出がましいが、話してみてくれないか」

年長者らしい気遣いであった。

「大体の計画みたいなものは考え付いているんです。でも——僕たち3人だけでは、ちょっと難しいかもしれない。かといって、村の

人たちの手を借りたら、みんなの身に危険が及ぶかもしれない、って思ってた……」

自分の作戦によって、村人を危険に晒すかもしれない。もし万一死者でも出てしまったら——そう思うと、決断に踏み切れないのだ。他者の命を背負う責任の重さを痛感する。作戦指揮官のダイアナは、いつもこんな思いをしているのだろうか。そんなことを考えるフランス。

「ふむ、確かに難しい問題だな。……しかし、今の隊長はこの村の治安維持責任者だ。決断しなきゃいけないこともある」

「それはわかっています。でも——」

「心配するな。対竜部隊に比べりゃ頼りないかもしれないが、俺も、アントニーもいる。力を合わせれば、狼くらい屁でもないさ」

ハンターが、励ますようにフランスの肩を叩く。

「それに、自分たちの暮らしを守るためなんだ、村の連中だって腹はくくってるだろう。……さあ、皆が待っているぞ」

「……わかりました。やってみます」

ハンターの言葉に感謝しつつ、フランスはふたたび村人たちの前に立つ。——決断するのも、勇気なんだ。フランスは、間者騒動の際、自分が提案した作戦を了承したダイアナの姿を思い出す。あのときに比べれば、このくらいはなんでもないことだ。この程度で怖気づいていては、シラーズ みんなに会わせる顔がない。

決意を胸に、フランスが口を開いた。

「狼の群れをおびき寄せ、罾と銃撃で手酷く打撃を与えてやります。ただ——この作戦には、村の皆さんの協力が不可欠です。皆さんに

も危険が及ぶ可能性もありますが――どうか、力を貸してください」

フランススが、頭を下げる。恐る恐る反応をうかがうと、

「なんじゃ、そんなことならお安い御用じゃ」

「老いぼれじゃが、わしらとてフロンティアの男よ。狼なんぞにビビっていられんわい」

村人たちからは、予想外の言葉が発せられた。

「な、心配することはなかったろう？」

ハンターがフランススに耳打ちする。

「ありがとうございます、皆さん。それじゃあ、一緒に具体的な作戦を練りましょう！」

そうして、作戦会議が始まった。ああでもないこうでもないとか、皆が自分の思いついたことを口にする。喧々諤々の議論は夜まで続くのだった。

(※) 降り積もった雪が春まで融けずに残ること

狼退治

数日後。普段なら、ほとんどの村人たちが眠りにについている時間。済んだ冬の夜空では、星星が青白い光を放っている。

フランスは村の外れ、針葉樹林と平原の境目で、雪洞に潜んでいた。雪洞は、厚く積もった吹き溜まりの雪を斜め下に向かって掘り下げたもので、入り口を雪でふさいで顔だけが外に出るような格好だ。

全身には、松葉をすり潰した汁を擦り込んである。匂い消しのためだ。

針葉樹林から少し外れた、平原の只中に立つ一本の立ち木。そこには、数匹の鶏の死体がくくりつけられ、真っ赤な血が雪の上にぽたりぽたりと滴り落ちる。

目下、フランスたちアスカム駐屯小隊と、アスカム村の村人たちは、協力して狼退治の作戦に当たっているところだ。

作戦はいたって単純なもので、鶏の死体に狼の群れをおびき寄せ、そこで罠にかける。群れの統率が乱れたところでありったけの銃で弾丸を浴びせる、というものだ。

作戦を成功させるうえで重要なのは、まずいかに狼を油断させるか、ということ。そのため、作戦に先立って仕込みが行われた。作戦が行われるのと同じ場所に肉をぶら下げ、狼たちがそれを奪って手は出さない。それを数日間続けたのだ。はじめはおっかなびっくりといった様子で肉に近づいていた狼たちも、それが数度続くうちに、だんだんと警戒心を薄れさせていった。

そして、もう一つ重要なのが、罠を発動させるタイミングだ。十分におびき寄せて、一気に複数の狼が罠にかかるようにしなければ、最初の1頭が罠にかかった時点で他の狼たちが逃げてしまうおそれがある。そうなれば、二度と同じ手には引っかからないだろう。虎

バサミや落とし穴のように、対象の行動によって罠が発動するものではなく、任意のタイミングで発動させることができるものでなくてはいけない。

雪洞に潜むフランスは、その罠を発動させるロープを握り、狼が現れるのを今か今かと待ち構えていた。

夜の空気はぴんと張り詰め、時折木立ちが風で揺れる音が聞こえるのみ。――余計なことは考えるな。自分を大地の一部だと思え。アルフレッドが、かつてそんなことを言っていたのを思い出す。じわじわと身体に冷気が染み込んでいく中、フランスは身じろぎもせずにその時を待つ。

と、針葉樹林の向こうから、わずかな物音がした。常人ならば聞き取れないであろう、小さな音だ。フランスは目を閉じて、聴覚に神経を集中させる。複数の獣の足音。狼の群れに違いない。

やがて、森の端から、1頭の狼が姿を現す。それに続いて、2、3頭。鶏の死体から垂れる血の匂いにつられて、次々と狼が平原に現れた。狼の群れは多くとも20頭、という話だったが、果たしてそこには20頭ほどの狼の姿があった。

フランスに、緊張が走る。ロープを握る掌には汗が滲み、高鳴る動悸は狼に聞き取られないかと思ってしまうほどだ。ゆっくりと息をして、心を落ち着ける。

狼たちはそんなフランスに気づくこともなく、無警戒に鶏の死体に近づく。ちょうど、狼の跳躍で届くか届かないか、という高さに吊られた餌に向かって、ぴょんぴょんと飛び跳ねている。

（まだだ、もう少し……）

肉に群がっているのは、まだ数頭。もっとおびき寄せなくては、罠の効果は薄い。

やがて、さらに数頭の狼が鶏が吊られた立ち木に群がる。その数が、とうとう12頭になった。ここが頃合か、とみたフランス。ナイフで、手元のロープを切り裂く。吊り下げられた重石に繋がれたロープが切られ、重石の重量によって、立ち木の根元に仕込まれた網が、一気に巻き上げられる。

「ウオオーッ!？」

狼の咆哮が響く。網に包まれる形で、6頭の狼が中吊りになった。

「よし、今だ！ 撃ちまくれ！」

ハンターの号令とともに、村人たちの銃が一斉に火を吹いた。二手に分かれた村人たちは、罾を仕掛けた木の南と西に陣取っており、狼の群れに対して十字砲火を加える。

苦悶の悲鳴を上げ、数頭の狼が雪の上に倒れた。残る狼は10頭ほど。このまま、残りが逃げ散ってくれば当初の予定通り。全滅させる必要はない、というハンターの言葉もある。

しかし、そんなフランスの期待をよそに――数頭の狼がいきり立ち、村人たちのほうへ向かう。本来は臆病でも、急な攻撃を受け追い詰められると、何をするのかわからないのが野生の獣というものだ。作戦立案時、フランスが懸念していたのもこの事態だった。1頭2頭が相手ならば、竜人であるフランスにとってはもの数ではない。しかし、狼の走行速度は竜人のそれに匹敵するものがあり、散開された場合は1人で防ぎきるのは難しいのだ。

悪い予感というのは当たるもので、狼は二手に分かれた村人たちのほうに、ばらばらに向かっていく。

村人たちは、慌てた様子で銃を放つが、トラップに驚いて立ちすくんでいた先ほどと違い、疾駆する狼に対しては弾丸を命中させることができない。

「いかん、みんな逃げろ！」

ハンターの指示で、村人たちが狼に背を向け走り出す。

「くっ！」

二手に分かれた村人たち、双方を助けに行くことはできない。しかし――村人たちの覚悟は聞いている。それを信じるしかないだろう。フランスは一瞬考えた末、狼の数が多い西の村人たちの救援に向かった。村人を追う狼は3頭。雪を巻き上げながら平原を走り、狼まであと少しのところに迫る。

「はあっ！」

ナイフを引き抜いて、投擲。ナイフは先頭を走る狼の後頭部に突き刺さり、狼は声も立てずに崩れ落ちた。さらにもう一本のナイフを引き抜き、跳躍。落下の勢いのままに、2頭めの首筋にナイフを突き立てた。

「あと1頭！」

最後の1頭は、踵を返してフランスに飛び掛った。迫る爪を左手でいなし、ナイフを一閃。すれ違いざまに腹部を切り裂いた。休む間もなく、フランスはもう一方の村人たちのほうへ疾駆する。

「っ！ ハンターさん！？」

数十ヤード先。撤退のしんがりを務めていたのだろうハンターに、

今まさに2頭の狼が襲いかかろうとしていた。ナイフを手に反撃を試みているが、いかに訓練を受けた兵士とて、野生の肉食獣を相手取るのは難しい。次々と繰り出される爪と牙を受け、ハンターの着衣が引き裂かれる。

「ハンターさん、いまお助けしますぞ!」

村人の1人が銃を構える。

「撃っちゃダメだ!」

フランシスが鋭く叫んでそれを制止する。この状況で下手に発砲すると、ハンターに当たってしまう可能性がある。フランシスは、両足にさらなる力を込めて加速する。

「ぐあっ!」

1頭の狼がハンターの右腕に喰らいつき、ハンターはナイフを取り落とす。もう1頭が、爪で太ももを大きく切り裂いた。血を流して、ハンターが地面に両膝をつく。止めとばかりに、ハンターの喉笛に狼の牙が迫る。

「グアアッ!？」

狼の顎が、ハンターの皮膚の直前で止まった。フランシスの投げたナイフが、狼の前足の付け根あたりに刺さったのだ。

「うおおおーっ!」

フランシスは狼との距離を一気に詰めると、右腕を振りかぶって、

狼の頭を力任せに殴りつける。鈍い音が響き、狼の頭蓋が砕けた。残る狼は1頭。雪上で一瞬身を沈めると、ばねに弾かれたような勢いでフランシスに襲い掛かった。

「ふっ！」

突き出された狼の前足を掴むと、背負い投げの形で地面に叩きつける。間髪入れず狼の顎と首筋を掴み、反対方向に捻り上げる。ごきつ、という音とともに、狼の頸骨が破壊された。

「はぁ、はぁ……これで、全部？　そうだ、ハンターさん！」

フランシスが、慌ててハンターに駆け寄る。

「つつ、だ、大丈夫だ。凄まじく痛いけど、致命傷じゃあない」

苦笑するハンター。この調子なら大丈夫か、とフランシスは安堵する。

「2人とも、大丈夫かね！？」

村人たちも集まってきた。

「僕は大丈夫です！　それよりハンターさんを！」

「おお。……傷は大したことないようじゃが、野の獣に噛まれたあとはすぐに消毒しないとあとが厄介じゃ。アントニーさん、すまんが急いでハンターさんを村まで運んでくれ」

「わかりました！」

アントニーが、ハンターを背負って走り出す。

「じゃあ、他の皆さんは手分けして後始末をしましょう」

フランススの掛け声とともに、村人たちが動き出す。

「捕まえた狼はどうしましょうか」

「ふむ、これだけの目に遭えば、もう人里に近づこうとは思えないじやろう。無闇に殺すこともあるまい」

村人の意見に従い、フランススが網を吊っているロープを切り離した。開放された狼たちは、フランススたちを襲うようなことはせず、一目散に森の奥へ消えていった。

「ふむ、これでしばらくは狼に襲われることもあるまい。しかし隊長さん、あんた凄い腕前じゃな。それに、えらく足が速い」

「そ、そうですか？ 無我夢中だったから、ほら、火事場のなんとやら、ってやつじゃないでしょうか」

「なるほどのお。しかし、マダラのやつを1人で倒してしまった、というのも納得じゃわい」

少々苦しい弁明だったが、村長は納得したようだった。

やがて狼の死体もすっかり片付け終え、フランススたちは村人たちとともに村へ戻るのだった。

駐在所では、ドロシーと数人の村人が、ハンターの介抱に当たっていた。

「痛い、痛いっての！ ドロシー、もう少し優しく手当てしてくれよ！」

ハンターの悲痛な叫びが響く。全身に刻まれた傷跡に、村人たちが度数の高い酒を擦りこんでいるのだ。

「ほら、じつとして！ 狼の爪や牙は、放っておくと大変なことになるんだから！」

ハンターの声を見捨て、手当ては進む。特に酷かったのは、大きく切り裂かれた太ももだ。熱湯で煮沸した縫い針と糸で、傷口が縫合される。

「いでででっ！」

傍で見ているフランシスも、思わず目を背けたくなるほどだから、ハンターの痛みはいかばかりか。

「よし、これでええじゃろう。ハンターさん、よく我慢しなすった」

「ああ、すまなかったな」

「ええんじゃよ。それから、しばらくは酒はお控えなされよ」

そう言って、村人たちが去っていった。

「さあ、もう遅い。アントニーとドロシーは、今日のところは家に戻っていいぞ」

「はっ！ では、失礼します！」

「あ、テーブルにお夜食用意しますから、良かったら食べてくださいね」

駐在所は、フランシスとハンターの2人きりになる。

包帯だらけのハンターの姿に、フランシスの心が痛んだ。自分の立てた作戦で、負傷者を出してしまったことに対する自責の念が、

フランススを苛む。

「なんだ、随分浮かない顔だな。作戦は大成功だったじゃないか」
「でも……ハンターさんに怪我をさせてしまいました」

そう言って、フランススが俯く。ハンターは、仕方がないな、といったふうに肩をすくめた。

「また偉そうなことを言うがな。今回の作戦は、誰の目から見ても妥当なものだ。そして、皆は最善をつくした。確かに、作戦の責任は指揮官が負うべきだ。しかし、犠牲者を出さないで済む作戦ばかりなら誰も苦勞はしない。俺たちは軍隊だ。大を生かすために、小を殺す決断をしなければならぬことだってある」

フランススは、黙ってハンターの言葉を聞く。

「そして、怖いのは、犠牲が出ることを恐れて、ここぞの場面で決断が鈍ることだ。判断が遅れたことで、大を生かすことも小を生かすこともできなくなってしまったら、どうにもならぬ。犠牲を出すことを前提にしろというわけじゃないが、軍隊で人の上に立つ者は、常に犠牲が出ることを覚悟していなくちゃならないんだ」

ハンターの言葉が、フランススの胸に重く響く。レナードやダイアナも、常にその覚悟を持って戦いに臨んだのだろうか。

「まあ、今回のところは、負傷したのが一般人でなく俺だったわけだし、それでよしとしようじゃないか」

そう言って、ハンターが笑った。

「……ありがとうございます、ハンターさん。あなたには教えられてばかりだ」

「礼を言われるほどのことじゃないさ」

「いえ、とんでもありません！　ハンターさんには感謝してもしきれないくらいで……」

「うーん、それなら礼を言う代わりに酒を飲ませてくれないか。ドロシーのやつ、俺が飲まないようにと駐在所の酒を隠しちゃったらしいんだ」

「それは駄目ですよ。血が止まらなくなっちゃいます」

「ははは、冗談だよ」

駐在所に、2人の笑い声が響いた。

フランススの書簡その2

親愛なるクリステイへ

お元気ですか？

こちらはますます寒くなり、雪がたくさん積もっています。シラーズでも、そろそろ雪が降るころでしょうか。

もうすぐ雪で街道が通れなくなるため、明日村に来るのが最後の行商人になるそうです。春になって雪が少なくなるまで手紙は送れなくなるでしょう。この手紙の返事も、たぶん受け取れないと思います。ごめんなさい。

さて、この前村の近くに狼が出ました。小隊の3人と、村の人たちとで協力して退治しましたが、ハンター曹長に怪我をさせてしまいました。「犠牲を出すことに責任を感じるのはいい。でも、犠牲を出してしまうことを恐れて判断を鈍らせてはいけない」ということを、ハンターさんに教えられました。

僕は、まだまだ軍人になるということへの覚悟が足りなかったようです。それから、人の上に立つというこの難しさを教えられました。いつも竜相手に僕たちを指揮している少佐の気持ちも、少しだけわかった気がします。

ハンターさんは熊、狼ときたら次は竜だ、なんて冗談を言いましたが、それだけは勘弁して欲しいです。

さっきも書いたけど、もうすぐ街道が通れなくなります。隣村まで行くには、雪はどちらかというと少ないけど、危険な山道を通らなければならぬので、村はほとんど孤立状態になってしまうそうです。春までの食料や薬を蓄えるため、年の瀬を前に大忙しの毎日です。駐在所の食料や薬は、ドロシーがすべて管理してくれている

ので大助かりです。裁縫なんかも上手で、いいお嫁さんになりそうな娘です。

狼が出た以外は、最近の村は平和そのものです。僕たちの仕事は村の平和を守ることですが、本当に何も起きないので正直なところやることはありません。なので、訓練のほかは、村の人たちの手伝いをして過ごしています。男の人たちはほとんど出稼ぎに出ているので、力仕事をしてあげるととても喜ばれます。

村の人に気に入られたのは嬉しいんですが、結婚していない娘さんがいる人からは、しきりにうちの娘を嫁にもらってくれ、と言われるのが困り物です。でも、僕はシラーズに戻らなければならぬ身だし、いつ死んでしまうともわからない危険な任務に就いています。なので、まだ結婚は考えられないかなあ。小隊のアントニーさんのほうが年上なので、村の人たちもアントニーさんのお嫁さんの世話をしてあげればいいのに。

時間も遅くなったので、今日はこのへんでペンを置きたいと思います。次に手紙が出せるのは、この村での任期が切れるころになると思います。隊長という役目に就いてから、たくさんのことを学びました。春には、少しでも成長した姿を見せられたらな、と思います。

では、これからますます寒くなりますので、風邪などひかないよう気をつけてください。隊のみんなにもよろしく。

追伸

村名産のすぐりのお酒と一緒に送ります。量は多くないけど、みんなに分けて飲んでください。白ワインで割って飲むのがお勧めです。

新年

アスカム村も、新年を迎えた。

この村には教会がないため、新年の礼拝は各家庭ごとに簡単に行われ、それが済めばお祝いが始まる。

フランシスが暮らす駐在所でも、フランシス、ハンター、アントニーがテーブルを囲み、酒を酌み交わしていた。本来ならば昼間から小隊員全員が飲酒することは許されないが、新年のお祝いならば話は別である。

「2人とも、去年はお疲れ様でした」

乾杯のあと、フランシスがそう挨拶する。

「いやいや、一番働いたのは隊長だろう。この小隊の歴史に残る働きっぷりだった」

「その通りです。村を救った救世主とお呼びしてもいいくらいですよ」

「2人とも、言いすぎですって……」

フランシスが頭をかく。

「謙遜しなさんな。ほら、杯が空だぞ」

「あ、すいません」

ハンターが、フランシスの杯に琥珀色の酒を注ぐ。麦から作った蒸留酒で、果樹の樽で熟成させることで独特の風味が出る。かち割った氷の上から注ぐのが、寒冷地であるこの村ならではの飲み方だ。

度数の高い酒によって、3人はすっかり出来上がってしまった。会話は自然と弾み、会話はシラーズでのフランスの任務に及ぶ。フランスが対竜部隊所属、というのは普段村人たちには伏せられており、こういう機会でなければあまり話題には出ない。

「いやあ、聞けば聞くほど凄い話ですな」

竜との戦いの話を聞き、アントニーが感嘆する。

「俺も東方遠征に行ったとはいえ、後ろで見てるだけだったからなあ。あんな化け物相手に肉弾戦とは、さすがは竜人だよ」

「でも、僕なんてまだまだですよ。作戦指揮官のヘイワード少佐なんて、もう40体以上竜を倒してるらしいし、同い年の同僚のクリスティだって僕より全然強いですし」

「隊長よりも上手が入るとは、信じられませんな」

アントニーが、腕組みして唸った。

「しかし、隊長が竜人になったいきさつ、ってもの傑作だな」

「みんなに言われますよ……なんでも、凄い偶然らしいです」

「では、その偶然がなければ、隊長は騎士団に入っていなかったということですか？」

「たぶん、そうでしょうね。シラーズあたりで仕事を探してたと思います」

「なら、村人全員はその偶然に感謝せにやいかんな」

「ですな。でなければ隊長がこの村に来ることもなかったでしょうから」

ハンターとアントニーは、2人して深く頷いた。ふと、フランスはシラーズでの日々を思い出す。それほど昔のことでもないのだ

が、ひどく懐かしく思える。訓練、そして命懸けの戦いが続く毎日。わずか数ヶ月の出来事とはいえ、それまでの人生経験全てに匹敵するほどに凝縮された日々だった。

「しかし、春には隊長も帰っちまうんだなあ」

まるでフランスの気分に応答するように、ハンターがそう呟いた。その一言で、場の空気が重たくなった。

「隊長、この村に留まることはできないのですか？ ドロシーを嫁に、というのは冗談としても、ここはいいところですよ」

アントニーが、努めて明るい口調で言った。

「無茶を言うなよ、アントニー。初めから5ヶ月と決まっていたことだろう」

ハンターが、アントニーを諷める。

アスカムに残る――フランスにとって、それは悪くない話だった。寒さは厳しいものの、人のいい村人たちの雰囲気は、故郷の村のそれとよく似て居心地がいい。ハンター、アントニー、そしてドロシーと暮らす日々は楽しいものだった。

「ごめんなさい、アントニーさん。やっぱり、僕の生きる場所は、あの対竜部隊なんだと思います」

しかし、フランスの口から出たのは、そんな言葉だった。頭にあったのは、クリスティをはじめとする対竜部隊のメンバーの顔だ。この村では、たくさんのことを学んだ。今は、平穏に暮らすことよ

り、それを対竜部隊で仲間のために生かしたい、という気持ちが強かった。

「しょうがないさ。フロンティアの平和は、対竜部隊によって守られている。そして、竜人は大きな戦力なんだ。こんな辺鄙な村の小隊長なんかやらせてちゃもったいない」

「でも、アントニーさんにそう言ってもらえて嬉しかったです」

「とんでもありません。無茶を言って、申し訳ありませんでした」

そんな3人のやり取りを、ドアの向こうで聞いていた人物がいた。酒の肴を差し入れに来た、ドロシーである。

フランスはすっかり村に馴染んでおり、ずっとこの村にいるものだ、ドロシーはそう錯覚していた。3人の会話に、現実を思い知らされる。フランスに恋心に近い感情を抱いていたドロシーにとって、それは辛い現実だった。無言で、その場を立ち去るドロシー。

以来、ドロシーは時折ふさぎこむ姿を見せるようになる。兄のアントニーは、そんな妹の姿に首をかしげるのだった。

年が明けてから、2ヶ月ほどが経過した。一年の中で、もっとも寒い季節の到来である。サイラスが語った、鼻毛も凍る寒さ、というのをフランスも体験することになる。呼気に含まれるわずかな水分が、瞬時に凍りついて鼻毛にまとわりつくのだ。

「ううつ、寒いですね」

「まったくだ。しかし、今年の

肌が痺れるほどの寒さの中、午後の巡回を終えたフランスとハントー。駐在所の戸口で、アントニーが1人の老婆となにやら話している。

「キャロルのお婆さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

「それが、爺さんが戻って来ないんじゃない。昼には戻る、と言うとつたから心配での」

「どこへ行ったんですか？」

「東の森じゃ。鹿でも撃ってくる、と」

「うーん、そりゃ心配だな」

ハンターが、空を見上げながら言った。それまでは晴天だったのだが、西の空から徐々に厚みのある雲が広がり始めている。天候が悪化するだろうことは、フランスにもわかった。

「自分が捜しに行こうと思います。隊長、許可を」

「うーん、1人じゃ大変でしょう。僕も一緒に行きますよ。ハンターさんは、留守番をお願いします」

歩き出そうとしたフランススを、ハンターが引き止める。

「もうすぐ暗くなるからカンテラと、あとスノーシューを持って行ったほうがいい。雪が深いところじゃ歩けなくなるぞ」

スノーシューとは、籐で編んだ輪の形をした道具だ。人の足の裏より二周りほど大きく、それを靴底に取り付けることで深い雪の上を歩くことができるようになる。

ハンターはそれらをフランススに手渡ししながら、老婆に聞こえないように耳打ちする。

「万一のことを考えて、村の男週に声をかけておく。一回りして見づからなかったら、一旦村に戻って捜索隊を組もう」

「わかりました。……では、行ってきますね」

スノーシューとカンテラ、そして念のためとマスケットを担いで、フランスとアントニーは東の森に向かう。

東の森は、村から数マイルのところにあり、村との間には、樹木の伐採によってできた平原が広がっている。スノーシューを履き、2人は雪上を歩く。

雪雲は空をすっかり覆い隠し、雪がちらつき始めた。日も落ちたようで、あたりは急速に暗くなる。

「風も出てきましたね、隊長。吹雪きそうだ」
「急ぎましょう」

カンテラに火を灯すと、2人は足を早めた。森に辿り着いた2人は、声を張り上げてキャロルを捜す。

「おい、キャロルさん！　いませんか！？」
「キャロルさん！　捜しに来ましたよ！」

しかし、返事はなく、2人の声は木々の間に空しく響くばかり。風雪は次第に強さを増し、とうとう本降りになった。

「隊長、一旦戻りましょう。この降りかたでは、私たちも遭難してしまいます。それに、入れ違いになった可能性もありますし」
「うーん、そうですね……あれ、あっちは？」

フランスには、しばらく先に森の切れ目があるのが見えた。

「ああ、北のほうから大きな川が流れていまして、あっちはその川原でしょう」

「じゃあ、あそこまで行ったら戻りましょうか」

「了解しました」

川原に辿り着いた2人。

大声でキャロルの名を呼ばれるが、ここでも反応は返ってこなかった。諦めて村に戻ろうとしたところで、フランススの視界に奇妙なものが飛び込んできた。

それは、川原の平地にぽつんと立つ影。日はとうに落ち、雪も激しくなっているので、竜人の優れた視力でなければ見つけることはできなかっただろう。立ち木や岩ではないようで、高さはちょうど大人の背丈ほど。不審に思って近づいた2人は、そこで驚愕の光景を目にする。

「隊長、これは……」

「いったい、ここで何が……?」

二人が見たもの。それは、彫像のように凍りついたキャロルの変わり果てた姿だった。驚きの表情もそのままに、まるで生きていたときの時間をそのまま止めてしまったようだ。単に凍死して凍りついた、というのなら、このような状態になるはずもない。

「た、隊長、どうしましょう」

「……とりあえず、村に運びましょう」

2人は、キャロルの身体を布で包んで担ぎ上げると、村へと急ぎ戻るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023x/>

ドラゴンズヘブン

2011年12月3日14時45分発行